

2015年度

博士学位論文

日本人キリスト者の神表象研究
—Wesley理論に基づく教会教育の視点から—

東洋英和女学院大学大学院

人間科学研究科

人間科学専攻

2012D002 河村従彦

2015年度

博士学位論文

(論文要旨)

日本人キリスト者の神表象研究
—Wesley理論に基づく教会教育の視点から—

東洋英和女学院大学大学院

人間科学研究科

人間科学専攻

2012D002 河村従彦

I 目的

信仰と心理学は、人間の心を対象領域にするため、それぞれ異なるアプローチで研究を進めてきた。キリスト教を背景とした心理臨床や教育の現場では、社会が複雑化することと並行して人間の問題も複雑化・多様化し、さまざまな対応の必要に迫られている。わが国のキリスト教会における教育に影響を与えてきた理論に、Wesley 理論がある。Wesley 理論は、「回心」と「聖化」を神学の軸に置いているが、牧会臨床の現場で、それが必ずしも機能しないケースが散見され、人間の発達や自立との関連で検討が求められているように見受けられる。そのような背景の中で、教育学的視点、心理学的視点が教会の教育や牧会臨床に援用されてきたが、特に心理学的視点については検証しないまま取り込んできたことから、心理学的視点と神学的視点の異同について混乱が見られるのも現実である。

神学的視点と心理学的視点の双方からアプローチが可能なテーマに、神表象理論がある。キリスト者が神をどのようなイメージで内在化させているかという神表象研究は、アメリカにおいて 1970 年前後から始まった。神学と心理学いずれとも関連づけられる数少ないテーマの一つであり、両者の橋渡しとしての位置づけが可能であると考えられる。神表象研究の草分け的存在である Rizzuto, A. は、Freud, S. の宗教論に批判的検討を加え、対象関係論に立つ Winnicott, D.W. の中間領域を取り入れて自らの神表象理論を構築した。その後 Rizzuto 理論は修正されるが、修正を試みた研究者の一人 Halevi-Spero, M. は、神表象は中間領域に萌芽が芽ばえるだけでなく、神がダイレクトに内在化されるルートもあるとした。

Rizzuto, A. や Meissner, W. W. の手による神表象の研究は臨床的なものであり、患者へのインタビューを中心にした研究法であったが、その後、研究法は拡大し、統計的な分析を取り入れた量的研究が中心となった。研究内容は、神表象と他の諸要素との関連を探ったものが中心となり、論文も相当数が発表され、内容も多岐にわたっている。さまざまな要素との関連を検討するために、神表象を測定する尺度も開発された。Lawrence, R. は Rizzuto, A. の理論を参照し、God Image Inventory を開発した。Beck and McDonald (2004) は、アタッチメント理論を基本にした神表象研究を深めるには神へのアタッチメントを測定できる尺度が不可欠であるとし、Experiences in Close Relationships (以下、ECR と略記) 尺度をベースに、Attachment to God Inventory (AGI) を開発した。

このように、神表象理論の歴史は、精神分析理論、対象関係論を背景に始められたが、後にアタッチメント理論が研究の背景を引き受けつつ、さらに発展して行く。アタッチメ

ント理論に基づく神表象研究においては、神表象が人の生涯でどのような役割を果たすのかという点について、「補償仮説」(compensatory hypothesis)と「一致仮説」(correspondence hypothesis)が導き出されたが、その後、修正が加えられ、現在に至るまでに、(1)「内的作業モデル・一致仮説 (internal-working-model correspondence hypthetis)」、(2)「感情的・補償仮説 (emotional compensation hypothesis)」、(3)「社会性・一致仮説 (socialized correspondence hypothesis)」、(4)「内在関係認識一致仮説 (implicit-relational-knowledge correspondence hypothesis)」の四つが提唱されている。

わが国においては宗教と心理学双方にまたがる宗教心理学の研究は試みられたが、神表象研究は未開拓の分野である。

先行研究およびわが国における教会教育の現状を踏まえ、本研究の対象範囲と意義を検討した。第一に、わが国においては、キリスト者が神についてどのような表象を内在化させているかということに関する実証的な研究は行われていない。日本人の心理を含めた神表象の内在化と変化のメカニズムについて、実証的アプローチから解明を試みる必要があると考えられる。第二に、先行研究が示す通り、神表象の内在化のプロセスについては Freud, S.、Rizzuto, A.、Halevi-Spero, M.のモデルなどが提示されているが、先行研究を支持できる範囲と、先行研究で説明できない範囲を確認する必要がある。第三に、アタッチメント理論を背景とした神表象研究では、「一致仮説」、「補償仮説」が提唱されたが、わが国における現状から、さらに詳細な検討が必要であると思われる。第四に、キリスト者が神について内在化させているイメージは、基本的信頼感や自尊感情などの自己の理解、他者との関係の構築のあり方、信仰のスタンスなどに影響を与えていると推察されることから、心理療法におけるモデル構築が可能かを検討する。第五に、キリスト教的な背景の中で人格形成をした場合とキリスト教的な背景のない中で人格形成をした場合を視野に、教会教育のあり方を検討する。第六に、わが国のキリスト教会における教育に影響を与えてきた理論に、「回心」を重視する Wesley 理論があるが、それが機能しないケースが散見されることから、神表象を一つの切り口に、人間のライフサイクルや発達も視野に入れた教会教育のあり方を模索する必要がある。

本研究は、以上の対象範囲における検討に学問的意義があると判断した。

II 方法

1 構成概念

本研究の構成概念の検討については、メソジストの教職であり、神学者でもある Coppedge, A. (1988, 2001) の「神の役割 (Roles of God)」に着目した。「神の役割理論」は、神学的な理論構成であるよりは、聖書の記述を要約したものとなっている。キリスト者はあえてこれらの役割を区別せずに、ひと言で「神さま」と理解しているが、聖書を信仰と生活の規範としているため、神のイメージは複数の役割を通して心の中に内在化される可能性がある。そもそも内在化されている神表象を心理学的手法によって測定するためには、その前提として、神の概念を構成概念に集約させていく必要がある。ところが、聖書に示されている「神」の表現は、言語化された時点で言語というツールで表現できる範囲に限定されており、これらが、本来の超越的な存在としての「神」と等価であるのかは断定できない。それは、本来、「神」という対象が、古典的および伝統的な人文科学の手法によって、統一的かつ正確な定義をすることが非常に難しいことを示しているといえるだろう。さらには、宗派によってもこの「神」の定義は単一ではなく、「表象」についても多様な定義がある。このことが、本研究に関連するテーマの実証研究を困難にしてきた一要因となっていることが推察される。このように、理論的な構成概念を計量可能なパターンに還元する必要があるが、本研究では、心理学研究の手法として認められている「操作的定義」を行って神表象を定義する。

2 調査の方針

本研究では日本のキリスト者の神表象についての実態調査と分析を行った。諸外国では神表象を測定する尺度が開発されているが、わが国では未開発であることから、尺度の邦訳と、新規に日本語版の尺度開発を行い、調査が可能な環境を整備した。その上で、カトリックからプロテスタント諸派までを幅広く対象とした神表象についての調査を行った。

3 調査の概要

質問紙調査、面接調査あわせて五つの調査を実施した。調査 A から調査 D は量的研究であり、いずれも質問紙調査を実施し、統計処理を行うことで、日本人キリスト者の神表象の傾向を検討した。調査 E は質的研究であり、半構造化面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行うことで、個人の内界における神表象の実態とその変化に焦点を当てた。

調査 A では、神表象を測定する尺度を作成した。調査は、大学生のキリスト者サークルとメソジスト系の三教会のメンバーを対象に、2009年12月に実施した。

調査 B では、調査 A で作成した尺度を用いて、自尊感情、基本的信頼感、生き方と神表

象との関連を検討した。日本のキリスト教界全体をバランスよく調査することを目的とし、カトリック、日本聖公会、メソジスト系を含むプロテスタントの各教派十教団(グループ)の教会と一神学校、一大学の、キリスト者とキリスト者ではない回答者を対象に、2010年4月～6月に実施した。

調査 C では、カトリック、聖公会からプロテスタント諸派のキリスト者を対象に、Erikson, E. H.の理論を背景として調査する A 版、アタッチメント理論を背景として調査する B 版のいずれも、四教団(グループ)の教会と一神学校、その他友人に依頼した。実施時期は2013年1月～2月であった。

調査 D では、プロテスタント系の教会のキリスト者を対象に、自立と甘えと神表象について質問紙調査を実施した。実施時期は2014年1月～2月であった。

調査 E では、プロテスタント系、その中でもメソジスト系のキリスト者を中心に、2013年12月から2014年2月に、半構造化面接を行った。

4 各研究の概要

調査 A から調査 E のデータをもとに、以下のとおり、合計八の研究を実施した。

第一研究：神表象を測定する尺度の作成（調査 A・B）

Coppedge, A. (2001) の神の役割の概念を構成概念として採用し、因子分析によって22項目二因子からなる神表象尺度・日本語版（以下、GISJと略記）を作成した。また妥当性の確認のために、Lawrence, R.が開発した三因子版のGod Image Scaleを邦訳した。

第二研究：基本的信頼感、自尊感情、生き方と神表象の関連（調査 B）

第一研究で作成したGISJを用いて、日本人キリスト者を対象として、自尊感情、基本的信頼感、対人的信頼感、生き方と神表象の内在化との関連を検討した。キリスト者が神を厳しい存在として取り込んでいるか、受容的な存在として取り込んでいるかを検討し、続いて、「創造者」、「父」、「裁判官」など、どのような表象で取り込んでいるかを検討した。

第三研究：神アタッチメント尺度日本語版の作成（調査 C）

神アタッチメントを測定する日本語版の尺度を作成した。The Experiences in Close Relationships-Revised (ECR-R) Questionnaire (2000, Fraley, Waller, & Brennan) のアタッチメント人物を「神さま」に置き換え、それを邦訳した。因子分析によって28項目二因子が抽出され、尺度名は「神アタッチメント尺度」(God Attachment Scale、以下、GASと略記)とした。

第四研究：アタッチメント理論からの検討（調査 C）

第三研究で作成した GAS、4 分類愛着スタイル尺度日本語版 (RQ) (1998、加藤)、一般他者版成人愛着スタイル尺度 (ECR-GO) (中尾・加藤、2004a、2004b)、GISJ、PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版 (小川、1991) (以下、PBI と略記) の相関を算出することによって、神表象、アタッチメント、神アタッチメント、親の養育態度の関連を検討した。

第五研究：心理社会的発達理論からの検討 (調査 C)

第二研究 (調査 B) で、神表象を規定している要因を探るために重回帰分析を行った結果、基本的信頼感は、肯定的な神のイメージに正の影響を、厳しい否定的な神のイメージに負の影響を与えており、神表象に影響している要因の一つであることが明らかになった。その結果を受け、Erikson, E. H. の漸成発達理論に基づき、人間のライフサイクルにおいて神表象がどのような影響を与えているかを検討した。ラスムッセンの自我同一性尺度日本語版 (REIS) (1987、宮下)、GISJ、PBI の下位尺度の相関を算出し、心理発達段階の各段階、神表象、親の養育態度の関連を検討した。

第六研究：神表象の属性別検討 (調査 C)

第二研究の結果を受け、属性別に神表象を分析し、アタッチメントおよび心理社会的発達段階と属性の関連を検討した。調査 C では、調査協力者の年齢、性別、宗派、キリスト者になってからの年数、人格形成期の家族構成、人格形成期の家族との関係、神イメージが変化した体験の有無について尋ねており、それぞれ属性別に、神表象との関連、神アタッチメントとの関連、親の養育態度との関連を検討した。さらに、神表象の変化の様態と内容について検討した。

第七研究：神表象と甘えの心理の関連 (調査 D)

キリスト教的な神観念では「個」が強く意識されているが、日本人的な神観念は、甘えの葛藤の影響を受けている可能性があり、キリスト教的な神観念と異なることが推察される。また、日本人特有の甘えが絶対他者である神を信頼することの妨げになっている可能性もある。甘え尺度 (谷、1999)、GISJ、GISJ・簡易版、GAS の下位尺度の相関を算出し、甘えと、神表象、神アタッチメントの関連を検討した。

第八研究：神表象の変化のプロセスの検討 (調査 E)

日本人キリスト者の神表象がどのように変化するかを検討し、教育や心理臨床のあり方を考察した。生涯において神表象が変化したか、また変化した場合には、どのような要素がそのことに関係していたか、幼少期の神表象はどのようなものであったかを検討した。

神表象の変化について尋ねるときには、八つの神の役割を提示した。

十名の調査協力者を対象に半構造化面接を行い、内容を逐語録におこし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析を行った。逐語録はA4（40字×30行）で合計135ページ（101,921字）であった。最初に、内容が豊富に語られていると判断した事例を分析焦点者として設定し、概念を生成した。その後、分析焦点者から生成された概念を意識しながら、順次、他の事例について分析を行った。十の調査協力者の分析を終了した時点で理論的飽和と判断した。22の概念が生成され、九つのカテゴリーにまとめられた。

III 結果

第一研究から第八研究までの分析から、以下のことが示唆された。

1 神表象と自己のあり方・生き方

自尊感情が高く自己を受容できる人、対人的信頼感が高い人、能動的実践の態度がある人、自己の創造・開発の姿勢が高い人、自他共存の姿勢が高い人、こだわりと執着心がないう人、他者尊重の姿勢が高い人は、傾向として肯定的な神イメージを内在化させている。基本的信頼感、自己を開発する姿勢、他者を尊重する姿勢が、肯定的な神イメージを作る要因となっている。

親しい神のイメージを内在化させている人は、基本的信頼感、自尊感情、生き方いずれも肯定的であるが、厳しい神のイメージを内在化させている人は、基本的信頼感や自尊感情に負の影響を与えていながら、対人的・社会的存在としての自覚・行動が必ずしも否定的になるわけではない。神のイメージが肯定的であり、生きる姿勢が積極的である人は、「父」、「牧者」、「創造者」の表象を、逆に否定的な人は、「王」、「裁判官」、「救出者」の表象を抱く傾向がある。

2 属性別分析

若いころ、あるいはキリスト者になって五年程度は、厳しい神のイメージを内在化させやすいが、年齢や年数を重ねることで、厳しい神のイメージは緩和される傾向がある。性差は、女性は男性よりも親しい神イメージが強く、神との親密性を保つ傾向がある。宗派による差は、プロテスタントとメソジスト系は、親しい神のイメージと厳しい神のイメージの両面を内在化させ、他方カトリックは、厳しい神のイメージをそれほど内在化させていない可能性がある。

3 家族との関係

両親の養護的な養育態度と肯定的な神イメージの内在化は関連があり、母親の過保護的・干渉的な養育態度と否定的な神イメージの内在化は関連がある。

4 アタッチメント

とらわれ型とおそれ型は、安定型に比較して神を厳しい存在としてイメージしており、神アタッチメントも否定的である。

5 心理社会的発達段階

第一段階の発達課題である基本的信頼感が高い人は、神を肯定的にイメージしている。第四段階の発達課題である勤勉性については、厳しい神のイメージを内在化させている人は弱くなり、また劣等感を抱きやすくなる可能性がある。第六段階の発達課題である親密性については、親しい神のイメージを内在化させている人は身につけることができる傾向があり、厳しい神イメージを内在化させている人は身につけにくい可能性がある。

6 甘えの心理と神表象

親しいイメージを内在化させている人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」の心理が弱くなり、厳しい神イメージを内在化させている人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」を抱く傾向がある。「神からの見捨てられ不安」を抱いている人、「神との親密性」を回避する傾向がある人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」の意識が高い。

家族にキリスト者がいる環境で人格形成をした人は、家族にキリスト者がいない環境で人格形成をした人よりも甘えの心理が強い可能性がある。父親との関係が全般的に良かったと認識している人は、「とらわれ」、すなわち、甘えたくても甘えられない心理を抱いている傾向があり、母親との関係が良好でなかった人のほうが「とらわれ」、すなわち、甘えたくても甘えられない心理を抱いている可能性がある。

7 神表象の変化

神表象が変化したと感じている人は、神表象があまり変化していないと感じている人よりも他者との親密性を保つ傾向がある。神表象が急に变化したと感じている人は、神表象が徐々に変化したと感じている人よりも、神表象が親しいものになり、他者との親密性を保つ傾向がある。父から肯定的・養護的な養育態度で接してもらえなかったと認識している人は、神表象が急に变化する傾向がある。母から養護的な養育態度で接してもらえたと認識している人は、神表象がゆっくり変化する傾向がある。神表象が変化するプロセスでは、神は人格的他者として意識される。また、プロセスそのものが意外な展開として認識

される。キリスト者になる経験と神表象が変化する経験は、パターンが多様である。神表象の変化は、重大なことがらの後に起きることが多い。キリスト者になる経験と神表象が変化した経験が同時に起きることはない。神表象の変化は、「王、裁判官」から「あがない主」へ変化する段階と、「王、裁判官」から「父、牧者」へ変化する二つの段階がある。それぞれ別々の機会に認識されるのが一般的である。「創造者」は神表象の変化前後にわたって認識されている。神表象が変化したとき、変化したのは神との距離感と関係であり、神の存在そのものは同じ存在として認識されている。神表象の変化の結果、自己の再統合、無条件に受け入れられていることの体験的理解、自分のスタンスの確立、やってもらっているという意識への方向の変化、他者や周囲の状況との関係の変化、人の評価からの解放が起きる。

8 内在化される神表象のカテゴリー

日本人キリスト者が神表象をイメージするときには、厳しいイメージの「裁判官」、「王」、親しいイメージの「父」、「牧者」、赦しと関連のある「あがない主」、そして存在の根幹を意味する「創造者」の四つのカテゴリーでとらえている。

IV 考察

1 日本人キリスト者が内在化させている神表象の特徴

本研究は、第一研究、第二研究および第八研究の結果から、Wesley 理論を背景に持つ日本人キリスト者がどのような様態で神表象を内在化させているかを示したものである。内在化されている神表象は、厳しいイメージの「裁判官」、「王」、親しいイメージの「父」、「牧者」、赦しと関連のある「あがない主」、そして存在の根幹を意味する「創造者」の四つのカテゴリーで整理できることが示された。このことは、聖書に記述されている神表象全部を内在化させている訳ではないということを意味していた。また、「父」の神表象には、内容的に父性と母性の両面が含まれていると想定された。「父」の神表象は、(1)否定的・律法的父性、(2)受容的・母性的父性、(3)理想的・社会的父性、の三つの観点から論じる必要があることが示唆された。

2 神表象の内在化のプロセス：Rizzuto 理論の検討

本研究は、第四研究および第八研究の結果から、欧米の先行研究で検討されて来た神表象の内在化のプロセスについて、日本人キリスト者を対象に展開したものである。本研究の結果は、Freud, S.の神表象理論を一部支持するものの、Freud 理論を超えて展開された

Rizzuto 理論を支持している。ところが、Rizzuto 理論だけで説明できない点が観察された。ここで、神表象の内在化には四つのルートがあるとした Halevi-Spero, M.の理論に着目した。本研究の結果は、「理想的『神的』表象が直接内在化」されるルート B の内在化のプロセスがありうることを示唆していた。

3 日本人に特徴的に見られる心理と神表象

(1) 「個」の確立と甘えの心理

本研究は、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、日本人の心理の中に「個」を意識することが希薄であるという土居の指摘を確認したものである。神を肯定的にイメージできても、甘えたくても甘えられない、その甘えを素直に出せないままの状態であり、また「自分がない」状態、傷つきやすい自我の状態を抱え込んでいる姿が示唆された。また、神表象の変化のプロセスにおいては、自分とは全く異なる他者との出会いを通して、しかもそれが、自分が想定できる範囲のことではなく意外性の中で経験することを通して、人間は初めて自己を認識し、そのことによって「個」としての自分を意識できるようになることが示唆された。

(2) 神への信頼と甘えの心理の差異

「個」の確立に関連して、本研究は、第七研究の結果から、甘えと信頼は違うという土居の仮説を実証したものである。本研究の結果によって、日本人に特有の「甘えの構造」が他者を信頼することの妨げになっていることが示唆された。日本人キリスト者がイメージする神に甘える気持ち、居心地がよいと感じる感覚、神と一つとされたという感覚は、神への信頼とは異なるものであることが示された。

4 一致仮説と補償仮説：「日本的修正補償仮説」

本研究は、第二研究、第四研究、第六研究、第八研究の結果を踏まえて、アタッチメント理論の中で四つの仮説が提示されていることを受けて、日本人キリスト者をどの仮説で説明できるかを検討したものである。神表象の変容のパターンについて、(1)「内的作業モデル・一致仮説」、(2)「感情的・補償仮説」、(3)「社会性・一致仮説」、そして(4)「内在関係認識一致仮説」の四つの仮説が提唱された。ところが、本研究で観察された現象は、上記の四つの仮説で全部を説明できるものではなかった。検討した結果、「明確に神表象の変化を認識し、生き方や関係性においても決して悪くなく、それでありながら内面的には『とらわれ』の状態にある」と定義される (5)「**日本的修正補償仮説**」が提唱された。

5 神表象の内在化の共通的側面

(1) 一神教的神概念と日本の神概念の異同

本研究は、第八研究の結果から、日本人キリスト者の中に形成される神表象と Rizzuto, A.らの提示した神表象との異同を実証的に確認し、「先行的恵み」や「共通恩恵」の概念を神表象のレベルで実証したものである。欧米における神表象理論の研究で論じられている神は一神教の神であり、日本的な汎神論的神と異なるものである。ところが、第八研究では、キリスト者になる前と後を比較したとき、神の存在は、認識の度合いは大きく異なっているにもかかわらず同じものとして認識されていた。このことは、幼少期に内在化される神は、文化背景にかかわらず同じであることを意味している。

(2) 父性性との出会いと神表象の変化

本研究は、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、「個」の確立の要件を神表象の変容の視点から提案したものである。「個」の確立は、父性性との出会いよりは、神表象の変化によるものであり、神表象の変化によって、より実態のある「個」の確立が促されることが示された。父性性との出会いそのものよりは、生涯における神表象の変化によって神について抱く父性性がどのように変化したかを見て行く必要があることが示唆された。

(3) 「個」の確立の意味

本研究は、第五研究、第七研究および第八研究を踏まえて、神表象の変化にともなう「個」の確立の意味を実証的な角度から展開したものである。「個」の確立とは、第一に、アイデンティティの確立を意味していると考えられる。自分が他者との関係をどのように構築して行くか、自分が社会の中でどのように位置づけられて行くかということが焦点化される。第二に、「個」の確立は、本来の自分への覚醒を意味していると考えられる。神表象研究というテーマと深い関わりを持つ神学領域から考察すれば、人間が生来持つ「神のかたち」に回復されて行くことを意味していると考えられる。

6 心理臨床・牧会臨床への神表象理論からの提言

(1) 神概念と神表象の関連

本研究は、第八研究の結果を踏まえて、先行研究で指摘されてきた神概念と神表象の関係について、改めて両者の関係の位置づけを試みたものである。神表象理論の歴史では、神概念と神表象は区別すべきであると指摘されてきたにもかかわらず、実際はできていない。内在化された神表象は、神概念として意識されている部分と、神表象として無意識の中に存在している部分があると考えられる。神表象は無意識・前意識、神概念は意識に対応すると考えることができる。

(2) 神という鏡に映し出されている自己

本研究では、第二研究、第五研究、第六研究および第七研究の結果から、自己のあり方と神の内在化の様態に関連があること示したものである。自己のあり方に神が投影され、神について抱くイメージに自己が投影されていると解釈することが可能ではないかということが示唆された。神をどのように内在化させているかを知ることが、自己洞察につながる可能性があることが示された。

(3) 心理臨床における神表象の理解

本研究は、第一研究から第八研究までの結果から、具体的な神表象を用いて神のイメージを測定することによって、より詳細な神表象の特定を行ったものである。神を肯定的にイメージしている場合には、「父」、「牧者」のイメージが強くなり、逆に神を否定的にイメージしている場合には、「王」、「裁判官」のイメージが強くなる。ここに、教育的・心理臨床的援助のヒントが示されている。心理的援助のプロセスにおいて、「父、牧者」の領域を豊かにすること、「裁判官」の領域が強すぎないようにすることを一つの目標にできる可能性が示唆された。

7 キリスト教教育への神表象理論からの提言

(1) キリスト教教育における従来の神の提示

本研究は、第二研究、第五研究および第八研究の結果を踏まえて、幼少期の教会の教育における神のイメージの提示の問題点を示したものである。従来の考え方では、人生の幼少期に「あがない主」を体験的に理解するということに重点が置かれる「あがない主アプローチ」が一般的であった。しかし、「あがない主」が理解できるように働きかけられた場合、受けとる側は「裁判官、王」としての神表象を内在化させてしまう可能性がある。その場合、基本的信頼感は低くなり、劣等感は高くなる傾向があることが示唆された。基本的信頼感という発達課題をクリアしにくいということは、アイデンティティ確立のためのプロセスに支障が生じる可能性が高くなるということを示唆している。

(2) 神表象理論からの神の提示：「父・牧者アプローチ」

本研究は、第二研究、第五研究および第八研究の結果を踏まえて、幼少期の教会の教育においてどのような神表象が提示されるべきかということについて、新しい視点を提示したものである。健全な成長のためには「父、牧者」としての神表象を内在化させるような働きかけが教会教育において必要であると思われる。「父、牧者」としての神表象を内在化させることを意識したアプローチを、「**父・牧者アプローチ**」と命名した。肯定的な神表

象を内在化させることができれば、親との良好な関係の中で基本的信頼感を築きながら、その後の発達課題も順次クリアできる可能性が高くなることが想定される。

(3) 前エディプス段階における信仰

本研究は、第四研究、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、プレ・エディパルな段階における宗教性と、健全な人格性の発達を伴ったキリスト者の信仰の違いを、神表象の角度から確認したものである。本研究の結果、神表象の起源は、Winnicott が提示したようなプレ・エディパルな段階にまでさかのぼって考えるべきことが示された。ところが、信仰と甘えの心理を混同した場合、母性原理に土台を置いて「個」が埋没してしまうプレ・エディパルな心理を信仰と取り違える可能性がある。甘えの心理をきっかけにして宗教現象に深く入って行く危うさを内包していることが示された。

(4) 「クリスチャン・ホーム」における自立のプロセス

本研究は、第六研究、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、キリスト教を背景にした人格形成のプロセスにおいて、自立の視点から問題提起をしたものである。第七研究によって、家族にキリスト者がいる者は、そうでない者よりも「個」の確立が弱く、信仰について自覚的でない可能性が高いことが示唆された。これは Marcia 理論によれば、アイデンティティの危機を経験しないまま何かに傾倒している「早期完了」の状態である可能性がある。「早期完了」の状態にある者が危機を迎えるとき、心理的課題を克服するプロセスは複雑になることが想定される。自立の視点から教会教育を考える必要性が示された。

(5) Wesley 理論に基づく教会教育のプログラムの展望

本研究は、第四研究、第五研究および第八研究の結果を踏まえ、Wesley 理論を背景に持つ教会教育において、受け皿となる人間性の理解が重要であることを示し、教会教育のプログラムのあり方に問題提起をするものである。Wesley 理論に基づく教会教育の現場では、「回心」に軸足を置くアプローチが大切であると考えられてきた経緯があり、必ずしも「父・牧者アプローチ」を採用しているわけではない。これは、教会教育の最終的目標からすれば間違っているとは言えない。しかし、本研究の結果は、「回心」、「聖化」だけに軸足を置くのではなく、人間性が健全に発達し、他者との関係を含む社会性が育っているかということに着目する必要があることを示していた。教会教育の担い手は人間性と人間の発達に関する理解に努める必要があると考えられる。

8 救いの神学への神表象理論からの提言

(1) Wesley 理論による信仰体験の検討：「第 X の転機」

本研究は、第八研究の結果を踏まえて、Wesley 理論の枠組みにおいて、「**第 X の転機**」という概念を提出することによって、「回心」や「聖化」という視点だけでなく、神表象の変化が重要であることを提示したものである。キリスト者になる経験と神表象が変化する経験は、パターンが多様であることが観察された。また、キリスト者になることは大きな転機であっても、そのことで神表象が変化したり、神表象の変化にともなって、生き方が変化したりすることではないことも示された。この意味で、「回心」や「聖化」の経験を骨子としてきた従来の神学体系は再検討の余地があり、「回心」や「聖化」の経験だけでなく、神表象の変化にも着目すべきではないかということが示された。神表象の変化は人生のどこかで起きうる、そしてその変化が、自己の認識、他者の認識、人生の認識などを変え、人格的な成長を促す。転機でありながら時期を特定しにくいという意味で、神表象の変化を「**第 X の転機**」と表現した。本研究は、教会教育と人格形成における Wesley 理論の新しい展開を提示するものである。

(2) 宗教の方向性の再考：「恵み」の神学をめぐって

本研究は、第八研究の結果を踏まえて、神表象の変化の内容と様態との関連で、キリスト教のあり方、特に「恵み」の概念の再評価が必要であることを示唆したものである。神表象の変化のプロセスで特に注目すべきことは、無条件さの体験と方向性の変化である。無条件に受け入れられていることを体験的に理解することによって、自己を受容し、他者を意識できるようになり、支えられ、やってもらっていることに意識が変化し、自分で自分のことを監視しないで済むという内面の変化を経験している。この変化は、キリスト教の本質と深く関係している。人間から神へではなく神から人間へという方向性が神の啓示の基本的スタンスである。神学的には「恵み」の概念の再評価が必要であると考えられる。

IV 本研究の限界と今後の課題

第一に、本研究は研究対象の範囲を Wesley 理論に基づく教会教育に限定した、実証的研究法による研究である。本来、神表象の定義について神学的・宗教哲学的に検討した上で、実証的・心理学的検討を行うことによって、さらに包括的な理論構成ができると思われる。この意味で、本研究は神表象研究の端緒に過ぎない。本研究の最終的な研究射程は、神学的研究法による検討を含めて、神表象研究全体におよぶことを想定したものである。今後、「神のかたち」(imago Dei)に関する神学的検討は必須であると考えられる。

第二に、本研究では研究のフィールドに制限があったため、研究法が限定された。本来

ならば、対照群を設定し、日本人の心理と諸外国の人の心理の比較を行う横断的研究に加え、「個」の認識の変化のプロセスを追う縦断的研究も試みられるべきである。

第三に、本研究は、諸外国で行われた神表象理論の研究を受けて、日本という一文化形態を対象に実施したキリスト教教育における実証的検討である。実証的検討でありながら、聖書の中に語られている神を前提としている。心理学的探求と神学的探求の接点について考察すべきであるが、本研究の段階では、十分な議論ができる段階に至っているとは言えない。今後、さらに接点を探る研究を行う必要があると考えられる。

第四に、本研究は、神表象を測定する日本語版の尺度開発を試みたが、否定的・律法的父性、理想的・社会的父性、受容的・母性的父性の三つのカテゴリーの中で、理想的・社会的父性が質問項目に載りにくかった。尺度開発は否定的・律法的父性の測定が可能になったという意味で第一歩だが、今後さらに父性性を測定する尺度の精緻化が求められる。

第五に、本研究では、Freud 理論から始めて、Rizzuto 理論、そしてアタッチメント理論の系譜をたどったが、表象論研究・象徴研究はその他の理論背景でも行われており、Jung の分析心理学を始めとして一つの流れを作っている。より包括的な理論構築のためには、先行研究に載らなかった理論を背景とした研究が求められる。

第六に、日本人一般の神概念については、宗教学あるいは宗教心理学においてさまざまな研究が試みられているものの、日本人全体を同じ枠の中にとらえて研究するのはきわめて難しい。キリスト教の神概念が、絶対他者としての神であるのに対し、日本的神概念は汎神論的であることがその理由の一つであろう。絶対他者としての神、汎神論的の神の両方を含めることができる研究法の切り口は見いだせないままであり、今後の検討課題である。

第七に、本研究の目的の一つは、わが国におけるキリスト教教育のあり方やキリスト者を対象とした心理療法に何らかの貢献ができるのではないかとということにあった。心理療法の分野においては、諸外国ではさまざまな心理学の理論に神表象理論の知見を取り込んだモデルの構築が試みられているが、わが国においては未開拓の分野である。今後の検討課題である。

2015年度

博士学位論文

日本人キリスト者の神表象研究
—Wesley理論に基づく教会教育の視点から—

東洋英和女学院大学大学院

人間科学研究科

人間科学専攻

2012D002 河村従彦

目次

序章 問題	1
第一節 筆者の問題意識	1
第二節 牧会現場からの問題提起	2
1 牧会心理臨床における神表象の問題	2
2 キリスト教教育における神表象の問題	4
3 神表象の実証的研究の必要	6
第三節 心理学と神学との関係	6
1 科学の宗教の緊張関係	6
2 心理学と信仰の混同	7
3 科学と宗教の再統合への試み	8
第四節 本研究全体の目的	9
第一章 先行研究	10
第一節 諸外国における神表象研究	10
1 神表象研究の端緒	10
2 精神分析理論：Freud, S.の宗教論	11
(1) 心の理解	11
(2) 宗教論	13
(3) 神表象理論	14
(4) 「イマージ」(imago) の概念	16
3 対象関係論：Rizzuto, A.の神表象理論	17
(1) Freud, S.の神表象理論の理論の要約（Rizzuto, A.による）	17
(2) Rizzuto, A.と Freud, S.の相違点	17
(3) Freud, S.からの展開	20
(4) 神表象の誕生と発達のプロセス	22
(5) Rizzuto, A.の Freud 評価：エディプス期の意味	29
4 Rizzuto, A.の理論の修正	29
(1) Meissner, W. W.	29
(2) Leavy, S.	30

(3) Jones, J. W.....	31
(4) Halevi-Spero, M.....	32
(5) 修正の要点	38
(6) 理論背景の移行	39
5 アタッチメント理論	39
(1) 実証的研究法の必要.....	39
(2) Freud 理論との訣別.....	40
(3) Rizzuto, A.の反論	41
(4) 「補償仮説」と「一致仮説」	41
(5) 「回心」の様態の検討	46
6 神表象を測定する尺度開発の試み	47
7 神表象と諸要素との関連の検討	49
(1) 性差	49
(2) 自己イメージ	49
(3) 原家族の親のダイナミクス.....	49
(4) 病理	50
8 神概念と神表象の区別	50
第二節 わが国における神表象研究	53
第三節 神表象理論と近接領域	54
1 人間科学領域内での位置づけ	54
2 信仰発達理論との関連	55
第四節 本研究の対象範囲と意義.....	56
1 日本人キリスト者を対象にした実証的検討.....	56
2 神表象の内在化のプロセスの検討	57
3 「一致仮説」と「補償仮説」の詳細な検討.....	57
4 心理臨床におけるモデルの提言	57
5 教会のキリスト教教育のモデルの検討	57
6 「回心」を重視する Wesley 理論の神表象の視点からの検討	58
第二章 研究方法	59
第一節 構成概念の背景	59

1	わが国におけるメソジストの流れの位置づけ	59
2	メソジストの流れの端緒	60
(1)	Wesley, J.の生涯の概観	60
(2)	Wesley, J.自身の「回心」の経験	61
3	Wesley 理論の全体像	62
(1)	Wesley, J.の救いの順序	62
(2)	「神のかたち」(imago dei) の概念	63
(3)	「神のかたち」の回復	63
(4)	「先行的恵み」	64
(5)	「悔い改め」	65
(6)	「義認」	65
(7)	「新生」	66
(8)	キリスト者の中にある罪	66
(9)	「聖化」	67
(10)	キリスト者としての継続的成長	68
4	「回心」を軸とした教会教育	69
5	Wesley, J.の「回心」の心理的側面	69
6	まとめ	71
第二節 構成概念の検討		71
1	本研究における構成概念の特殊性	71
2	聖書の表現を記述した「神の役割理論」	72
(1)	八つの「役割」の全体像	72
(2)	「役割」と「属性」	73
(3)	各「役割」の内容	74
(4)	内在化される神のイメージの多様性	76
3	ケース・スタディーによる検討	77
(1)	論点	77
(2)	方法	77
(3)	結果	78
(4)	分析	82

(5) まとめ：神表象の変化と生き方の関連	83
4 心理学的研究法における神表象の「操作的定義」	83
5 神の役割理論の「操作的定義」の妥当性	85
6 神表象研究の最終的研究射程	86
第三節 神表象理論の日本人キリスト者への適用の妥当性	86
1 日本の神観と欧米の神観	86
2 父という神概念と母性	87
3 質問紙作成時の工夫	87
第四節 用語の範囲と定義	88
1 神表象と神概念の範囲	88
2 役割 (role) と表象 (image)	88
3 「表象」と「イメージ」の訳語	89
4 自己の概念	89
5 神の概念	90
(1) 二つの神論	90
(2) ユダヤ教の神とキリスト教の神の連続性	90
(3) 共通した神論の可能性	91
6 日本人キリスト者の定義	91
7 信仰の定義	92
8 「回心」の定義	92
9 キリスト教教育の定義	93
第五節 調査・研究の全体的方針	93
1 調査協力者と実施の時期	93
(1) 調査 A 質問紙調査 (2009)	94
(2) 調査 B 質問紙調査 (2010)	94
(3) 調査 C 質問紙調査 (2013)	94
(4) 調査 D 質問紙調査 (2014)	94
(5) 調査 E 半構造化面接 (2014)	94
2 分析方法	94
(1) 量的研究 (調査 A～D)	95

(2) 質的研究（調査 E）	95
3 調査・分析の方針	95
第三章 量的研究：神表象の実態調査と内容の検討	96
第一節 第一研究：神表象を測定する尺度の作成（調査 A・B）	96
1 問題と目的	96
2 方法（調査 A・予備調査）	96
(1) 神表象尺度・簡易版の作成	96
(2) 神表象尺度の作成	96
(3) 調査の実施	96
(4) データの確定	97
(5) 神表象尺度の分析	97
3 尺度名の検討	98
4 方法（調査 B・本調査）	98
(1) GISJ・簡易版の調整	98
(2) GISJ の調整	98
(3) God Image Scale・邦訳版の作成	98
(4) その他の使用した尺度	99
(5) 調査の実施	100
(6) データの確認	100
5 GISJ の因子分析による検討	101
(1) 因子内容の検討	101
(2) 因子数の決定	101
6 まとめと課題	102
(1) サンプルングの限界	102
(2) 聖書の記述を質問項目にする限界	103
(3) 聖書の記述とキリスト者が取り込んでいるイメージの差異	103
(4) 父性性の検討	103
第二節 第二研究：基本的信頼感、自尊感情、生き方と神表象の関連 （調査 B）	104
1 問題と目的	104

2	方法	104
3	各下位尺度得点間の相関分析	105
4	十の神表象と他の尺度との相関	106
5	属性別の検討	107
	(1) 自尊感情、基本的信頼感、生き方の属性別分析	107
	(2) 神表象の属性別分析	108
6	神表象を規定する要因の重回帰分析による検討	109
7	まとめと課題	110
	(1) 神表象と自己の関係	110
	(2) 社会性と内面のギャップ	110
	(3) 宗派の差異	111
	(4) 本研究の限界	111
	(5) 次の研究への展望	112
第三節 第三研究：神アタッチメント尺度日本語版の作成（調査 C）		
	112
1	問題と目的	112
	(1) 今後の研究の方針	112
	(2) 神アタッチメントの定義と妥当性	112
	(3) 神アタッチメントを測定する尺度の回答可能性	113
	(4) 神アタッチメントを測定する尺度の必要	113
2	方法（調査 C）	114
	(1) ECR-R の邦訳の作成	114
	(2) その他の使用した尺度	114
	(3) 質問紙の構成	115
	(4) 質問紙調査の実施	116
	(5) 有効回答の決定	116
	(6) 各質問項目の平均値と標準偏差	117
	(7) 逆転項目の変換	118
	(8) 各尺度の基本統計量	118
3	GAS の因子分析による検討	118

4	まとめと課題	119
第四節 第四研究：アタッチメント理論からの検討（調査 C）120		
1	問題と目的	120
2	仮説	120
3	方法	120
4	下位尺度間の相関	120
(1)	一般他者および神アタッチメントと神表象の関連	121
(2)	親の養育態度と神表象の関連	121
(3)	親の養育態度と神アタッチメントの関連	122
5	アタッチメント傾向と神表象の関連	122
6	まとめと課題	123
(1)	神表象と神アタッチメントの関連	123
(2)	神アタッチメントと社会性・内面の差異との関連	123
(3)	神アタッチメントと母性イメージ	124
(4)	次の研究への展望	125
第五節 第五研究：心理社会的発達理論からの検討（調査 C）125		
1	第二研究からの知見	125
2	問題と目的	125
3	仮説	125
4	方法	126
5	下位尺度間の相関	126
(1)	親の養育態度と神表象の関連	126
(2)	神表象と心理社会的発達理論との関連	127
6	性別による検討	127
(1)	性別による親の養育態度と神表象の関連	127
(2)	性別による神表象と心理社会的発達理論との関連	128
(3)	性別による親の養育態度と心理社会的発達理論との関連	128
7	まとめと課題	129
(1)	各発達段階と性差	129
(2)	主導性と罪責感	129

(3) 勤勉の感覚と劣等感	130
(4) アイデンティティの確立と親密性	130
(5) 次の研究への展望	131
第六節 第六研究：神表象の属性別検討（調査 C）	131
1 問題と目的	131
2 仮説	131
3 方法	133
4 属性別の分析	133
(1) 年齢	133
(2) 性差	134
(3) 宗派	135
(4) キリスト者になってからの年数	135
(5) 人格形成期の家庭環境	136
(6) 両親との関係	138
(7) 兄弟の中での自分の位置	139
(8) 兄弟との関係	140
5 神表象の変化	141
(1) 神表象の変化とアタッチメントとの関連	141
(2) 神表象の変化と親の養育態度との関連	142
(3) 神のイメージの変化の方向	143
6 まとめと課題	144
(1) ライフサイクルと神表象の変化	144
(2) 性差	145
(3) 人格形成期の家庭環境	146
(4) 神表象の変化	147
(5) 次の研究への展望	148
第七節 第七研究：神表象と甘えの心理の関連（調査 D）	148
1 日本人の心理と神表象	148
(1) 一神教的神概念と日本の神概念	148
(2) 「甘えの理論」	149

2	問題と目的	152
3	方法（調査 D）	152
(1)	使用した尺度	152
(2)	質問紙の構成	153
(3)	質問紙調査の実施	153
(4)	有効回答とデータの決定	153
(5)	逆転項目の変換	153
(6)	各質問項目の平均値と標準偏差	154
(7)	各尺度の基本統計量	154
4	因子分析による GAS の検討	154
5	仮説	156
6	相関分析	156
7	属性別の分析	157
(1)	人格形成期の家庭環境	157
(2)	父親との関係	158
(3)	母親との関係	159
(4)	環境および父親・母親と甘えとの関係	159
(5)	兄弟構成	160
(6)	神表象の変化の方向	160
8	まとめと課題	161
(1)	信頼と甘えの違い	161
(2)	「屈折的甘え」	162
(3)	「とらわれ」の意識（甘えたくても甘えられない心）	162
(4)	原家族の宗教的環境と甘え	164
(5)	本研究の限界と次の研究への展望	165
第四章 質的研究：神表象の変化のプロセスの検討		166
第一節 本研究における質的研究の意義		166
1	量的研究と質的研究の特性	166
2	修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ	167
3	半構造化面接	169

4 分析方法としての適性	169
第二節 第八研究：神表象の変化のプロセスの検討（調査 E）	170
1 問題と目的	170
2 方法（調査 E）	171
(1) 調査協力者	171
(2) 実施期間および場所	172
(3) 倫理的配慮	172
(4) 半構造化面接で質問した質問項目	172
3 分析	173
4 結果	173
(1) 概念リスト	173
(2) カテゴリーごとの説明	174
(3) ストーリーライン	184
(4) 結果図	185
5 分析 2.....	187
(1) 他者性と意外性の意識	187
(2) 神表象の変化のプロセスパターン	187
(3) 神表象の変化	191
(4) 神の存在自体の変化のパターン	193
(5) 神の存在の変化の意味	195
(6) 神表象の変化の結果	196
(7) 日本人キリスト者が取り込んでいる神表象	197
6 本研究の限界	197
第五章 総合考察	199
第一節 結果	199
1 自尊感情	199
2 人間関係・対人的信頼感	199
3 社会的関係・生き方	199
(1) 能動的実践的態度	199
(2) 自己の創造・開発	199

(3) 自他共存	200
(4) こだわりと執着心のなさ	200
(5) 他者尊重	200
4 神表象を形成する要因	200
5 神表象の内面性への影響と外的表れ	200
6 十の神表象と生き方	201
(1) 全体的傾向	201
(2) 親しい神のイメージ	201
(3) 厳しい神のイメージ	201
7 属性別分析	201
(1) 年齢	201
(2) 年数	201
(3) 性差	202
(4) 宗派	203
8 親の養育態度	203
(1) 親の養育態度と神表象	203
(2) 親の養育態度と神アタッチメント	203
(3) 親の養育態度と家族環境	204
(4) 父親との関係	204
(5) 母親との関係	204
(6) 兄弟の中での位置	204
(7) 兄弟との関係	204
9 アタッチメント	204
(1) 神表象との関連	204
(2) アタッチメント傾向	205
10 心理社会的発達段階	205
(1) 第一段階・乳児期	205
(2) 第四段階・学童期	205
(3) 第五段階・青年期	205
(4) 第六段階・前成人期	205

11 甘えの心理と神表象	206
(1) 神表象と甘えの心理	206
(2) 神アタッチメントと甘えの心理	206
(3) 家族環境と甘えの心理	206
12 神表象の変化	207
(1) アタッチメントとの関連	207
(2) 親の養育態度との関連	207
(3) 変化の方向	207
(4) 他者性と意外性の意識	207
(5) 変化のパターン	207
(6) 神表象の変化	208
(7) 神の存在の変化	208
(8) 変化の結果	208
(9) 内在化される神表象のカテゴリー	209
第二節 考察	209
1 日本人キリスト者の神表象の内在化の特徴	209
(1) 四つのカテゴリー	209
(2) 聖書に提示されている神表象との関連	210
(3) 父性性の三つの角度からの検討	211
2 神表象の内在化のプロセス：Rizzuto 理論の検討	212
3 日本人に特徴的に見られる心理と神表象	213
(1) 「個」の確立と甘えの心理	213
(2) 神への信頼と甘えの心理の差異	214
4 一致仮説と補償仮説：「日本的修正補償仮説」	214
5 神表象の内在化の共通的側面	218
(1) 一神教的神概念と日本の神概念の異同	218
(2) 父性性と神表象の変化の位置づけ	219
(3) 「個」の確立の意味	219
6 神表象の内在化の全体像	220
7 心理臨床・牧会臨床への神表象理論からの提言	222

(1) 神概念と神表象の関連	222
(2) 神という鏡に映し出される自己	223
(3) 心理臨床における神表象の理解	224
8 キリスト教教育への神表象理論からの提言	227
(1) キリスト教教育における従来の神の提示	227
(2) 神表象理論からの神の提示：「父・牧者アプローチ」	228
(3) 前エディプス段階と信仰	229
(4) 「クリスチャン・ホーム」における自立のプロセス	230
(5) Wesley 理論に基づく教会教育のプログラムの展望	233
9 救いの神学への神表象理論からの提言	234
(1) Wesley 理論による信仰体験の検討：「第 X の転機」	234
(2) 宗教の方向性の再考：「恵み」の神学との関わりで	238
終章 結論	240
第一節 結果の要約	240
1 神表象と自己のあり方・生き方	240
2 属性別分析	240
3 家族との関係	240
4 アタッチメント	240
5 心理社会的発達段階	241
6 甘えの心理	241
7 神表象の変化	241
8 神表象の四つのカテゴリー	242
第二節 意義	242
第三節 総括	246
第四節 課題	247
1 最終的研究射程としての神表象の神学的検討	247
2 実験計画全体の精緻化	248
3 実証的検討と神学的検討の接点	248
4 父性性の心理学的検討	249
5 神表象の表象論研究	249

6 日本人論の視点からの神表象の検討	249
7 神表象理論に基づく心理療法のモデルの構築	250
文献	251
あとがき・謝辞	264
Appendix	i
1 調査 C「神イメージと生き方についてのアンケート (A 版)」質問紙	i
2 調査 C「神イメージと生き方についてのアンケート (B 版)」質問紙 ..	vii
3 調査 D「神イメージと生き方についてのアンケート」質問紙	xii
4 調査 E 半構造化面接の分析ワークシート	xviii

図目次

図 1 肉体・精神/心理・霊性の関係	8
図 2 客観的人間関係 (人間的) 対象の心理表象	33
図 3 神概念の発達の標準的心理的モデル (人間中心的次元)	34
図 4 心内的「神」対象の心理表象	35
図 5 神表象の発達の修正モデル (人間中心的・神中心的次元)	36
図 6 心理内的「神」対象の心的表象と客観的神的对象	37
図 7 Wesley, J.の救いの順序.....	62
図 8 神表象の変化のプロセス	186
図 9 神表象の変化 ～ライフ・イベントや信仰との関係.....	188
図 10 キリスト者になる経験および神表象の変化の前後の神の存在の比較.....	193
図 11 厳しい神表象の内在化と社会性の保持	215
図 12 神表象の内在化と変容から見る生涯の構図	221
図 13 Freud, S.の局所論における神概念と神表象の位置づけ	222
図 14 言語化された神概念と神表象の関係	223
図 15 神という鏡に映し出される自己	224
図 16 神表象の親しさの度合いと神表象との距離感.....	225

図 17	キリスト者になる前の神表象の親しさの度合いと神表象との距離感.....	226
図 18	「あがない主アプローチ」の親しさの度合いと神表象との距離感	227
図 19	「父・牧者アプローチ」の親しさの度合いと神表象との距離感	229

表目次

表 1	神表象研究で開発・使用された主な尺度のリスト	48
表 2	神の「聖」のさまざまな表現～神の八つの役割 (Roles of God)	73
表 3	Wesley, J.の説教に見られる神表象の言及数	78
表 4	神表象尺度 因子分析結果	97
表 5	第二研究 GISJ 三因子の因子分析結果.....	101
表 6	調査 B GISJ 二因子の因子分析結果	102
表 7	各下位尺度得点間の相関.....	105
表 8	GISJ・簡易版と他の尺度との相関.....	106
表 9	年齢、環境、年数の分散分析結果	107
表 10	GISJ の属性別平均値の比較・分散分析結果	108
表 11	GISJ の性別平均値の比較・ <i>t</i> 検定結果.....	109
表 12	神表象を規定する要因・重回帰分析結果	109
表 13	配布数、回収数、有効回答数	116
表 14	各尺度の質問項目の平均値と標準偏差.....	117
表 15	尺度得点の基本統計量	118
表 16	GAS 因子分析結果.....	119
表 17	ECR-GO・GAS・GISJ・PBI の相関	121
表 18	神のイメージと RQ の四つのスタイルの平均値 分散分析結果	122
表 19	自我同一性・神のイメージ・親の養育態度の相関	126
表 20	自我同一性・神のイメージ・親の養育態度の男女別相関	128
表 21	年代と神のイメージの関連 分散分析結果	133
表 22	神アタッチメントの年代別平均値の比較 分散分析結果	134

表 23	GISJ と PBI の性別の平均値の比較 t 検定結果.....	134
表 24	神アタッチメントの性別の平均値の比較 t 検定結果	134
表 25	宗派別の平均値の比較 t 検定結果.....	135
表 26	キリスト者になってからの年数と神のイメージとの関連 分散分析結果 .	136
表 27	キリスト者になってからの年数と神アタッチメントとの関連 分散分析結果	136
表 28	人格形成期の環境と神のイメージとの関連 分散分析結果	137
表 29	人格形成期の環境と父の養護的養育態度との関連 分散分析結果	137
表 30	キリスト者が家族にいるかによる父の養育態度の差の検討 t 検定結果...	137
表 31	自我同一性・GISJ・親の養育態度の相関.....	138
表 32	父との関係と神のイメージとの関連の検討 t 検定結果	139
表 33	母との関係と神のイメージとの関連の検討 分散分析結果	139
表 34	兄弟との関係と神のイメージとの関連の検討 分散分析結果.....	140
表 35	兄弟との関係と親の養育態度との関連の検討 分散分析結果.....	141
表 36	変化がなかったと答えた人と変化があったと答えた人の平均値の比較 t 検定 結果.....	142
表 37	急な変化があった人とそれ以外の人との平均値の比較 t 検定結果.....	142
表 38	神表象の変化と父の養育態度との関連の検討 分散分析結果.....	143
表 39	神表象の変化と母の養育態度との関連の検討 t 検定結果.....	143
表 40	神表象の変化の方向	144
表 41	各尺度の質問項目の平均値と標準偏差.....	154
表 42	各尺度の質問項目の平均値と標準偏差.....	154
表 43	GAS 因子分析結果.....	155
表 44	甘え尺度、GISJ、GAS の相関.....	156
表 45	十の神表象と甘え尺度の相関	157
表 46	人格形成期に家族環境の違いによる平均値の差 t 検定結果	158
表 47	父親との関係と甘えの関連の検討 分散分析結果	158
表 48	母親との関係と「とらわれ」の関連の検討 t 検定結果	159
表 49	父親との関係と甘えの関連の検討 分散分析結果	159
表 50	母親との関係と甘えの関連の検討 分散分析結果	160

表 51	神表象の変化の方向と甘えの関連の検討 分散分析結果	161
表 52	調査協力者一覧.....	172
表 53	概念とカテゴリーのリスト	174
表 54	神表象の内容の変化	192
表 55	神の存在の変化の意味	195

重要事項の記載目次

本研究の論旨で重要と考えられる以下の事項は、本文中、**太字ゴシック体**で記載した。

日本的修正補償仮説	214、216、217、218、231、243、247
父・牧者アプローチ	220、228、229、230、233、234、245、247
第Xの転機	234、235、237、238、245、246、247

序章 問題

第一節 筆者の問題意識

本研究のテーマは、臨床心理学専攻の修士課程で研究を行った際に研究テーマとして設定されたものである。しかしその問題意識は、筆者自身の人格形成のプロセスと無関係ではなく、かなり早い時期から筆者の中に取り込まれていた。幼少期から少年期に身をおいていたプロテスタント教会の宗教的環境は、少なくとも形の上では整っていたように見え、小学生のときに洗礼も受けている。それにもかかわらず、青年期を回想すると、自己理解と社会性は稚拙なものであり、それが顕在化したのは、牧師になってから留学のために日本という環境を離れた時であった。教えられてきたキリスト教、それを土台にして培ってきた価値観、キリスト者としての良心が、自分の内側から働く内発的なものではなく、いざという時の自分の価値判断やモラルを支えないという自己の現実と直面した。そのことを通して、従来のキリスト教への疑義、そして基本的なレベルでの問い直しが内的課題となった。そのとき問題となったのが、教えられてきた神学が、少なくとも見た目は立派でありながらなぜ機能不全に陥るのかという問いであり、さらに、自分は何者なのか、そして、神は自分にとってどういう存在かという実存的な問いであった。

アメリカに滞在中、聖書の中に神がどのような役割（role）で示されているかを聖書神学的手法によって提示したCoppedge, A. (1988) の「神の役割理論」は、自己の問い直しをするための素材となった。「神の役割理論」を用いて、一人の人物について歴史神学的アプローチによる文献研究を行い、その妥当性を検討した (Kawamura, 1993)。「神の役割理論」の検討は、キリスト教会の価値観、人格形成をした原家族（筆者注：自分が生まれ育った家族の意）の価値観を再評価し、一キリスト者としての自分自身、対人援助に関わる牧師としての自分のあり方を振り返り、自己存在を問いなおす素材を与えてくれた。筆者自身、幼少期から青年期にかけて、否定的な神のイメージを内在化させていたことを認識し、神について抱くイメージが変化することも体験として理解できた。

さらにもう一人、メソジストの教職であり、アズベリー・セオロジカル・セミナリーで牧会学の教鞭をとっていたSeamands, D. (1981, 1985, 1988, 1993) の牧会心理臨床の視点は、違う角度からの自己の問い直しを促した。Seamands, D.は、牧会臨床の枠組みに心理学的視点を援用し、人間が神から受けることができる「恵み」を体験することを妨げる人間性の問題を論じている。宗教や信仰は、人間理解が欠落すればイデオロギー化する。

人間を存在のレベルで解放し、成長させるはずの宗教が、逆に人間を縛り、そのみならず人間を歪めるツールになる。Seamands, D.の視点から学んだことは、信仰は神の啓示による形而上学的なものでありながら、信仰の健全性は、その受け皿となる人間そのものの理解を土台に置いたものでなければならないということであった。その意味で、神学の体験的側面には、人文科学の実証的検討が機能する余地があり、しかもそこに時代的な必然性があると想定された。

そのことと並行して、牧師として関わってきた牧会心理臨床の現場では、信仰のあり方・社会性・対人関係の構築のしかたと、その人がどのように神を自分の中に内在化させているかということとの間に関連があるのではないかと感じるようになった。

以上のように、自己洞察を進めて行くプロセスの中で、神表象という視点と人間性の理解が重要な検討課題となった。臨床心理学専攻の修士課程では、実証的アプローチによって、日本人キリスト者の神表象の内容と様態を調査・検討した（河村、2010）。本研究は、その基礎研究をさらに展開したものである。

第二節 牧会現場からの問題提起

1 牧会心理臨床における神表象の問題

人生の構え、生き方、パーソナリティー、発達の様態などは、人それぞれに特性や傾向性がある。キリスト者も例外ではない。一般的に、クライアントや教育の対象者に社会的な不適応が観察される場合、人生の構えやパーソナリティーの傾向を検討することは十分あり得るが、キリスト者を対象とした教育や心理臨床の場合は、人生の構えやパーソナリティーの傾向だけでなく、内界の重要な一部である絶対他者（神）をどのようにイメージするかということにも一定の傾向があるのではないかと推測される。

牧会臨床の現場では、自分のイメージと神のイメージについて、臨床心理学的な知見を生かしたさまざまな取り組みがなされてきた。Seamands, D.は、自らの牧会の経験から、自己評価の低さ（1981、p.63）と、親との関係で培われる完全主義が人格成長の妨げになっていると述べ（1988、河村訳、2004、p.134）、内面的な未成熟さを「幼児性」という概念で説明した（1993、河村訳、2002、p.11）。さらに絶対他者（神）をどのようなイメージでとらえるかが生き方に影響を与えていると指摘し、人格が健全に成熟して行くためには、神について持っているイメージが矯正されることが必要であるとした（1985）。さら

に、初期の発達過程で、親との関係が良くなかったなど、良好でない環境の中に身をおかざるをえなかった場合、それが神についてのイメージにどのように影響するかについて述べ、以下のような歪みが発生するという問題提起をしている (pp.98～99、引用者訳)。

〈本来の神表象〉		〈歪んでしまった神表象〉
愛とケアを与える	→	憎しみに満ち無関心な
善であわれみに満ちた	→	ケチで赦さない
たしかで信頼できる	→	予測がつかず信頼できない
無条件の「恵み」の	→	条件付きで是認する
今ここにおられる	→	必要な時にいない
良き賜物を与えてくださる	→	奪う方、しらけさせる
養い肯定してくださる	→	批判的で、喜ばすことができない
受容する	→	拒絶する
聖い、正しい、公平、えこひいきのない	→	正しさがなく、不公平で、ひいきする

初期の発達過程で良好でない環境の中に身をおかざるをえなかった場合、神の肯定的側面は歪められ、非人道的な、無機質な、反応のない存在として神を描くしかなくなる。人格形成のプロセスで一度刷り込まれたこのようなイメージを修正・回復して行くのは簡単なことではない。このように、キリスト者の場合、神をどのようにイメージしているかは、重要な要因として検討すべきであると思われる。

Phillips, J. B. (1961) の著した "Your God Is Too Small" は、Seamands, D. (1985) も牧会臨床の現場で読むことを勧めている古典的な名著である (p.126)。Phillips, J. B. はその著書の中で、神についてキリスト者が理解している概念が歪んでいるのではないかという問題提起をし、子どもが父親について抱くイメージの影響は避けられないとしている (p.19)。

Tillich, P. (1960) は、現代のプロテスタント教会が、人間が善い意志をもって地上における神の国の実現に向けて進んでいるという理解をもっていながら、実際の現場においてさまざまな問題や不協和が報告されており、考え方を変えなければならないのではないかと論じている (相澤訳、p.142)。そしてその一因が、律法主義的な歪曲にあり、そのような背景から、キリスト教の受容の教理の再表現の必要感が生まれてきたとしている (相澤訳、p.145)。「宗教と心理学の対話——人間精神および健康の神学的意味」の翻訳者であ

り、Tillich 研究をしている相澤（2009）は、教会が倫理道德的清さと正しさ、そして罪や罪意識を強調しすぎてきたため、キリスト者の中に自責の念や劣等感を生み出し、それがもとになって他者を裁く体質になってはいないかと警鐘を鳴らしている（pp.346～347）。

長老派の牧師であり、交流分析の心理療法家でもある Lotufo, Jr., Z.（2012）は、保守的なキリスト教が残酷で怒りに満ちた神のイメージに土台をおいているのではないかとという仮説のもとに、神表象研究の内容をレビューし、それと神学との関係を論じている。

これらの牧会現場からの報告は、わが国における牧会現場の現状とも重なり合うことが十分推察される。宗教心理学者であった松本（1998）は、日本の宗教を意識した宗教の父性的側面・母性的側面について研究し、父性の否定的・破壊的側面を「桎梏性」、父性の肯定的・生産的・助長的側面を「支柱性」と呼んだ（pp.58～63）。さらに松本（1998）は、日本的宗教との比較において、キリスト教は、父性性が優位な宗教であるという位置づけをしている（p.93）。人間は「母なるもの」によって育まれ、「父なるもの」によって支えられて成長するが（p.63）、もし神の「桎梏性」が強調されることによって、神の「支柱性」が機能しなければ、神は否定的なイメージとして内在化されると考えられる。

2 キリスト教教育における神表象の問題

教会におけるキリスト教教育において、どのような神表象が説かれてきたかについての研究はほとんどなされていない。教会教育において主要な役割を担ってきたのは教会学校である。「回心」を主要な教理と受け止めてきたプロテスタント教会においては、子どもに対して、成人と同等の「回心」、あるいはそれに近いものを求めて来たところがある。しかし、牧会臨床の現場で、それが必ずしも機能しないケースが散見される。河村（1999）は、幼少期から「回心」経験をフォーマットとして提示された場合、キリスト者としての自己イメージが一人歩きし、自分の実態から遊離する「信仰のイメージ化」が起きるのではないかという問題提起をしている。さらに河村（2005）は、キリスト教の背景の中で人格形成をする場合、人間が自立するメカニズムを理解する必要があるとし、自立と信仰継承の問題をKohlberg, L.とFowler, J.の理論を援用して論じている。人間は自立するプロセスで原家族と異なる価値観を自己の中に形成しなければならず、両親がキリスト者である場合には、自立に向けた葛藤はさらに強くなることが想定される。自立しようとするエネルギーが強い場合には、そのことが引き金となって結果として教会から離れることになり、他方、キリスト者としてとどまろうとすれば、客観視するために一度距離を取り、それと同

時並行的にキリスト教の価値観を取り込むという心理的矛盾を抱え込むことになる。河村はそのジレンマを「自立のねじれ現象」と命名した。

この問題は、幼少期からの家庭や教会における教育のあり方に問題を投げかけている。キリスト者の親であれば信仰の継承は望むであろうし、キリスト者の教育者であればキリスト教の理念に基づく人格形成を願うであろう。しかしながら、信仰の継承ということが前面に出て、自立やアイデンティティという視点が欠落すれば、心理的葛藤を抱えたままのキリスト者であり続けなければならないことは想定されることである。

この点に関して、アイデンティティ理論を深めたMarcia理論は興味深い。わが国においては、最初、無藤（1979）によって検討され、加藤（1983）によって尺度が開発された。Marcia, J. E. (1966) は、青年のアイデンティティを考える際には、危機（crisis）を体験しているかということと、何かに傾倒（commitment）しているかということの2軸を導入して、アイデンティティの状態を四つの類型で考えた。「アイデンティティ達成」（identity achievement）：危機を経て、現在自己投入の対象を持っている者、「モラトリウム」（moratorium）：危機の中で自己投入の対象を獲得しようと努力している者、「早期完了」（foreclosure）：危機を経ずに、両親や社会通念が示すものを自己投入の対象としている者、「アイデンティティ拡散」（identity diffusion）：危機の有無にかかわらず、現在自己投入を行っていない者、の四つである（加藤、1983、pp.20～21）。ここで問題になるのは、「危機」を経験しないままに「傾倒」している状態を示す「早期完了」である。「早期完了」は、権威を評価し、自ら権威主義的傾向が強く、その反面、ストレスがかかった状況で達成課題をこなすことが苦手である弱さを持っている（遠藤、2013、p.123）。また、自分の目標と親の目標の間に不協和がなく、どんな体験も、幼児期以来の信念を補強する機能を果たし、パーソナリティに柔軟さを欠くという特徴を持つ。皮肉なことに、この権威主義的傾向がキリスト教の権威と結びつく可能性がないとは言えない。親の価値観を引き継ぐことを信仰の継承であると考えれば、「早期完了」の状態を生み出す可能性が生じてくる。

以上のように、キリスト者の両親のもとで人格形成をする場合、自立という視点に着目することは重要であると考えられる。一つの仮説に過ぎないが、キリスト者の場合、内在化させている神表象が自立のプロセスに何らかの影響を与えているのではないか、その中でも特に、否定的な神表象を内在化させていることが問題の背景にあるのではないかということが想定される。すなわち、聖書に提示されている神をバランス良く内在化させるこ

とができず、裁判官などの厳しいイメージのみが支配的である場合、それが発達課題をクリアする妨げになっているのではないかということである。教会におけるキリスト教教育の現場でどのような神表象が提示されているかは再考の余地があると考えられる。

3 神表象の実証的研究の必要

キリスト教における神についての研究は、神学的・宗教哲学的アプローチから、宗派を越えてなされてきた。それに比べて、実証的アプローチによる研究は、諸外国において1970年代からなされてきたとはいえ十分とは言えない。キリスト教教育や牧会心理臨床の現場で提起されている問題は、いずれも神学の問題としては解決しにくい。その理由は、これらの問題を解決するためには人間の心理や発達のメカニズムを理解することが必要と思われるからである。

神学的・宗教哲学的アプローチは、文献を研究するものであることから、演繹的に思索を深めることができる長所があるが、キリスト教教育や心理臨床、牧会臨床に資する研究であるためには、現場の実態を帰納的に捉える実証的アプローチが不可欠であると考えられる。以上のことを踏まえて、本研究では実証的な角度からの検討を試みる。

第三節 心理学と神学との関係

1 科学の宗教の緊張関係

心理学と信仰は、人間の心を対象領域にするため、それぞれが別のアプローチで研究を進めてきた。しかし、キリスト教教育や牧会心理臨床の領域における人間形成の問題にアプローチするためには、信仰は神の啓示による形而上学的なものでありながら、その受け皿となる人間そのものに焦点をあてる必要があるということを理解しなければならない。その意味で、欧米では神学と心理学の対話が試みられてきたと言えるだろう。

わが国のキリスト教会で、実証的・心理学研究法を用いた神表象研究が歓迎される可能性は低い。心理臨床のボキャブラリーを用いて信仰に関係することを定義する方法に妥当性があるのかということも議論の材料になってきた。そもそもその背景には、信仰と心理学の領域の未整理の問題とともに、宗教と科学的知見の対立構図がある。科学の発達により、宗教と科学が分離してしまっているところに現代の宗教の理解の特徴があると考えられる。

2 心理学と信仰の混同

キリスト教を背景とした心理臨床や教育の現場では、社会が複雑化することと並行して人間の問題も複雑化している。現代は臨床心理学が幅広く認知されているが、キリスト者の場合は、神の啓示である聖書を最終的な権威として認めているため、人間の心理を把握する方法は複雑になる。現代は、自然科学・医学と霊性の領域を明確に分けるという考え方をしており、それほど混同されることはない。また明確に領域を分けないままに、両者を必ずしも矛盾するものであるとも考えていない。キリスト者であっても、信仰があるから薬はいらないとは考えない。Seamands, D. (1993) は、「神が通常用いられるいやしの方法は、人間の知識と医学的な技術を最大限活用するという方法です」と述べ、医学と霊性は矛盾しないとしている（河村訳、p.118）。しかし、対象が心になると事態は複雑になる。例えば、心理士が「心」と言う場合と牧師が「心」と言う場合は、その内容は明らかに異なっている。それでありながら、どこが重なっておりどこが違うのかについては曖昧なままである。精神科医や心理士サイドからは、「信仰だけでやろうとしてかえって症状が悪化した」というコメントが出され、牧師サイドからは、「信仰は心理学ではない」というコメントが出される。その背景には、「心」や「たましい」という用語の定義が明確になされていないことがある。

以上のように、信仰が神の啓示を土台にしたものである反面、心理学は、人間の心理現象を科学的に検証する人文科学の貢献であることから、両者の折り合いはつけられていない。わが国の牧会心理臨床の現場では、両者の領域の異同について検証がされないままに心理学的知見を牧会的援助に取り込んできたことから、混乱が見られるのも現実である。

Pruyser, P. W. (1976) は牧師側からこの問題を提起し、問題は、牧師が援助を求めてくる人を診断する際に精神医学の用語を使い、その枠内でしか仕事をしていないことにあると論じている（p.39、斎藤・東方訳、p.41）。また牧師が牧師としての義務を果たさなければ、神学と心理学のあいだに埋もれてしまうと警鐘を鳴らしている（p.54、斎藤・東方訳、p.61）。

河村（2013b）はこの点について、心理・精神と霊性の違いを確認すべきであるとし、人間を、(1)肉体、(2)心理・精神、(3)霊性（スピリチュアリティ）の三つの構成要素から成る統合体と理解した上で、その全体像を図1（次頁）に示した。

人間を、肉体、心理・精神、霊性が相互に影響し合っている統合体として理解することが求められていると言えるであろう。

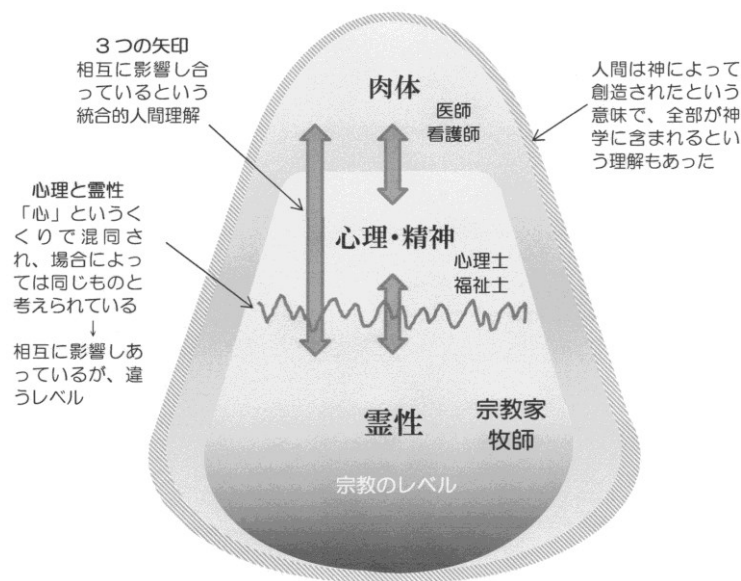


図 1 肉体・精神/心理・霊性の関係

3 科学と宗教の再統合への試み

河村（2013b）が図1で提示した仮説は、科学と信仰の緊張関係の視点から考えれば最終的な解答ではなく、むしろ途上の便宜的・実地的な説明にすぎない。この点について、Tillich, P. (1961) は次元論を提唱する。次元論では、人間は肉体やたましいや精神という層の混合体ではなく、多次元的な統一体であり、物質的、化学的、生物学的、心理的、精神的、歴史的次元が一点に収集するように内在しているととらえる（相澤訳、p.69）。近代の科学至上主義では科学と宗教は交わらないが、宗教と科学が対立の構図を乗り越えて再統合に向かって進むべきであるならば、実証的なアプローチによる神表象理論からの信仰への問いかけは意味がある。神学が心理学の表記に埋没してしまうことを恐れるあまり対話を控えるという姿勢ではなく、実証的探求によって神学的深まりが期待できる可能性もある。

1970年前後のアメリカで始まった神表象の研究は、神学と心理学のいずれとも関連があり、双方からアプローチが可能な、独特の立ち位置にある研究テーマであった。この意味で、今後、心理学と神学が関係を模索して行く中で、重要な役割を果たす可能性がある研究領域であると考えられる。筆者の仮説として、神学が心理学的な枠組みに埋没してしまわない限りにおいて、実証的な方法を援用することはむしろ歓迎すべきことであり、神学の問題をより健全なものとして表記し、そのことで神学的探求が深まりをみせる可能性もある。本研究は、霊性と心理が違う領域に属しながら相互に影響し合っているという前提に立って、科学と宗教が対立するものではないことを示す一つの試みである。

第四節 本研究全体の目的

わが国においては、キリスト者が神についてどのような表象を内在化させているかというに関する研究は行われていない。わが国の教会教育の理念は、「回心」を重視する Wesley 理論の影響を受け、「回心」を子どもにも求めて来たところがあるが、それが必ずしも機能しないケースが散見される。その背景的要因として、キリスト者が内在化させている神表象が影響しているのではないかということが推察される。ところが、牧会臨床や教会のキリスト教教育の現場では、内在化された神表象がキリスト者の信仰と生き方にどのような影響を与えるかということについて、個別の知見は集積されているものの、これらはいわば牧会事例報告や事例研究にとどまっているといえよう。統計学的な検定の結果を根拠として、差異や関連性を吟味していくような実証性の高い基礎研究は行われておらず、神表象を測定する尺度も開発されていない。

本研究は、キリスト教教育、牧会心理臨床の現場で提起されている問題を受け、キリスト者がどのような神表象を内在化させているか、そしてそれが人間形成やキリスト教教育にどのような影響を与えるかについて総合的な考察を行うことを目的とする。具体的な方法としては、日本人キリスト者が内在化させている神表象について実態を把握するために尺度構成を行い、その尺度によって調査を実施した上で、神表象の内在化のあり方について検討する。さらに、内在化させている神表象が変化するか、変化する場合にはどのような変化のプロセスを経るか、そしてその変化が、信仰や生き方にどのような影響を与えるかを検討する。

第一章 先行研究

第一節 諸外国における神表象研究

神表象研究の歴史には三つの理論背景がある。精神分析理論、関係対象論、そしてアタッチメント（attachment）理論である。第一章では、神表象研究がこの三つの理論をどのように活用しながら発展したかを順次概観する。

1 神表象研究の端緒

宗教性の発達研究は絶対他者としての唯一神を伝えるキリスト教を土台においた欧米において進んだため、結果として人間の中で神のイメージがどのように発達するのかというテーマが中心となった（西脇、2011）。神表象研究の草分け的存在といえば、*The Birth of the Living God* を記した Rizzuto, A. である（Hoffman, Grimes, & Acoba, R., 2005）。Rizzuto, A. は、アメリカに移民して精神科医および精神分析の訓練を受けた、アルゼンチン生まれの医師である。2008 年には日本にも招かれ、講演会を行っている（狩野、2009）。

年代的に見ると、Rizzuto, A. が *Annual Meeting of the Society for the Scientific Study of Religion* において、*Critique of the Contemporary Literature in the Scientific Study of Religion* と題したプレゼンテーションを行ったのが 1970 年である。それを少しさかのぼる 1960 年代後半には尺度開発も始まっており、Gorsuch, R. L. (1968) が *Adjective Ratings of God/Religious Concept Survey* を、Vergote, Tamayo, Pasquali, Bonami, Pattyn, and Custers (1969) が *Semantic Differential Parental Scale* を開発している。このように、神表象研究は 1960 年代後半から行われるようになった。

精神分析家であった Rizzuto, A. は、自らの神表象理論の出発点を Freud, S. (1856～1939) に求めた。Freud, S. はユダヤ人の毛織物商人を父として、モラビアの小都市フライベルクで生まれ（Jones, E., 竹友・藤井訳、p.25）、オーストリアの精神科医として、ナチスに追われてロンドンに亡命するまでウィーンを拠点に活動した（Jones, E., 竹友・藤井訳、pp.504～505）。Freud, S. は、心的現象の背後にある無意識を提唱したことなど、人間心理の解明に大きな貢献をしたが、宗教論や宗教心理学の領域まで十分に論じているわけではない。また精神分析学の角度から宗教心理学を検討することもなかった（葛西、1994）。

Freud, S. は宗教を幻想と考え、「幻想の未来」（1927）の中で以下のように論じている。「〈教義〉などと称するこの宗教的なイメージは、経験から生まれたものでも、思考の最終

的な結果から生まれたものでもない。これは幻想にすぎないのだ。これは人間のもっとも古く、もっとも強い緊急な願望を満たす役割をはたしているのである」(中山訳、pp.61～62)。Freud, S.にとって宗教は幻想であり、科学的に克服すべきものとして否定的な見方をしていた。Freud, S.の宗教論はその後、修正されることになり、対象関係論の立場から、幻想には肯定的な意味があるという批判を受けている(葛西、1994)。Rizzuto, A.の神表象理論も、幻想に肯定的な意味を持たせている。

以上のことを踏まえて、ここではまず Freud, S.の宗教論と神表象理論を整理し、その後、Rizzuto, A.がそれをどのように修正しながら自分の理論を構築したかを概観する。

2 精神分析理論：Freud, S.の宗教論

(1) 心の理解

ここで、Freud, S.が人間の心をどのように理解していたかを見ておきたい。Freud, S.が人間の心を説明する考え方に局所論がある。Freud, S.は、人間の心は、エス、自我、超自我の三つの部分から成り立っていると考えた(梅本、p.499)。Freud, S.はエスについて、「精神分析学概説」の中で以下のように述べている。

この精神装置の中で最も古い精神的区画、または「場」をわれわれは「エス」Esと呼ぶ。エスの内容はすべて遺伝され、出生のときにすでにその個体が持って生まれ、体質的に決定されている。つまりそれは、身体組織から発生したさまざまな本能、ここにおいてはじめてわれわれに不明な形で一つの精神的表現を見出す本能である(フロイト著作集 9、p.157)。

Freud, S.は、エスという本能的なあり方を精神の根本であると考えた。エスは、無意識的・性的エネルギーが生じる、快楽原則に従って、その力を発揮する部分である(梅本、p.499)。

Freud, S.は、この本能的なエスから独立した機能として、「自我」を設定する。Freud, S.は自我について、同論文の中で以下のように述べている。

われわれの周囲にある現実外界の影響のもとに、エスの一部分は一種特別な発達を経験する。この部分は、……エスと外界とを媒介する一つの特異な組織として形成される。われわれはこの領域に「自我」Ich なる名称を与える(フロイト著作集 9、p.157)。

自我は「私という主観」であり、外界からの刺激をコントロールするが、同時に内界からの本能欲求もコントロールしている部分である（布施、2005、p.4）。

さらに Freud, S.は、Freud 理論の特徴とも言える超自我という概念を提出する。Freud, S.は超自我について以下のように述べている。

長い幼児期を通して成長してゆく人間は、その期間中両親に依存して生きているが、この幼児期の両親への依存性は、この時期の沈殿物として、彼の自我の中に、両親の影響が継続される一つの特別な「場」を形成する。この「場」は「超自我」Uber-ich と呼ばれる。この超自我が自我から分離しているか、または自我に対立している限り、超自我は第三の力であって、自我はその力を考慮しなければならない（フロイト著作集 9、p.158）。

超自我は、両親からの働きかけによって内在化された「規範」であり、人間の意志を規定するものである（布施、2005、p.4）。

Freud, S.はエス、自我、超自我という三構造を踏まえ、内的なエネルギーがどのようにして「精神」として現れるかを論じた。Freud, S.はここで、意識とともに無意識という概念を提出する。Freud, S.は無意識について、以下のように述べている。

しかし、この意識的な過程（意識された過程）は、一般の一致した意見によれば、決して欠陥のない、完全な系列ではない。だからこそそこに、精神の物理的、身体的随伴現象を仮定しないわけにはいかないのである。……心理学においては、力点をこの身体的過程におき、その中に真に精神的なものを認識し、意識的過程についてこれまでとは違った評価を試みることになるのは当然だろう。しかしこれに対しては、多くの哲学者その他の人々が反対し、無意識的な（意識されない）精神とは一つの自己撞着であると論じている（フロイト著作集 9、p.166）。

このように、無意識についての Freud, S.の提案は、当時は新しいものであった。

Freud, S.はさらに、意識と無意識の間に位置する領域として、前意識を設定する。Freud, S.は前意識について、以下のように述べている。

こういう状態にあって、容易に無意識状態を意識状態と交換し得るすべての無意識を、それ故にわれわれはむしろ「意識化可能な」もの、あるいは「前意識的な」

vorbewusst ものと呼びたい（フロイト著作集 9、p.169）。

前意識とは、無意識的であるが、注意を向けることによって意識できる領域のことであり、無意識とは、働きかけを受けても容易には意識化されない領域のことである。無意識は、自分でどうしてそういう精神の状態になるのかについては気付くことが難しいというところに特徴がある（布施、2007、p.3）。

Freud, S.はこれら三つの領域を以下のように要約して説明している。

われわれは、精神過程に三つの性質を見出した。すなわち、それは意識的 *bewusst* であるか、前意識的 *vorbewusst* であるか、または無意識的 *unbewusst* である。……前意識的なものは、われわれの見たように、われわれが手を加えなくても意識化される。無意識はわれわれの努力によって意識化されるが、その際、われわれは非常に強い抵抗を克服したのだという感じを持つこともしばしばあり得る（フロイト著作集 9、pp.169～170）。

このように Freud, S.は、人間の心の性質として、エス、自我、超自我の三構造とは別の枠組みで、意識、前意識、無意識の三つの領域を考えていたことがわかる（梅本、p.499）。

(2) 宗教論

Freud, S.は、神々には三つの役割があるとした。自然の恐怖をしずめること、死の残酷さと和解させること、人間が文化の中で共に生きるときの苦痛と欠如の償いをするものの三つである（1927、中山訳、2007、p.36）。そして特にこの三つ目が大きな意味を持つようになる。互いが共同生活をすることで苦痛に思えるような文化的規範が遵守されているかを監視するのが神々の役割だということである（1927、中山訳、2007、p.38）。このために、人間の文化を基礎づけている道徳的法が存在し、それは世界を支配する。しかし、そもそもその法を規定しているのはだれかと言えば、それは最高の裁きを行う存在だということである（1927、中山訳、2007、p.40）。これは超自我の働きであると考えられる。Freud, S.にとっての宗教は超自我の働きによって担われるものであった。

さらに Freud, S.にとって、宗教は幼少期の父親との関係に源がある原初的な依存欲求に根ざしているものであった。宗教は「幼時の強迫神経症と同じように、エディプス・コンプレックス、すなわち父親との関係から生まれた」（1927、中山訳、2007、p.90）もの

であると述べている。幼児期の恐ろしい記憶のために、愛による庇護の欲求が生まれ、その求めに応じたのが父親であり、この寄る辺なさが一生続くものであることを認識するようになると、もう一人の父、もっと強い父なる神の存在にすがらようになる（1927、中山訳、2007、p.62）。ところで、幼児期に形成されたコンプレックスは心的な葛藤を生じさせるが、この葛藤は完全には克服されることはない。もし宗教がその葛藤をある程度軽減させることができれば、人間は心理的に安堵できるようになり（1927、中山訳、2007、p.63）、そこに宗教が存在する意味があるとする。宗教は幻想に過ぎない（1927、中山訳、2007、p.65）としながらも、宗教は強力であり、きわめて強い緊急な願望を満たす役割を果たしていると考えた（1927、中山訳、2007、p.62）。

Freud, S.にとって、幻想にすぎない宗教は離脱すべきものであり（1927、中山訳、2007、p.90）、そのために必要なのは理性と経験（1927、中山訳、2007、p.111）、そして科学的な研究であった（1927、中山訳、2007、p.115）。Freud, S.は、「人間の心身の構造のうちには、ある合目的性が実現されているのであり、人間の心身そのものが、探求しようとする世界の一つの構成要素なのである。こうして、心身を科学的な研究の対象とすることは十分に可能なのである」（1927、中山訳、2007、pp.114～115）と述べている。Freud, S.にとって、無意識下に抑圧されているものが意識化されることが治療であるのと同じように、宗教で語られる超自然的な現象は、科学的な手法を通して理性と経験によって表面化されるべきものであった。Freud, S.は宗教を幻想であるとしたが、あえて幻想であるとしたことによって、宗教が力を持つものであることを痛感していたことが推察される。宗教を乗り越えようとしながら宗教を否定できなかった葛藤が、Freud, S.の宗教論には表現されている。

（3） 神表象理論

1) 神表象にいたる人類学的なプロセス

Freud, S.は神表象の起源をユダヤ教に求めた。Freud, S.の神表象の出現の説明は人類学的・進化論的であり、そのプロセスには相互に補完し合う二つの段階がある。第一の段階は、歴史のはじまりで起きる原初の父親の段階である。それは以下のような内容と順序を含む。まず原初の人、父親イメージを発展させ、内在化させる。「原父とは神の原型であり、のちの世代の人々にとって神の姿を思い浮かべるモデルとなる。人間は、自分たちが父を暴力的な手段で排除したことを知っており、その反動として父の意志を尊重するこ

とにした」(1927、中山訳、2007、pp.87～89)と述べているように、Freud, S.はこの原父が神のモデルであると考えた。ところが人間は原父との間にアンビバレントな感情を経験し、その感情を表面化させ、父親を打ち殺してしまう(1938、渡辺訳、2011、pp.139～140)。人間はそのことに強い罪責感を抱くようになる。そして父親の心象の残りの部分から好ましい部分を切り取り、引き裂いた心象の部分と自分を同一化させる。

第二の段階は、動物像が父親の代理物になる段階である。それは以下のような内容と順序を含む。まず、抑圧された原初の父親像は、すべての男子の中に存在している。抑圧された父親像は氏族の動物(トーテム)によって表現され、動物像が父親の代理物になる。この動物は、死んだ父親を慕う気持ちを表し、同時に殺したという罪責感をなだめてくれるものである。父との同化はこの動物像によって強化される。さらに人間は、父親の表象を投影していた動物を殺し、食べる。その儀式を通して、原初に自分が同一化していたものを再覚醒させる。抑圧されてきたものは神表象として顕在化し、父性的な神表象が強迫観念的に再形成される。すなわち、幼児期の恐ろしい記憶のために、愛による庇護の欲求が生まれ、その求めに応じたのが父親であり、この寄る辺なさが一生続くものであることを認識するようになると、もう一人の父、もっと強い父なる神の存在にすがらようになるということである(1927、中山訳、2007、p.62)。

2) 一神教的な神概念の出現

Freud, S. (1938)は「モーセと一神教」の中で、ユダヤ人は、モーセが反抗的で強欲なユダヤの民によって暴力的に殺害されたプロセスを通して一神教を持つに至ったとしている。さらに、モーセが与えた禁止条項が神を高度な知性に引き上げ、それが神表象を作り上げ、父親のイメージは神についての知的な概念へ移行し、神は抽象的概念となるという。

また、ユダヤ民族の中からパウロという一人の男が現れ、ユダヤ教をキリスト教に発展させた。彼はまた、罪の意識を取りあげ、それを「原罪」と名付けたとする(1938、渡辺訳、2011、p.147)。これは神に対する犯罪であり、死をもってしか償えないものであった。ここで一人の神の息子が万人の罪を一身に引き受ける(1938、渡辺訳、2011、p.148)。この段階で父親殺害はすでに起こってしまっているため、神の息子は死すべき息子ということになる。キリストは原人たちの群れに回帰してきた原父であり、息子として父親の場に押し上げられた者であった(1938、渡辺訳、2011、p.153)。以上が、Freud, S.のキリスト教の神表象の出現のプロセスである。

Freud, S.の神概念について、宗教学、旧約聖書学、古代イスラエル史学を専門とする山

我（2013）は、一神教の発生に関する三つの俗説を挙げる。第一は、一神教は砂漠の産物であるとする説である。第二は、古代イスラエルの一神教はエジプトの宗教改革の影響を受けたとする説である。そして第三は、旧約聖書が語る歴史を史実ととらえるかという点である。そして第二の説の中で Freud, S.に言及し、Freud, S.の説は歴史的に検証してもありえない珍説であるとして退けている（pp.43～45）。

(4) 「イマーゴ」(imago) の概念

ここで、Rizzuto 理論に話を進めて行く前に、Freud, S.が用いた「イマーゴ」の概念について見ておきたい。Freud, S.は「イマーゴ」という用語を使っているが、「イマーゴ」について厳密な概念規定を行っているわけではない。しかし、「心的人格の解明 (Dissection of the Personality)」という論文の中で、以下のように述べている。

“they no longer influence the super-ego, which has been determined by the earliest parental imagos” (Standard Edition, XXII、以下 SE と略す、p.64、「最も早期の両親のイメージによって規定されている超自我にはもはや影響を及ぼすということがないのです」、懸田・高橋訳、p.439)

さらに、「ギムナジウム生徒の心理学のために (Some Reflections On Schoolboy Psychology)」という論文の中では、以下のように述べている。

“All those whom he gets to know later become substitute figures for these first objects of his feelings. ……These substitute figures can be classified from his point of view according as they are derived from what we call the ‘imagos’ of his father, his mother, his brothers and sisters, and so on.……Of all the imagos of a childhood which, as a rule, is no longer remembered, none is more important for a youth or a man than that of his father.” (SE、XIII、p.243、「子供がやがてのちに知り合うことになる人々はすべて、その子にとっては、これら最初の感情的対象の代替人物となり、私たちのいうところの、父、母、兄弟姉妹などの『イマーゴ』から発した一続きの列をつくって並ぶことになります。……しかし、普通はもはや記憶に残っていない幼年期に作られたイマーゴのうち、父のイマーゴほど、青年ないし男性にとって重要なものではありません」、道籬・立木・福田・渡辺訳、p.292)。

以上のことから、Freud, S.による「イマージ」とは、人物についての心理的に形成される包括的イメージと同義であると理解できる。Freud, S.は「イマージ」の心理的体験について、「非常に早い時期に組み込まれる親・兄弟のイメージ、その中でも父のイメージが最も重要であり、意識されないにもかかわらず保存され続け、超自我に影響を与えているもの」との視点を提出している。

3 対象関係論：Rizzuto, A.の神表象理論

Rizzuto, A. (1979)の理論はFreud, S.の神表象の形成史に土台を置いているが、Rizzuto, A.がFreud, S.を参照したのは、信仰の発達と神表象についての先行研究がほとんどなく、最も近い理論を提起しているのがFreud, S.であると考えたためであった (pp.viii～ix)。Rizzuto, A. (1979)は、Freud, S.の神表象理論を以下のように要約している (pp.41～42)。

(1) Freud, S.の神表象理論の理論の要約 (Rizzuto, A.による)

- 1) 男の子が神表象を形成するために「イマージ」を用いるようになる時系列のプロセスがある。多くの場合、父親の「イマージ」を用いる。
- 2) それは通常、エディプスの葛藤が解決するときに起きる。
- 3) そのときにリビドー的な欲求が昇華する。そのような昇華が起きないとき、男の子は、神表象かあるいは父親の代理物に対してリビドー的な愛着を持つようになる。
- 4) 悪魔の心象も親の「イマージ」から形成される。
- 5) (男の子の) 神との関係は、肉の父親との関係によって左右される。
- 6) 宗教は人生で困難に直面したときにもつ幻想であり、幼稚な願望である。
- 7) 「交差遺伝」を除いて、女性についての神表象の説明はない。
- 8) 信仰を持っていない者が神に対する信仰を持つに至らない説明はしていない。

人間はエディプス期に自分と父親を自己同一化し、エディプス・コンプレックスを解消したとき父のイメージを内在化させ、この内在化が神表象の土台となる。神表象の起源がエディプス期にあるため、心理的解決を見いだすために抑圧された罪責感と折り合いをつけることが必要になり、したがって神表象は父性的なものとなっている (p.31)。

(2) Rizzuto, A.とFreud, S.の相違点

Rizzuto, A. (1979)はFreud, S.の研究を総括したが、Freud 理論を否定しているので

も、その枠組みを大きく変えたかったのでもなかった (p.212)。しかし、対象関係論を根拠に修正と付加を試み、Freud, S.を超えようとしたことは事実である。その中心は、表象の形成はエディプス・コンプレックス以前にさかのぼるものであり、幼児期には父親だけでなく母親も重要な意味を持つ (p.43) ということであった。

Rizzuto, A.は以下の点で、Freud, S.の理論と異なる立場をとっている。

1) 宗教と幻想

まず二人の間で基本的に異なっていたのは、宗教の位置づけであった。Freud, S.は、宗教は幻想であり、克服すべきものであると考えた (1927、中山訳、2007、p.90) という意味で、宗教そのものについては否定的であった。Rizzuto, A. (1979) は「宗教は幻想ではない」 (p.47、引用者訳) と述べて、宗教を否定しないだけでなく、幻想を抱くことができる人間の機能を積極的に評価している。Rizzuto, A. (1979) はさらに、幻想そのものを意味あるものとして評価し (p.177)、「現実 (reality) と幻想 (illusion) は矛盾することではない」とも述べる (p.209、引用者訳)。幻想は科学万能の人間観においては積極的な見方をされないが、Rizzuto, A.の見方では、幻想は人間の意味ある機能として評価される。幻想は、芸術や宗教や創造的な活動を生み出すものであり、また神が存在を開始する場所でもあるという。Rizzuto, A.の幻想の位置づけは肯定的である。

2) 抽象的概念と表象の関係

Rizzuto, A. (1979) は、Freud, S.は、対象の名前と、芸術によって対象に見える形の表象にすることと、人間が抱く内的な表象を混同しているとした (p.27)。Rizzuto, A. (1979) によれば、名前を付けることは抽象概念に属することであり、見える形の表象は、それを表す概念と象徴を結びつけたものであり、対象表象は非常に複雑な心理的プロセスである。さらに Rizzuto, A. (1979) は、Freud, S.が、名前を付けることと抽象的な概念との間には因果関係があったとしても、名前を付けることと対象表象との間には因果関係がないことを見落としているとした。芸術的で儀礼的な象徴によって表された神表象と、神表象よりも前に存在しているはずの原父の表象の間にも因果関係はないはずである (p.27)。

3) 父親の「イマーゴ」が神に変容する必然性

Rizzuto, A. (1979) によれば、Freud, S.は、エディプス期に、両親の「イマーゴ」が昇華して、原父の記憶の中に現れ、それが神表象に変化し (p.30)、エディプス・コンプレックスと超自我と内界の変化によって、両親の「イマーゴ」が神表象に変容すると考えた (p.31)。しかし、なぜ子どもは父の「イマーゴ」を神に変容させなければならないのかと

ということについては説明していない。Freud, S.は、神表象は原父の表象であることもあれば、原父の「イマーゴ」が変容・昇華したものであることもあるとした (p.32)。また、神表象は原初の「イマーゴ」と実際の父親の「イマーゴ」が混ざりあうことで形成されることもある。さらには、リビドーが昇華するとき、男の子は、エディプス・コンプレックスを抑圧して実の父親と同化するだけでなく、父親のエディプス的なイメージへの性愛的な愛着を手放すことによって、愛され、保護され、そのプロセスで愛の源である神を内在化させるとした。しかし Rizzuto, A. (1979) は、幼少期に心の中に映し出されていた父を失うことなしに、両親の「イマーゴ」の性愛的魅力だけが失われるというのが父から神への昇華であるならば、神は単なる昇華になってしまうのではないかと批判している (p.33)。

4) 信じることと父親の関係

Rizzuto, A. (1979) によれば、Freud, S.は信仰と実際の父親との関係について、本当の意味での父親的な存在が現れたら、神との関係は変容するか、場合によっては消滅する、また、父親が適切な形で若者の心の中に入ってくるとき、若者は自分の中で神に昇華した「イマーゴ」を忘れる、さらに、何らかの理由で神との関係がなくなっても、無意識の中に神表象は残ると考えた。しかし、これらについて Rizzuto, A.はいくつかの点を指摘する。第一に、Freud, S.は、父親と適切に同一化したとき、抑圧されていた「イマーゴ」がどのように神に昇華するかについては述べていない (p.34)。第二に、Freud, S.によれば、子どもは後になって「イマーゴ」を発展あるいは修正する。実際には教師や権威ある存在の影響が親の「イマーゴ」に結びつくこともある。しかし、このような人物が親の「イマーゴ」をどのように修正するか、またその人物が親の「イマーゴ」にどのように影響を与えるかについては述べていない (p.34)。第三に、Freud, S.は、圧倒されるような力に直面したときに「退行」する人について説明していないとした (p.35)。

5) 信じない者の神表象形成

Rizzuto, A. (1979) はさらに、Freud, S.は、信じない者の神表象形成に関して、神に対する信仰を持つに至らないプロセスについて説明していないとした。また、人が人生で病気や恐怖や別離や孤独や無力さなどの子ども時代の感情を繰り返すとき、信じていない者が親の「イマーゴ」を使うかどうか (p.35)、また信じていない者は原初の父親の記憶をどのように使うか (p.35)、さらに、人間が無意識の神表象を受容したり礼拝したり拒絶したり忘れたりする理由についても説明がされていないとした (p.35)。

6) 悪魔の表象の形成

Rizzuto, A. (1979) によれば、Freud, S.は、原初の父親の「イマーゴ」は「全く反対の属性を持つ二つの存在に分離される」と述べ、さらに、子どもが父親に対して持つ「敵意と挑戦」の感情は引き裂かれたイメージであり、悪魔の表象の実態となる (p.35) と考えたということである。しかし Rizzuto, A. (1979) は、Freud, S.の悪魔の表象についての説明は十分ではないとした。

7) 宗教的な人の信仰の獲得

Rizzuto, A. (1979) は、Freud, S.は、信仰（そして疑い）は全面的にエゴ（意識）に属しており、無意識の領域の問題ではない (p.36) と述べているとした。しかし、無意識のレベルは、対象としての表象が宿ると考えられている場所であり、感情が必要としたときに覚醒されるものである。ここで Freud, S.は「イマーゴ」に、「イマーゴ」自身を神の表象に変化させる潜在能力を与える (p.36)。しかし、このような Freud, S.の理論には論理的飛躍が見られ、Rizzuto, A. (1979) も、「神聖な存在」への信仰がどのように獲得されるかを Freud, S.の理論の中に見いだすことはできなかったとしている (p.36)。

(3) Freud, S.からの展開

Rizzuto, A.は Freud, S.との相違点を述べた上で、Freud, S.をどのように乗り越えようとしたかを説明している。

1) 神表象の起源

Freud, S.は、神表象の起源をエディプス期とその結果に求めた。そのため Freud, S.の神表象は律法と権力を持った、どちらかというとな否定的な父性のイメージになっている。Rizzuto, A.はこの考え方を全面的には受け入れられず、律法と罪責感が土台にある Freud, S.の神表象理論を超えて、存在の感覚に土台がある神表象理論を目指した。

Rizzuto, A. (1979) は自分の臨床経験から、親の「イマーゴ」だけが神表象を形成するために用いられるという見方に疑義を唱え (p.44)、実際の親だけでなく、自分が想像する親や、恐怖を感じていた親など、さまざまな要素が神表象の形成に関わっている可能性があると考えた。さらにエディプス期の葛藤が少なかった人の神表象がエディプス期の葛藤を経験した人の神表象と変わらなかったことから、神表象の形成はエディプスの葛藤とは関係なく、むしろ対象関係における表象形成と関係しており、神表象の形成を一つの発達段階だけに閉じ込めることはできないと結論付けた (p.44)。

2) 信じるようになった人

Rizzuto, A. (1979) は、想像上の存在を造り出すのは、性的なものや、あるいは心象を形成するプロセスであるが、靈感や勇気や恐れ的心を与えるのは「新しい」オリジナルな表象であり、それは実際の親が与えることができるものをはるかに超えているとした (p.46)。神表象も同じように、想像によって造られた存在ではなく、もし想像上のものに過ぎないのならば、信仰を持っている人は依然として父を慕い求めていることになる。このことは、幼くない人、あるいは退行してもいない人が神を信じることの説明にもなるとした (p.46)。さらに Rizzuto, A. (1979) は、成熟した信仰を持つことができる人は、神を象徴としてではなく、生きた存在として経験しているため、意識・無意識を含めた感情レベルでも自分の神表象を改定することができる考えた。ここが Rizzuto, A. と Freud, S. の違いである。神を信じる者の愛は、親の愛を思慕する愛ではなく、成熟した対象関係的な愛である (p.47)。

3) 信じない人

Rizzuto, A. (1979) は信仰を持っていない人を、表象として持っているその神を信じないと決定した人と定義した (p.47)。ここで、神概念と神表象を区別することは重要である (p.47)。神概念は、自我により制御され、また環境に影響された意識的な精神活動や論理的思考によって作られる神である (p.48)。しかしこのような神は、因果関係や哲学的前提について熟く考えた結果でしかない。神はいなければ「ならない」と知的に信じている人であっても、人間関係の中で経験したイメージを感情のレベルで受け入れることができないければ、神を受け入れようとは思わないと考えた (p.48)。

4) 親との関係が適切でない場合

Rizzuto, A. (1979) は、神を信じる者であっても、親との関係が敵対的であったり、性的な特徴が意識されるつながりであったりした場合は、知的な神と経験的な神の間に衝突が生まれるとした (p.48)。さらに、その知的な部分とイメージの部分を統合させるために、表象や経験の源を再考し、夢の潜在内容を合理的で理解できる形に秩序づけ、そこから危険を取り除く「加工」が必要になるとした (p.49)。さらに、親から神を禁止された場合には、自己の中に形成された神表象が強いものであるため、隠れて信じるか、自分の親と、すでに形成されつつある自己の感覚、対象、神表象との間に平衡を見いだすために葛藤しなければならなくなるとした (p.52)。

5) 「回心」の対象関係論的意義

Rizzuto, A. (1979) は、自分の中にあって抑圧されている神表象を呼び覚ます条件が示

された場合、「回心」という現象が起きる可能性があると考えた。Rizzuto, A. (1979) は「回心」を、神表象と結び付いた初期の親の心象の中にある抑圧に対して解放を与えることと定義している (p.51)。神に対する宗教的な信頼をこのような意味で理解すると、人生の新しい局面に入るときに宗教的な意味で危機が訪れることがわかる (p.52)。もしこの考え方が正しいとするならば、精神分析学の用語を用いて神を描くことは難しくなるとした。

(4) 神表象の誕生と発達のプロセス

Rizzuto, A. (1979) は Freud, S. の理論を参照しながら、自分の患者二十名にインタビューを実施し、どのように神表象が誕生するかを検討した。Rizzuto, A. (1979) は、神は特別な移行対象であり、神が萌芽のように人間の心の中に存在を開始するのは、Winnicott, D.W. が提唱した移行対象を通してであると考えた (p.177)。ここでは Rizzuto, A. が重要な概念として取り入れた Winnicott, D.W. の中間領域と移行対象の理論を参照しながら Rizzuto, A. の神表象理論を概観する。

1) 移行対象

Rizzuto, A. は、子どもが内界から外界に移行する際に移行対象を用いるという Winnicott, D.W. の概念を神表象理論に取り入れた。Winnicott, D.W. (1971) によれば、人間は生まれた時から客観的に知覚されるものと主観的に思索するものとの関連性という問題を内包しており、その間に中間領域と呼ばれる領域がある。「中間領域とは、幼児が一時的創造性と現実検討に基づく客観的知覚との間に持っている認められる領域」(1971、橋本訳、1979、pp.15～16) のことである。

人間が用いるこの移行対象は、子どもが健全に発達して行くのと並行して意味を失い、芸術的創造や宗教的感覚など中間領域全体に拡散する (Winnicott, p.7)。「中間領域は、幼児の体験に大きな部分を占め、その後、生涯を通じて、芸術、宗教、想像力に富んだ生活、創造的科学研究等に付随する集中的体験の中に保持されて行く」(1971、橋本訳、1979、p.19) という。これが、Rizzuto, A. が考えた神表象が誕生する領域である。

Rizzuto, A. (1979) はさらに移行対象としての神について述べる。移行対象としての神は、境界線の外側、内側、そして境界付近に位置している。神は特別な移行対象であり、初期の対象の表象に源がある対象物から生み出されたものと理解される。

ところで、Rizzuto, A. (1979) によれば、神は移行対象であるが、他の移行対象がたどるのと同じようなコースを辿ることはない (p.178)。移行対象は通常、徐々に愛着を失い、

時が経つにつれて拡散し、それに伴って意味も失うが、神はそれとは反対に、徐々に心的エネルギーを向けるようになり、エディプス期に最高に達する。神の意味は失われるどころか、表象の特長を再加工することによって高められる (p.178)。場合によっては、拒絶され、無視され、抑圧され、意味を失うこともある (p.178)。神は、一度創造されると活発に活動を始め、精神的統合のプロセスのための表象として継続的に用いることが可能である (p.178)。このように、神は生涯を通じて移行対象であり続け、いつでも活用することができるという (p.179)。痛みを伴う経験をするときなどには、一時的に抱き込むために神を呼び戻すこともある。そして再び忘れ去られる。それは誕生から死まで、ライフサイクル全体をカバーする発達的なプロセスである (Rizzuto, 1979, p.179)。

以上のように、Rizzuto, A. (1979) は、自らの臨床研究を根拠に、移行対象領域、あるいは幻想が神表象の誕生にとって重要な意味を持つとした。しかし、他の移行対象とどこが決定的に異なるのかということについてまでは明確に述べていない。

2) 移行対象と母親

幻想の中で誕生する神表象について Rizzuto, A. はさらに論を進める。Rizzuto, A. (1979) は、成長とは母親との「一体」の状態から離れることを意味するという。Winnicott, D.W. (1971) はこの点について、「ほぼよいといえる母親」(good-enough mother) (1971、橋本訳、1979, p.14) という表現を用いている。母親はいつまでもいる存在ではないが、そこに存在していない時にも存在を感じ取ることができる。神が内在化されるのにも同じようなメカニズムがあり、母親がいなくなっても母親の存在を感じ取れるように、神が物理的に存在しなくてもその神の存在を感じ取れるということである。

3) 神表象形成のプロセス

Rizzuto, A. (1979) によれば、神表象を形成するプロセスは以下のようになる。両親は子どもの時代に、自分自身の神表象を作り上げる。そして赤ちゃんがその夫婦のもとに誕生する。親の抱いている神表象は、意識と無意識両方において子どもに引き継がれる (p.183)。このように、神と子どもは、両親の心の中において表象として機能する。両親は、意識においてはことばで、無意識においては態度やほのめかしや行動で、神表象を子どもに与える。子どもは、両親が彼に伝える微妙なメッセージをハッキリととらえることができるような自分の起源についての「神話」を形成し始めるという (p.183)。

神表象を形成するプロセスを考察する際に発達的な視点を取り入れると、文化的・社会的な要素のみならず、生物学的、あるいは霊的なレベルの人間経験までを視野に入れなけ

ればならなくなる (p.182)。Rizzuto, A.は、神表象の発達的なプロセスまでは解明していない。

4) 表現と記憶の能力

Rizzuto, A. (1979) は、神表象の形成にとって重要である子どもの表現や記憶の能力の始まりについて述べている。初期の段階に使われるのは、アイコンタクト、ほほえみ、そして子どもが人間の顔の造形に感じる魅力のようなものである (p.184)。アイコンタクトという神秘的で表現できない経験を通して、二人は互いに境界線を越えて応答し合い、互いの目を通して、遊びと移行領域の中に入っていく。また、基本的信頼感もこの時期に発達するという (p.184)。

5) ミラーリングと神表象

Rizzuto, A. (1979) は、人間は自分を他者や鏡に映し出す必要があると考えた (p.185)。母親はそこで、子どもに自分の表象を与え、子どもがどのように目に映っているかを子どもに話し、子どもを名前と呼び、子どもの顔の部品や体の部品の名前を子どもに向かって話しかける。母親の視線と母親の顔は、子どもにとって最初の鏡である。そして後に、その経験は、神の最初の表象を生み出すときに直接用いられる。Rizzuto, A. (1979) はさらに、鏡に映し出す段階が普通の形で発展して行くとき、子どもは拡張した母の「イマージ」が映し出される鏡の中に自らの誇大化した自己表象を見るようになり、ゆっくりと自己の表象と母親の表象を分離させ、次の分離個体化の段階に進むとした (p.186)。

6) 神の登場

Rizzuto, A. (1979) によれば、肛門期、男根崇拜、膺へのとらわれ、幻想、願望、恐怖などのさまざまな状況の中で、いよいよ神が登場する (原著、God arrives) 段階に至るという (p.193)。神は違和感なく、社会文化的、宗教的、儀式的、漸成的な現象のために特別で優位な立場を獲得する。その具体的な様態は以下ようになる。子どもは、幻想の対象となっている人々が神について敬意をもって話しをし、特別な重々しい抑揚をつけて荘厳なことばを話し、自ら神に語りかけているのを耳にする。また子どもは特別な建築物や芸術作品や祝典を見る。家庭においては、親が神に決定権を委ねているのを見る。そのことで、他の親とは違うということを感じ取る (p.194)。子どもは、大人が、神はたしかに存在し、力があり、世を支配しているという言い方をしていることを聞き、そこに違いを認め、神ということばは何か真剣な意味があるということを知る。大人が、神は罰し、祝福し、愛する方だということを聞くと、大人が信じているということを確認するようにな

る。神は目に見えないが、子どもは、神は力があり、尊敬を受けるに値し、すべてを治め、どこにでもいることを感じ取るという (p.194)。

7) 神表象の発達

Rizzuto, A. (1979) は、神表象が子どもの中でどのように発達して行くかを以下のように説明する。子どもは自分の経験から、身のまわりに同じような特徴を持っている存在がないかを考える。そこで目に入るのが母親と父親である。人間は神表象を描こうとすると、入手できる最も重要な表象である親の表象を利用する (p.194)。

子どもは二歳半前後の年齢になると、周囲の人がいろいろなものを作っていることを発見し、ものはどのようにして作られるのかと問いかけるようになる (p.195)。もし大人が、雲を作ったのは神だと答えれば、子どもは、雲みたいな巨大なものを作るくらいものすごい存在、畏敬の念を抱かせる存在である神という人格を想像する。このように、子どもはその表象を「引き上げる」。この問いは二歳半前後に始まり、四歳で最高に達する (p.195)。

三歳になると、子どもの心は、幻想、思索、理論でふくらみはじめる。大人の態度が神の存在を抑制してしまわないかぎり、子どもはその好奇心を言語化するようになる。子どもはこの時期に、「神さまにはおしりはあるの？ 雨は神さまのおしっこなの？ 稲妻は神さまのおならなの？ 神さまは電話を持っているの？ 神さまはお祈りを記録できる留守番電話を持っているの？」などど、さまざまなことに興味を示す。神に関するこのような単調な質問は六歳くらいまで続くという (p.195)。

8) エディプス期の神表象

Rizzuto, A. (1979) は続いて、エディプス期の神表象について以下のように説明する。子どもはエディプス期に親という対抗者と競争する。自らが「ナンバーワン」であろうと努力し、自分が親しみを感じる親から注意と愛を獲得しようとする (p.195)。しかし間もなく負けを認識する。他の人から最も愛される存在になり、その人から肉体的な意味での好意を得たいという願望を自分のものにするためには、大人になるまで待たなければならないということを確信するようになる。ここで、自分の中で親を性的なパートナーとするという理想は延期される (p.196)。

エディプス期の解決は、子どもが自分は小さい存在に過ぎないことを認め、そのことによって、いつの日か、自分も父親や母親のようになり、母親や父親のようなだれかと結婚することを受け入れることができるようになる。ここで親の対象表象も変化し、性的なものは消滅して、通常受け止められるレベルにまでなる。この時期、子どもは学校に行って、

勉強し、友だちと社会的な関係を作る (p.196)。また宗教教育を受け、自分は「神の民」に属していることを認識する。子どもは知的に成熟し、世界や親についての経験が大きくなって行くにつれて、神について考えるようになるという。

9) 親と家族への幻滅

Rizzuto, A. (1979) によれば、ここで発達には次の段階を迎えるという (p.198)。子どもはエディプスの敗北と現実の評価の結果、親や家族について幻滅する (p.198)。親との分離は明確になり、後エディプス期の子どもの自己イメージを再構築する。神表象はここで、孤独と分離の感覚をなだめる仲介者として使われる。神は潜在的な存在としていつもそこにいて、すべてのことを知っていると感じている。そのような子どもは孤独ではなく、神は、自分の内的な自己についての知識の源となる唯一の存在であるという。もし、子どもが自己をネガティブにとらえ、恐怖を与える神表象を抱いてこの発達段階に到達した場合、既存の宗教が示す神は子どもにとって耐えられない存在となる (p.199)。神は復讐する存在だと感じることもある。このような時には、子どもの恐怖心に耳を傾け、彼らの苦境に参画する神表象を示すことが必要であるという (p.199)。

10) 漸成的な神表象の改定

Rizzuto, A. (1979) はさらに、神表象の改定について以下のように説明する。この段階では、子どもの基本的なパーソナリティーは形成され (p.199)、神表象も非常に深い部分に編み込まれている。そして、親と自分の経験の中に埋め込まれた神表象を利用するか拒否するかは、個々の経験や、神表象との関係によって決まるという (p.200)。

発達の段階においては、親と自己の表象を改定し続けても、神表象は触れられないまま残る可能性もある。自己の表象の変化に合わせて神表象を改定することに失敗すれば、神表象は同期されないまま不自然なものとして残るか、あるいは逆に、恐怖の心を引き起こす危険なものとして経験される可能性もあるとした (p.200)。

漸成的な現象は、神表象を改定する新しい機会となる。新しく経験する人生の危機、病気、死、昇進、恋愛、子どもの誕生、災害、戦争などの際だった出来事は、神表象の改定の機会となる。日常の出来事が改定の機会になることもある。におい、旋律、表情、贈り物、ことば、恐れなどが、忘れられていた神表象を呼び覚ますこともある。宗教的リバイバルで語られることばが強烈な感情を引き起こすこともあるという (p.200)。

11) エディプス期後

Rizzuto, A. (1979) は、エディプス期後に話しを進めて行く。エディプスの危機の後に

は、神表象にとって意味のある二つの新しい出来事が起こる。第一の出来事は、思春期である（p.200）。その時期には、抽象的で論理的・数学的な思考が出現する。子どもは自分が持っている神表象の限界を越えて、神概念を初めて持つことができる。この神概念は信仰にとって役に立たないが、理論化や哲学的・神学的議論の構築には役に立つものである。それがうまく行くと、子どもが持っている神表象を測ることができるようになる（p.200）。

人は、人生、結婚、職業について大きな決断をする青年期の最後に、自己の表象を統合する必要に迫られることになる。社会における自分の地位を探そうとしながら、強烈な自己探求と自己イメージの再構築を行い、古くて同時に新しい神表象と出会う。これらの出会いは、信仰に結びつくこともあれば、そうでないこともあるという（p.201）。

第二の出来事は、ライフサイクルの後半部分である（p.201）。自己の表象が変化する必要を感じて自己の再発見をする。神表象は、その変化をいっしょに経験するために呼び出されることもあるが、そうでないこともある。最後に死がやって来るとき、神の存在についての疑問がもう一度呼び戻される。その時、神表象は、前エディプス期以来長い間否定され続けてきた存在として記憶に戻って来ることがあれば、よく知られた人生の仲間のような存在として戻って来ることがある。あるいはその両者の間のような存在として戻って来ることがある。神表象によって信仰の「恵み」を獲得することができるか、神表象そのものが最後に破棄されるか、いずれかであるという（p.201）。

12) 信じる段階

Rizzuto, A. (1979) は続いて、信じる段階について論じている。神の記憶、すなわち対象の記憶、自己の記憶、発達段階のある特定の時期における移行対象の記憶などは、無意識と前意識の中に存在している。しかし、信仰と疑いは意識のプロセスである。「神への信仰」があるかないかは、神表象と、自己の感覚を保持するために必要な自己の表象との間に、「意識における『経験というアイデンティティ』」が確立されるかどうかで決まるという（p.202）。

神への信仰があるかないかは、初期の対象物や初期に意味を持つ人との関係において獲得した個人的なバランスによって決まるという（p.202）。この移行対象は幼少期に現れ、もしそれが人生のライフサイクルの変化とペースをあわせて行くなれば、生涯にわたって変化し続ける。しかしもしそれが意味を失うならば、忘れ去られるかあるいはそのまま無視される可能性もある。神表象が新しい昇華の段階を迎えるか、あるいはそれ自体が信仰に至るような初期の表象にまでさかのぼって行くなれば、ライフサイクルのある時点でそ

の意味を再発見することができる可能性もある。それは、意識の上でその特徴に耐えられなくなって抑圧されてしまうこともある。もし神表象が移行対象として使われなければ、それは移行領域というおもちゃ箱に戻り、もともと持っていた特徴をそのまま保持することになる。もし人が、さかのぼっていった瞬間、例えば通過儀礼としての死に向き合うとき、突然神表象が必要だと感じたならば、神表象は一時的に使われ、そして静かにおもちゃ箱の中に戻って行く。しかし、発達することで変貌した自己の表象が求める必要を満たすにはあまりに遅れたものになってしまっていることもあるという (p.202)。

他方、もし神表象が変化し、移行対象として満足できるものならば、自己表象が突然変化したときに、神という存在を再度構成する能力を最大限発揮させる可能性もある (p.202)。不協和な神表象と格闘する中で、大きな疑念、深い忘我と熟考の状態、宗教的行為の実行、牧師や宗教的な人や書物のもたらす忠告などが、宗教的興奮状態を印象的に提示する場合もある。肉体的な面の深い変化、知的な視野の拡大、感情的・性的親密度の急激な必要感の高まりなどを経験する思春期は、自分の神表象がどれだけ柔軟かが極限まで試される時期であるという (p.202)。

ほとんどの人はこの激動の時期に信じるのをやめて神を捨ててしまう (p.203)。あるいは神を保持し続けても、時代錯誤で拘束的な神を背負わされているケースもある。それは未解決の発達課題があるかを示すものさしとなる。また、自分の必要に応じて神表象を上手に変化させる人もいる。そのとき信仰は発達と両立できるものとなる。逆に、ライフサイクルの中で新たな成長の危機を迎えるときに、信仰は意味を失うか、発達という観点からすると、遅れてしまって合わないものになるか、あるいは修正されなければならない状態で止まってしまうということもあるということである (p.203)。

究極の危機は死である (p.203)。その時になって、それまで抱いてきた神表象を捨てる可能性はだれにでもある。さかのぼって行って神に訴えるか、差し迫ったいのちの停止と自己の感覚に対する特別な恐怖心に統合するかであるという (p.203)。

このようにして、神表象は、人の生涯の各局面を生きて行く。必要になると突然引き出され、不要になると放り出されるが、ほとんど感覚に上らないままに存在し、静かに安心を与え続ける (p.203)。

以上、Rizzuto, A.が提唱した神表象の誕生と発達のプロセスについて概観した。Rizzuto, A.の神は、「幻想の移行対象」(illusory transitional object) (p.177) である。

(5) Rizzuto, A.のFreud評価：エディプス期の意味

ここで、Freud, S.の神表象の起源がエディプス期にあり、Rizzuto, A.の神表象の起源が前エディプス期にあるとした点を確認しておきたい。Rizzuto, A. (1979) は Freud, S.よりも早い時期にまでさかのぼることによって神の起源をさぐったが、Freud, S.の見解を否定してのではない (p.212)。Rizzuto, A. (1979) は、以下のように述べている。

人間が知識だけを糧にして生きていますと「信じている」Freud に私は同意できない。しかし私は、もう一人の Freud、すなわち、研究の過程で、対象関係、エディプス・コンプレックス、家族関係論を語る Freud を追って行き、西洋世界における個人について彼が主張した結論に私も達した (p.212、引用者訳)。

Rizzuto, A.は Freud, S.を超えようとしたが、Freud, S.は依然として、Rizzuto, A.にとって精神分析学の師であった。エディプス期に神が発生するという Freud 理論は、エディプス・コンプレックスなどの心理的課題を乗り越えることによって成熟できるのと並行して、他者としての神との関わりを確立し、同時に自らの「個」を確立することによって、信仰の段階に至るという見方も可能ではないかということを示唆していると思われる。

Freud, S.が、ユダヤ教としての神を文化的背景に持ちながら、エディプス期との関連で神の誕生を考えた理由は、幼い頃から経験する宗教体験が人間形成に意味を持たないと考えていたためかもしれない。そうだとすれば、エディプス期との関連で神の誕生を考える発想には合理性があったという理解も可能である。このように、神表象の誕生については、Freud, S.と Rizzuto, A.の双方を理解しておく必要がある。

4 Rizzuto, A.の理論の修正

Rizzuto, A.の理論は神表象研究の出発点として多くの研究者が参照する重要なポイントとなっているが、その後、さまざまな角度から修正が試みられることになる。

(1) Meissner, W. W.

Rizzuto, A.とともに、Freud, S.の宗教論に異を唱えた人物に、イエズス会士であり医師でもあったMeissner, W. W. (1931～2010) がいる。Meissner, W. W. (1984) は、Freud, S.の宗教論はFreud自身が解決できなかった自分の葛藤の現れにすぎないという評価をしている (p.55)。その上で、Rizzuto, A.と同様、自らの理論構築のためにWinnicott, D.W.

の中間領域理論を引用する (p.166)。しかし同時に、信仰は人間が生み出す主観的なものではなく、信仰が自分に語りかけて来るという宗教の客観性にも目を向ける (p.178)。すなわち、信仰は、主観的なものと客観的なものの両方が相互に作用するものであるという (p.174)。神表象についても同様の考え方をし、神表象はWinnicott, D.W.が言うように、幻想という主観性にだけ立脚しているのではなく、「外側と内側の境界部分」にあり、個人の宗教経験という純粋に主観的な幻想と周囲のcommunity (p.179) が提供する神表象の相互作用から生まれるとする。Meissner, W. W.は、Winnicott, D.W.の中間領域理論を取り入れたが、信仰は何もないところから発生するのではなく、家族環境などの客観的要素が意味を持つとした点で (p.178)、Rizzuto, A.の理論とは異なる立場を取っている。

(2) Leavy, S.

ユダヤ人であり、ユダヤ教徒でありながら、後に聖公会に改宗した Leavy, S. (1988) は、精神分析理論と聖公会の信仰の両立を模索した。Leavy, S. (1988) は精神分析家でありながら、人間が神を創造したのではなく、神が人間を創造したという立場を明確にし、「疑問視したり拒否したりする行為そのものが、それ自身人間の中の神の似姿の典型であるということを懷疑主義者に思い起こさせることが、私たちにとっておそらく唯一可能なことであろう」(p.xi、渡辺訳、p.8) と述べて、宗教を破壊的にとらえた Freud, S.と一線を画している (pp.74~75)。Leavy, S.の神表象理論は Rizzuto, A.や Meissner, W. W.とは異なり、中間領域に根拠をおいた対象関係論的な神表象のとらえ方をしない。Leavy, S. (1988) は、愛すること、憎むこと、苦しむこと、信じること、死ぬことなど、人間が直面する問題を精神分析的に解釈することを重要視した。「私たちのもっとも深い個人的な意向を可能な限り明るみに出そうとする精神分析の努力があり、他方に、自らを啓示しつづけている神を私たちに示そうという、つねに更新されるキリスト教の努力がありますが、両者の間には啓発的な並行関係が見られる」(p.56、渡辺訳、p.96) と述べて、精神分析理論と神学の両面が必要であることを強調している。さらに Freud, S.に対するキリスト教からの応答として、精神分析学の文献を丁寧読みながらキリスト教の意味との適合を行うべきであり、Erikson, E. H.の基本的信頼の概念を神に対する信頼と同じ地平に置き、Winnicott, D.W.の移行対象の概念をキリスト教の信仰に役立つために用いることも可能であるとする。「しかし、そのような試みはすべて宗教を世俗的な言語に服従させることによって宗教の知的な体面を保とうとすることを目指しています」(1988、p.80、渡辺訳、

p.128) と述べて、心理学的な概念に宗教を還元させ、宗教が心理学の中に埋没してしまうことには警鐘を鳴らしている。Leavy, S. (1988) は、宗教と心理学を分離させてしまうのではなく、一致点を見いだそうともしている。宗教は神の側から始まるものであり、その意味でキリスト教は神の啓示の宗教であるとする。しかしながらその啓示は、人間性の成り立ちを開示するものなのである。この点で、神によって開示された人間性と心理学的視点との接点を見いだそうとしている (pp.105~106)。精神分析理論を優位に置かずに、精神分析理論と宗教を両立させようとした Leavy, S.の姿勢が伺える。

(3) Jones, J. W.

神表象研究の系譜は、神表象の内在化の様態について研究するものが主であったが、周辺の諸要素にまで研究領域を深化・拡大させた臨床心理学者に Jones, J. W. (1943~) がいる。Jones, J. W.は神学からの視点を大切にしながら神表象研究を行った臨床心理学者であり、宗教学と臨床心理学の両方の領域で博士号を取得し、ラトガース大学で教鞭を執りながら心理臨床を行っている (渡辺、1997、p.221)。

Jones, J. W. (1991) の立場は、あくまで臨床心理学の視点で、臨床現場からの問題提起をしながら、心理学にすべてが還元されることを避け、神学からの見方を参照することによって両者の橋渡しをする立場である。また、後述する Halevi-Spero, M.の立場である「神関係アプローチ」と、Rizzuto, A.の立場である「信仰関係アプローチ」という二つのアプローチを認め、両者の利点を整理している (2007、p.53)。「神関係アプローチ」の強みは、治療者の目から見て、それが精神病理学的に歪んでいても、神が客観的存在であることについて、前提としての信仰を認めることができることであり、宗派や教団というコンテキストで仕事をするセラピストに有効であるとしている。他方、「信仰関係アプローチ」は、宗教の定義や内容よりも機能を重視することによって、資料をより広く分析することが可能であり、多元主義的なコンテキストで仕事をするセラピストに適しているという。

Jones, J. W.の研究の一つの貢献は、自己イメージと神表象の関係を論じたことであった。Jones, J. W.は転移のパターンと神との関係には関連があるのではないかという仮説に基づき、四つの症例から症例研究を行った。このような症例研究は Rizzuto, A.の症例研究とともに貴重なものである。Jones, J. W. (1991) は、「神のイメージのそのような転換は、多くの神経症者の治療の成功例における転移の過程と並行関係がある。これらの神経症者は、宗教的であろうとなかろうと罪悪感と自己非難を担って治療に来て、より自己受容的

になって去っていくのである」(p.81、渡辺訳、p.115)と述べ、それらの症例で鍵になったのは裁きの神イメージであったとしている。さらに児童期に裁きの神のイメージが優位なのは、両親の多くが神を社会的統制の手段として用いており、それが内面化されるためであるという。しかし Jones, J. W. (1991) は、神のイメージが親のイメージによって決まるという Rizzuto, A. の見解を認めつつも、養育的な親だから養育的な神表象を内在化させるというような単純な相関関係は見られないとも指摘している (p.81、渡辺訳、p.115)。

Jones, J. W. (1991) は臨床例の分析から、批判的な神との結びつきが重要な力動的な機能を果たしていることを発見した (p.83)。さらに、神について抱くイメージが変化することによって、治療関係が変化することを発見した (p.84)。これらのことから、転移の変化と神のイメージの間に同じ力動が働いているのか、どのようにしてそれらは変容するのかを、Masterson, J. F. の「真の自己理論」を用いて検討した (p.87)。Jones, J. W. (1991) は、「変容は、防衛的自己の突破と内的な真の自己の解放を伴う。……さまざまな宗教が、信者にこれらの自己破壊的な姿勢の一方か両方を取り入れることを勧め、献身者のこれらの防衛的なペルソナとの同一化の移行的根拠として働く神のイメージを快く提供する」(p.100、渡辺訳、p.140)と述べ、転移が変化するためには、偽りの自己に直面し、それが破壊される必要があるとしている。Jones, J. W. (1991) は結論的に、「第一に、治療的な転移の変化は、その人の宗教における経験の変容と対応すべきものである。前の章の四つの症例はその可能性を示しており、詳細をたどって行くと、転移の変容と宗教の変容の間に一致を見ることができる。第二に、内的な世界の変容は神経経験に反映されるものである。この章は、個人の内的な対象の世界が変容されるプロセスと、それがどのように聖なるものとのつながりに影響しているかを理解するモデルを提示している」(p.110、引用者訳)と述べている。Jones, J. W. の研究を要約すると、転移の変容が神表象の変容をもたらすということである。

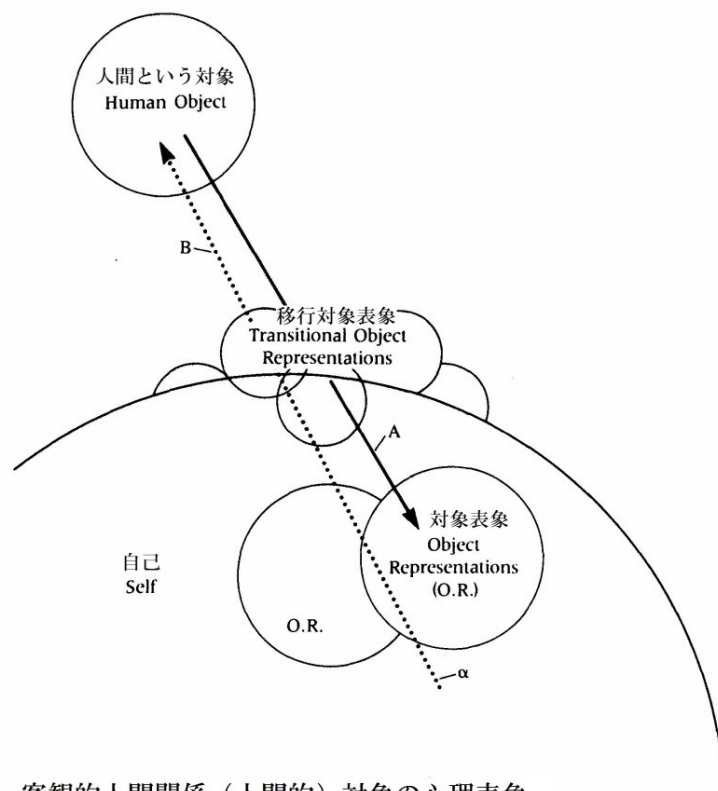
(4) Halevi-Spero, M.

内在化された神表象が神という存在と距離があるのではないかという点についてはさまざまな批判が出された。Halevi-Spero, M. (1992) は、Freud, S. や Rizzuto, A. の立場に批評を加え、Rizzuto, A. に代表される関係対象論的なアプローチは神を移行対象にとじこめ、それは神の現実をおとしめることになると考えた。

Halevi-Spero, M. (1992) は、テディ・ベアなどの一般的な移行対象と、親のような幼

少期に愛する対象となる存在を区別した。移行対象はその役割を終えたら消滅する。他方、親のような幼少期に愛する対象となる存在は、現実と幻想にまたがって内在化され、内在化された親はその対象表象が消滅するよりは、むしろ非具象化・非擬人化されたものになるとし、神表象もこれと同じではないかという仮説を立てた (pp.83～84)。このように Halevi-Spero, M.は、客観的現実としての神という宗教的な側面と、発達の推移によって形成される神表象という心理臨床的な側面の両方があることを認めつつ、心理分析の中に宗教的側面としての神の存在を入れる余地を残そうとしている。

Halevi-Spero, M. (1992) はユダヤ教的な観点に基づくメタ心理学 (metapsychology) に着目し、メタ心理学的な視点を取り入れることで心理学と宗教が分離している状況を解決できると考えた (p.128)。そして「人間中心的な (anthropocentric) アプローチ」と「神中心的な (deocentric) アプローチ」の関連を示しつつ、メタ心理学的視点を取り入れた理論を構築し (p.134)、関係対象論から、移行対象が取り込まれるメカニズムを Figure2 として提示している。邦訳を付加したものを図 2 に示す (p.135、引用者訳)。



客観的人間関係 (人間的) 対象の心理表象
Figure 2 Psychic Representation of Objective Interpersonal (Human) Objects

図 2 客観的人間関係 (人間的) 対象の心理表象

図 2 の A は、人間という対象が対象表象として内在化されるルートを示している。B は、

人間という対象は、それまでに構築されてきた主観的对象表象によって認識されるものであることを示している (p.135)。移行対象表象は Winnicott 理論に基づくものである。

Halevi-Spero, M.はさらに、対象としての人間が内在化される (internalized) ルートにおいて、そのルートから分岐するかたちで心の中に (internal) 取り込まれたものが神表象として残る可能性を示し、それを Figure 3 として提示している。邦訳を付加したものを図 3 に示す (p.136、引用者訳)。

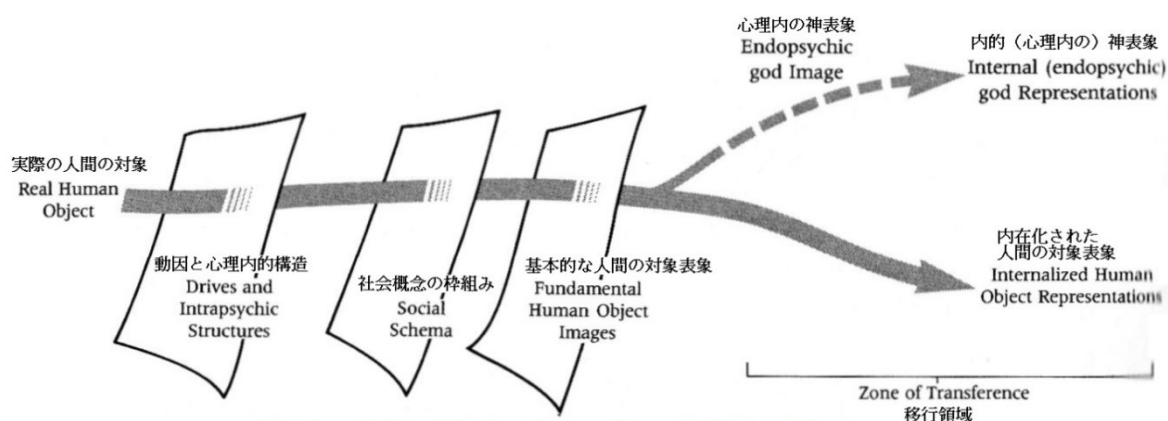


Figure 3 Standard Psychological Model of the Development of God Concepts (the Anthropocentric Dimension)

図 3 神概念の発達の標準的心理的モデル (人間中心的次元)

Figure3 は、Winnicott 理論を取り入れた Rizzuto 理論に近い考え方である。

さらに Halevi-Spero, M.は、神表象が発生するプロセスを Figure4 として提示する。邦訳を付加したものを図 4 (次頁) に示す (p.137、引用者訳)。

精神分析的発達心理学や関係対象論では、表象を抱く主観的な経験によって新しい心内的対象が形成される。そのプロセスでは、ただ外的世界に存在しているものが取り込まれるというのではなく、外的世界で投射されたものが内在化されるプロセスをたどるとされる。Figure 4 は、そのプロセスを神という特別な投射された心内的対象に当てはめたものである (p.137)。

一般的に、神というものを抱くようになるプロセスは、別々の主観的な経験が固まりとなり、すでに存在している神表象が融合した結果として神が生み出される。すなわち、幼少期の親や家族との経験の中に見られる宗教的对象に先立つ「対象」から神の経験が表れるという。Figure 4 に示されている 2 本の A は、対象表象が固まりとなって生み出されるプロセスを表しており、その対象は一定の客観性をもって経験されるものである。神とい

う対象も同様に、「あたかも」自己の外側にあるものとして経験され、それは経験的に発見した対象とは異なるものであるとしている。

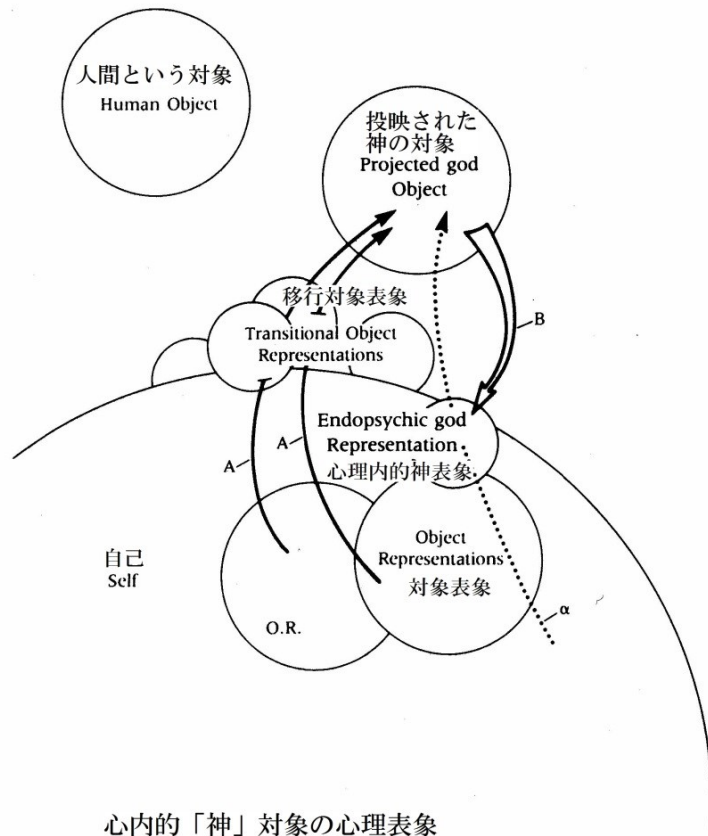


Figure 4 Psychic Representation of Endopsychic "God" Objects

図 4 心内的「神」対象の心理表象

このプロセスを経て、投射された宗教的な神表象が十分に経験されるとき、内的な神表象がより具体的に形成されて行く。これが B である (p.138)。ここで重要なことは、このようなプロセスで内在化される神表象は、図 2 の α が示す人間という対象を内在化させるプロセスに重なって行くということである (p.138)。

この Halevi-Spero, M. の分析は、移行対象の一つとして神表象が内在化されると考えた Rizzuto 理論を発展させたものである。Rizzuto 理論では、一般的な移行対象は成長と共に消滅するのに対して、なぜ神という移行対象だけが残るのかについて詳細を語っておらず、曖昧な部分が残されていたことは否めない。それに対して Halevi-Spero, M. は、投射された神の対象という概念を用いて、Rizzuto 理論が明らかにできなかった不明瞭な部分の説明を試みている。

Rizzuto 理論を補完した Halevi-Spero, M. (1992) は、ここでさらに神表象の内在化の理論を発展させる。Halevi-Spero, M.は、Rizzuto, A.らの関係対象論に基づく神表象の内在化のプロセスは、客観的な神表象が内在化されるプロセスとは明らかに異なるものであると、修正モデルとして Figure 5 を提示する。邦訳を付加したものを図 5 に示す (p.139、引用者訳)。

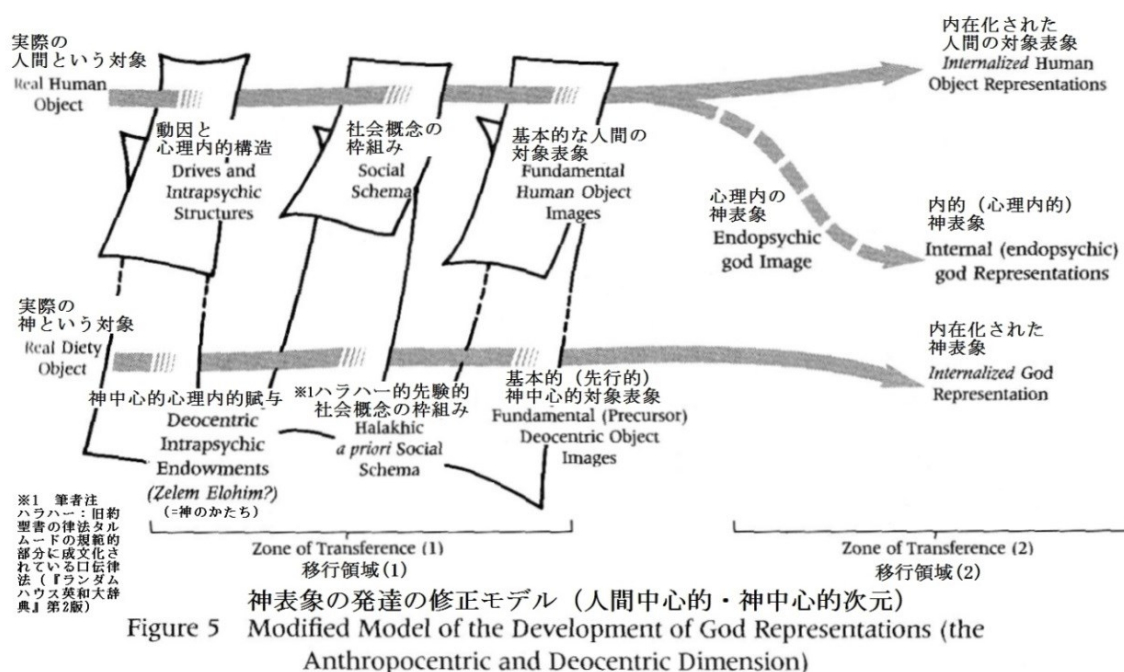


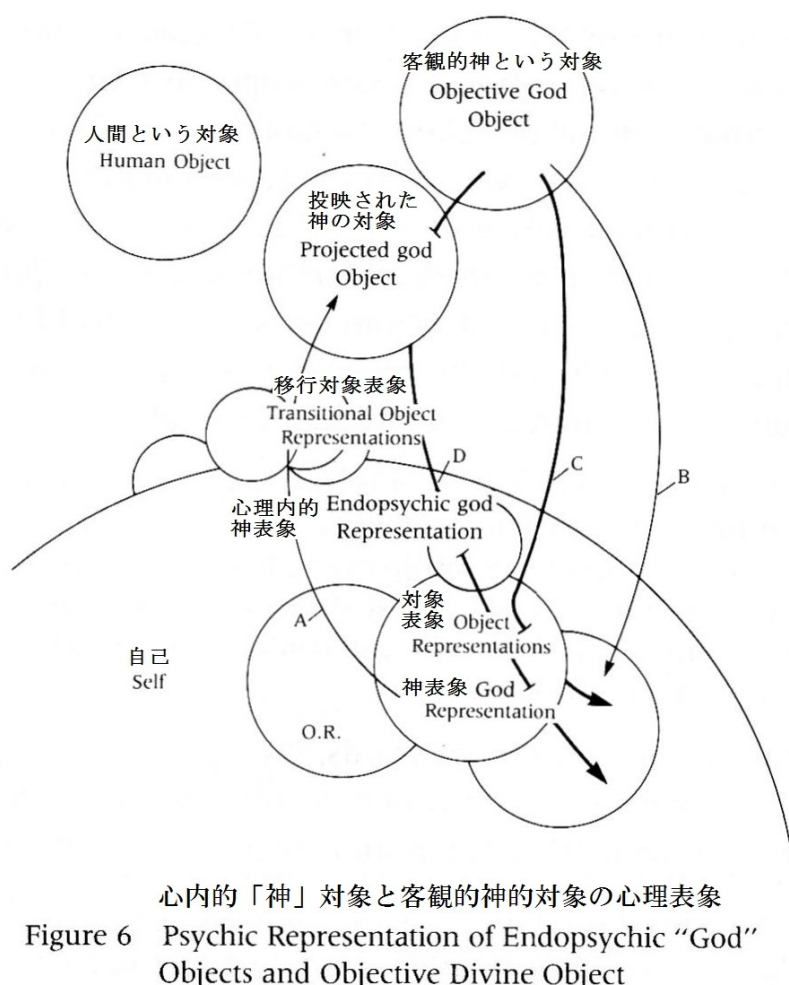
図 5 神表象の発達の修正モデル（人間中心的・神中心的次元）

「実際の神という対象」（Real Diety Object）は、対象としての人間が内在化されるのとは違うルートを通して内在化され、それが内面に取り込まれた神表象であるというとなえ方をしている（pp.136～139）。

Halevi-Spero, M. (1992) はさらに、神表象が取り込まれるルートは、移行対象を通して対象が取り込まれるルート以外に三つあるという理論を構築し、それを Figure 6 として提示している。邦訳を付加したものを図 6（次頁）に示す（p.141、引用者訳）。

Halevi-Spero, M. (1992) は、移行対象によって内在化される神表象を Projected God Object という用語で、客観的な神表象を Objective God Object という用語で表現して、両者を別のものとして分けた。さらにこれらのルートは、心の中に起きる経験として、認知や感情を通して入ってくるという意味では「心理的」（psychological）であるが、A 以外の三つは「心理学的ではない」（nonpsychologistic）としている（p.140）。その上で、A

以外の三つのルートを経由して定義している。ルート B は、「理想的『神的』表象が直接内在化」(the direct internalization of an ideal “divine” representation) されるルートである。ルート C は、神的対象が、人間の心が理解できる形で自らを提示しつつも、人間関係のメカニズムや経験を通して発達のな方法で内在化されるルートである。そのルートは神と出会う備えとなる (pp.140～141)。ルート D は、非常に早い段階で心の中に神表象が形成され、そしてそれが客観的な神的対象と置き換わるルートである (p.141)。



心内的「神」対象と客観的・神的対象の心理表象
Figure 6 Psychic Representation of Endopsychic “God” Objects and Objective Divine Object

図 6 心理内的「神」対象の心的表象と客観的・神的対象

Halevi-Spero, M.の理論は、Winnicott, D.W.の理論をもとに論じた Rizzuto 理論を大胆に発展させ、結果として Rizzuto 理論とは全く異なるものとなっている。Halevi-Spero, M.は、宗教的な側面、すなわち客観的な神表象がどのように内在化されるのかという視点を従来の図式の中に織り込んだ (p.142)。また、神という対象表象の心理社会的、性心理的、対象関係的、認識論的な面を切り捨てずに宗教的な側面を取り込むことに成功し、人間中

心の視点と神中心の視点を並行して示すことができたとしている (p.143)。

Jones, J. W. (2007) はこのことに関連して、Halevi-Spero, M.の考えは正統的ユダヤ教の範囲の中では問題ないが、多元的な宗教の枠の中で機能するかについては明確でなく、他の枠組みが必要になる可能性があるとして、Halevi-Spero, M.の理論の限界を指摘した (pp.51～52)。聖なるものに対する認識は人間の深い基本的欲求と関係があり、ユダヤ的な背景の中で論じることによって理論があいまいなものになる可能性もある。より包括的な理論構築のためには、認識論や文化論からの分析が必要ではないかという評価であり、妥当なものである。

このように、神表象の内在化を対象表象に求めた Rizzuto, A.の理論は、Halevi-Spero, M.の理論と比較すると未発達段階にとどまっているという印象は否めない。Halevi-Spero, M.の理論は、心理学的な角度だけでなく、宗教的な角度からの分析も射程に入れているという意味で、本研究のために重要な概念を提示していると推察される。神表象を神学的に分析することは可能であるが、人間が体験できる実際的な心理現象として説明することは簡単ではない。ところが、心理学的な理論構築を試みるだけでは、客観的かつ神学的な神表象の分析が希薄になる可能性があるという視点も意識されるべきである。この意味で、Halevi-Spero, M.の理論は、ユダヤ教の範囲の中では問題ないという現段階での限界を認めつつ、心理学的視点だけに収斂されるのではない、包括的かつ実際的な理論構築のために参照できるものであると考えられる。

(5) 修正の要点

Rizzuto, A.に対するこれらの批判は、神表象の内在化のプロセスに二つのアプローチがあることを示した。客観的な神を中心にしたアプローチと、神の性質よりは人間の機能を中心にしたアプローチの二つである。人間の機能を中心にアプローチした Rizzuto, A.への批判の中心は、心理学的分析だけに神表象を閉じ込めてよいのかという問題提起になっている。この問題提起は、神学と心理学の両者の立場を生かしつつ、包括的かつ実際的に人間の現実に向きあうことができる新しい理論を生み出そうとするものであった。神表象の内在化のプロセスをさらに現実的に描こうとした試みだったが、その理論は、より複雑なものになったということもできる。

(6) 理論背景の移行

Rizzuto, A. (1979) の研究は、Freud理論を踏まえて、神表象の誕生を移行対象という角度からとらえ、幼少期の表象対象と神表象の間に何らかの関連があることを示したものである。その後、Rizzuto理論は修正され、神表象の誕生、様態、変容について理論的な深化が試みられた。精神分析学を背景とした神表象研究は一段落し、研究は次の段階へ進むことになる。ここで、実証的研究の必要とFreud理論への批判という観点から注目されたのがアタッチメント理論であった。

5 アタッチメント理論

(1) 実証的研究法の必要

アタッチメント理論は、英国の児童精神科医であるBowlby, J. (1907～1990) が提唱した理論である。Bowlby, J.は医師であったが、精神分析の資格を得て治療に当たった（庄司、2008、p.24）。Bowlby, J.は、精神分析理論で対象関係ということばで説明されてきた母性的人物と子どもとの関係を、アタッチメントという概念で説明した。Bowlby, J. (1969) によれば、アタッチメントとは「母親に対する子どもの結びつきは、母親をある結果をもたらす対象とみなして接近しようとする行動システム」（p.179、黒田・大羽・岡田・黒田聖訳、p.217）であり、生後二年目くらいからはっきりした愛着行動として表れるものである。アタッチメント人物など特定の対象へ近接し、その対象が近くに存在するかぎり、子どもは安心できる（p.209）。そして、そのような特定の対象との関係をもとに、内的作業モデルを構築し（pp.80～83）、その作業モデルはその後の対人関係などにも影響を与えるとされ、成人のアタッチメントについても研究が行われるようになった。

神表象研究の分野で、神へのアタッチメントについてかなり早い時期に言及した人物に、神学者であるKaufman, G. D.がいる。Kaufman, G. D. (1981) は、「神の概念とは、完全に機能するアタッチメント人物（attachment-figure）の概念である」（p.67、引用者訳）と述べ、神は多くの場合、アタッチメント人物と重なり、自分を守りケアしてくれる親のイメージでとらえられているとした（p.67）。

実証的な研究方法として神表象研究にアタッチメント理論を取り入れた代表的な人物はKirkpatrick, L. A.である（Grimes、2007、p.20）。Kirkpatrick and Shaver (1990) は、幼少期のアタッチメントと親の宗教性が、成人になってからの信仰や神との関係にどのように影響を与えているかを研究した論文の中で、以下のように述べている。

宗教と幼少期の経験との関係に注意を払ってきた理論的伝統は精神分析学であり、対象関係論学派（McDargh 1983; Meissner 1984; Rizzuto 1979）であった。これらのケース・スタディーは、親子関係とその後の宗教性の間に関連があることを示唆したが、残念なことに、量的な調査方法を使うことができなかった（p.316、引用者訳）。

Kirkpatrick, L. A. (1992) は、宗教心理学においては実証研究がほとんどなされていないことを指摘し、実証的結果を得るための理論的な枠組みとして、アタッチメント理論に着目する。Kirkpatrick, L. A.を初め、Granqvist, P.やRichard Beck et al.がアタッチメント理論に基づく論文を発表し、神表象研究は量的研究の分野に広がりを見せて行った。

(2) Freud理論との訣別

神表象研究がアタッチメント理論を採用したもう一つの理由として、そしてこちらのほうがより本質的な理由であると考えられるが、Kirkpatrick, L. A. (1992) は、1950年代から宗教心理学の分野で徐々に現れ始めた「神はどのような存在なのか」ということに関する実証的な研究を概観し、それらの研究とFreud, S.の理論に基づいて行われて来た一連の研究の結論が異なっていることを指摘する（p.12）。Kirkpatrick, L. A. (1992) によれば、神表象研究は、①神表象と親について抱く概念との関係、②神表象と自己イメージとの関係、この二つのことに集約されていた。その中でも、①の神表象と親について抱くイメージの関連について、実証的な研究は、神は父親よりも母親のイメージに近いのか、あるいは必ずしも母親でなくても、自分にとって好ましい親のイメージに近いことを示唆しているとした。Kirkpatrick, L. A. (1992) は、この知見は明らかにFreud, S.の理論とは異なり、むしろアタッチメントの考え方で説明したほうがよいのではないかと考えた（pp.12～13）。母親のイメージや、自分が好ましいと感じる親のイメージに着目する視点は、基本的にアタッチメント理論と重なる。さらに、Freud, S.の理論では、神表象は超自我と関連がある父性的な面が強く、母親のイメージや、自分が好ましいと感じる親のイメージとは重ならない（pp.12～13）。以上のことから、Kirkpatrick, L. A.はFreud理論と訣別し、アタッチメント理論に活路を見出そうとした。Rizzuto, A.もKirkpatrick, L. A.もFreud理論に批判的な評価を加えたという点では同じだが、Rizzuto, A.がFreud理論の枠内にとどまったのに対し、Kirkpatrick, L. A.はFreud理論の枠から出て研究を進めた。

以上のように、実証研究の発展の必要と、Freud, S.の理論への批判という二つの要素が

ら、神表象研究はアタッチメント理論を理論背景にして、さらに発展して行った。

(3) Rizzuto, A.の反論

アタッチメント理論に基づく神表象研究は、実証的な手法を取り入れて進んだが、深層心理学的なアプローチとアタッチメント理論の科学的実証性について、Rizzuto, A.がGranqvist, P.に反論している場面がある。Granqvist, P. (2006) は、Erikson, E. H.、Freud, S.、Jones, J. W.、Rizzuto, A.らの立場である深層心理学的アプローチを批判する。深層心理学的アプローチは、心理臨床全般で影響力を保っているが、宗教心理学の分野では科学的とは言えず (p.12)、より実証的な研究を目ざすならばアタッチメント理論がもう一つの選択肢になりうるという主張である (p.1)。Granqvist, P. (2006) はその一例として、宗教という深層部分の説明を試みるときに、防衛機制という公理が制限になって、反駁を許さない構図を作っているとする。深層心理学的なアプローチは結局議論の余地を狭めているというこの批判は、Rizzuto, A.にも向けられた (p.7)。

それに対しRizzuto, A. (2006) は、アタッチメント理論があたかも実証的な神表象研究の始まりであるかのようなGranqvist, P.の論に異議を唱えた (p.26)。Rizzuto, A.は、自分はアタッチメントと宗教経験の関係についてすら厳密に科学的な手法に則ってリサーチを行ったと主張し、アタッチメント理論が深層心理学的なアプローチにとってかわるという見解こそ科学性を欠くものであるとする (p.26)。また、アタッチメントは人間を表現する一つの論ではあっても、人間が向き合うことになる超越的な存在との関係を説明するには限界があるとも主張した。Rizzuto, A. (2006) は、神表象理論は、たしかに本質に迫ろうとしているが、それでも宗教的な面を表現する一手段に過ぎないと考えれば、それと同じように、アタッチメント理論も極めて限定的なものである。したがって、一つの理論だけを採用するのではなく、さまざまなアプローチを援用して研究を進めるべきであると提言した (p.27)。

以上のように、Granqvist, P.とRizzuto, A.の間で議論はあったものの、神表象研究の分野では、最終的に、アタッチメント理論が実証研究の手法として幅広く用いられるようになって行った。

(4) 「補償仮説」と「一致仮説」

アタッチメント理論に基づく神表象研究から、神表象がどのような役割を果たすのかと

いう点について二つの仮説が導き出された。一つは「補償仮説」(compensatory hypothesis)であり、もう一つは「一致仮説」(correspondence hypothesis)である。

「一致仮説」とは、「親とのアタッチメント関係が安心だったか不安だったかによって、その人の宗教の傾向がわかる」(Kirkpatrick、1992)という仮説である。その人が幼少期に身につけたアタッチメントの内的作業モデルは、その後の人生に影響を与え続けるとされるが、それは神との関係にも影響を与え、どのような内的作業モデルを形成しているかによって、神表象がその人の人生でどのような役割を果たすのかが変わるという。Davis, E. B. (2010)によれば、自己と他者を見る内的作業モデルが肯定的であれば、神というアタッチメント人物、その神というアタッチメント人物といっしょにいる自己を見る内的作業モデルも肯定的なものになる。自己と他者を見る内的作業モデルが否定的であれば、神というアタッチメント人物、そしてその神というアタッチメント人物といっしょにいる自己を見る内的作業モデルも否定的になる (p.122)。Davis, Moriarty, and Mauch (2012)は、研究史で提出された「一致仮説」と「補償仮説」に関するさまざまな仮説を四つに整理しているが、ここでいう「一致仮説」は、その中の(1)「内的作業モデル一致仮説 (internal-working-model correspondence hypothesis)」に相当するものである。Davis et al. (2012)がまとめた四つの仮説については、まとめて後述する。

2番目の「補償仮説」とは、神と宗教は、回避型のアタッチメントを持った人にとって補償的な役割を果たす、すなわち、神が代用的なアタッチメント人物 (substitute attachment figure) の役割を果たす (Kirkpatrick & Shaver、1990)という仮説である。Davis, E. B. (2010)によれば、幼少期にケアを与える人物が、安心できない、そして時によって一致していない接し方をするとき、自己と他者についての内的作業モデルが否定的になり、不安なアタッチメント型を形成する。そこで、神が代用的なアタッチメント人物として登場する。この場合、神というアタッチメント人物は、人の感情的な必要を満たし、アタッチメントから受ける苦しみに対する反応を抑制するために使われる (p.119、p.123)。これは、Davis et al. (2012)がまとめた四つの仮説の(2)「感情補償仮説 (emotional compensation hypothesis)」に相当するものである。

「一致仮説」と「補償仮説」の妥当性について、さまざまな検討がなされた。「回心」に焦点を合わせて研究を行ったKirkpatrick and Shaver (1990)は、最初、(2)の「補償仮説」を提唱した。ところがKirkpatrick, L. A. (1992)は、アタッチメント理論を「回心」や神表象に適用して検討を重ねて行く中で、結果はそれほど単純ではなく、結論を出さずに「補

償仮説」と「一致仮説」を並記している。さらにKirkpatrick, L. A. (1997) は、「補償仮説」と「一致仮説」はそれぞれアタッチメント理論の異なる面を表しているとし、縦断的な研究から神との関係は補償の機能を果たしているとしている。Dickie, Eshleman, Morasco, Shepard, Vander Wilt, and Johnson (1997) は、Kirkpatrick, L. A. の「補償仮説」をもとに調査を行い、子どもは親の愛情と力について持っているイメージと類似したイメージを神に対しても持つようになり、親から自立するにつれて、神が代替りのアタッチメント人物になるとした。この研究は「一致仮説」と「補償仮説」の両方を支持するものであり、幼少期は「一致仮説」、成長すると「補償仮説」で説明できるとした。このように、「一致仮説」と「補償仮説」がそれぞれ違う面を説明しているのではないかという仮説が出された。

Beck and McDonald (2004) は、「回心」や宗教行為など補償のための「行動」と、愛に満ちた神、親切的な神、遠くにいる神、裁く神など、個人が神をどのように受け止めるかという「体験」を区別する必要があるとした (p.93)。「一致仮説」と「補償仮説」の両面から検討しながら、この段階でどちらの立場を取るかは明確にしていない。Beck and McDonald (2004) は、Kirkpatrick and Shaver の研究が、神がアタッチメント人物であることを十分に証明していることを評価しながらも、神へのアタッチメントを測定する尺度がないために実証性に欠けていることを指摘し、Experiences in Close Relationships (以下、ECR と略記) 尺度をもとに、神へのアタッチメントを測定できる尺度、Attachment to God Inventory (以下、AGI と略記) を開発した。McDonald, Beck, Allison, and Norsworthy (2005) は AGI を用いて調査を行い、家庭における親との関わりが希薄であった場合、神との親密性を回避する傾向があることを明らかにし、「一致仮説」を支持した。

(3)の「適合一致仮説 (socialized correspondence hypothesis)」は、Granqvist, P.らの研究によって提唱された仮説である。Granqvist, P. (1998) は、親の信仰がどのような意味を持つのかという観点から「一致仮説」と「補償仮説」について検討した。親が信仰的でない場合は、子どもはアタッチメントに不安を感じているが、かえって信仰には熱心になり、他方、親が信仰的である場合は、子どもはアタッチメントへの不安が少なく、同様に信仰に熱心になることが示された。前者は「補償仮説」、後者は「一致仮説」に相当し、親の宗教性によってモデルも異なることが示された。Granqvist and Hagekull (1999) は、宗教性は、アタッチメントに不安がある人が安心感を得るために獲得する感情規範と関わりのあるものか、アタッチメントのしっかりした人が宗教規範を取り込むことによって獲

得するものかという点に着目した。アタッチメントのしっかりした人はアタッチメント人物である大人と同じ宗教規範を取り込むことを通して信仰を獲得し、信仰も劇的な変化ではなく徐々に成長するとし、「修正一致仮説」を支持した。逆にアタッチメントに不安がある人は、感情が前面に出やすく、劇的な「回心」を経験するとし、「修正補償仮説」を支持した。Herthel and Donahue (1995) は、親の神表象は親業に影響し、親業が子どもの神表象に影響を与えるとして、Granqvist et al. (1999) の「修正一致仮説」の立場を支持した。

いくつかの見解が出されたものの、Granqvist et al. が提唱したこれらの「修正一致仮説」は、Davis et al. (2012) がまとめた四つの仮説の(3)「適合一致仮説 (socialized correspondence hypothesis)」に相当すると考えることができる。Davis (2010) によれば、幼少期にはケアを与えてくれる人が宗教的であれば、自己と他者の内的作業モデルは肯定的になる。アタッチメントのしっかりした子どもは、神というアタッチメント人物と、その神というアタッチメント人物といっしょにいる自己を見る内的作業モデルも肯定的になる。そして神というアタッチメント人物が、必要なときには答えてくれる感性豊かなアタッチメント人物として機能するようになるという (p.120)。

(1)の「内的作業モデル一致仮説」との違いは、(1)の「内的作業モデル一致仮説」は、幼少期にケアを与えるアタッチメント人物が肯定的か否定的かということが問題にされるのに対して、(3)の「適合一致仮説」は、幼少期にケアを与えるアタッチメント人物が感性豊かで宗教的であるかというところに焦点をあてているという点である。宗教性という要素を考慮して分析を試みたという意味でGranqvist, P.の貢献は評価すべきである。

以上のように、研究史では(1)「内的作業モデル一致仮説」、(2)「感情補償仮説」、(3)「適合一致仮説」の三つの仮説が順次提唱されたが、それぞれが支持を得ており、どれか一つがすぐれていると決めるだけの決定的要素は今のところない (Davis, 2010, p.120)。

これらの三つの仮説を融合させようとしたのが、Hallらの研究によって提唱された(4)「内在関係認識一致仮説」(implicit-relational-knowledge correspondence hypothesis)である。Hall, Fujikawa, Halcrow, and Hill (2009) は、内面的な霊的機能と外面的な霊的機能は区別する必要があるとし、「一致仮説」は内面的な信仰経験のレベルで妥当なものと考えられるが、外面的に表れる宗教行為は「一致仮説」で説明ができないとした。Davis et al. (2012) はこのプロセスを以下のようにまとめて説明している。まず、他者、特にアタッチメント人物との関係があつて、そのことで、一般的な人との関係、ある

いはある特定の人との関係についての内面的な認識が深まる。それを土台にして今度は、ある特定の宗教的アタッチメント人物（例えば神）との関係についての内面的な認識が深まり (p.9)、それが「内的な、宗教的・霊的機能 (implicit religious/spiritual functioning)」に影響を与えて行く。しかし、その場合でも、その内面的な認識が「外的な、宗教的・霊的機能 (explicit religious/spiritual functioning)」には必ずしも影響を与えないという考え方である (p.8)。ここで言う「内的な、宗教的・霊的機能」とは、感情・心理・関係における宗教的・霊的な経験と関わるものであり、多くの場合、非言語的であると同時に、意識にも上らないものを意味する。Davis et al. (2012) はその例証として、ユダヤ教を信じている人物を挙げる。その人物は、親、友人、恋人との関係が肯定的で、感情的、心理的レベルで、神を肯定的に経験しながら (implicit religious/spiritual functioning)、シナゴグには行かない (explicit religious/spiritual functioning) (pp.8～9) という。

Davis et al. (2012) は、(4)のこの仮説は、他の三つの仮説に比べて証拠が不十分であると批判している。しかし、多数を占める立場ではないにしても、現状では最も注目すべき仮説であることは間違いなく、今後検討を加える必要があるとされる。

ここまで、「一致仮説」と「補償仮説」に関する研究史を概観した。Davis et al. (2012) は、「一致仮説」と「補償仮説」に関して提唱されたさまざまな仮説を、(1)「内的作業モデル一致仮説」、(2)「感情補償仮説」、(3)「適合一致仮説」、それに(4)「内在関係認識一致仮説」の四つに整理した。それぞれの仮説の提唱者は、(1)と(2)は Kirkpatrick and Shaver (1992) であり、大きな柱となる二つの仮説を導き出したという意味でその貢献は小さくない。(3)は最初 Granqvist, P. (1998) が提唱し、さらに Granqvist and Hagekull (1999) の研究が支持した。(4)は Hall (2004) がキリスト者のスピリチュアリティとメンタルヘルスの関係について問題提起をし、Hall et al. (2009) が「一致仮説」と「補償仮説」の両方について検討して提出したものである。

「一致仮説」と「補償仮説」は、両仮説の検討が進むにつれて、どちらか一方の仮説だけで実態を説明できないことが徐々に明らかになってきている。むしろ、どのような意味で「補償」なのか、また「一致」なのか、状況によってどちらの仮説が適しているかを選択する性質のものであろう。人生のどの段階を見るかという視点、また神表象の変容が急なものかゆっくりしたものかという視点など、より詳細な検討を行うことによって、両仮説を丁寧に神表象理論に織り込んで行くことが求められる段階に入ってきていると考えられる。さらには、人間が内在化させる神表象は、一仮説で説明を試みるにはあまりに複雑

であり、宗教経験を含む領域を研究対象にすることの限界を暗示しているとも推察される。

より詳細な分析の試みの一つとして、Davis, E. B. (2010) は、(1)「包括的内的作業モデル (global internal working models)」、(2)「領域特定内的作業モデル (domain-specific internal working models)」、(3)「関係特定内的作業モデル (relationship-specific internal working models)」の3層で構成される「階層的内的作業モデル (hierarchical network of internal working model)」という考え方を提唱している。(1)の「包括的内的作業モデル」は、「自己、他者、他者と関わる自己についての全般的な見方に対応する」モデルである。(2)の「領域特定内的作業モデル」は、「ケアを与える人と子どもとの関係、恋人との関係、友人との関係、仕事上の関係、宗教的・霊的な関係などのある特定の領域における、自己、他者、他者と関わる自己についての概念に対応する」モデルであり、例えば、「ケアを与える人と子どもとの関係」、「恋人との関係」、「宗教的・霊的關係」など、(1)よりは狭い領域を想定する。(3)の「関係特定内的作業モデル」とは、「ある特定のアタッチメント人物との関係を考慮した、自己、他者、他者と関わる自己についての概念に対応する」モデルのことであり、(2)よりもさらに具体的に、「自分の母・子どもとの関係」、「自分の配偶者との関係」、「神との関係」など、領域を絞って内的作業モデルを考えるという整理である (p.14)。

アタッチメント理論に基づく神表象研究は、今後より詳細な分析が必要になる段階に入ってきており、さらに複雑なものになって行くことが想定される。

(5) 「回心」の様態の検討

神表象がどのように変化するかということは、「一致仮説」と「補償仮説」の見極めをする中で研究者たちの関心事となった。Kirkpatrick and Shaver (1990) の研究は、急なプロセスをたどる「回心」を経験する割合は、アタッチメントの安定型よりも回避型の人のほうが大きいことを示した。また調査協力者たちは、親や対人関係の問題などが「回心」の経験の契機になったと述べている。Granqvist, P. (2003) は、「回心」を突然変化する体験として定義する古典的パラダイムと、「回心」を徐々に変化する体験として定義する現代的パラダイムの二つがあるとした。そしてパラダイムの違いは、アタッチメントの違いと関連があるのではないかという問題提起をした。Granqvist and Kirkpatrick (2004) は、「回心」と親とのアタッチメントの関連について実証的な検討を加えた。「補償仮説」の観点から、アタッチメントに不安がある場合は急激な変化としての「回心」を経験する

が、「一致仮説」の観点から、アタッチメントに不安がない場合にゆっくりした変化としての「回心」を経験するという仮説を出し、同様の分析結果を得ている。

6 神表象を測定する尺度開発の試み

Rizzuto, A.や Meissner, W. W.の臨床的な研究法は、患者へのインタビューを中心にしたものだったが、その後の神表象研究はアタッチメント理論が取り入れられたこととも関連して研究法の幅が広がり、統計的な分析を取り入れた量的研究が中心となっていく。

神表象と他の諸要素との関連を探った心理学論文は相当数が発表されており、内容も多岐にわたる。さまざまな要素との関連を検討するために、神表象を測定する尺度も開発された (Hoffman, Grimes, & Acoba, 2005)。主なものを表 1 (次頁) に示す。

Gorsuch, R. L. (1968) は、神表象を表す形容詞を選択する形式の Adjective Ratings of God/Religious Concept Survey を開発した。Vergote, Tamayo, Pasquali, Bonami, Pattyn, and Custers (1969) は、親のイメージと神表象の関連について研究し、Semantic Differential Parental Scale を開発した。Rizzuto, A. (1979) は神を移行対象という角度からとらえ、幼少期の関係が神表象に何らかの影響を与えているとして文章完成法による質問紙を開発した。Roof and Roof (1984) は、Judge、King、Lover、Master、Father、Redeemer、Friend、Healer、Mother、Liberator、Spouse、Creator というイメージを採用して神表象を測定した。Nelson, Cheek, Jr., and Au (1985) は、Roof and Roof (1984) の研究を受け、12 の神のイメージを三つの因子で抽出した。Janssen, De Hart, and Geraudts (1994) は、青年たちの神表象を調査するためにオープン形式の質問紙を作成し、神の属性 (attributes of God) と神の行為 (acts of God) という概念を導き出した。

Lawrence, R. (1997) は Rizzuto, A. の概念を採用し、God Image Inventory と God Image Scale (以下、GII、GIS と略記) を開発した。この尺度は信頼性と妥当性も検討され、標準化された尺度としてその後の神表象研究で用いられている。Kunkel, Cook, Meshel, Daughtry, and Hauenstein (1999) は、神イメージは、神人同形同性説と神秘主義、懲罰的と養育的という二つの因子によって測られるとした。Kunkel の結果は、Roof や Nelson のものと同じであった。Roof and Roof や Nelson et al. や Kunkel et al. の研究は、神を具体的なイメージで測定しようと試みたところに特徴がある貴重な研究である。Beck and McDonald (2004) は、アタッチメント理論に基づいて神表象研究を行うためには神へのアタッチメントを測定する尺度が不可欠であるとし、ECR をもとに AGI を開発した。

表 1 神表象研究で開発・使用された主な尺度のリスト

尺度	人物	年	人物	1990	1998	2002	1998	1998	1999	2004	2004	2005	2006a	2006b	2002	2008	2008	1986	2001	2003	2007	2008	2008	2009	2011
Adjective Ratings of God	Gorsuch	1968																1							
Concepts of God and Paretal Images	Vergote, et al.	1969																							
God/Family Questionnaires	Rizzuto	1979																							
God Image Inventory	Lawrence	1991																							
God Image Scale	Lawrence	1991																1					1	1	
Loving and Controlling God Scale	Benson, Spilka	1973		1	1	1																			
Nearness to God Scale	Gorsuch, Smith	1983																							
Nonverbal Measure of God-Concept	Bassett, et al.	1994																							
Intrinsic and Extrinsic Religious Orientation Scales	Allport, Ross	1967		1																					
Religious Change and Conversion				1																					
Attendance				1																					
Christian				1																					
Ethical Type				1																					
Born Again				1																					
Personal God				1																					
God Relationship				1																					
Child Attachment to Parents	Hazan, Shaver	1986		1																					
Adult Attachment style	Bartholomew, Horowitz	1991		1																					
Relationship with God	Kirkpatrick, Shaver	1992		1																					
Beliefs about God	Kirkpatrick, Shaver	1992		1																					
Relationship Questionnaire(RQ)	Bartholomew, Horowitz	1991			1						1														
Five personality traits	Saucier	1994			1																				
Balanced Inventory of Desirable Responding	Paulhus, Reid	1991			1																				
Intrinsic, Extrinsic, and Quest Scales	Batson, Schoenrade	1991			1																				
Doctrinal Orthodoxy Scale	Batson, Schoenrade, Ventis	1993			1																				
Symbolic Immortality Scale	Mathews, Mister	1988			1																				
Death Anxiety Scale	Temper	1970			1																				
Manifest Anxiety Scale	Bending	1956			1																				
Positive Affect Negative Affect Scale	Watson, Clark, Tellegen	1988			1																				
Parental religiousness					1	1																			
Repondents' religiousness					1	1																			
Socialization-Based Religiosity Scale(SBRS)	Granqvist					1	1																		
Emotionally Based Religiosity Scale(EBRS)	Granqvist					1	1																		
Religious change and sudden religious conversion	Granqvist					1	1																		
Attachment forced-choice	Granqvist					1																			
Attachment to God Inventory(AGI)	Beck, McDoland	2004									1	1	1	1										1	
Experiences in Close Relationships Scale(ECR)	Brennan et al.	1998									1													1	
Religious Emphasis Scale	Altemeyer	1988									1														
Parental Spirituality Scale	Beck et al.	2005									1														
Parental Bonding Instrument	Parker, Tupling, Brown	1979									1														
Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales-III	Olson	1986									1														
Parental Attachment Questionnaire	Kenny	1987									1														
Spiritual Assessment Inventory(SAI)	Hall, Edwards	2002																						1	
Triangular Love Scale-God Version	Sternberg	1997																							
Interactional Quest Scale	Batson, Schoenrade	1991													1										
Multidimensional Quest Orientation Scale(MQQS)	Back, Jessup	2004													1										
Questionnaire to Assess Personality Pathology																1									
Questionnaire God Image																1	1								
SCL-90																1									
Center for Epidemiologic Studies Depression Scale(CES-D)	Randloff	1977															1								
Beck Hopelessness Scale(BHS)	Beck et al.	1974															1								
The Dutch Questionnaire God Image(QGI)	Murken, Petersen	1993															1								
Brief RCOPE	Pargament et al.	2000															1								
Benevolent God Scale																		1							
Sensual God Scale																		1							
Creative God Scale																		1							
Valuable God Scale																		1							
Attachment Story Completion Task	Verschuieren	1999																	1						
Student Teacher Relationship Scale(STRS)	Pianta	1996																	1						
Pictorial Scale of Perceived Competence and Social	Harter	1984																	1						
Acceptance for Young Children																									
Behavioral Rating Scale of Presented Self-Esteem	Haltiwaner	1989																	1						
23-item questionnaire children's concept of God																			1						
Religious Status Inventory(RSI)	Hadlock	1988																		1					
Brief Symptom Inventory(BSI)	Derogatis	1982																			1				
MMPI-2	Greene	2000																				1			
Self-Liking Self-Competence Scale	Tafarodi	1995																		1					
Adjective Check List(ACL)	Gough	1980																			1				
Transactional Analysis(TA) scoring system for the ACL	Williams	1980																				1			
Attachment Prototype Rating(EBPR)	Strauss	1999																					1		
Adult Attachment Interview(AAI)	George	1985																						1	
Inventory of Interpersonal Problems(IIP-D)	Horowitz	1994																						1	
FKK	Krampen	1991																							1
Narcissism Inventory	Deneke	1989																							1
Early Maladaptive Schema Questionnaire-Short	Young	1994																							1
Form(EMSQ-SF)																									1
Transgression-Related Interpersonal Motivations	McMullough	1998																							1
Inventory(TRIM)																									1
Tendency to Forgive(TTF)	Brown	2003																							1
Purpose in Life(PIL)	Crumbaugh	1964																							1
Congregational Items		1999																							1
Spiritual Community Scale(SCS)																									1
Religious Commitment Inventory(RCI-10)	Worthington et al.	2003																							1
Spiritual Practices Scale(UPS)																									1
Sim and Loh 16-item measure		2003																							1
Children's Hope Scale	Snyder	1997																							1
Rosenberg Self-Esteem Scale	Rosenberg	1965																							1
Asian Adolescent Depression Scale	Woo et al.	2004																							1

7 神表象と諸要素との関連の検討

(1) 性差

Roof and Roof (1984) は、12 の神のイメージを採用して神表象を測定し、女性が男性よりも多くの神のイメージに反応したことから、神表象には性差があるとした。Janssen et al. (1994) は青年たちを対象にオープン形式の質問紙を実施し、男性は力という概念で神をとらえ、女性はサポートや助けという概念で神をとらえていることを明らかにした。Krejci, M. J. (1998) は潜在的なレベルで神表象に性差があるかについて調査・分析し、「裁き—養育」因子、「支配—救済」因子、「具体—抽象」因子の三つの因子があり、男性は支配する面が高いことを明らかにした。

(2) 自己イメージ

神表象と自己イメージとの関係については、さまざまな角度から調査・分析が行われた。Benson and Spilka (1973) は、認知的斉合性理論 (cognitive consistency theory) から、自己を認識する心のあり方と神表象の関係について調査・研究を行い、自己評価は愛の神表象と正の相関があり、拒絶する、非人格的な、支配する神表象と負の相関があること、自己評価が神表象を決定する主要因になっていることを明らかにした。Spilka, Addison, and Rosensohn (1975) の研究も同じ傾向の結果を示した。Jolley and Taulbee (1986) の研究は、大学生と受刑者を対象に、自己イメージと神表象を比較し、神表象と生き方に関係があることを明らかにした。しかし同時に、自己イメージと神表象の関係は非常に複雑なものであり、さらにリサーチが必要であるとしている。Johnson and Eastburg (1992) は、虐待を受けた子と受けていない子の、神表象、親イメージ、自己イメージについて調査し、神表象よりは親イメージが損なわれていることを明らかにした。Francis, Gibson, and Robbins (2001) の調査は、自分を価値ある者として受け止めている人は神を愛と赦しに満ちた存在として受け止めており、自分を価値ない者と思っている人は神を残酷で罰を与える存在として受け止めていることを明らかにした。

(3) 原家族の親のダイナミクス

神表象と原家族の親との関係については、さまざまな調査・分析が行われた。Tamayo and Desjardins (1976) の調査では、神表象は母のイメージよりも父のイメージの影響が強いことが明らかになった。Tamayo and Dugas (1977) が大学生・大学院生を対象に行

った調査では、芸術系の学生は母親のイメージが強く、科学系の学生は父親・母親のイメージに差がないこと、また高度な教育を受けるほど神表象と父親イメージの重なりがなくなることが明らかになった。Birky and Ball (1987) の調査では、神表象は父親か母親かどちらかではなく、両親と関連があることが明らかになった。Jansen (1994) の研究では、親のイメージと神表象の間に類似点があるかをたずねたとき、ほとんどの人が意識していないと答えたが、意識している人は、母親イメージではなく父親イメージがあると答えた。Herthel and Donahue (1995) は、親の神表象は親業に影響し、親業が子どもの神表象に影響を与え、とし、Granqvist et al.の「修正一致仮説」を支持した。Lee and Early (2000) の調査では、「父～母」、「主人～配偶者」、「さばく人～愛する人」、「友人～王」という四つの神イメージ因子を採用して家族の価値観を調査し、肯定的な神表象は革新的な価値観と、否定的な神表象は伝統的な価値観と関連があることを明らかにした。

(4) 病理

神表象と病理の関連についての研究は多くない。しかしその中でも、Bowman, Coons, Jones, and Oldstrom (1987) は解離性障害とうつに関して研究し、解離性同一性障害の女性七名を調査した。その結果、第一の人格は神を信頼し、第二の人格は神を信頼していなかった。しかし、調査自体が妥当なものだったかという問題と、サンプル数が少なかったことから、信頼性は高くない。Exline, Yali, and Sanderson (2000) は信仰と心理的な問題について調査・研究を行い、うつは疎遠な神表象と関連があるとした。Jonker, Eureling-Bontekow, Verhagen, and Zock (2002) は心理的な問題と信仰体験との関係について調査・研究を行い、病態水準が低くなるほど、神表象は否定的になることから、神表象は病理あるパーソナリティ特性と関係があるとした。また人格障害の分類ごとに神表象の特徴を調査したところ、妄想症、スキゾイド、分裂気質のグループは、否定的で支持してくれない神のイメージ、回避性、依存性、強迫性のグループは、支配的で罰を与える神のイメージが強かったが、反社会性、境界性、演技性のグループには差が見られなかった。Cheston, Piedmont, Earnes, and Lavin (2003) の研究は、成長と共に神表象は変わる可能性があることを明らかにした。

8 神概念と神表象の区別

Rizzuto, A. (1970) は、神概念 (concept of God) と神表象 (image of God) を分ける

必要性を強調した。著書であるThe Birth of the Living Godの中でも同様のことを指摘している (p.47)。Rizzuto, A. (1970) によれば、神概念は、「象徴や記号として表される神」(the God of the symbols and signs) であり、神表象は、「信じている者の内的な経験の神」(the God of the inner experience of the believer) である。ところが実際には、Rizzuto, A.も述べているように、神概念と神表象はほとんど区別されずに用いられている。また Hoffman et al. (2005) が指摘するように、Gorsuch, R. L. (1968) の研究も、Benson and Spilka (1973) の研究も、両者を区別できておらず、神概念を測定するものになっている。

Lawrence, R. (1997) は、Rizzuto, A.の研究を受けてGIIとGISを開発した。Rizzuto, A.と同様、神概念と神表象は区別されるべきであると述べているが、尺度の内容は神概念を測定するものになっている (Hoffman et al., 2005)。しかし神表象研究の歴史では有用な尺度として用いられており、本研究でもGod Image Scaleを邦訳する。

神を言語化することの難しさから、神概念と神表象を区別することは簡単ではない。さらには真の神イメージ (original God image construct) は必ずしも認識している神表象と同じではなく、人間の認知の構造との関係が研究のプロセスを複雑にしている。人間の認知の背後にある、あるいは認知が歪めてしまう可能性のある真の神イメージ (original God image construct) は測定が難しく、認識論をふまえた研究が必要ではないかという問題提起もされている (Hoffman et al., 2005)。

神概念と神表象の違いを考慮する必要があることを強調したHoffman, L. (2004b) は、同性愛者、女性、African Americanに着目し、神概念と神表象の問題は文化的側面から論じられる必要があるとした。Hoffman, L. (2004a) はまた、神義論 (theodicy) と試練の問題に焦点をあて、神概念と神表象の内面的な認識の違いがそのまま放置され、それが否定的な神のイメージの要因になっているとき、心理臨床のプロセスは複雑になるとした

(p.14)。特に怒りの問題を取りあげ、怒りがキリスト教会で否定的な感情として見られてきたにもかかわらず、心理臨床のプロセスにおいて改めて着目すべき要素であると提言した (pp.14-15)。さらには、試練の中では神概念と神表象の内面的な認識の違いが罪責感として表現されるとし (p.18)、心理臨床のプロセスで罪責感に焦点をあてる必要があるとした。Hoffman, L.の見解は、神表象を考慮した心理療法にさまざまな知見を与えている。神概念と神表象の違いから心理療法に有用な知見を提供したHoffman, L.は、Moriarty, G. L.とともに、神表象を心理援助に援用した心理療法の概要をハンドブックとして紹介している (Moriarty, G. L. & Hoffman, L. (eds.) , 2007)。

Jonker et al. (2008) は Rizzuto, A. が神表象と神概念を区別すべきであると述べたことを引用し、この二つが神表象 (God representation) を形成するとした。さらに、Davis et al. (2012) は、God images、God concepts、God schemas、God representations など、神表象研究でさまざまな用語が混乱して使われてきたことを指摘し、改めて神表象と神概念を整理した上で、両者の概念規定を試みている。Davis et al. (2012) によれば、神表象は「特別な神的アタッチメント人物 (specific divine attachment figure) と、その神的アタッチメント人物との関係で経験される自己による内的作業モデル」と定義される (p.2)。他方、神概念は「特別な神的アタッチメント人物の性質、そしてその神的アタッチメント人物が、人間 (自己を含む) とどのような関係を作るか、人間についてどのように考えるか、人間についてどのように感じるか、そして人間 (自己を含む) がその神的アタッチメント人物とどのような関係を持ち、その神的アタッチメント人物についてどのように考え、どのように感じるかということに関する信念の枠組み (set of beliefs)」と定義される (pp.2～3)。Davis et al. (2012) の定義を見ると、内在化させる表象 (representation, image) から、アタッチメントを構築する人物 (figure) にニュアンスが変化していることが観察される。Davis et al. (2012) が、divine attachment figure という用語を用いたことは、最近の神表象研究がアタッチメント理論の背景の中で行われてきたことと関連があると考えられる。現代の神表象の定義は、アタッチメント理論、神経生物学、社会・認識・情緒神経科学、認識科学、社会認知、精神分析学、宗教心理学の分野からのリサーチをもとに試みられたものであり (Davis et al., 2012)、一理論背景の中にとどまらないものになっている。このことは、神表象と神概念の区別が難しいことを間接的に示しているとともに、理論背景が変わると、内在化させている神という研究対象の定義が微妙に変わることから、神表象が一つの理論に収まりきらないことを示唆しているとも考えられる。

神表象と神概念の関係について、Lotufo, Jr., Z. (2012) は、神表象理論の歴史において両者がどのように区別されてきたかを概観した上で、神表象と神概念は違うものとして区別されなければならないが、相互に影響し合っていると理解すべきであるとする。さらに、神概念よりは神表象のほうが、人のパーソナリティに強い影響を与えることを認めつつ、どちらもその人の経験や心理療法によって変容する可能性があるとしている。

第二節 わが国における神表象研究

わが国においては宗教と心理学双方にまたがる研究はさまざまな角度からなされてきたが、それらの研究は、キリスト教の背景を持つ欧米と異なり、他宗教も含めた一般的な宗教を対象としたものが多い。そもそもキリスト教を対象とした研究が少なかった上に、尺度構成を行う実証的な研究は見当たらない。松島（2011）によれば、戦後における宗教意識調査は、宗教教育との関連からの検討、特定の宗教の検討、日本人一般の宗教意識の検討の三つに分類されるという（p.37）。その中でもキリスト教を対象としたものに、安藤（1962）の研究があり、安藤はキリスト者を対象に宗教的情操尺度を開発している。棚瀬（1996、p.94、97）は、「聖なる絶対他者」をどのようにとらえるかにより、異なったタイプの「自己」の発達がありうることを指摘し、人格的な「顔」を持たない日本的土壌の中で、「聖なる絶対他者」を根本とするキリスト教に期待をしている。絶対他者の概念を研究対象とした点で意味がある研究である。またジャンセン（2003）は、絶対他者（神）の存在が前提となっている牧会カウンセリングについて、神を三位一体としてとらえる必要があると述べている（p.82）。これらの研究は絶対他者（神）に焦点を当てているという点では意味があるが、必ずしも実証的アプローチではない。キリスト者を対象とした最近の実証的研究に、松島（2005、2006、2008、2009、2010）の研究がある。ホーリネス系教会のキリスト者における宗教経験の構造を研究対象とし、宗教意識を測定する尺度構成を行っている。「回心」など、神学の分野では神学用語で説明される宗教体験を、心理学的用語を用いて説明している点で意義深い。しかしいずれも神表象を研究対象としたものではない。

西脇（2011）はキリスト教圏の宗教性研究の特徴を述べ、宗教性発達の研究を牽引してきたのが唯一神論を唱えるキリスト教圏であったために、神のイメージが宗教性の発達の研究の主流になってきたとしている（p.89）。この観点からすれば、唯一神論とは全く異なる宗教観を持つわが国において、神のイメージが研究題目として取りあげられなかったことも頷ける。杉山（2011）によれば、パーソナリティーや心理的適応や社会行動と宗教性の関連についての研究も欧米では盛んに行われて来たが、わが国においては未開拓な分野であり、その原因は、宗教的多様性が顕著であるわが国において宗教性を測定する指標を作るのが難しいことにあるとしている（p.118）。

わが国においては、実証的な神表象研究は行われておらず、神表象研究に最も貢献した Rizzuto, A. についても知られていないが、Rizzuto, A. を紹介したケースがいくつかある。葛西（1994）は、Freud, S. の宗教論の角度から、「リットーの精神分析的信仰形成論一フ

ロイト宗教論のもう一つの可能性―」と題した論文を発表し、Rizzuto, A.の信仰形成史を紹介している。また狩野(2009)はRizzuto, A.が来日した際の講演会の様子と意義を、『Dr. Ana-Maria Rizzuto講演会』について」と題した論文で日本精神分析学会の学会誌に発表している。その時の講演会の内容は、Rizzuto, A.の講演を福本(2009)が翻訳する形で講演記録としてまとめられ、「フロイトはなぜ神を拒絶したか―精神力動的な一解釈―」(原題: Why Did Freud Reject God: A Psychodynamic Interpretation)という題で同学会誌に紹介されている。Rizzuto, A.はその中で、以下のように述べている。

フロイトの神表象の心的な土台は、死の恐怖・持続的で反復された外傷・幻滅・両親像の理想化の喪失との関連で考えられました。……これらのすべての要素が思春期の終わりに収斂して、「必要に迫られての有神論者」という無神論者を生み出しています。……そのような神に対しては、どのような犠牲を払っても防衛がなされなければなりません。強い不信仰は、長い間満たされなかった幼児期・思春期的切望の耐え難い苦痛に対する、唯一の保護でした」(2009, 福本訳, p.225)。

Freud, S.が神を信じなかった理由は、幼少期からの心的外傷や幻滅が原因で、神を信じるに値しない存在として位置づけ、神に対して防衛したことにあるとしている。なお、Rizzutoという名称の日本語表記について、葛西(1994)は「リットー」、福本(2009)は「リズット」、Jones, J. W.のContemporary Psychoanalysis and Religion(1991)を訳した渡辺は「リズト」としており、統一されていない。本研究ではRizzutoと表記する。

第三節 神表象理論と近接領域

1 人間科学領域内での位置づけ

1970年前後のアメリカで始まった神表象の研究は、神学と心理学のいずれとも関連がある、独特の立ち位置にある研究テーマであり、人間科学領域における位置づけが可能なテーマである。人間科学は、個別諸科学が個々に専門特化していくだけでは十分ではないという問題意識から、総合的な見方で人間にアプローチする研究領域である(菅村、p.4)。本研究も、いくつかの領域にまたがって人間のあり方にアプローチするという意味で、人間科学の一研究と位置づけることが可能であるが、わが国においては、心理学と神学を関連づける視点は、神学的視点到重点を置いているため、もっぱら牧会カウンセリング、あ

るいは牧会心理学というキリスト教学の一領域内にあるものと理解されてきた。そのために、人間科学領域での知見として位置づけられた例はほとんど見当たらない。将来的に、人間科学領域内での位置づけが求められる可能性もある。

2 信仰発達理論との関連

神表象理論と同時期に欧米で発達した近接領域の研究に、信仰発達理論がある。信仰発達理論は1960年前後から始まり、その後一つの潮流を形成した。Kohlberg, L.が道德性の発達に関する学位論文をシカゴ大学に提出したのが1958年（伊藤、1985、p.2）、Kohlberg, L.に触発されたFowler, J.が信仰発達理論（FDT）を発表したのが1974年である。Fowler, J.（1981）は、信仰は、未分化の段階の信仰を含めて七つの段階を経て発達すると考えた（pp.119～211）。信仰発達理論は、信仰が人間の心の一部だけでなく、パーソナリティーの全領域と関わるものであることを明らかにしたこと（奥田、p.143）、その斬新性に対してさまざまな批判が提出されたものの、瞬く間に広がり、欧米における宗教教育や宗教心理学に大きな影響を与えた。アメリカでは牧師を養成する神学校のカリキュラムにも取り入れられている。

信仰発達理論と時期的に並行して神学と心理学の対話を試みたのが神表象理論である。年代を見ると、Rizzuto, A.が Annual Meeting of the Society for the Scientific Study of Religion で神表象研究に関するプレゼンテーションをしたのが 1970 年、The Birth of the Living God を発表したのが 1979 年である。Rizzuto, A.は、Fowler, J.が信仰発達理論を発表する数年前から神表象研究に取り組んでおり、信仰発達理論が脚光を浴びていた中で、それとは視点が異なる The Birth of the Living God を発表したことになる。発表後に瞬く間に広がった信仰発達理論に比較して、神表象理論は、その後、アタッチメント理論の研究者たちに注目されながらも、広がりという点で地味な印象は否めない。

信仰発達理論と神表象理論は、学的な理論背景が異なっていた。Fowler, J.が、Erikson, E. H.や Kohlberg, L.の理論を援用したのに対し（伊藤、2012、p.187）、Rizzuto, A.の理論背景は精神分析理論である。それぞれ独自の発展を遂げており、両者が神学的・心理学的対話を試みてきた様子は伺えない。むしろ、神表象理論はそれほど注目されず、信仰発達理論の立場から相手にされなかった可能性もある。

信仰発達理論は 1980 年代後半になって日本にも紹介された（伊藤、2012、p.183）。奥田（1990）は、1987 年から 1989 年にわたって雑誌「教師の友」に連載した記事を一つに

まとめて書籍として発刊し、その中で Fowler, J.の信仰発達理論を紹介している（pp.139～142）。河村（2005）は、Kohlberg, L.と Fowler, J.の理論をもとに、キリスト者家庭における自立と信仰継承の問題を論じている。それでもわが国の場合は、認知度はまだ低く、キリスト教教育のカリキュラムに取り入れられている例もほとんど見られない（伊藤、p.183）。他方、神表象理論は、信仰発達理論が紹介されてから数年遅れて、1994年に葛西が Rizzuto, A.の信仰形成史を紹介したのが最初である。しかし、その認知度は信仰発達理論よりもさらに低く、全く知られていないのが現状である。Rizzuto, A. (1979)の *The Birth of the Living God* も邦訳されていない。

以上のように、信仰発達理論と神表象理論は、欧米においてほぼ同じ時期にそれぞれ別の理論背景をもって発展したが、わが国に紹介されたのは信仰発達理論のみであった。本研究は神表象理論に着目し、日本人キリスト者を研究領域として、教会教育のあり方と信仰形成について検討するものである。

第四節 本研究の対象範囲と意義

先行研究の状況と、特にわが国における教会教育の現状を踏まえ、本研究の対象範囲と意義を検討した。

1 日本人キリスト者を対象にした実証的検討

わが国においては、宗教性や宗教意識についての研究はなされていながら、キリスト者が神についてどのような表象を内在化させているかということに関する実証的な研究は行われておらず、神表象を測定する尺度も開発されていない。諸外国においてはさまざまな試みがなされてきたが、いずれも日本的文脈を考慮したものではない。また、日本人の心理については、土居（1997a）の「甘えの理論」をはじめとしてさまざまな研究者が研究を重ねてきたが、日本人の心理と日本人キリスト者の神表象との関連についての研究も行われていない。以上のことから、日本人キリスト者の神表象の内在化と変化のメカニズムについて、実証的アプローチから解明する必要がある。本研究は、実証的なアプローチによるキリスト教教育領域の研究である。記述は心理学論文の様式を採用する。

2 神表象の内在化のプロセスの検討

先行研究が示す通り、神表象の内在化のプロセスについては Freud, S.から始まり Rizzuto, A.の研究を経て、さまざまな修正が加えられ、Halevi-Spero, M.のモデルなどが提示されている。改めてわが国において調査・分析を行うことによって、先行研究を支持できる範囲と、先行研究で説明できない範囲を確認する必要があると考えられる。

3 「一致仮説」と「補償仮説」の詳細な検討

神表象研究は、精神分析理論から始まり、対象関係論を経て、アタッチメント理論に至って今日を迎えている。アタッチメント人物（figure）との関係についてはさまざまな検討が重ねられ、現在では四つの見解にまとめられている。四つ目に提唱された「内在関係認識一致仮説」は、内面的なレベルは「一致仮説」で説明できるが、それが宗教行為など外的な面は必ずしも「一致仮説」で説明できないとする考え方であり、わが国における現状からさらに詳細な検討が必要であると思われる。

4 心理臨床におけるモデルの提言

先行研究が示すように、キリスト者が内在化させている神表象は、基本的信頼感や自尊心感情などの自己理解、他者との関係の構築のあり方、信仰のスタンスなどに影響を与えていると推察されることから、神表象を牧会やキリスト教教育に活かすモデルを構築する。神表象の角度からのアプローチは諸外国においてはなされているが（Moriarty et al., 2007）、わが国においては今後の分野である。その際、内在化されている神表象をより具体的に測定できることは重要である。内在化させている神表象を、神の役割のような名称によって言語化し、それをもって測定できれば、キリスト教教育や心理療法におけるモデルの構築に資することができる可能性がある。本研究の意義の一つであると考えられる。

5 教会のキリスト教教育のモデルの検討

神表象の変化という観点から、教会のキリスト教教育のあり方について検討する。本研究の調査のフィールドは日本におけるキリスト者であり、教会におけるキリスト教教育についての検討が主眼となる。わが国においては、戦後、キリスト教会が新しいスタートを切った経緯があり、人格形成のプロセスにおいてキリスト教的な背景のない人がキリスト者になるケースが多く、そのパターンがキリスト者になるモデルとして理解されてきたと

ころがある。その反面、キリスト教的な背景の中で育った子どもがキリスト教を信じるパターンについては、それほど検討されることはなかった。神表象の変化という観点から、人格形成期のキリスト教的な背景を視野に入れた教会教育のあり方について検討することに意義があると考えられる。

6 「回心」を重視するWesley理論の神表象の視点からの検討

わが国のキリスト教会における教育に影響を与えてきた理論に、「回心」を重視するWesley理論がある。特に、プロテスタント教会においては、子どもに対して、成人と同等の「回心」、あるいはそれに近いものを求めて来た。しかし、牧会臨床の現場で、それが必ずしも機能しないケースが散見される。幼少期から「回心」をフォーマットとして提示された場合、キリスト者としての自己イメージが一人歩きし、自分の実態から遊離する「信仰のイメージ化」が起きるのではないかという問題提起もなされている。神表象を一つの切り口に、人間のライフサイクルや発達も視野に入れたキリスト教教育や心理療法のあり方を模索することに意義があると考えられる。

本研究は、以上の対象範囲における検討に学問的意義があると判断した。

第二章 研究方法

第一節 構成概念の背景

1 わが国におけるメソジストの流れの位置づけ

本研究は、わが国のメソジスト系の教会におけるキリスト教教育を主な研究領域として想定している。メソジストの流れは、18世紀の英国で、Wesley, J. (1703～91年)によって始められた宗教復興運動に端を発している。

そもそもキリスト教会の伝統は、大きくカトリックとプロテスタントの二つに分けられる。イギリス国教会（聖公会）は歴史的経緯の中でカトリックと袂を分かったが、神学的立場や実践ではカトリックに近い立ち位置にある。プロテスタントは Luther の主張に端を発した宗教改革によって教会が誕生し、カトリックと立場を異にする流れを形成した。教会の伝承や教会会議の絶対的權威は否定しつつ、初期の信条、ニカヤ信条やアウグスティヌスの罪と恩恵についての教理を受け入れ、聖書の權威と信仰によって義とされる立場を主張した（ワイレー・カルバートソン、p.41）。プロテスタント神学を支える代表的な神学者 Calvin の神学的立場は、神の「絶対主権」と「選び」に重点を置く傾向があるが、それに対して異なる見解を取ったのがアルミニウス主義であった（ワイレー・カルバートソン、p.329）。現代のプロテスタント教会には、Calvin の影響を強く受けている考え方とアルミニウス主義の影響を受けている考え方の二つの流れがある。Wesley, J. はアルミニウス主義の流れの中にあり（Coppedge, A., 1987, pp.35～36）、「聖化」の考え方についてもアルミニウス主義の伝統を引き継いでいる（ワイレー・カルバートソン、p.386）。この神学的立場を、Wesley, J. の名にちなんで「ウェスレアン神学」、それに対して宗教改革の神学者であった Calvin の流れを組む神学を「カルヴァン神学」と呼び、現代のプロテスタントの二大潮流を形成している。

ところで、この神学的二大潮流は、「神の絶対主権」や「予定」については立場を異にしているが、本研究のテーマである「神」の記述については、必ずしも対立しているわけではない。Wesley, J. は「神の選び」についてカルヴァン派と論争したが（Coppedge, A., 1987, p.37）、当時の政治状況を見つつ、神は絶対主権を持った「創造者」や「王」であるだけでなく、正義を行われる「裁判官」であり、愛を注がれる「父」とあるという面にも着目した。Wesley, J. はこの視点を根拠に、キリスト者になる経験を「新生」、あるいは「信仰義認」としてとらえた（Coppedge, A., 1987, p.129）。この理解は、宗教改革の立場と差異

はない。さらに Wesley, J.は、宗教改革の伝統と同じく聖書を最高の権威として認め、聖書の中に神学的な真理を見出そうとしたという意味で、自らを宗教改革の伝統の中にあると理解していた (Coppedge, A., 1987, p.129)。「神の選び」については、カルヴァン派との論争で立場を鮮明にしたが、宗教改革やドイツ敬虔派の伝統から良いところを抽出してまとめようとした神学的な姿勢が伺える。

日本のキリスト教会は、メソジスト派の教会だけでなくカルヴァン派の教会も多く、「ウェスレアン神学」と「カルヴァン神学」が混在しているが、「予定論」などで立場を異にしながら、キリスト者になる経験、あるいは「回心」を軸にしている点では同じ流れの中にあると理解することが可能であろう。

本研究では、メソジストを、「18 世紀の英国で Wesley, J.によって始められた宗教復興運動」と定義し、メソジスト神学を、「Wesley によって提示された『回心』を重要視する神学体系」と定義する。

2 メソジストの流れの端緒

(1) Wesley, J.の生涯の概観

メソジスト神学の端緒となったのは Wesley, J.である。Wesley, J.は、18 世紀の英国でメソジストの運動を指導し、それを契機にメソジスト教会が誕生した。ここで、Wesley, J.の生涯の主な出来事を概観する。

Wesley, J.は 1703 年、英国 Lincolnshire の Epworth で、牧師家庭の 18 人目の子どもとして生まれた。六歳のときに火事から救い出されるという経験をしている (山中、1990、pp.65～66)。1725 年、22 歳のときに執事への聖職按手を受ける。これが「オックスフォード回心」と呼ばれるものであり、この時、神の律法すべてを外的にも内的にも厳格に守ることによって神の救いを得るという決意をした。しかしこの決意は、心の安息をもたらすことはなく、宣教師としてアメリカの Georgia へ赴くも、1737 年、人間関係で失敗、傷心の思いで帰国する (山中、pp.68～75)。1725 年の「オックスフォード回心」から 1737 年までを一つの区切りと考えることができる。

アメリカでの失敗は、Wesley, J.に精神的な打撃と罪責感を与えた。自分の意志をたよりに救いを求めた方法は挫折し、自分が罪ある者であるという非常に強い意識を持つに至った。そして 1738 年 5 月 24 日、Aldersgate で「回心」を経験する。Aldersgate での経験に関する評価は分かれるところだが、危機に晒されていたアイデンティティを回復し、

罪責感と不安感に対して心理的な救いを与えたことは間違いない（山中、p.77）。翌 1739 年、Wesley, J.は Bristol 郊外の Kingswood で野外説教をし、大きな成功を収め、このことによって神への信頼を再確認することになった。その後さらに布教活動に従事し、メソジスト運動のリーダーとなって行った（山中、pp.86～87）。1738 年の Aldersgate での経験から 1760 年までを一つの区切りと考えることができる。

1760 年代に入り、Wesley, J.は宗教的リバイバルについて論争するようになる。当時の神学的な焦点は、「キリスト者の完全」の教理であった（Coppedge, A., 1987, p.160）。「キリスト者の完全」の教理は「聖化」とも言われ、キリスト者となる経験とは異なるレベルの経験・転機として定義づけられる（山中、p.138）。松島・宮下（2008）は、心理学研究の用語として「高次の回心体験」という表現を提示するが、「聖化」と同義である。1760 年代に「聖化」について論争になった時期から 1791 年の死までを第三の区切りと考えることができる。

このように、Wesley, J.の生涯は、1738 年の Aldersgate の「回心」まで、メソジストの運動が拡大した 1760 年まで、「聖化」について論争した 1760 年以降の三つに整理できる。

(2) Wesley, J.自身の「回心」の経験

メソジスト派の「回心」の理解は、創設者である Wesley, J.の Aldersgate での体験に寄るところが大きい。Wesley, J.は、人間が聖くされること、すなわち「聖化」を神学の中心に置いた（山中、1990、p.138）。「回心」はそのプロセスのスタート、すなわちキリスト者になる経験であると理解される。Wesley, J.は、自分がどのように Aldersgate での「回心」に至ったかについて、1738 年 5 月 24 日の日記の中で、以下のように述べている。

14、夕刻、私はひどく気が進まなかったけれども、オルダアスゲイト街における集りに行ったところ、そこで或る人が、ルタアママのローマ人への手紙の序文を読んでいた。9 時 15 分前ごろ、キリストを信じる信仰によって神が人心に働いて起したもう変化について、彼が述べていた時、私は自分の心があやしくも熱くなるのを覚えた。そしてキリストを、只ひとりの救い主であるキリストを信じた、と感じた。また彼は、私の罪を、私の罪をさえも取り去り給うて、私を罪と死との律法から救って下さったとの確証が、私に与えられた（標準ウェスレー日記 I、日記・第 2 部、pp.243～244）。

この経験は、キリスト教会の中で「福音的回心」と呼ばれ（山内、pp.31～32）、キリスト者になる体験のモデルとして理解されてきたものである（山内、p.118～119）。

3 Wesley理論の全体像

(1) Wesley, J.の救いの順序

ここで、人間が神の「恵み」を体験することについて、Wesley, J.がどのように理解していたかを整理する。Wesley, J.は、神の「恵み」を体験することはプロセスと転機の両面からとらえることができると考え、それをパターンとして提示した。それを図7に示す。

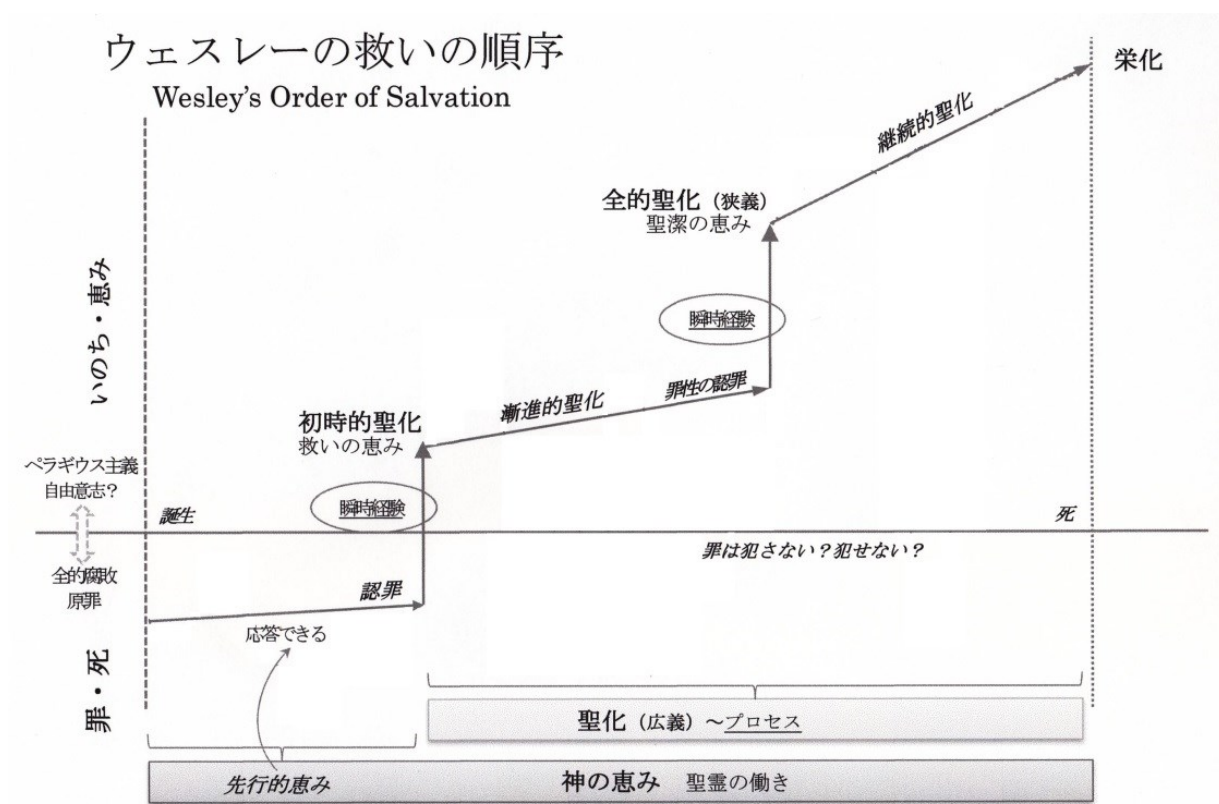


図7 Wesley, J.の救いの順序

Wesley, J.の理解によれば、「回心」と「聖化」は、比較的急な変化の中で経験できるものであるが、急な変化だけでなく、全体を神の「恵み」のプロセスとしてとらえることに本来の特徴がある。また、神が人間に「恵み」を与え、そのことが人間の内面に変貌を促し、生活を改変させるという積極的方向性を描いたことも、Wesley, J.の理解の特徴である。人間形成の観点から考えれば、積極的な成長を促す理念であると考えられることもできる。

以下、救いの順序の段階を、順を追って概観する。

(2) 「神のかたち」(imago dei) の概念

Wesley, J.は、人間は創造されたときには完全であり、「神のかたち」(imago dei) を与えられていると考えた。「神のかたち」とは、旧約聖書・創世記 1 章 27 節に「神は人ご自身のかたちとして想像された」(日本聖書刊行会、第三版、2003 年) と記されている、人間が神に創造されたときに神が人間に組み込んだものである。

ここで、Wesley, J.の用いている「神のかたち」(imago dei) の概念について見ておきたい。Wesley, J.は「神のかたち」について、説教の中で以下のように述べている。

それは単に神の自然的な像 (natural image)、すなわち理解力や意思の自由やいろいろな感情を与えられている霊的な存在として神ご自身の不死の似姿にしたがって創造されたばかりでなく、また単に神の政治的な像 (political image)、すなわち……人間より低い被造物を支配する者として創造されたばかりでなく、人はおもに神の道徳的な像 (moral image) に従って創造されたのです (説教 45 「新生」、i、1、ジョン・ウェスレー説教 53 (下)、pp.294)。

このように、Wesley, J.の「神のかたち」は、神が人間を創造したときに人間に組み込まれたものであり、「自然的像 (理性・意志・自由)」、「政治的像 (被造物を管理する責任)」、「道徳的像 (人間と神との関係の土台)」の三つを含む。この「神のかたち」は、人生のどこかで組み込まれるものではなく、生まれたときからすでに組み込まれているものである。

(3) 「神のかたち」の回復

その「神のかたち」は、神が人間を創造したときのままで組み込まれているのではなく、人間の罪によって破壊されている。そのため、人間は理性・感情・意志など、ある程度の能力を備えているが、そのことで神のもとに来ることはできない。このように、罪を強調する Wesley, J.の考え方が「神のかたち」の理解にも表現されている。Wesley, J.はそのような人間の状態を表現するために、「腐敗」(corruption) ということばをしばしば用いた。例えば、説教の中で以下のように語られている。

2 ……人は生まれながらに、あらゆる種類の悪に満ちているのでしょうか。……全的に墮落しているのでしょうか。そのたましいは完全に腐敗しているのでしょうか。……それを否定するなら、あなたは依然として異教徒に過ぎないということです。

3 ……このように病んでいるたましいをいやす神の方法です。この方法によって、たましいの偉大な医者、この病をいやすために薬を与えます。薬を与えて、その全ての機能が腐敗している人間性を回復させます（説教 44「原罪」、iii、2～3、ジョン・ウェスレー説教 53（下）、pp.283～284）。

Wesley, J.は、人間は腐敗しているが、その腐敗した人間が、「神のかたち」に回復されることが救済であると考えた。特に「神のかたち」の三つ目の要素である「道徳的像」の回復が救いであり、その回復のプロセスを「救いの順序」というパターンで提示した。

人間に「神のかたち」を組み込まれているという視点は、「回心」重視の理論では重視されてこなかった。Wesley, J.の描く「神のかたち」が理想的過ぎて、その理想に回復される転機は劇的でなければならず、その意味で「回心」が焦点化されてきた可能性もある。

(4) 「先行的恵み」

人間が全的に腐敗しているならば、神からの「恵み」の働きかけに応答することはできないはずであるが、人間が応答できるのは、神が先行的に「恵み」を注がれるからであると考えた。この「恵み」は、「回心」前から先行的に働いているという意味で、「先行的恵み」と呼ばれるものである。例えば、説教の中で以下のように語られている。

ここで言われている救いは、神のみわざの全体に、すなわち、恵みが魂のうちに働く最初の兆から、それが栄光のうちに完成されるに至るまで、拡張して解釈できます。もし私たちがこのことばを極限にまで引き延ばして解釈するなら、しばしば〈生まれながらの良心〉という名で、正確には〈先行的恵み〉と呼ばれているものを含めることができます。先行的恵みは、父なる神の「引き寄せる」（ヨハネ 6:44 参照）働きすべてを指します。それは神を求める欲求として現れ、もし私たちがそれに応じるならば、この欲求はますます増大します（説教 43「聖書における救いの道」、i、1、ジョン・ウェスレー説教 53（下）、pp.246～247）。

人間は全的に腐敗しているが、人間が何かをする前に神の側から一方的に与えられる「先行的恵み」によって神に応答できる。そして、人間は「悔い改め」に至るとされた。

(5) 「悔い改め」

「悔い改め」とは、自己を認識し、神の前に罪人であることを言い表し、それについての裁きを受けとめることである。人間が神に対して努力を重ねることによって神の「恵み」を引き出すことができるカードではない。例えば、説教の中で以下のように語られている。

1 従って、赦され、神の恵みと和解することを願う人はだれであっても、心の中で、「私はまず、これをしなければならない。私はまず、すべての罪を征服し、すべての悪しき言葉と行いから離れ、すべての人にあらゆる善を行わなければならない。あるいは、私はまず、教会に行き、主の聖餐にあずかり、もっと多くの説教を聞き、もっと多くの祈りを捧げなければならない」と言うてはなりません。……まず、信じなさい。……この大切な土台をまず据えなさい。

5 そしてあなたは何の目的で、罪が拭い去られる前に、より誠実さを得ようと待ち望むのですか。神の恵みにもっとふさわしい者となるためですか。ああ、あなたはなおも「自分自身の義を立てよう」としているのです。主が憐みを与えてくださるのは、あなたがそれにふさわしいからではなく、主の恵みが尽きないからであり、あなたが正しいからではなく、イエス・キリストがあなたの罪を贖ってくださったからです（説教 6「信仰による義」, iii、i、v、ジョン・ウェスレー説教 53（上）、p.171、173）。

「悔い改め」は、人間が自分を整えることによるのではなく、神からの「恵み」の働きかけによってなされるものである。悔い改めによって救いに至ることができる。

(6) 「義認」

人間の努力や功績は無効であり、人間が神の前に義とされるのは 100 パーセント神の働きかけによる。神の働きによって人間は正しいものであると認められる。人間はそれを、信じて受けとるだけでよいとされた。例えば、説教の中で以下のように語られている。

6 ……私たちの義認に際して、三つの事柄が伴わなければならない。すなわち、神の側では神の偉大な慈悲と恵み、キリストの側では神の義の満足、そして私たちの側では、キリストが獲得した功績に信頼する信仰である（説教 20「主、我らの義」、ii、6、ジョン・ウェスレー説教 53（中）、p.80）。

この信仰は、人間が努力した結果、能動的に手に入れることができるものではなく、神の「恵み」によって受動的に付与されるものである。徐々に身に付けて行くものではなく、瞬時に与えられるものである。例えば、日誌の中で以下のように述べられている。

この一事について私は、聖書を、とくに使徒行伝を、探究してみた。ところが、驚いたことには、聖書のなかには一瞬間の回心以外の実例を見出すことができず、また新生のための劇痛三日間を要した聖パウロのような緩慢な実例を見出すこともできなかった（標準ウェスレー日記Ⅰ、日記・第2部、p.230）。

Aldersgate での経験と聖書に提示されている神の「恵み」についての記述は、Wesley, J. の中で違和感なく重なっていた。「回心」は瞬時的で、急な変化を伴うものと理解された。

(7) 「新生」

人間がキリスト者になる経験は、死んでいた者が新しく生まれるという意味で「新生」と呼ばれる。例えば、説教の中で以下のように語られている。

2 しかし、義認と新生とは、〈時〉という点では、相互に不可分な関係にあることは認めなければなりません、両者は容易に区別できるものです。それは、両者が同じものではなく、全く異なった性質の事柄だからです。義認はただ関係上の変化を意味するのに対して、新生は実質的な変化を意味します。神が私たちが義と認めるとき、神は私たちのために(for us) 何かをなされます。そして私たちが新しく生まれさせるとき、神は私たちの中に(in us)働きをなされるのです（説教 19「神より生まれた者の偉大な特権」、序、2、ジョン・ウェスレー説教 53（中）、p.51）。

「新生」は、人間の努力で獲得できるものではなく、神の働きによる人間の実質的な変貌、心の生まれ変わりとして理解された。

(8) キリスト者の中にある罪

人間は「回心」を経てキリスト者になるが、キリスト者になったからといってそのまま理想的な人物になるのではない。キリスト者になっても、心の中に罪は残存している。例えば、説教の中で以下のように語られている。

7 ……それらの経験が絶えず感じているのは、信仰からはずれるような心の傾向性や、悪へと引きずられる生まれつきの傾向、また神から離れやすい性質、さらに世のものへの執着心などです。彼らは、プライドや自己意志、また不信仰などの罪が、自分たちの心のうちに残存していることに日々気づいています。……しかし同時に、彼らは「神からの者」(Iヨハ 5:19)であることを知っています(説教 13「信仰者の中にある罪について」、iii、7、ジョン・ウェスレー説教 53 (上)、p.322)。

キリスト者になった後に直面するテーマは、キリスト者の中に残存している「罪性」をどのように克服するかということであり、そのために有効な方法は自己否定であるとされた。神の愛を受け入れても、古い自分を捨てる努力をしなければ、キリスト者としての成長は期待できない。自己否定には強い意志と行動を伴うが、それも、神の主権と働きかけに対する応答であり、修練ではない。例えば、説教の中で以下のように語られている。

2 自己否定とは何でしょうか。……自己否定とは、私たちにとって神の意志こそが行動の唯一の基準であると確信して、自分自身の意志を否定し、あるいはそれを拒否することです。……

3 ……この腐敗に対して抵抗し、反発することこそが神の意志です。……

5 さて、機会がある度に自分の墮落した性質に身を任せて、自分自身の意志に従うことは、疑いもなくその時は快いものです。しかし、どのようなことであれ、自分の意志に従っていくことにより、私たちの意志のゆがみはそれだけ強くされます。墮落した性質に身を任せることにより、それをさらに増進させるのです(説教 48「自己否定」、i、2～3、5、ジョン・ウェスレー説教 53 (下)、pp.375～377)。

以上のように、キリスト者になった後の生活は、ある種の修練を伴うものと理解された。

(9) 「聖化」

「聖化」とは、キリスト者になった後に、キリスト者になる経験とは別の時に、その人の性質が変えられるという意味である。人間の修練によってではなく、神の「恵み」によって成し遂げられる。例えば、論文の中で以下のように語られている。

問 22 私たちが愛に全うされる時までは、平和と喜びのうちに留まっていられないだ

ろうか。

答 もちろん、留まることができる。……しかしそれでも、私たちは自分自身の内に未だ残っている罪の性質について心を痛めることであろう。このことを痛感して、罪の性質から解放されるように熱心に願うことは、私たちにとって良いことである（「キリスト者の完全についての考察」（1759年）、「キリスト者の完全」、pp.144～145）。

「聖化」は、Wesley, J.の時代の英国で1760年代から神学的なテーマになり、「回心」と同様、瞬時的になされる「第二の転機」とであると理解された。「第二の転機」が瞬時的になされるのかということについて、Wesley, J.は論文の中で以下のように述べている。

問20 罪に死に、愛に刷新されるというこの体験は、漸進的なものか、瞬時的なものか。

答 ……同様に、人は時間をかけて罪に死につつあるかもしれない。それでも、罪がその人のたましいから離れる時まで、罪に死んでいるとは言えない。……それと同じように、たましいが罪に対して死ぬ時になされる変化は、過去のいかなる変化とも異なっていて、……しかもその人は、その後も、恵みのうちに、キリストを知る知識のうちに、神の愛と神の御姿のうちに成長する。そして、肉体の死を迎えるまでだけでなく、永遠に成長を続けていくのである（「キリスト者の完全についての考察」（1759年）、「キリスト者の完全」、pp.142～143）。

Wesley, J.は「聖化」を、人間が「神のかたち」に回復されるプロセス全体として理解していたが、急な変化を伴う体験によって体験的に確かなものになると考えた。

(10) キリスト者としての継続的成長

キリスト者は「聖化」を体験するが、体験した後も、さらに「恵み」に成長できる余地があると考えられた。例えば、論文の中で以下のように語られている。

問29 キリスト者の完全に達した人は、恵みに成長できる余地があるのか。

答 もちろん、ある。しかも、地上で肉体を持っているときだけでなく、永遠から永遠に恵みに成長するのである（「キリスト者の完全・追考」（1761～1762年）、「キリスト者の完全」、p.216）。

以上のように、Wesley, J.が考えた神の「恵み」は、いくつかの段階を経て体験されるものであり、右肩上がりのパターンとして提示された。この神学的整理は、人間の性質が変化して行くことを前提としており、人間、あるいはキリスト者としての成長に焦点が合わされているものであると考えることができる。

4 「回心」を軸とした教会教育

「救いの順序」を描いた Wesley, J.にとって、人間の成長は重要な概念であった。Wesley, J.は教育の重要性を認識し、当時英国で始められた日曜学校運動を評価している（深町、p.160）。その後 19 世紀に、メソジスト運動がアメリカに拡大するのにもなって、日曜学校がアメリカでも行われるようになってくると（深町、p.163）、子どもに原罪を教え、「回心」による「新生」体験を持つことが重視されるようになった（大森、p.203）。日本では、日曜学校はアメリカの教会の影響を受けて明治初期から始まったが（深町、p.164）、同様に「回心」による「新生」体験を持つことが重視される傾向があることは推察される。

Wesley, J.が提示した「回心」を軸にするモデルは、教会におけるキリスト教教育でも重要な概念となってきた。成人の場合は、キリスト者になる経験として、このモデルと似た体験をするケースがあることは事実であるが、子どもの場合でも、キリスト者になる経験のパターンとしてそのまま適用されてきたようなところがある。「回心」の転機に至ることがキリスト教教育の一つのゴールとされ、そのゴールを前提に教会におけるキリスト教教育のプログラムが構成された。神の「恵み」を受ける側の人間について、青年期を経て、「個」としての人格形成がある程度進んでいるとみなしうる成人と、心身ともに発達途上にあり、人格形成を目指して成長しつつある子どもとの心理学的差異について論じられることはほとんどなく、人間形成や人間性の理解を深めないままに、神の「恵み」を体験するプロセスを教会におけるキリスト教教育に適用してきたのではないかと考えられる。

5 Wesley, J.の「回心」の心理的側面

Wesley, J.は Aldersgate での経験を軸に、人間が神の「恵み」を体験するプロセスをパターン化した。ここでもう一度、Aldersgate での経験前後の Wesley, J.自身の内面を見ておきたい。Aldersgate 後の日誌には以下のように記されている。

16、帰宅の後、私は誘惑からの猛攻撃に会ったママので、叫んだところ、それらの

誘惑は退散した。誘惑はくり返しくり返し逆襲してきたので、しばしば天を仰いだ処、神が「その聖所から助けを送って下さった。」そこで私は、現在の状態と、以前の状態との間に存在する重なる違いを、発見した。以前には、恵みの下にいた時と同じく律法の下にいて、骨折りつつあった——そうだ、極力戦っていたのだ。けれどもあの頃はしばしばでなくとも時として、征服されていたのに、現在は常勝軍の状態になっている。

17、さて、25 日(木)の朝、眼をさました瞬間、「イエスよ、主よ」との言葉が、私の心にも口にも満ちあふれて、自分の全力が、眼でイエスを見つめ、魂では絶えずイエスに事えるということに集中している事を発見した。……

18、試みる者が、続けて問うた、「お前に少しでも恐怖心があるのは、信じていない証拠ではないか？」私は、私のために答えて下さることを主に望んで、聖書を開いた処、次のような聖パウロの言葉に接した、「外には戦い、内には恐れがあった。」そこで私は、自分の内に恐れがあるかも知れないけれども、一路邁進して、恐れを踏みこじらなければならぬ、と思った。……

27 日(土) 私に喜びのない一つの理由が、祈りの時間をもたないところにあると思ったので、朝、教会に行くまでは執務しないで、聖前に心を打ち明けることを、決心したのだった。すると今日は、精神が拡くなされたために、多くの誘惑の来襲をうけたとは言えわが救主なる神を信じて喜ぶ力が与えられて、征服者に優るものとなった。

28 日(日) 私が眼ざめた時は、平和であったけれども、喜びはなかった。この単調で穏やかな状態が夕刻までつづいた。夕刻、私は大勢の中で、狂信者、誘拐者、新教義の創立者だといわれて、激しく攻撃された。けれども神の恵みによって、私は動揺して怒ることなく、ただ穏やかに、そして簡単に答えて、そこを立去った。けれども、誤った生活のなかに死を求めでいる入々に、私の義務として払わねばならないやさしい関心を、私はもっていなかった。……

6 月 1 日(木) 私の憂うつは、今朝までつづいた。ところが、或る人に勧告を与えていたとき、神は私の魂になぐさめを与えることを善しとし、また私がしばらく祈ってから、次のみことばを私に示すことを善しとし給うた……（標準ウェスレー日記Ⅰ、日記・第 2 部、pp.244～248）。

Wesley, J.は、「回心」という転機の出来事の後も、さまざまな心の揺らぎを見せている。

これは、宗教体験が直ちに感情的な安定に結びつくのではないことを示唆している。また、転機的な経験だけで人間の内面の変革を説明することの限界も示していると考えられる。

6 まとめ

Wesley, J.の生涯と主張を中心に、メソジストの歴史と考え方について概観した。「回心」を重視する視点を評価しつつ、Aldersgate 後に Wesley, J.が吐露した内面的なゆらぎも、「回心」がどのような意味を持つのかを考察する材料にしなければならない。

構成概念という観点からすると、「回心」を重要な概念と位置づける理論は、検討のプロセスにおいて「回心」前後のさまざまな現象を比較することができる。あわせて Wesley, J.は、キリスト教的な背景の中で人格形成をすすめてきた人であり、そのような背景の中でどのような神表象の変遷を経験するのかというケース・スタディーとしても有意義ではないかと考えられる。

第二節 構成概念の検討

1 本研究における構成概念の特殊性

本研究は、キリスト者に内在化されている神表象をキリスト教教育の視点から論じる人間科学領域の研究であり、神学と心理学および教育学を射程に入れているが、神学的な文献分析を緻密に行うことによって神学的・哲学的に神の概念にアプローチする神学研究ではなく、教育論の領域における実証的研究を中核におき、そのために、心理学的研究法を援用する。心理学的な手続きを用いることで、理論的な構成概念を観察可能な指標に還元し、その指標を測定するための尺度構成を行い、尺度を用いて指標を計量し、計量した値を構成概念の測定値と考えるという手続きをとることが可能となる(渡邊、1996、p.125)。

本研究においては、内在化されている神表象を心理学的手法によって測定するために、聖書の中で多様なイメージで表現されている神表象を、調査協力者が一定の時間内に十分回答できる範囲で、具体的な質問項目へ反映させられるよう、構成概念に集約させていく必要がある。人間の心理現象を研究対象とする場合には、面接や自由記述の質問紙を用いた予備調査を実施し、構成概念の検討を行うのが一般的であるが、本研究は、研究対象が人間の心理現象としての「神」の表象、および神の側からの啓示と位置づけられる聖書の記述に見る「神」の表象との両面に及ぶものであることを重視する。そのため、聖書の記

載の中で神表象を取り扱っている表現を素材として整理し、構成概念としてまとめ、確認するという手続きが必要になる。

ところが、聖書に示されている「神」は、言語化された時点ですでに制約を受けており、これらが、本来の超越的な存在としての「神」と等価であるのかは断定できない。それは、本来、「神」という対象が、古典的および伝統的な人文科学の手法によって、統一かつ正確な定義をすることが非常に難しいことを示しているといえるだろう。さらに、この「神」の定義は宗派によってもさまざまである。その上、「表象」についても、「イメージ」、「心像」などの関連概念もふくめ、多様な定義があることが知られている。このことが、本研究に関連するテーマの実証研究を困難にしてきた一要因となっていることが推察される。

本研究では、「神」という構成概念を定義するために、メソジストの教職であり、神学者でもある Coppedge, A. (1988, 2001) の「神の役割 (Roles of God)」に着目した。以下、「神の役割理論」の概要を述べ、「神の役割理論」の検証を Wesley, J. の説教を用いて行う。その上で、構成概念として採用する妥当性を心理学的研究法に則って検討する。

2 聖書の表現を記述した「神の役割理論」

(1) 八つの「役割」の全体像

メソジストの教職であり、神学者でもある Coppedge, A. (1988, 2001) は、聖書の記述から八つの神の役割、Creator/Physician、King、Revealer、Priest、Judge、Father、Redeemer、Shepherd を抽出した。Coppedge, A. (2001) によれば、一神教としてのキリスト教の神は、「聖」という属性を持ちながらも、聖書の中で八つの神の役割として提示されているという。それを表 2 (次頁) に示す (引用者訳)。八つの役割は、表 2 の主役割の部分に該当するものである。

一番上の欄に「聖」と書かれてあり、キリスト教の神は「聖」なる存在として描かれている。また次の欄にあるように、その神の聖はさまざまな意味を含んでいるという。「分離」は神の聖さであり、キリスト教の神が絶対他者であることを表している。神の「絶対主権」は神の聖さである。人間の世界では、絶対主権には専制君主のイメージがあるが、神の絶対主権は専制的という意味ではなく、聖さである。また、神の愛も聖さの表現である。

さらにその下の欄には、それぞれの役割に該当する「言語」と「焦点」が書かれている。役割はそれぞれの概念と関係があり、「創造者」は「いのち」が、「王」は「栄光」と「権威」が、「裁判官」は「法」が、「父」は「家族」と「愛」がそれぞれ重要な概念となる。

その下の欄には副役割が書かれている。「医者」、「陶器師」は、「創造者」と同じカテゴリーに含まれる。「教師」、「預言者」、「友」は、「啓示者」と同じカテゴリーに含まれる。

表 2 神の「聖」のさまざまな表現～神の八つの役割 (Roles of God)

	聖 Holiness							
要素 (6)	分離/ 力 Separation		輝き Brilliance		義 Righteousness	愛 Love	力 Power	善 Goodness
	超越性	絶対主権	内在/真理	聖さ/恵み				
主役割 (8)	創造者 Creator	王 King	啓示者 Revealer	祭司 Priest	裁判官 Judge	父 Father	贖い主 Redeemer	牧者 Shepherd
言語	創造	栄光	個人的コ ミュニケ ーション	聖所	合法的	家族	奴隷/自由	個人的情 景
焦点	いのち	権威	交わり/コ ミュニケ ーション/ 真理	恵み/聖さ	法	愛	解放/奉仕	ケア
副役割	医者 農民 建築者 陶器師	万軍の主	教師 預言者 友		立法者	夫 花婿		

(Coppedge, 2001, p.27, 29, 32, 399)

(2) 「役割」と「属性」

この理論は、「神」が聖書の中でどのように記述されているかという点に着目し、それを「役割 (role)」として提示したものである。したがって、実証研究の構成概念として採用できる可能性がある。

そもそも「役割」は、表 2 の要素の欄に示されている神の「属性」とは異なるものである。「属性」が神の性質・本質であるのに対して、「役割」は、人間との接点を表す用語と理解できるだろう。この意味で、「役割」は、宗教のカテゴリーに属する概念を扱いながら、人間科学領域で使いやすい指標であると考えられる。逆の見方をすれば、「役割」それ自体に実態があるというよりは、その背後にある、「神」の実態としての「属性」が「神」そのものを表すと理解すべきである。すなわち、「役割」は、その背後にある「神」に向かう方向性を持った指標ということである。「神」の「属性」そのものは実証研究で扱うことはおそらく難しく、このことが神学領域における神概念の研究が一つに収束して行かない理由となっていると推察される。本研究では、研究の主眼を実証的な教育学研究に置き、神学的検討は今後の課題と考える。

(3) 各「役割」の内容

ここで、それぞれの「役割」を概観する。原著には膨大な数の聖書のことばが引用されているが、それぞれのカテゴリーについて代表的なもののみを列挙した。なお、聖書のことばは、『聖書：新改訳』（日本聖書刊行会、第三版、2003年）を採用した。

1) 創造者 (creator)

神は人間を創造した創造者である。旧約聖書イザヤ書には、「イスラエルの聖なる方、これを形造った方、主はこう仰せられる。『これから起こる事を、わたしに尋ねようとするのか。わたしの子らについて、わたしの手で造ったものについて、わたしに命じるのか。このわたしが地を造り、その上に人間を創造した』」（45章11～12節、Coppedge, A., p.59）と書かれている。この意味で、人間存在の源は神にある。

「創造者」の副役割の中に「医者」がある。出エジプト記には、「もし、あなたがあなたの神、主の声に確かに聞き従い、主が正しいと見られることを行い、またその命令に耳を傾け、そのおきてをことごとく守るなら、わたしはエジプトに下したような病気を何一つあなたの上に下さない。わたしは主、あなたをいやす者である」（15章26節、Coppedge, A., p.93）と記されている。「創造者」のカテゴリーに医者が入っている理由は、神がいのちの与え主であり、また再創造する方であるからである。

2) 王 (king)

神は絶対主権をもった王として描かれている。出エジプト記には、「主はとこしえまでも統べ治められる」（15章18節、Coppedge, A., p.100）と記されている。また、「この民があなたに言うとおりに、民の声を聞き入れよ。それはあなたを退けたのではなく、彼らを治めているこのわたしを退けたのであるから」（第一サムエル8章7節、Coppedge, A., p.101）、さらには「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方」（黙示4章8節、Coppedge, A., p.100）と記されている。

3) 啓示者 (revealer)

英語表記の **revealer** は、明らかにする者という意味である。神は、雲、火などさまざまな方法を用いて自分を啓示する存在として描かれている。特に大切な概念は、それがキリスト者にとって個人的なもの、すなわち、一人ひとりといっしょにいる存在だということである。この役割の鍵の言葉は「真理」であり、三位一体の神では聖霊と深い関係がある。聖霊は一人ひとりの心の中におられる神として啓示されている。「その方、すなわち真理の

御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです」(ヨハネ 16 章 13 節、Coppedge, A., p.152) と記されている。

啓示者の副役割の中に「教師」がある。「主よ。あなたの道を私に知らせ、あなたの小道を私に教えてください。あなたの真理のうちに私を導き、私を教えてください」(詩篇 25 篇 4～5 節、Coppedge, A., p.143) と記されている。

もう一つ、副役割の中に「友」がある。詩篇 25 篇 14 節には「主はご自身を恐れる者と親しくされ、ご自身の契約を彼らにお知らせになる」と記されている。また第二歴代 20 章 7 節には、「私たちの神よ。あなたはこの地の住民をあなたの民イスラエルの前から追ひ払い、これをとこしえにあなたの友アブラハムのすえに賜ったのではありませんか」(Coppedge, A., p.144)、そしてヨハネの福音書 15 章 15 節には、「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです」(Coppedge, A., p.147) と記されている。神が友として描かれている。

4) 祭司 (priest)

この役割は三位の神の中では、御子キリストについて使われており、父なる神と聖霊なる神には使われない。しかし直接の記述はなくても、父なる神も聖霊なる神も祭司としての役割を担っている (Coppedge, A., p.177)。御子キリストについては、「そういうわけですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい」(ヘブル 3 章 1 節、Coppedge, A., p.181) と記されている。祭司は「仲保者」(mediator) としての役割を果たしている (ヘブル 9 章 15 節、第一テモテ 2 章 5 節、Coppedge, A., p.184)。その神は聖める働きをする。「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とするのでしょうか」(ヘブル 9 章 14 節、Coppedge, A., p.183) と記されている。

5) 裁判官 (judge)

神は裁判官として描かれている。イザヤ 33 章 22 節には、「まことに、主は私たちをさばく方、主は私たちの立法者、主は私たちの王、この方が私たちを救われる」と記されている (Coppedge, A., p.213)。この役割は「義」の概念と関係がある。このイメージが強調されると、神はネガティブなイメージの存在になり、その結果、生活は裁かれている感

じのものになり、漠然とした不安感や罪責感を感じながら生きる人生になることが推察される。

裁判官の役割は王の役割と一部重なっている (Coppedge, A., p.212)。両者の相違点は、赦しという概念との関係の違いにある。王は赦しを宣言することができるが、裁判官は法にしたがって罪を裁く。聖書には両方の面が描かれている。

6) 父 (father)

聖書にはキリストの祈りが記録されている。「聖なる父。あなたがわたしに下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください。それはわたしたちと同様に、彼らが一つとなるためです」(ヨハネ 17 章 11 節、Coppedge, A., p.251)。父は、「家族」という概念、「愛」という概念と関係があり、キリスト者はその家族の中で、神の子という位置づけを与えられる。ガラテヤ人への手紙 4 章 6～7 節には、「そして、あなたがたは子であるゆえに、神は『アバ、父』と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です」と記されている (Coppedge, A., p.279)。

7) 贖い主 (あがない主、redeemer)

詩篇 78 篇 41～42 節には、「彼らはくり返して、神を試み、イスラエルの聖なる方を痛めた。彼らは神の力をも、神が敵から贖い出してくださった日をも、覚えてはいなかった」(Coppedge, A., p.304) と記されている。キリスト者が贖い主という用語から連想するのはキリストの十字架であるが、聖書に描かれているあがない主は、敵から奪還する力、エジプトから解放する力を持った存在というイメージである(出エジプト 15 章 1～18 節、Coppedge, A., p.300)。神自ら、力強く人を救い出す存在として描かれている。

8) 牧者 (shepherd)

代表的な聖書のことは詩篇 23 篇である。「主は私の羊飼ひ。私は、乏しいことはありません」。エゼキエル 34 章 11～16 節にも同じ内容の記述がある (Coppedge, A., p.336)。ヨハネの福音書 10 章 11～16 節には、キリストが牧者のイメージで示されている。鍵の概念は「善」であり (Coppedge, A., p.334)、「牧者」という役割は「父」と並んで、神を肯定的にイメージしているときに強調される役割である。

(4) 内在化される神のイメージの多様性

聖書に提示されている神の役割について概観した。キリスト者はあえてこれらの役割を

区別せずに、ひとことで「神」として意識しているが、実際は聖書の記述には多様な神の役割が登場する。キリスト者は聖書を信仰と生活の規範としているため、神のイメージはさまざまな役割を通して心の中に内在化されるはずである。以上のことを踏まえた上で、一人の人物について「神の役割理論」を用いたケース・スタディーを行い、八つの神の役割が実証的研究を行うための構成概念として採用する意味があるかを検討する。

3 ケース・スタディーによる検討

(1) 論点

Kawamura, Y. (1993) は、「神の役割理論」の妥当性を検証するために、Wesley, J. の文献研究を行うことによって、内在化させている神表象と外的行動の関連について分析を試みた (Asbury Theological Seminary の修士論文。Wesley, J. が内在化させている神表象を、説教を題材にして分析)。考察の論点は、第一に、神表象は人間の中にどのように取り込まれるか。第二に、内在化された神表象は信仰と生活にどのように影響するか。第三に、神表象は生涯で変化するか、以上の三点であった。

Wesley, J. を題材として選んだ理由は、第一に、メソジストの宗派の中でキリスト者のモデルであると考えられていることと、第二に Wesley, J. の生涯には転機があったということである。転機があると、その転機の前後のデータを収集することによって、神表象の変化の意味を検討することが可能と思われる。

(2) 方法

第一節・2・(1)でも述べたとおり、観察された区切りにしたがって、Wesley, J. の生涯を以下の三つの期間に分ける。

1) 第一の期間 (1725～1737 年)

「オックスフォード回心」から Aldersgate の経験までである。Wesley, J. は「キリスト者の完全」(Works, vol. 11, p.366) の中で、1725 年の区切りは「福音的回心」として評価される Aldersgate での「回心」と比較してどのような意味があったかについて述べている。Wesley, J. にとって 1725 年の区切りは、神の前に聖い生き方をしようと決断した時であり、一つの転機であった。

2) 第二の期間 (1738～1760 年)

Aldersgate から「聖化」をめぐる論争の時期以前の期間である。第二の期間の終わりは

Aldersgate のような転機はないが、その後 60 年代に入って、「聖化」がどのような意味を持つかを神学的にまとめようと試みたことから、その時期の前までを一つの区切りとした。

3) 第三の期間 (1762～1791 年)

「聖化」あるいは「高次の回心体験」が神学のテーマになった時期から、Wesley, J. の死までの期間である。

Wesley, J. の説教は教義を明確にするために発表されたものであったが (山中、p.90)、説教を記した時の状況や内面性が表現されるという前提で、それぞれ三つの期間の説教の特徴を分析した。まず、八つの神の役割に関連して書かれている部分を抜き出してカードに記録した。150 の説教は Outler, A. C. の編集した *The Bicentennial Edition of the Works of John Wesley* (以下、BE Works と略記) を採用した。記録したカードは 3,137 を数えた。次にそのカードを八つの神の役割に分類した。表現が間接的な場合、概念が二つの役割にまたがる場合は厳密な判断は難しいが、それぞれどこかの役割に入れた。

(3) 結果

分析した結果を表 3 に示す。上の欄の I、II、III は三つの期間、括弧の中は説教の数である。また、各欄の数は、それぞれの役割について言及されているデータの数、括弧の中はパーセントを表す。

表 3 Wesley, J. の説教に見られる神表象の言及数

8つの神表象	I (19)	II (45)	III (86)	合 計(150)
創造者/医者	53 (21.6)	79 (6.0)	234 (14.8)	366 (11.7)
王 (知恵)	37 (15.1)	179 (13.6)	253 (16.1)	469 (15.0)
啓示者	48 (19.6)	312 (23.7)	411 (26.1)	771 (24.6)
祭司 (あわれみ)	25 (10.2)	108 (8.2)	93 (5.9)	226 (7.2)
裁判官 (義)	28 (11.4)	216 (16.4)	168 (10.7)	412 (13.1)
父 (愛)	26 (10.6)	319 (24.2)	261 (16.6)	606 (19.3)
贖い主	15 (6.1)	71 (5.4)	103 (6.5)	189 (6.0)
牧者 (善)	4 (1.6)	18 (1.4)	16 (1.0)	38 (1.2)
他の表現	9 (3.7)	14 (1.1)	37 (2.3)	60 (1.9)
合 計	245	1,316	1,576	3,137

(Kawamura, 1993, p.17)

1) 生涯全体

ここで、生涯全体について、どれだけの数の言及があるかという点から分析を行った。

まず、全体のパーセントを見ると、一番多かったのは「啓示者」で、24.6 パーセントで

あった。「啓示者」としてのイメージはどの期間も優位であった。次に多かったのは「父」で、19.3 パーセントであった。この二つを足すと全体の 43.9 パーセントになる。他方、「創造者」と「王」を足すと 26.7 パーセントになる。

「啓示者」は、内面に真理を理解させる神の働きを表す。また、啓示者である神の働きは、キリスト者にとって個人的なものであり、神が一人ひとりといっしょにいる存在だというメッセージである。「父」は、八つの神役割の中でも中心的なものであり、愛の概念と深い関係がある。神が父であるとは、キリスト者は神の「子」であることを表し、キリスト者の存在が肯定されており、神とキリスト者との間に密接な関係があることを示唆している。以上のように、「啓示者」と「父」が主要な役割であったことから、Wesley, J.の信仰が、全体として内面的・個人的であり、また肯定的なものであったと考えられる。

次に、それぞれの期間について分析を行った。

2) 第一の期間（1725～1737 年）：「超越した絶対主権の神」

この期間には 19 の説教が残っており、その中には『心の割礼』などの有名な説教が含まれている。収集したデータの数は 245 であった。一番多かったのが「創造者」で、21.6 パーセント、2 番目は「啓示者」で 19.6 パーセント、3 番目は「王」で、15.1 パーセントであった。それに対し「父」は 10.6 パーセントであった。「創造者」と「王」を足すと、全体の 36.7 パーセントになり、3 回に 1 回は超越性に関する記述であったことがわかる。Wesley, J.の神表象全体の特徴は、「啓示者」や「父」といった、人間との人格的な関係を表す神表象が中心であるが、この期間は明らかに異なる特徴を示していた。以上のことから、この期間の特徴は「超越した絶対主権の神」ということができる。

ここで、この時期の特徴である「創造者」について概観する。Wesley, J.が創造者について言及するときには、創造者と被造物の関係が論じられることが多い。たとえば、「自らを一つのことに与えること、すなわち、創造者か被造物かいずれかに忠誠を誓うことは絶対に必要である。というのは、神にも仕え、富にも仕えることはできないからである」

（Wesley, J., BE Works, vol.4, p.217, 引用者訳）といった表現に見られるものである。

さらに、Wesley, J.が創造者について言及するときには、創造者の愛に焦点が合わされている。例えば、「創造者以上に被造物を愛してはいけない」（Wesley, J., BE Works, vol.4, p.333, 引用者訳）という表現に見られるように、Wesley, J.の宗教は、被造物ではなく創造者を愛することであった。「わたしたちの性質の病は、創造者以上に被造物を愛することである」（Wesley, J., BE Works, vol.4, p.338, 引用者訳）という言い方がされている。

第三に、創造者について言及されているときには、「人間はもともと神のかたちに造られている」(Wesley, J., BE Works, vol.4, p.293, 引用者訳) という言い方がされている。Wesley, J.にとって、罪は「神のかたちを消すこと」であり、あがないは「神のかたちを回復すること」(Wesley, J., BE Works, vol.4, p.354, 373, 引用者訳) を意味していた。

3) 第二の期間 (1738～1760 年) : 「個人的に明確化された愛の神」

この時期には Wesley, J.の非常に重要な説教が含まれており、Wesley, J.の神表象を理解するためには、この時期の説教の理解が欠かせない。この期間には 45 の説教が残っている (Outler, 1984, p.548,ff.)。収集されたデータの数 は 1316 であった。一番多かったのが「父」で、24.2 パーセントであった。2 番目の「啓示者」が 23.7 パーセントであり、この二つを合わせると 48 パーセントになる。

第一の期間の主要な特徴であった「創造者」は、21.6 パーセントからわずか 6 パーセントに下がっている。他方、「父」の神表象は、第一の期間が 10 パーセントであったのに対し、24.2 パーセントに上昇している。超越性を表す「創造者」と「王」は、第一の期間は 36.7 パーセントであるのに対して、この期間は 19.6 パーセントに下がっている。以上のことから、神表象の強調点は移行していることがわかる。第二の特徴は「啓示者」である。第一の期間は 19.6 パーセント、第二の期間は 23.7 パーセント、そして第三の期間は 26.1 パーセントである。「啓示者」は、人間の内面に真理を示すという神表象であり、超越性よりは内面性を強調する神表象であるが、「父」という神表象と合わせると 48 パーセントになる。これが、神表象に関する記述のほぼ半数にあたり、この期間の最大の特徴である。もう一つの特徴は「裁判官」である。第一の期間は 11.4 パーセント、第三の期間は 10.7 パーセントであるのに対して、第二の期間は 16.4 パーセントと上昇している。Wesley, J.の神表象の特徴は、「父」や「啓示者」という内面性の深化にある。しかしそれだけでなく、第二の期間に「裁判官」という神表象の認識が上昇していることも重要な点であり、愛という概念とバランスを取るように、神の厳しい面の認識も明確なものになっていったことが伺える。以上のことから、この期間の特徴は「個人的に明確化された愛の神」ということができる。

ここで、第二の期間の特徴であった「父」について概観する。まず、「父」という用語は、天におられる父という意味で使われている。例えば、「天におられる父のみこころを行う者は、本当の意味で賢いものである」(Wesley, J., BE Works, vol.1, p.691, 引用者訳) といった表現に見られるものである。また「天の父」という表現に「栄光」ということばが

付いている個所もあり、Wesley, J.にとって父はすばらしい存在でもあったことが伺える (Kawamura, p.32)。例えば、「そのすべての部分がわたしたちのたましいの中に現れ、神の指によって深く刻み込まれるまで、わたしたちを召し出してくださった方が聖であるように、わたしたちが聖くされ、わたしたちの天におられる父が完全であるように、わたしたちが完全にされるまで」(Wesley, J., BE Works, vol.1, p.530、引用者訳) という表現に見られるものである。しかし同時に、父である神は憐れみ深い存在として受け止められている。「天の父が憐れみ深いように、憐れみ深くありなさい」(Wesley, J., BE Works, vol.1, p.697、引用者訳) と言われている。

第二の特徴は、「父」という概念との関連で、「神によって生まれる」という表現が使われていることである。例えば、「バプテスマを受けるとき、その人は再び生まれたと言われる。そのことによって、以前は悪魔の子であった者が、神の家族の中に、子として迎え入れられ、子として数えられるということである」(Wesley, J., BE Works, vol.2, p.191、引用者訳)。あわせて、「神の子」という表現がしばしば使われている。

第三の特徴は、「父である神」という概念との関連で、愛について語られているということである (Kawamura, p.36)。例えば、「その人は神の怒りをもはや恐れることはない。なぜなら、神の怒りはその人から去ったことを知っているからである。その人は神を怒った裁判官としてではなく、愛にあふれた父として見るようになる」(Wesley, J., BE Works, vol.1, p.261、引用者訳) といった表現に見られるものである。

4) 第三の期間 (1762～1791 年) : 「全体の均衡が取れた真理の神」

この期間には 86 の説教が残っている (Outler, 1984, p.548,ff.)。収集されたデータの数は 1576 であった。一番多かったのは「啓示者」で 26.1 パーセントであった。2 番目が「父」で、16.6 パーセントあったが、「王」も 16.1 パーセントあり、さらには、第二の期間に 6 パーセントと大きく落ち込んだ「創造者」も 14.6 パーセントまで回復しており、第二の期間よりもはるかに神表象全体のバランスを取っていることが伺える。1760 年代に入ると、Wesley, J.は宗教的リバイバルについて神学的に論じ、その神学的な焦点は、キリスト者の完全の教理に関するものであった (Coppedge, A., 1987, p.160)。自己の内面的な経験を言語化して論じなければならなかったことが、この期間の神表象のとらえ方に影響したことは推察される。以上のことを総合して、この期間の特徴は、「全体の均衡が取れた真理の神」ということができる。

ここで、この期間の特徴であった「啓示者」について概観する。まず、「啓示者」という

神表象は、「信仰の確信」(assurance of faith)との関連で語られているということである。

「信仰の確信」とは、自分がキリスト者になったことは、神からの語りかけを通して認識できるという考え方である。例えば、「御霊(引用者注:神の意味)ご自身が私のたましいに、私が神の子であるという証しを与え、そのことについての証拠を与え、私は直ちに、『父よ(Abba, Father)』と叫んだ」(Wesley, J., BE Works, vol.1, p.290、引用者訳)と表現されている。さらに、「啓示者」としての神の働きは、「父」としての神の働きとの関連で語られていることも重要なことである(Kawamura, p.63)。

第二の要点は、「啓示者」としての神の働きは、人間の内面に働くものであるということである。この場合の「啓示者」は、「聖霊」という表現で表されることが多い。例えば、「神はわたしたちに聖霊を与え、その聖霊はわたしたちの中で働き」(Wesley, J., BE Works, vol.3, p.201、引用者訳)と表現されている。また、聖霊は、語り、命令する(Wesley, J., BE Works, vol.4, p.70、引用者訳)。また、導きを与える(Wesley, J., BE Works, vol.2, p.599、引用者訳)。わたしたちの理解の目を開き(Wesley, J., BE Works, vol.3, p.129、引用者訳)、教える(Wesley, J., BE Works, vol.3, p.341、引用者訳)。

以上のように、それぞれの期間の特徴が見られた。それぞれの期間の説教の中で、神表象がどれだけ言及されているかということについてパーセントを算出したのみであり、統計的に有意を確認していないが、特徴に差異が見られたことは有意義であると考えられる。

(4) 分析

生涯全体とそれぞれの期間について、神表象がどれだけ言及されているか、また各期間に発刊された説教にどのような傾向があるかという点から分析を行った。その結果、各期間にはその期間の特徴があることが示唆された。人間としての成長が影響したこと、神学論争の影響を受けたことなどの要因が考えられるが、この期間の特徴の差異は意味がある。特に第一の期間と第二の期間の間の変化は大きい。

第一の期間と第二の期間の変化は、内面的には、1738年、信仰によって神の「恵み」に与ることができるという「信仰義認」の概念を確かなものにした Aldersgate での経験が背景にあり、外面的には、翌 1739 年、Bristol での経験を契機に Wesley, J.が野外で説教するようになったことと関連があることが推察される。

一般的に Aldersgate での経験は「回心」の経験であると理解される。これは、極悪人が

かたぎになったという意味ではない（山内、pp.20～21）。外見の変化よりは内面の変化である。Wesley, J.は「回心」したとき、「私の心が不思議に熱くなるのを感じた（I felt my heart strangely warmed）」と述べているが、山内（2005）によれば、ここで使われる heart という用語は、18 世紀の英国人にとっては、現代に使われている「ハート」ということばが連想させる「気持ち」の意味ではなく、人間の主体性、人格の中心を表すことばである（p.31）。非常に内面的な、存在そのものの変化があったことを意味していると考えられる。

翌 1739 年の Bristol での経験は、野外で説教するという、Wesley, J.がそれまで経験したことのないものであった。最初は気乗りしなかったが、それほど時を経ずに野外説教という方法を積極的に活用するようになる（山内、p.85）。野外での活動を始めた経緯は Wesley, J.の中では他律的であったが、このことと、前年の Aldersgate での経験が内面的には繋がっていると解釈することも可能である（山内、p.85）つまり、神のイニシアティブを肯定してそれにしたがって行動するように、彼自身の考え方が変わったと見ることができるということである。Aldersgate での経験と Bristol の経験を経て、牧師としての仕事は人生の全く新しい段階に入って行った。

(5) まとめ：神表象の変化と生き方の関連

この研究から、以下のことが示された。第一に、神表象は固定的に生涯を通じて変わらなかったのではなく、第一の期間（1725～1737年）：「超越した絶対主権の神」、第二の期間（1738～1760年）：「個人的に明確化された愛の神」、第三の期間（1762～1791年）：「全体の均衡が取れた真理の神」というように、生涯の区切りごとに変化していた。第二に、人生の初期においては、神イメージが「王」や「創造者」だったのが、「父」というイメージに変化し、人生の後期になると、「啓示者」を中心に、「父」・「創造者」・「王」のバランスが取れるようになっていった。第三に、「父」のイメージは聖書の愛の概念と結びつくものであり、「父」のイメージへの変化の時期と並行して、生き方も大きく変化していた。

以上のことから、内在化されている神表象は、生き方と関係があるという問題提起がされた。そしてこの研究の結果は、臨床牧会の現場での観察を支持するものであった。

4 心理学的研究法における神表象の「操作的定義」

内在化させている神表象を測定するための構成概念として、神の役割理論の全体像を提示し、Wesley, J.の説教をケース・スタディーとして取りあげ、神の役割理論が妥当なも

のかを検討した。ところで、心理学研究法に則った実証研究としての客観性を確保するためには、そのまま構成概念として採用することはできない。研究対象が、人間の心理現象としての「神」表象、および神の側からの啓示と位置づけられる聖書の記述に見る「神」表象との両面に及ぶものであることを重視するという特殊性を検討しなければならない。

心理学の構成概念は、「傾性概念 (disposition concept)」と「理論的構成概念 (theoretical construct)」(「仮説的構成概念 (hypothetical construct)」と呼ばれる場合もある) の二つに分類される。「傾性概念」は、特定の状況下において観察された行動パターンを抽象的に記述しただけの概念であり、概念の意味内容は観察に還元され、観察が行われた場面の先行条件に依存するため、状況が変化した場合の正当性は保証されない。他方、「理論的構成概念」は、「傾性概念」とは異なり、観察に還元できない「余剰意味 (surplus meanings)」を持っている。「余剰意味」とは、観察された行動パターンを規定する内的過程など、外的な状況要因から独立した理論的実態と定義され、この意味で、「理論的構成概念」は、状況が変化しても記述の正当性を保持することができるとされる (渡辺、1995、p.81)。

ところで、「理論的構成概念」は観察不可能な仮説的過程を意味しており、それ自体を直接計量することはできない。そのため、心理学的研究を行う前提として、「理論的構成概念」を計量可能な指標に還元することが不可欠となる。「理論的構成概念」を計量可能なパターンに還元する手続きにおいて、理論的な内実を吟味し、十分な検討を経て妥当な構成概念に集約していくのではなく、実践的かつ具体的な運用場面を想定して、概念を実際的に定義する手法を「操作的定義」と呼ぶ。「操作的定義」とは、「構成概念を明確に定義するためにそれを客観的で再現可能な操作によって定義すること、つまり『～という操作を加えた時に生じる現象』として構成概念を定義すること」である (渡邊、1996、p.126)。

社会科学では、認識の客観性をどのようにして確保するかが大きな問題となるが、その認識方法は、実証主義と解釈主義に大別される。解釈主義では、現実を意味の解釈過程としてとらえ、それが独断にならないための基準を導入しながらも、行為者の主観を重視する。それに対して実証主義では、現実を記述するためにいくつかの概念が構成され、概念間の関連づけと、それらの概念を観察可能なものにするための指標化が行われ、実際にその指標に基づいて検証が加えられる (山田、2009a、pp.119～120)。実証主義では、観察者が自己の認識に基づいて設定した「仮説的構成概念」であっても、「操作的定義」によって実際に測定可能なものに還元するという方法に従うことによって共通の「現実」にたどり着けるという意味で客観性があるとされる (山田、2009a、p.120)。

心理学研究など実証的な研究においては、「操作的定義」によって得られた概念によって、心理学的な概念を洗練することが可能となり、量的調査の実施に展開することができる、きわめて有用な方法論として認められている。例えば、「知的能力（知能）」や「無意識」といった重要でかつ多様な定義が想定しうる概念を用いて研究を行う場合も「操作的定義」を用いている。実証主義に基づくこの考え方には、理論的内実の妥当性の可否についての議論が不毛なものとなって、そのことで現実適用性が高い知見を得られないという損失を避けることができる利点がある。例えば、「無意識」は理論的な概念規定をすることは非常に難しいが、概念規定をすることができないものについては研究対象にならないとは考えず、「無意識」を「操作的に定義する」ことによって有用な知見を得ることが可能になる。

5 神の役割理論の「操作的定義」の妥当性

以上のことを踏まえて、「神の役割理論」を構成概念として採用することが可能であるかを検討した。本研究の研究領域においては、神学的・理論的に「神」を定義することが困難であることを踏まえて、実証主義の考え方に基づき、メソジストの枠の中にある「神の役割理論」を一つの指標として導入し、神表象について「操作的定義」を行った上で研究を進める。この場合の「役割」や「イメージ」は、操作的に定義された構成概念であり、「神」を実態あるものとして仮定すれば、「神」は「余剰意味」に該当すると想定される。無限の「神」を有限な言語で表現するという限界を認めざるを得ないこととあわせて、人間が神をどのように内在化させているということを示す指標として「神の役割理論」を操作的に定義することによって一定の妥当性を確保するものである。

「神」についての記述は、さまざまな研究者が概念構成を試みてきたが、その結果は、定説がないと言っても過言ではないくらい多岐にわたる。聖書学の枠組みを採用するか、歴史神学の枠組みを採用するかによっても見解は異なるし、カルヴァン神学、メソジスト神学、アルミニアン主義など、どのような神学的前提を採用するかによっても大きく異なってくる。さらには、研究者や神学者の文化背景によっても違いが生じてくる可能性がある。もし、研究の前提として、「神の役割理論」が神学的・理論的に妥当なものであることを検証しなければならないと仮定すると、最初にどの枠組みで検証するかを設定しなければならず、その知見は、設定された枠組みの中に限定されることにならざるを得ない。「神」についての実証研究は、「理論的構成概念」で言う「余剰意味」の部分は理論構築が極めて難しく、神学的・理論的に検証できないままに研究を進めざるを得ないという限界がある。

構成概念の採用については、さらに以下の二点が考慮された。第一に、「神の役割理論」は、組織神学として改めて組み直したものでなく、帰納的に聖書の生データを記述したものとなっている（Coppedge, A., 2001）。理論構成をせずに聖書の生データを記述したことで、カルヴァン派やウェスレアン派などの神学的立場の差異が問題になる可能性は低いと言えるだろう。キリスト者は聖書を読むことによって、聖書に記述されている用語を内在化させることが推察され、本研究のような、「神」を研究対象にするものでありながらも、人間の現象を対象にする研究では、聖書に採用されている用語を記述しているという点で構成概念として採用しやすいと考えられる。

第二に、「神の役割理論」で用いられている用語を軸に Wesley, J. の説教を分析したところ、人生の区切りで神表象が変化していることが示された。神表象の変化を示唆する結果が出たことから、八つの神の役割を構成概念とすることで、Wesley 理論と矛盾しない尺度構成が可能ではないかと推察される。調査対象者もわが国のメソジストの流れをくむものが中心となっていることから、本研究の成果の適用範囲については、最終的には、Wesley 理論に基づく日本の教会教育に限定されていくことになる。

以上のことから、神の役割理論を、「操作的定義」によって構成概念として採用した。

6 神表象研究の最終的研究射程

本研究は神学論文ではなく、研究法としては実証的研究法を援用している教育学領域の論文である。テーマの立ち位置の特殊性から、「神の役割理論」を「操作的定義」によって構成概念として採用した。本研究は、神表象研究の最終段階に位置するものではない。最終的な研究射程は、「余剰意味」に当たる「神」を神学的に分析することを意識している研究である。神学的研究法を採用する場合には、「神の役割理論」が構成概念として妥当性があるかも検討しなければならない。

第三節 神表象理論の日本人キリスト者への適用の妥当性

1 日本の神観と欧米の神観

日本の神観と欧米の神観は同じではない。聖書とキリスト教の影響を受けた欧米の神観は絶対唯一神教であり、他方、日本の神観は、「八百万の神」と言われるように多神教である。聖書と異なる神観を持つ日本人の場合は、キリスト者になるときに、一神教という異

なる教えを受け入れるというプロセスを経る可能性が高い。一般的にキリスト者は、日本人であっても信仰の対象を「神」というひとことで表現している。しかし、キリスト教会でキリスト教教育を受けるプロセスを通して、唯一神でありながらさまざまな役割で登場する神に出会い、その神を取り込んでいるのではないかと推察される。

2 父という神概念と母性

日本的な神のイメージには母性の要素が含まれるのではないかという指摘は従来からあった。遠藤（2010）によれば、宗教は「父の宗教」と「母の宗教」に分けられ、新約聖書のイエスは「母の宗教」を説いたという。さらに日本人は「父の宗教」よりは「母の宗教」に心がひかれるとも述べている（pp.225～227）。日本人の心情には、「母の宗教」はしっくりくるという意味で、遠藤の指摘は正しい。

ルカの福音書 15 章に登場する父は、息子を無条件で受容する、慈しみに溢れた母性的な面を表現している。本研究は、アタッチメント理論を援用するため、母性は重要な概念になり得る。土居（1997a）は甘えの心理を提唱したが、甘えの心理的原型は母子関係における乳児の心理に存すると述べている（p.80）。かといって、聖書の中に母なる神という用語はないため、研究において「母」という用語を採用することは難しい。あえて「父」以外の用語を採用するのであれば、「親」と言い換えることができる可能性はある。研究のプロセスで意識しなければならない点であると考えられる。

3 質問紙作成時の工夫

聖書は言語コミュニケーションの一方法であり、ヘブル文化、ギリシャ文化の枠の中で記述されている歴史文書である。したがって、文化的色彩を帯びた神表象も当然その中に含まれていると考えなければならない。厳密に言えば、聖書が提示する時間・空間に拘束されない神を、時間・空間に制約された言語で表現しても、それを普遍的なものと言うことは不可能である。質問紙では、このことを考慮する必要があると考えられる。

例えば、「牧者」は、わが国も含めてキリスト者が神について好んで使う神表象であるが、聖書が書かれたヘブルの文化圏が遊牧民族であったことが背景にあって頻繁に言及されているものである。聖書を土台に置いたキリスト教教育を受けてきたキリスト者であればイメージすることができても、キリスト者ではない日本人はイメージしにくい。

さらに、「父」という役割は、聖書概念では神を肯定的にイメージするときに強調され

る役割である。ところが、父は権威という専制的なイメージと結びつくことも多く、必ずしも肯定的に受けとめられていない。また、父親不在ということが言われる現代では、父という用語自体、実体験としてイメージしにくいことばになっている可能性もある。

「啓示者」という用語は、日本語としてなじみがなく、教会でキリスト教教育を受けている者であってもイメージしにくいことが想定される。例えば、「教師」など、「啓示者」という概念を変えずに、他の用語を代用することも考慮しなければならない。

これらのことから、「父」、「啓示者」などの名称を用いるだけでは、質問紙の回答を得ることが難しくなる可能性がある。そのため、聖書の記述にどのような概念が含まれているのかを理解した上で、その内容を文章化した質問項目を作成する必要があると考えられる。

第四節 用語の範囲と定義

1 神表象と神概念の範囲

先行研究が示しているように、神表象研究の歴史では、神概念（concept of God）と神表象（image of God）を区別することは簡単ではなく、実際のところ両者は区別して使われていない。また、神の役割、すなわち神が聖書の中にどのような呼称で提示されているかということと、神表象、すなわち人間がそのイメージをどのように取り込んでいるかということも同じではない。Davis et al. (2012) は神表象研究の歴史を概観し、用語の混乱を指摘した上で、アタッチメント理論の立場から神表象と神概念の定義を試みている。本研究では、Lotufo, Jr., Z. (2012) が指摘しているとおり、神表象と神概念が相互に影響し合っていると理解し、神の八つの役割を構成概念として採用して研究を進める。

2 役割 (role) と表象 (image)

Coppedge, A.の研究では、聖書に提示されている八つの神のあり方がroleという用語で説明されているが、神表象理論の歴史においてroleという用語を用いた例は見られない。神表象を具体的にイメージして研究を行った例としてRoof and Roof (1984) の研究がある。この研究は、Judge、King、Lover、Master、Father、Redeemer、Friend、Healer、Mother、Liberator、Spouse、Creatorというイメージを採用している。内容は、神について考えたとき、それぞれのイメージについてどのように感じるかを尋ねるという簡易な質問法によるものだが、そこで採用されているイメージは「神の役割理論」に近いもので

ありながら、imageということばが当てられている。以上のことから、roleとimageは同じカテゴリーに含めて理解できる可能性があり、本研究も厳密な区別をせずに研究を進める。

3 「表象」と「イメージ」の訳語

Rizzuto, A. (1979) は、対象関係論のobject representationという概念を援用したことから、神のイメージを表す際にGod representationという用語を多用した (p.179)。Rizzuto, A. (1970) は、God conceptとGod representation/God imageが違うことを主張したが、神表象理論の歴史では、両者は区別されずに使われており、さらにRizzuto, A.自身も、God representationとGod imageを厳密に区別していない。また、Rizzuto, A.はimagoという用語を用いるが、imagoはimageやrepresentationとは異なる概念として、Freud, S.の宗教論を引用する文脈で使われる (p.30)。Lawrence, R. (1997) は、Rizzuto, A.の研究を受けて尺度を開発したにもかかわらず、God imageという表現を用いた (p.214)。神表象理論の研究史では、representationとimageは区別されずに使われている。

福本 (2009) は、Rizzuto, A.がFreud, S.について講演した記録を翻訳し、その中で「フロイトの神表象」という訳語を用いた。また「リットーの精神分析的信仰形成論—フロイト宗教論のもう一つの可能性—」を論じた葛西 (1994) も「神表象」という訳語を用いている。しかし、神表象研究で使われている用語の日本語訳は、現時点では定まっていない。

以上のことを踏まえて、本研究では用語を以下のように表記する。

- (1) God representation、God imageいずれも「神表象」という訳語を当てる。
- (2) God conceptには「神概念」という訳語を当てる。
- (3) imagoは、Freud, S.の文献の道籟・立木・福田・渡辺訳にしたがって、「イマーゴ」という訳語を当てる。
- (4) 神を肯定的にとらえているなど、具体的な表象ではない場合は、「神のイメージ」、「肯定的イメージ」などの表記で記述する。

なお実際の質問紙調査では、質問紙の標題で「神イメージ」という表記を用いている。「神表象」という用語は調査協力者にわかりにくく、「神をどのようにイメージしているか」という意味で「神イメージ」という用語を採用した (Appendix参照)。

4 自己の概念

本研究は、Rizzuto, A.が Freud 理論を批判することによって神表象理論を構築したこと

から精神分析理論がベースになっているが、Freud, S.は、人間の思考や行動の多くが無意識の過程によって引き起こされるということを基本的な前提として、人格をエス、自我、超自我の三つの構造から説明しており、「自己」という言い方はほとんどしていない。Erikson, E. H. (1959) は同じ精神分析理論に立つが、自己については Freud, S.と異なる見方をし、かなりの部分で「自己」と「アイデンティティ」は重なるとしている (p.158)。その上で、自我と自己について、「自我が自己を[自分自身を]知覚し制御するという問題において、「自我」[という言葉]主体 the subject に割り当て、「自己」[という言葉]客体 the object に割り当てることが妥当であると考えられる」(p.160、西平・中島訳 pp.173～174) と述べて、自我は中枢として自己に直面し、自己は統合されることを求められている。以上のことから、本研究では自己を、「統合されて行くことを目指しているありのままの自分についての概念」と定義する。

5 神の概念

(1) 二つの神論

保呂 (2005) によれば、神についての見方は大きく二つある。一つは、神は世界と別物ではなく、世界に内在しているという「汎神論」である。もう一つは、相対的存在を全く超越するものとして絶対者をとらえる「超越神論」である (pp.170～171)。宗教では超越と内在という概念が重要であり、キリスト教においても大切な対概念となった (木村、2005、p.166)。キリスト教における神は、天地を創造し、これを統治する「全能」の神、唯一神であり、人類の歴史に働きかけ、救済を実現する神である (平林・リアナ、2005、p.33)。木村 (2005) によれば、一神教の宗教意識が希薄な日本では、超越と内在という問題設定は意味を持ってこなかったし、現在においても理解することは難しいとしている。日本人の「神」は、超越と内在という対概念が重要な意味を持たない曖昧さを内包している。

(2) ユダヤ教の神とキリスト教の神の連続性

ここで、Freud, S.の神の概念とRizzuto, A.の神の概念について整理する。ユダヤ教は旧約聖書を經典とし、キリスト教は旧約聖書と新約聖書を經典としている。キリスト教では、旧約聖書に示されている神と新約聖書に示されている神は同一である。さらに、ユダヤ教もキリスト教も一神教であり (山我、p.13)、キリスト教は、ユダヤ教から唯一神の観念を引き継いでいる (山我、p.368)。汎神論的な神と絶対他者の神の二つのカテゴリーで考え

れば、ユダヤ人の神もキリスト教の神も同じカテゴリーに属していると考えることが可能であろう。また、ユダヤ人であったFreud, S.は、ユダヤ教的な神概念を持っていたと推察されるが、Rizzuto, A.も自分の理論をFreud, S.の延長線上に置いており、以上のことから、Freud, S.の神の概念と本研究で扱う神の概念との間には連続性があると考えられる。

(3) 共通した神論の可能性

神学では、人間は聖書という神の啓示を知る以前に、文化背景などさまざまな要素を越えて、神の「恵み」を共通的に受けているとされ、その概念を説明するために「先行的恵み」(prevenient grace) (Grider, 1994, p.351) や「共通恩恵」(common grace) (Dunning, 1988, p.296) という概念規定がされている。「先行的恵み」は、第二章・第一節・3・(4)で述べたとおり、Wesley, J.が用いた用語である。これらの概念から推察して、神表象理論の研究が行われてきた欧米のキリスト者と日本人キリスト者との間に共通点があることは推察される。本研究では、日本という汎神論的文化圏で、キリスト者が超越神論の神をどのように内在化させているかという問題を神表象という角度から検討する。

6 日本人キリスト者の定義

本研究は、日本人一般の宗教意識を研究対象とするものではなく、キリスト教会においてキリスト教教育を受けている現代の日本人キリスト者を領域として、神表象の内在化の様態を研究対象とするものである。その中でも、神表象の変化についての詳細な分析では、メソジスト系のキリスト者に範囲を限定したものである。

わが国においては、キリスト者という用語が幅をもって使われているため、キリスト者を定義することは簡単ではない。キリスト者になることについての宗教心理学の研究としては、日本人キリスト者がどのように宗教性を深めて行くかというモデルを構成した松島らの研究がある(松島・宮下、2008)。松島らはキリスト者になる経験について、「救いの体験とは、キリスト教において、自らの罪を悔い改め、イエス・キリストを救い主として信じ、自分の罪が赦されることをいう。本研究は、心理学的研究であるため、教会用語である救いの体験という用語は原則として使わずに……、『救いの体験』を『回心体験』と呼ぶことにする」と説明している。杉山(2011)によれば、これは主体的・能動的「回心」プロセスモデルということができる肯定的な体験である。「回心」が明確であるという観点から、狭義の枠組みとなっている。

信仰は本来、神との関わりの中で考えられるべきものであるが、洗礼を受けて教会のメンバーになることとキリスト者であることは、それほど明確に区別されているわけではない。また、「回心」経験や洗礼の経験がないにもかかわらず、自分がキリスト者であるという自己認識を持っているケースもある。さらには、わが国においてキリスト者の範囲を規定するときには、その歴史的変遷も考慮する必要がある。明治以降、キリスト教が日本に入ってきて以来、「個」の確立を目指して主体的に生きようとした20世紀のキリスト者があり、他方、精神的・心理的問題を抱えて教会を訪れ、心理的な治療を期待して信仰を持った現代のキリスト者では、キリスト者であることのとらえ方が同じでない可能性も否定できない。本研究は、既存のキリスト教会に所属している調査協力者に協力を求めているが、実際の調査協力者は20代から80代までと幅が広く、この点でもキリスト者を一つのカテゴリーでとらえることは困難であることが予測される。以上のことから、本研究では、キリスト者を「日本の諸教会に属し、自分がキリスト者であると認識している者」と定義する。歴史的変遷や現代の特徴からくる影響については今後の課題とする。

7 信仰の定義

神学的には、信仰は、「見えぬものを実在するものとして受け取ること」、「信頼する、あるいは、その対象が信頼に値すると『納得させられる』ということ」と定義できる概念であり、「第一義的な要素は信頼である」(ワイレー・カルバートソン、p.343)。土居(1997b)は信仰の説明として、「相手の言葉に聞き入り、相手の存在に自分が全く傾倒することが真の信頼であり信仰である」という表現を用いている(p.183)。本研究では信仰を、「信頼、すなわち対象が他者として意識され、その上でその他者に傾倒すること」と定義する。

8 「回心」の定義

Rizzuto, A. (1979) は「回心」を、「神表象と結び付いた初期の親の心象の中にある抑圧に対して解放を与えること」(p.51)と定義し、人生のサイクルで新しい局面に入るときに宗教的な意味で危機が訪れることを示唆した。松島ら(松島・宮下、2008)は、キリスト教において、自分の罪を悔い改め、イエス・キリストを救い主として信じ、自分の罪が赦される「救い」の体験を「回心体験」と定義している。アウグスティヌスの教育論を論じた神門(2013)は、アウグスティヌスの「回心」を、「手段として獲得するものから、恵みとして受けとるものへと、質的転換を遂げていると考えられる」と定義し(p.22)、神

表象の変化との関連で有意義な概念を提出している。徳田（2005）は、心理学的過程モデルの「回心」研究の歴史を概観し、「回心」のモデルを、伝統的な神学に基づいた「罪からの救い」を基盤とする「古典的モデル」と、コンプレックスや葛藤に着目し、1920年代から60年代にかけて研究された Freud, S.の精神分析学理論を軸とする「精神分析学的モデル」の二つのカテゴリーに分類している（pp.22～35）。「精神分析学的モデル」は、神学的前提から距離を取り、因果関係を軸に「回心」現象を説明しようとする試みである。現在、「古典的モデル」を継承しているのは、牧会ケアや牧会カウンセリングなどの神学的実践であり、初期の心理学的研究が主に青年期に着目していたのに対して、牧会カウンセリングでは成人期に着目するようになってきているとされる（p.30）。本研究は、手法においては実証的スタンスを取りつつ、神学的前提を視野に入れており、その意味で「古典的モデル」の枠組みの中に位置づけることができると考えられる。以上のことから、本研究では「回心」を、「神と神の恵みについての内的・質的な変化」と定義する。

9 キリスト教教育の定義

わが国の現状では、キリスト教教育という用語で意味する概念として、二つのカテゴリーが想定される。一つは、ミッション・スクールなどを含む、キリスト教の理念に基づく学校教育である。もう一つは、教会の教育である。深町（1999）によれば、日本のキリスト教会が、教会の活動として日曜学校を始めたのが1872年（明治5年）であり、今で言う日曜学校の形態があちこちに誕生したのが1877年（明治10年）頃からである。大正に入り、日曜学校という呼称は教会学校という呼称に変わり、時代の変遷によってさまざまな新しい取り組みがされているものの、今日に至るまで長い間教会の教育の働きを担ってきた。理念において学校のキリスト教教育と教会におけるキリスト教教育を厳密に区別することは難しいが、本研究の調査の主たるフィールドは教会であり、本研究ではキリスト教教育を、「教会におけるキリスト教教育」と定義する。

第五節 調査・研究の全体的方針

1 調査協力者と実施の時期

本研究は、以下の通り、質問紙調査、面接調査あわせて五つの調査を実施した。

(1) 調査A 質問紙調査 (2009)

調査Aでは、神表象を測定する尺度を作成する。キリスト者ではない回答者にも協力を求めることを考慮し、質問紙には「絶対他者（神）のイメージ」、「神（仏など）のイメージ」などの表現を用いた。調査は、大学生のキリスト者サークルとメソジスト系の三教会のメンバーを対象に、2009年12月に実施した。

(2) 調査B 質問紙調査 (2010)

調査Bでは、調査Aで作成した尺度を用いて、自尊感情、基本的信頼感、生き方と神表象との関連を検討する。日本のキリスト教界全体をバランスよく調査することを目ざし、カトリック、日本聖公会、メソジスト系を含むプロテスタントの各教派十教団(グループ)の教会と一神学校、一大学の、キリスト者とキリスト者ではない回答者を対象に、2010年4月～6月に実施した。

(3) 調査C 質問紙調査 (2013)

調査Cでは、カトリック、聖公会からプロテスタント諸派のキリスト者を対象に、Erikson, E. H.の理論を背景として調査するA版、アタッチメント理論を背景として調査するB版について、四教団(グループ)の教会と一神学校、その他友人に依頼した。実施時期は2013年1月～2月であった。

(4) 調査D 質問紙調査 (2014)

調査Dでは、プロテスタント系の教会のキリスト者を対象に、自立と甘えと神表象について尋ねる質問紙を依頼した。実施時期は2014年1月～2月であった。

(5) 調査E 半構造化面接 (2014)

調査Eでは、メソジスト系のキリスト者を中心に、2013年12月から2014年2月に、半構造化面接を行った。

2 分析方法

本研究は、それぞれ以下の分析方法を採用した。

(1) 量的研究（調査A～D）

調査AからCは、いずれも質問紙による量的研究とし、統計処理を行った。統計処理には、Microsoft Excel 2007（マイクロソフト社）、エクセル統計2008 for Windows（社会情報サービス）、Excel多変量解析 Ver. 5.0、Ver. 6.0（エスミ）を用いた。

(2) 質的研究（調査E）

調査Eは、半構造化面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行った。

3 調査・分析の方針

本研究では日本のキリスト者の神表象について実態調査と分析を行う。調査Aから調査Dでは量的研究を行い、キリスト者全般の傾向から一般的な原則を探り、調査Eでは質的研究を行い、個人の内界における神表象の実態とその変化に焦点を当てる。

量的研究を行うための準備段階として、神表象を測定する尺度の邦訳と、新規に日本語版の尺度を開発し、調査が可能な環境を整備する。これを第一研究とする。その上で、研究の最初の段階として、カトリックからプロテスタント諸派まで、日本のキリスト教界を幅広く対象とした実態調査と分析を行う。これを第二研究とする。第二研究においては、日本のキリスト教界を幅広く対象としたが、第三研究以降、調査Cから調査Eに研究を進めて行く段階で、プロテスタント諸派からメソジスト系のキリスト者に絞って行く形をとった。さらに、調査Eの半構造化面接は、全員メソジスト系のキリスト者を対象に実施した。

この点についてはいくつかのことが考慮された。第一に、いずれの研究も、研究者の関係から研究フィールドを確保できることが期待されたものの、調査協力者のフィールドがキリスト教会であるため、同じ教会に複数回アンケートの回答を依頼することは控えるべきであるなど、さまざまな制約と倫理的配慮が求められた。この点は本研究の限界になることが想定された。第二に、研究を進めて行くプロセスで、カトリック・聖公会・プロテスタント諸派全体を含めた調査結果よりは、プロテスタントやメソジスト系の研究結果が、現象を数的に抽出しやすいという面が認められた。フィールドを確保する限界もあったが、調査Dからはプロテスタント系のキリスト者に絞った。第三に、調査Eの半構造化面接は、本研究の研究射程がWesley理論に基づく教会教育に限定されることから、全員メソジスト系のキリスト者を対象に実施した。

第三章 量的研究：神表象の実態調査と内容の検討

第三章・第一節および第二節は本論文のために実施した七つの研究に先行して行われた研究であり（河村, 2010）、修士課程の研究のために提出されたものであるが、論文構成のために重要と思われる主要な部分を第一研究・第二研究として記載した。

第一節 第一研究：神表象を測定する尺度の作成（調査A・B）

1 問題と目的

神表象研究はRizzuto, A.を草分け的存在として始まり、欧米で発展したが、わが国においては未開拓の領域となっている。また神表象を測定する尺度も開発されていない。本研究では、わが国で神表象を実証的に研究するために、神表象を測定できる尺度が必要となることから、第二章・第二節・2に提示された八つの神の役割（Roles of God）の概念を用いて神表象について「操作的定義」を行い、神表象を心理学的に測定する尺度を開発する。さらに、Lawrence, R.（1997）が開発したGod Image Scale・36項目版を邦訳する。

2 方法（調査A・予備調査）

(1) 神表象尺度・簡易版の作成

八つの神の役割（Creator/Physician、King、Revealer、Priest、Judge、Father、Redeemer、Shepherd）について、それぞれどのようなとらえ方をしているかを回答してもらう十項目の質問紙を作成した。そのうち、「Creator/Physician」と「Revealer」は、わかりやすさを考慮し、「神」・「医者」、「教師」・「友だち」というようにそれぞれ二つにわけ、合計十項目とした。

(2) 神表象尺度の作成

八つの神の役割をもとに、それぞれのイメージが持つ概念から、一つのイメージについて四つの質問を作成し、それに神表象を測定する尺度・簡易版で構成した項目を加えて合計42項目の質問紙とした。

(3) 調査の実施

質問紙は、A4判用紙四ページで、質問紙のタイトルは「神イメージについてのアンケート

ト」とした。性別と年代を聞く欄も設けた。三教会と大学生のキリスト者サークルに、合計150部の質問紙を依頼した。実施時期は2009年12月であった。95名（男性35名、女性55名、性別未記入5名）の有効回答を得た。回答率は63%であった。

(4) データの確定

欠損値のある回答を除外することによるサンプル数の減少を考慮し、「わからない」と回答したものについては中間値を、欠損値については各項目の平均値を投入した。

(5) 神表象尺度の分析

因子分析を行った。固有値が1.0以上のスクリープロットを基準とし、解釈の可能性を考慮しつつ因子分析を行い、合計22項目、三因子を抽出した。その結果を表4に示す。

因子分析により決定した質問項目について、各項目の平均と標準偏差を算出した。各項目の平均は 4.53～2.16、標準偏差は1.45～0.69であった。

表 4 神表象尺度 因子分析結果

質問項目		F1	F2	F3	共通性
第一因子：頼れる存在 (α=.93)					
41 神はわたしにとって知恵のある王のような存在で、頼りになる。	王	.80	.11	.10	.77
16 神はわたしの心を聖くしてくれる方である。	祭司	.79	-.04	-.16	.63
32 祭司(憐れみふかい、罪・失敗を赦す、心を聖くしてくれる)	祭司	.79	.13	.03	.76
9 教師(真理を教えてくれる)	教師	.76	.00	-.08	.59
6 救出者(力強い存在)	救出者	.76	-.03	-.02	.55
38 自分がかつて迷っていたが、今は帰るべきふるさにいる感じがする。	牧者	.64	.32	.06	.75
20 神は善だから、わたしは神を信頼すれば安心だ。	牧者	.61	.26	-.05	.67
26 創造者(宇宙の源、わたしを創造した存在)	創造	.60	.11	.16	.46
第2因子：親しい存在 (α=.93)					
25 自分にとって神は愛に満ちた父のような存在である。	父	-.12	.89	.13	.62
1 神は近くにいる親しい友だちみたいな存在である。	友だち	-.02	.79	-.03	.62
19 自分は神から、従業員ではなく子どものように扱われている。	父	.15	.75	.03	.70
15 自分は神との間にはギクシャク感がなく、和解していると思う。	友だち	.12	.74	-.05	.71
30 友だち(良い相談相手であり、正しいことを教えてくれる)	友だち	.11	.68	.01	.56
29 神にとってわたしは子どものような存在なので、一日が終わる時も安心だ。	父	.24	.65	.00	.67
36 自分にとって神は羊を大切に守る羊飼(牧者)のような存在である。	牧者	.26	.60	-.07	.66
28 自分は功績を上げなくてもありのまま神に受け入れてもらえると実感している。	父	.17	.59	-.07	.54
第3因子：厳しい存在 (α=.77)					
22 自分にとって神は、細かいルールで監視する厳しい裁判官のような存在である。	裁判官	.06	-.16	.67	.53
7 神は義なので、一日が終わる時、不安になる。	裁判官	-.31	.23	.65	.42
27 神はわたしにとって支配的な権力者である。	王	.14	.10	.62	.38
42 神はわたしのミスを簡単には赦さない存在だと思う。	裁判官	-.03	-.20	.60	.48
10 神はあまりに偉すぎて、とても近づきにくい存在だ。	王	-.02	-.41	.52	.59
37 神は絶対権限をもって、わたしの全部を要求してくる方である。	王	.43	.01	.52	.42
因子間相関		F1	F2	F3	
F1			.63	-.08	
F2				-.31	
主因子法(プロマックス回転)		n=95			

3 尺度名の検討

本研究では、質問紙のタイトルを「神イメージについてのアンケート」とした。またその後の質問紙のタイトルでも、「神イメージ」という用語を用いた。第二章・第四節・3でも述べたとおり、研究が進む段階で、「神イメージ」、「神表象」という用語の内容の検討を行い、**image of God** に「神表象」という訳語を当てることにしたが、すでに実施済みの質問紙のタイトルでは「神表象」という用語を用いていない。「神表象」という用語は、調査協力者にその意味を理解してもらうことが難しいことは十分想定され、「神イメージ」という用語を俗称として用いることが妥当ではないかと判断した。

尺度名については、研究の初期の段階で「神イメージ尺度」とした。しかし、改めて内容を検討した結果、精神分析用語の専門性を考慮し、「役割イメージ」を「表象」に変更した。本研究では尺度名を「神表象尺度」(**God Image Scale**、以下、日本語版であることから **GISJ** と略記)で統一し、その他、十の神の役割を質問項目にした簡易なものを「**GISJ・簡易版**」、十の神の役割に順位をつけるように教示したものを「**GISJ・順位法**」とする。本稿の「神表象尺度」はすでに作成・発表した「神役割イメージ尺度」と同内容である。

4 方法（調査B・本調査）

(1) **GISJ・簡易版**の調整

簡易版については、上位五つを選んでもらう回答方法も付加し、**GISJ・順位法**とした。

神学者に各表象の呼称の検討をお願いした結果、日本的な要素を考慮し、「教師」は「人生の師」に変更し、「慈悲」、「はぐくむ」、「君主」という表現を採用した。

(2) **GISJ**の調整

各項目について、日本的な要素を考慮し、「教師」は「人生の師」とした。また神の役割についての名詞の形は、文章表現に直した。

(3) **God Image Scale・邦訳版**の作成

「**God Image Inventory**」(72項目・6因子)の簡易版である「**God Image Scale**」(36項目・三因子)を邦訳した。**Presence**、**Acceptance**、**Challenge**の三因子は、質問項目の内容から、それぞれ「信頼できる存在」、「受け入れてくれる存在」、「求めてくる存在」と命名した。

(4) その他の使用した尺度

1) 自尊感情尺度（山本・松井・山成、1982）

Rosenberg (1965) のSelf Esteem Scaleの十項目を山本ら (1982) が邦訳し、桜井 (2000) によって日本語版の妥当性が確認されている。「とてもよい (very good)」と感じる「自信」や「優越感」を意味する自尊感情ではなく、「これでよい (good enough)」と感じる「自己受容」を測定する尺度である (桜井、2000、p.65)。

2) 基本的信頼感尺度（谷、1996）

Erikson, E. H.は、1902年にドイツのFrankfurtに生まれた (鑑、p.24)。Freud, A.を通して精神分析理論を学び、1932年には正式な精神分析家として国際精神分析学協会に登録されている (p.35)。Erikson, E. H.はアメリカに渡り、児童臨床の研究を進めて行くが、それはオーストリアのWienで学んだものとは異なり、児童臨床の蓄積から彼独自の理論を構築した。Erikson, E. H. (1959) は、社会的な現実の中に位置づけられる自己の感覚を「自我アイデンティティ (ego identity)」と呼び、アイデンティティという重要な概念を生み出した。またErikson, E. H. (1959) は、健康な成長のために八段階の心理社会的な発達段階を経るとする漸成発達理論を提唱した (pp.67~105、p.129)。その中でも、健康なパーソナリティーを形成するために欠かせないのが、第二段階の「基本的信頼感 (basic trust)」である (p.57)。それは生後一年間に形成され、他者を信頼し、自己を信頼に値するものとして理解することができる態度のことである。基本的信頼感はパーソナリティーの中に溶け込んでしまい、特別に意識されることはない。

基本的信頼感尺度は、谷 (1996) によってErikson, E. H.の漸成発達理論に基づいて開発された、基本的信頼感を測定する尺度であり、「基本的信頼感」と「対人的信頼感」の下位尺度で構成されている。クロンバック α 係数から信頼性が、Beck抑うつ尺度・特性不安尺度との相関から妥当性が確認されている (谷、1996)。「基本的信頼感」は、生後1か年の経験から獲得される自己自身と世界に対する信頼感を測定する (谷、1998、p.35、37)。「対人的信頼感」はErikson, E. H.の概念とは異なり、主にラズムッセンの尺度を参考に作成され、現実の人間関係に基づく一般的な他者に対する信頼感を測定する尺度である (谷、1998、p.42)。

3) 生き方尺度（板津、1992）

生き方を個人の自律・主体性の確立のみに限定せず、社会・他者との関わりの中で生きて行く社会的存在としての自覚という観点から板津 (1992) によって開発された。「能

動的実践的態度」、「自己の創造・開発」、「自他共存」、「こだわりのなさ・執着心のなさ」、「他者尊重」の五つの下位尺度で構成されている。28項目全体と性別について信頼性係数が算出され、高い値が得られている（板津、1992、p.90）。また合計点と態度分析カテゴリーの関係から構成概念妥当性が確認されている（板津、1992、pp.91～92）。

「能動的実践的態度」は、今という時間を大切にしつつ、目標達成への努力を惜しまない積極性を測定する（板津、1992、p.87）。「自己の創造・開発」は、自己の成長・可能性の開発への積極的な姿勢と、それを支える自己への柔軟性を測定する（板津、1992、p.87）。「自他共存」は、「個」としての自己の行為は責任をもってやり遂げる一方で、人間一人の力の限界を自覚しているために、他者を尊重し、周囲と調和的・協力的でありたいと願う心を測定する（板津、1992、p.87）。「こだわりのなさ・執着心のなさ」は、自己の失敗に対していつまでもくよくよこだわらない、自己の内面的な安定感に支えられたこだわりのなさを測定する（板津、1992、p.89）。「他者尊重」は、自己中心的不是な、他者を尊重するあまりに自己を抑えるという自己抑制的な面も含む姿勢を測定する（板津、1992、p.89）。

(5) 調査の実施

質問紙は、A4判用紙4ページで、性別、年代、宗派、職業、家庭環境、信仰年限（キリスト者の場合）についてたずね、続いて「自尊感情尺度」（アンケート1）、「基本的信頼感尺度」（アンケート2）、「生き方尺度」（アンケート3）、「GISJ・簡易版」（アンケート4）、「GISJ・順位法」（アンケート5）、「GISJ」（アンケート6）、そして「God Image Scale・邦訳版」（アンケート7）の順序で構成された。質問紙のタイトルは、「神（仏など）のイメージと自尊感情・生き方についてのアンケート」とした。

調査は、十教団（グループ）の教会と一神学校、一大学に、合計1,350部余（正確な数は不明）の質問紙を依頼。実施時期は2010年4月～6月であった。658の質問紙が回収された。回収率は48.7%（依頼した部数を1351部として計算）であった。

(6) データの確認

未記入などのデータを確認し、444名の回答を有効回答として採用した。少数の欠損値のある回答用紙については平均値を算出して投入した。さらに逆転項目を変換した。続いて、質問項目の平均値と標準偏差を算出し、各尺度の得点の基本統計量を求めた。

5 GISJの因子分析による検討

(1) 因子内容の検討

本調査（調査B）のサンプルを用いて因子分析を行い、予備調査（調査A）の因子分析結果と比較したところ、違いが見られた。本調査における因子分析結果を表5に示す。

表 5 第二研究 GISJ 三因子の因子分析結果

質問項目	イメージ	F1	F2	F3	共通性
第1因子：親しい存在 ($\alpha = .90$)					
5 神は親しい友だち、良い相談相手であり、正しいことを教えてくれる	友だち	.93	-.24	.05	.68
14 神は近くにいる親しい友だちみたいな存在である	友だち	.82	-.25	.04	.52
20 自分は神との間にはギクシャク感がなく、和解していると思う	友だち	.74	-.01	-.10	.56
19 神にとってわたしは子どものような存在なので、一日が終わる時も安心だ	父	.69	.09	-.09	.56
2 自分は功績を上げなくてもありのまま神に受け入れてもらえると実感している	父	.66	.13	-.13	.58
6 自分にとって神は愛に満ちた父のような存在である	父	.66	.16	-.05	.59
7 神はわたしにとって知恵のある王(君主)のような存在で、頼りになる	王	.66	.18	.18	.62
22 神は善だから、わたしは神を信頼すれば安心だ	牧者	.66	.21	-.03	.63
8 自分にとって神は羊を大切に守る羊飼いのような存在である	牧者	.65	.21	-.04	.62
10 神は人生の師であり、真理を教えてくれる方である	教師	.64	.17	.04	.55
11 自分は神から、従業員ではなく子どものように扱われている	父	.61	.10	.00	.46
4 自分がかつて迷っていたが、今は帰るべきふるさとにいる感じがする	牧者	.60	.10	.02	.44
13 神は憐れみふかく、罪・失敗を赦し、心を聖くしてくれる方である	祭司	.57	.29	-.06	.60
1 神はわたしの心を聖くしてくれる方である	祭司	.55	.26	.05	.52
第2因子：頼れる存在					
16 神は創造者、宇宙の源であり、わたしを創造した方である	創造	.22	.60	-.03	.55
17 神は救い出す方、力強い存在である	救出者	.36	.58	.01	.68
第3因子：厳しい存在 ($\alpha = .68$)					
21 自分にとって神は、細かいルールで監視する厳しい裁判官のような存在である	裁判官	-.08	-.05	.72	.54
12 神は義なので、一日が終わる時、不安になる	裁判官	.10	-.18	.60	.39
18 神はわたしのミスを簡単には赦さない存在だと思う	裁判官	-.14	.00	.59	.37
15 神はわたしにとって支配的な権力者である	王	.15	.19	.57	.39
3 神はあまりに偉すぎて、とても近づきにくい存在だ	王	-.21	.01	.49	.29
9 神は絶対権限をもって、わたしの全部を要求してくる方である	王	.31	.15	.49	.39
因子間相関		F1	F2	F3	
		F1	.54	-.04	
		F2		-.07	
主因子法(プロマックス回転)					n=444

予備調査の因子分析結果では（表4 神表象尺度 因子分析結果、参照）、「頼れる存在」の質問項目数が8、「親しい存在」の質問項目数が8、「厳しい存在」の質問項目数が6であったが、本調査の因子分析結果では、質問項目数が2、14、6となり、「頼れる存在」の質問項目が「親しい存在」に移動する結果となった。「厳しい存在」は変動がなかった。

(2) 因子数の決定

次に、本調査のデータを用いて二因子による因子分析を行った。その結果を表6（次頁）に示す。

「親しい存在」の質問項目数が16、「厳しい存在」の質問項目数が6となり、この時点で質問項目数を調整せずに、二因子構造としても解釈できることが確認された。この場合も

「厳しい存在」の項目数は6で、変動がなかった。質問項目数を再調整せずに因子分析の結果を得ることが可能であるため、二因子による因子分析の結果を採用して、第二研究の分析を行うことにした。なお、確認のために、キリスト者であると回答した回答者のみを抽出して因子分析を行ったところ、表6と同様の二因子構造であることが確認された。

表 6 調査 B GISJ 二因子の因子分析結果

質問項目	イメージ	F1	F2	共通性
第1因子：親しい存在 ($\alpha = .95$)				
22 神は善だから、わたしは神を信頼すれば安心だ	牧者	.79	-.03	.63
8 自分にとって神は羊を大切に守る羊飼いのような存在である	牧者	.79	-.04	.63
7 神はわたしにとって知恵のある王(君主)のような存在で、頼りになる	王	.77	.18	.62
13 神は憐れみふかく、罪・失敗を赦し、心を聖くしてくれる方である	祭司	.76	-.06	.59
6 自分にとって神は愛に満ちた父のような存在である	父	.76	-.05	.59
10 神は人生の師であり、真理を教えてくれる方である	教師	.75	.04	.56
2 自分は功績を上げなくてもありのまま神に受け入れてもらえると実感している	父	.75	-.13	.58
5 神は親しい友だち、良い相談相手であり、正しいことを教えてくれる	友だち	.74	.07	.54
19 神にとってわたしは子どものような存在なので、一日が終わる時も安心だ	父	.74	-.09	.56
17 神は救い出す方、力強い存在である	救出者	.74	-.02	.55
20 自分は神との間にはギクシャク感がなく、和解していると思う	友だち	.72	-.09	.53
1 神はわたしの心を聖くしてくれる方である	祭司	.72	.04	.51
11 自分は神から、従業員ではなく子どものように扱われている	父	.68	.00	.46
4 自分はかつて迷っていたが、今は帰るべきふるさとにいる感じがする	牧者	.66	.03	.44
14 神は近くにいる親しい友だちみたいな存在である	友だち	.63	.06	.39
16 神は創造者、宇宙の源であり、わたしを創造した方である	創造	.62	-.05	.39
第2因子：厳しい存在 ($\alpha = .72$)				
21 自分にとって神は、細かいルールで監視する厳しい裁判官のような存在である	裁判官	-.10	.72	.54
12 神は義なので、一日が終わる時、不安になる	裁判官	-.02	.60	.37
18 神はわたしのミスを手軽には赦さない存在だと思う	裁判官	-.12	.59	.37
15 神はわたしにとって支配的な権力者である	王	.28	.56	.38
3 神はあまりに偉すぎて、とても近づきにくい存在だ	王	-.19	.49	.29
9 神は絶対権限をもって、わたしの全部を要求してくる方である	王	.41	.49	.39
因子間相関		F1	F2	
		F2		
主因子法(プロマックス回転)				n=444

6 まとめと課題

本研究では、八つの神の役割についての概念を構成概念として採用し、因子分析によって22項目二因子からなるGISJを作成した。また内容的妥当性の確認のために、Lawrence, R.が開発した三因子版のGod Image Scale・36項目版を邦訳した。

本研究で作成したGISJは、尺度作成の第一歩という意味では意義があると考えられるが、尺度構成に検討すべき点も散見される。結果を踏まえて、以下の点について考察した。

(1) サンプルングの限界

第一に、予備調査と本調査のサンプルングの問題である。尺度作成のプロセスにおいて、質問項目の確認のために予備調査を実施し、その上で本調査を実施したが、キリスト教会

やキリスト者が主要な対象になるため、公平なサンプリングはほぼ不可能に近い。その結果、予備調査の因子構造（表4）と本調査の因子構造（表5）がずれた可能性がある。

(2) 聖書の記述を質問項目にする限界

第二に、キリスト者の神表象を測定することを目的としていた点である。一般の尺度開発であれば、自由記述やインタビューによって収集したデータをもとに質問項目を作成し、その上で予備調査に臨むのが通常であるが、キリスト者が聖書の中に記述されている神のイメージを取り込んでいることが想定されるため、聖書の記述から「操作的定義」を行った。さらに因子分析を重ね、質問項目の重複を防ぐことができる可能性はあるが、現時点ではこれが限界であり、標準化のためには今後さらに精緻化する必要がある。

(3) 聖書の記述とキリスト者が取り込んでいるイメージの差異

第三に、聖書の記述とキリスト者の実際の受け止めの差異である。八つの神の役割を指標にして質問項目の作成・検討を行ったことから、因子分析を行って理想的な因子が抽出できれば八因子構造の尺度になるはずだが、実際にはそうはならなかった。その理由としては、キリスト者が聖書の記述をバランス良く取り込んでいないことが示唆されていると考えられる。

(4) 父性性の検討

第四に、父性性の問題である。予備調査の段階では、聖書の記述をバランス良く表現することを心がけ、父性性の問題は意識していなかったが、因子分析後の質問項目には、否定的・律法的父性や父性の歪みが見られる。予備調査と本調査の因子分析は、表5に見られるように質問項目が流動化したが、第二因子「厳しい存在」の質問項目、3、9、12、15、18、21の六つは、因子分析の条件を変えても変動がなかった。このことから、第二因子に表現されている否定的・律法的神イメージがキリスト者一般に幅広く内在化されていると推察できると思われる。おそらくこのイメージは、キリスト教教育や心理臨床において、さまざまな不適応が見られる場合に着目しなければならない要素であると推察される。

しかしながら父性性は必ずしも否定的・律法的父性ばかりではない。聖書に記述されている「父」のイメージは、否定的父性性というよりは理想的な父性性に近いものであると考えられる。そもそも父性性は、もし肯定的・生産的に作用すれば、「支柱性」としての機

能を果たし、個人の心的発達、自我の成長を支え導くことができるものである(松本、p.62)。創世記の中で神がアブラハムにウルを出るように促すイメージ、モーセを通してエジプトを脱出するように促すイメージはそれに通じるものがある。ところが、聖書の「父」のイメージには、人間の父性性の不完全さが要因となって、皮肉なことに人間の実体験に含まれにくくなってしまっている、宗教心理学では「母なる神」の面を表している受容的な面も含まれていると推察される。ルカの福音書15章の父親のイメージ、裏切る者をそのまま受容するイエスのイメージはそれに通じるものであろう。

質問項目の内容を検討してみると、父のイメージに受容性が含まれていることは、歪んだ父性を肯定的な方向に引き戻すほど十分に表現されている。ところが、それが母性性への焦点付けとなって、第二因子「厳しい存在」で表現されている概念に対する対概念として提示された可能性はある。肯定的な意味での父性性は質問項目に載らなかったが、そのことは本研究の限界である。表4の予備調査における因子分析結果では、第一因子「頼れる存在」が肯定的な父性性に近いものであるとすれば、この因子をどのように抽出できるかが今後の検討課題になるだろうと思われる。

次の研究では、本研究で作成したGISJおよびGod Image Scale・邦訳版を用いて、日本人キリスト者を対象に、基本的信頼感、自尊感情、生き方と神表象との関連を検討する。

第二節 第二研究：基本的信頼感、自尊感情、生き方と神表象の関連（調査B）

1 問題と目的

本研究は、第一研究で作成したGISJおよびGod Image Scale・邦訳版を用いて、日本人キリスト者を対象に、自尊感情、基本的信頼感、生き方、神表象に関する分析を行う。アンケート調査による調査・分析を行い、キリスト者が神を厳しい存在として取り込んでいるか、親しい存在として取り込んでいるか、続いて「創造者」、「父」、「裁判官」など、どのような表象で取り込んでいるかを検討する。さらに、自尊感情、基本的信頼感、対人的信頼感、生き方と神表象の取り込み方との関連を検討する。

2 方法

第二研究では、第一研究の本調査（調査B）で収集したデータを分析した。

3 各下位尺度得点間の相関分析

調査Bのアンケート5を除くアンケート1～7について、キリスト者であると回答した回答者について各下位尺度得点の相関を求めた。その結果を表7に示す。

表 7 各下位尺度得点間の相関

			1	2		3				4	6	
			自尊感情尺度	基本的信頼感尺度		生き方尺度				GISJ簡易版	GISJ	
			自尊感情	基本的信頼	対人的信頼	能動実践態度	自己創造開発	自他共存	こだわりなし	他者尊重	親しい存在	厳しい存在
4	GISJ・簡易版	4の得点の平均	.06	.05	.11 **	.17 **	.21 **	.18 **	.13 *	.19 **		
6	GISJ	親しい存在	.09	.11 **	.09	.29 **	.30 **	.25 **	.24 **	.21 **	.64 **	
		厳しい存在	-.22 **	-.29 **	-.18 **	.03	.04	-.01	-.03	-.12 *	.13 *	.08
7	God Image Scale・翻訳版	信頼できる存在	.29 **	.33 **	.16 **	.33 **	.35 **	.28 **	.31 **	.23 **	.47 **	.71 **
		受け入れてくれる存在	.39 **	.44 **	.18 **	.24 **	.29 **	.26 **	.25 **	.21 **	.36 **	.58 **
		求めてくる存在	.12 *	.06	.10 *	.18 **	.25 **	.23 **	.11 *	.11 *	.28 **	.35 **
											n=386	

** $p < .01$, * $p < .05$

その結果、以下のことが示唆された。

自尊感情の低い人は否定的な厳しい神表象を ($r = -.22$) 持つ傾向がある (結果2-1)。

基本的信頼感の高い人は肯定的な信頼できる神表象を ($r = .33$, $r = .44$)、基本的信頼感の低い人は否定的な厳しい神表象を ($r = -.29$) 持つ傾向がある (結果2-2)。

対人的信頼感の高い人は肯定的な神表象を ($r = .16$, $r = .18$)、対人的信頼感の低い人は否定的な神表象を ($r = -.18$) 持つ傾向がある (結果2-3)。

能動実践態度の高い人は肯定的な神表象を ($r = .29$, $r = .33$, $r = .24$) 持つ傾向がある。能動実践態度と厳しい神表象の間には関連が見られなかった (結果2-4)。

自己に向き合い、自己の可能性を探る姿勢の高い人は肯定的な神表象を ($r = .30$, $r = .35$, $r = .29$) 持つ傾向がある (結果2-5)。

自他共存の傾向がある人は肯定的な神表象を ($r = .25$, $r = .28$, $r = .26$) 持つ傾向がある (結果2-6)。

こだわりや執着心のない人は肯定的な神表象を ($r = .24$, $r = .31$, $r = .25$) 持つ傾向がある (結果2-7)。

他者尊重の高い人は肯定的な神表象を ($r = .21$, $r = .23$, $r = .21$)、低い人は否定的な神表象を ($r = -.12$) 持つ傾向がある (結果2-8)。

親しい神のイメージは、自尊感情、基本的信頼感との間にほとんど相関が見られなかったにもかかわらず、生き方尺度の各下位尺度についてはいずれも弱い正の相関が見られた ($r = .29$, $r = .30$, $r = .25$, $r = .24$, $r = .21$)。他方、厳しい神のイメージは、自尊感情、基本

的信頼感との間に弱い正の相関が見られたにもかかわらず ($r=-.22$ 、 $r=-.29$)、生き方尺度の下位尺度との間には相関は見られなかった。

神を親しい存在としてイメージしていても、それがすぐに自己肯定感につながらず、それでありながら、外面的な生き方を肯定的に保つことができることが示唆されている（結果2-9）。また、神を厳しい存在としてイメージしている場合は、自尊感情や基本的信頼感などの内面性が低下してしまうにもかかわらず、それでありながら、外面的な生き方にはそれほど否定的な影響がないことが示唆されている。内面的には基本的信頼感や自尊感情が損なわれていても、その神のイメージの厳しさが対人的・社会的存在としての自覚・行動にすぐに表現されるわけではない可能性がある（結果2-10）。

十の神表象全般の得点が高く、神表象全体に肯定的なイメージを持てる人は、他者との関わりの中で生きて行く姿勢が積極的になる傾向がある（結果2-11）。

4 十の神表象と他の尺度との相関

GISJ・簡易版（アンケート4）について、十項目全体の平均値および各質問項目と、各下位尺度の得点との相関を算出した。結果を表8に示す。

表 8 GISJ・簡易版と他の尺度との相関

アンケート番号	1	2	3						6		7		
尺度名	自尊感情 尺度	基本的 信頼感 尺度	生き方尺度						GISJ		God Image Scale 邦訳版		
下位尺度	自尊感情	基本的信頼	対人的信頼	能動実践態度	自己創造開発	自己共存	こだわりなし	他者尊重	親しい存在	厳しい存在	信頼できる存在	受け入れられる存在	求めている存在
王	-.06	-.07	-.07	.01	.01	.00	-.04	.07	.41 **	.16 **	.29 **	.17 **	.27 **
祭司	.09	.11 *	.17 **	.11 *	.15 **	.15 **	.11 *	.15 **	.36 **	-.04	.27 **	.27 **	.16 **
師	.07	.04	.04	.11 *	.16 **	.11 *	.06	.15 **	.44 **	.13 *	.30 **	.19 **	.23 **
医者	.09	.07	.15 **	.12 *	.15 **	.08	.07	.13 **	.42 **	.05	.32 **	.27 **	.12 *
救出	.04	.03	.05	.19 **	.18 **	.16 **	.10	.14 **	.46 **	.17 **	.34 **	.27 **	.25 **
牧者	.06	.07	.09	.24 **	.24 **	.22 **	.16 **	.13 *	.48 **	.01	.41 **	.27 **	.23 **
父	.06	.10	.13 *	.17 **	.19 **	.24 **	.16 **	.19 **	.50 **	.02	.43 **	.34 **	.18 **
友	.01	-.03	.08	.10 *	.13 *	.11 *	.10 *	.10 *	.54 **	.09	.38 **	.29 **	.14 **
裁判	.01	.02	.04	.09 *	.12 *	.13 *	.11 *	.10	.41 **	.25 **	.23 **	.16 **	.21 **
創造	.07	.09	.11 *	.16 **	.19 **	.15 **	.14 **	.22 **	.50 **	-.01	.43 **	.33 **	.20 **
GISJ簡易版 得点平均	.06	.05	.11 *	.17 **	.21 **	.18 **	.13 *	.19 **	.64 **	.13 *	.47 **	.36 **	.28 **

** $p < .01$, * $p < .05$

n=368

その結果、以下のことが示唆された。

十の神表象全体の得点が高く、神のイメージ全体を肯定的にとらえている人は、生き方が積極的になる傾向がある（結果2-12）。

神について「父」、「牧者」、「創造者」の表象を内在化させている人は、社会的関係のなかで生きる姿勢が積極的になる傾向がある（結果2-13）。

親しい神のイメージを持っている人は、十の神表象全般についていずれも正の相関が見られ（ $r = .41$ 、 $r = .36$ 、 $r = .44$ 、 $r = .42$ 、 $r = .46$ 、 $r = .48$ 、 $r = .50$ 、 $r = .54$ 、 $r = .41$ 、 $r = .50$ ）、十の神表象に対して肯定的なイメージを描いていることが示された（結果2-14）。

厳しい神のイメージを持っている人は、「王」、「救出者」、「裁判官」について極めて弱い相関が見られた（ $r = .16$ 、 $r = .17$ 、 $r = .25$ ）。神を「王」、「救出者」、「裁判官」としてとらえる傾向があることを示唆された（結果2-15）。

5 属性別の検討

(1) 自尊感情、基本的信頼感、生き方の属性別分析

次に、年齢、性別、宗派別、職業別、成人するまでの環境別、キリスト者になってからの年数別にそれぞれの傾向を分析した。最初に各尺度について、属性別に平均値と標準偏差を算出した。続いて、この中で特に、年齢、成人するまでの宗教的な環境、キリスト者になってからの年数に着目し、自尊感情、基本的信頼感、生き方と関連があるかを検討するために、それぞれの尺度について分散分析を行った。その結果を表9に示す。

表 9 年齢、環境、年数の分散分析結果

n	年齢 368			環境 368		年数 342	
	F値(7, 360)	多重比較		F値(9, 358)	多重比較	F値(4, 337)	多重比較
自尊感情	4.70 **	3<4, 3<5, 3<6 3<7		0.84		3.91 **	4<7
基本的信頼	4.78 **	2<5, 2<6 3<5, 3<6, 3<7		1.37		5.75 **	4<7, 4<8, 5<7 5<8, 6<7, 6<8
対人的信頼	1.89			1.84		1.42	
能動実践態度	2.08			1.33		4.40 **	5<8, 6<8
自己創造開発	1.22			0.82		3.96 **	5<8, 6<8
自他共存	1.14			1.84		3.98 **	5<8, 6<8
こだわりなし	4.42 **	2<5, 3<5, 3<6 3<7		0.72		6.80 **	4<7, 4<8, 5<7 5<8, 6<8
他者尊重	2.03			1.29		1.84	

** $p < .01$, * $p < .05$

その結果、以下のことが示された。

年齢については、「自尊感情」と「基本的信頼感」、「こだわりのなさ・執着心のなさ」が有意であり、50代～70代がいずれも高かった。自尊感情や基本的信頼感という内面性、対人的なこだわりのなさは、年齢は50代以降に徐々に高くなって行く傾向がある（結果2-16）。

年数については、「対人的信頼」と「他者尊重」を除くすべての尺度で有意であり、31

～50年、51年以上が高かった。自尊感情や基本的信頼感の内面性、社会と関わりを持つ生き方の積極性は、キリスト者になってから30年以上経過するときに徐々に高くなって行く傾向がある（結果2-17）。なお、環境については有意でなかった。

(2) 神表象の属性別分析

次に、GISJ（アンケート6）について、属性別に平均値を比較するために、性別を除く各属性については一要因分散分析を行った。また、その結果を表10に示す。なお、質問紙中の選択肢では、回答者のわかりやすさを考慮して「クリスチャン」という用語を用いたが、「キリスト者」と同意である。

表 10 GISJ の属性別平均値の比較・分散分析結果

			親しい存在		F値 (df)	多重 比較	厳しい存在		F値 (df)	多重 比較
n		n	平均 値	標準 偏差			平均 値	標準 偏差		
年齢 368	1 10代以下	10	3.02	(0.44)	2.05 * (7, 360)	1<2, 6<2 6<4 Fisherの 最小有意差法	1.69	(0.46)	1.78 (7, 360)	
	2 20代	36	3.43	(0.40)			1.82	(0.51)		
	3 30代	30	3.21	(0.43)			1.67	(0.46)		
	4 40代	74	3.33	(0.48)			1.72	(0.54)		
	5 50代	97	3.30	(0.46)			1.58	(0.42)		
	6 60代	76	3.16	(0.51)			1.56	(0.45)		
	7 70代	31	3.22	(0.53)			1.79	(0.61)		
	8 80代以上	14	3.39	(0.49)			1.71	(0.73)		
宗派 366	1 カトリック	65	2.99	(0.52)	12.13 ** (4, 363)	1<3, 1<4 2<3, 2<4 Tukey	1.47	(0.38)	2.96 ** (4, 363)	1<2, 1<3 1<4 Tukey
	2 聖公会	69	2.91	(0.49)			1.71	(0.54)		
	3 プロテスタント	141	3.25	(0.52)			1.69	(0.51)		
	4 メソジスト系	91	3.36	(0.48)			1.71	(0.49)		
職業 368	1 勤務	119	3.08	(0.53)	1.49 (6, 361)		1.66	(0.47)	0.88 (6, 361)	
	2 経営/自営	26	3.06	(0.58)			1.70	(0.56)		
	3 主婦	79	3.16	(0.59)			1.58	(0.48)		
	4 パート	31	3.30	(0.45)			1.69	(0.46)		
	5 学生	29	3.31	(0.51)			1.80	(0.57)		
	6 その他	76	3.25	(0.46)			1.67	(0.53)		
	7 未回答	8	3.16	(0.39)			1.50	(0.49)		
環境 366	1 仏教(系)	133	3.11	(0.50)	0.99 (9, 358)		1.60	(0.46)	0.84 (9, 358)	
	2 神道(系)	8	3.26	(0.46)			1.83	(0.66)		
	3 仏教・神道	6	3.60	(0.38)			1.41	(0.50)		
	4 その他の宗教	6	2.90	(0.59)			1.67	(0.38)		
	5 宗教色なし	54	3.21	(0.52)			1.71	(0.50)		
	6 両親がクリスチャン	58	3.21	(0.58)			1.71	(0.48)		
	8 母(父)だけクリスチャン	39	3.15	(0.52)			1.70	(0.55)		
	9 親以外にクリスチャン	17	3.12	(0.55)			1.55	(0.51)		
	10 家族みなクリスチャン	45	3.21	(0.55)			1.72	(0.57)		
年数 368	1 1年未満	2	2.88	(0.71)	0.83 (8, 359)		2.25	(0.35)	1.83 (8, 359)	
	2 1年～2年	5	2.93	(0.59)			2.00	(0.24)		
	3 3年～5年	11	3.20	(0.51)			1.47	(0.25)		
	4 6年～10年	32	3.19	(0.56)			1.75	(0.48)		
	5 11年～20年	60	3.27	(0.47)			1.69	(0.50)		
	6 21年～30年	71	3.13	(0.56)			1.70	(0.49)		
	7 31年～50年	122	3.14	(0.52)			1.56	(0.42)		
	8 51年以上	57	3.19	(0.56)			1.71	(0.63)		
	10 未回答	8	3.09	(0.60)			1.82	(0.86)		

** $p < .01$, * $p < .05$

さらに、性別の平均値を比較するためにt検定を行った。その結果を表11（次頁）に示す。

表 11 GISJ の性別平均値の比較・*t* 検定結果

	性別	n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)	
親しい イメージ	男性	164	3.22	0.45	1.19	1.99	*
	女性	204	3.32	0.50	(163, 203)	(366)	
厳しい イメージ	男性	164	1.76	0.54	1.44	3.61	**
	女性	204	1.58	0.45	(163, 203)	(316.285)	

** $p < .01$, * $p < .05$, 分散が異なる場合にはWelchの検定を行った。 n=368

その結果、以下のことが明らかになった。

宗派については、プロテスタントとメソジスト系は、親しい神と厳しい神のイメージ両面を内在化させ、他方カトリックは、厳しい神のイメージをそれほど内在化させていない傾向がある（結果2-18）。

男性よりも女性が、親しい神のイメージを内在化させている傾向がある（結果2-19）。

女性よりも男性が、厳しい神のイメージを内在化させている傾向がある（結果2-20）。

6 神表象を規定する要因の重回帰分析による検討

神表象に影響を与えている要因を検討するため、「自尊感情尺度」、「基本的信頼感」、「对人的信頼感」、「能動実践態度」、「自己創造開発」、「自他共存」、「他者尊重」の各尺度を説明変数、GISJ・簡易版、GISJとGod Image Scale・邦訳版の下位尺度の合計6変数を従属変数とし、減少法による重回帰分析を行った。その結果を表12に示す。

表 12 神表象を規定する要因・重回帰分析結果

	神イメージ尺度	神イメージ尺度・詳細		God Image Scale・邦訳版		
		親しい存在	厳しい存在	信頼できる存在	受け入れてくれる存在	求めてくる存在
標準偏回帰係数						
自尊感情			-.10		.13	
基本的信頼感			-.26 **	.23 **	.30 **	
对人的信頼感			-.08			
能動実践態度						
自己創造開発	.16 **	.26 **	.25 **	.22 **	.09	.17 *
自他共存						.11
他者尊重	.13 *	.12 *	-.12 *	.10	.09	
F	11.15 **	20.68 **	11.42 **	25.97 **	26.52 **	13.05 **
df	(2, 365)	(2, 365)	(5, 362)	(3, 364)	(4, 363)	(2, 365)
重相関係数	.24	.32	.37	.42	.48	.26
決定係数	.06	.10	.14	.18	.23	.07

** $p < .01$, * $p < .05$

n=368

その結果、以下のことが示唆された。

基本的信頼感は、肯定的な神のイメージに正の影響を、厳しい神のイメージに負の影響を与えている可能性がある（結果2-21）。

「自己創造開発」、すなわち自己に向き合う姿勢は、厳しい神のイメージを含めた神表象全体に正の影響を与えている可能性がある（結果2-22）。

「他者尊重」、すなわち他者のあり方や意見を尊重する姿勢は、親しい神のイメージに弱い正の影響を、厳しい神のイメージに弱い負の影響を与えている可能性がある（結果2-23）。

7 まとめと課題

本研究では、GISJとGod Image Scale・邦訳版を用いて、自尊感情、基本的信頼感、生き方と神表象との関連について分析を行った。さらに「父」、「裁判官」などの神表象をどのように内在化させているかを検討した。結果を踏まえて、以下の点について考察した。

(1) 神表象と自己の関係

本研究では、基本的信頼感、自己に向き合う姿勢、他者のあり方を尊重する姿勢が神表象の形成に影響を与えている可能性があることが示唆された。自己のイメージと内在化された神表象に関連があるとする、自己のあり方が神を投影し、神について抱くイメージが自己を投影している可能性がある。神を受容的な存在としてとらえている人は、自己を受容的な存在としてとらえ、神をわかりにくい存在だととらえている人は、自己理解が不十分であることが推察される。自己洞察の深化によって神に対する認識が深化する可能性があり、自己洞察がキリスト者の深化にとって重要な意味を持つことが示唆されていた。

(2) 社会性と内面のギャップ

本研究の結果は、神を親しい存在としてイメージしていても、それがすぐに内面的な肯定感につながらず、それでありながら外面的な生き方を肯定的に保つことができることを示唆していた。また、神を厳しい存在としてイメージしている場合は、自尊感情や基本的信頼感などの内面性が低下してしまうにもかかわらず、外面的な生き方にはそれほど否定的な影響がないことも示唆されていた。外面的には一定の社会性を保つことができても、神のイメージの肯定感が内面の肯定感につながっているわけではなく、内面的に基本的信頼感や自尊感情が損なわれていても、その神のイメージの厳しさが対人的・社会的存在としての自覚・行動にすぐに表現されてこないということである。内面的な神のイメージは、外面に比較して否定的になりやすいということもできる。

因果関係を特定することはできないが、外面的に自分を保つことができる理由は慎重に

検討されるべきである。第一に、日本的な心理と関連している可能性がある。世間体、体面に気を使う精神構造、儒教的道德観、和の精神など、それが良い意味で機能することで、内面的な問題がすぐに表面化しないことは推察できる。

第二に、神のイメージが否定的になると、外面よりも内面が否定的な影響を受けやすいが、神のイメージが肯定的になっても、その肯定感はすぐに内面的な変化をもたらさない。これは神表象の変化のプロセスに一つの問題提起をしている。神表象が変化し、それに伴って外面的に肯定的な生き方ができても、それはすぐには内面的肯定感につながらない可能性があるということである。後の研究でさらに検討したい。

(3) 宗派の差異

プロテスタントとメソジスト系は、親しい方向と厳しい方向の両方向のイメージを内在化させ、他方カトリックは、厳しい神のイメージをそれほど内在化させていないことが示唆された。宗派間の差に関連して、以下の二点が推察される。第一に、一般的に、カトリック系・聖公会系では、プロテスタント系と比較して、儀礼に強調点を置く礼拝式を行っているのに対し、プロテスタント系では、聖書主義を前提に、聖書の解説に強調点を置く礼拝式を行っている。カトリック系・聖公会系では神を「感じ取る」傾向があり、プロテスタント系では、神表象を「概念化・言語化する」傾向があることが背景的要因としてあるのではないかと推察される。第二に、プロテスタントはマリヤを特別な存在とはみなしていないのに対して、カトリックは聖母マリヤへの信仰が存在する。このことは、カトリックの神のイメージがそれほど厳しいものではないことと関連があることが推察される。この結果は、父性性・母性性の検討において重要な知見を提供している。

(4) 本研究の限界

本研究では、基本的信頼感、自尊感情、生き方、それに神のイメージを測定し、各下位尺度間の相関を算出した。統計的に有意であったもののいずれも相関係数は高くなく、弱い相関が見られる程度にとどまっている。また、自尊感情尺度や基本的信頼感尺度などは標準化されているが、今回作成したGISJとGod Image Scale・邦訳版はいずれも標準化されていない。特にGod Image Scale・邦訳版は、本来であれば、翻訳手続きを経た後に文化的差異も検討しなければならない。今後さらに精緻化を試み、尺度としての弁別力を上げることで、より信頼できるデータの収集に努める必要がある。今後の課題である。

(5) 次の研究への展望

日本人キリスト者を対象とした分析を踏まえて、神表象の実態をさらに詳細に検討するために、自我同一性、アタッチメント、親の養育態度の観点から、継続調査・分析を行う。

第三節 第三研究：神アタッチメント尺度日本語版の作成（調査C）

1 問題と目的

(1) 今後の研究の方針

第一研究および第二研究では、第一節・4・(4)で述べたとおり Erikson, E. H.の自我同一性に着目し、基本的信頼感と神表象の関連について検討した。その結果、基本的信頼感と神表象の関連が示唆された。第二研究では第一段階である基本的信頼感にのみ焦点をあてたが、基本的信頼感と神表象との間に関連があることが示されたことから、第二段階以降の発達段階についても検討するべきであると判断した。

アタッチメント理論が採用されるに至った経緯については、Kirkpatrick, L. A.がアタッチメント理論を取り入れたことに始まり（Grimes, 2007, p.20）、その後さまざまな研究がなされた。わが国においては、神表象研究はほとんどなされていないが、アタッチメント理論に基づく先行研究の知見を受けて、アタッチメント理論の角度から神表象研究を行う必要があると判断した。

以上のことから、自我同一性理論およびアタッチメント理論に基づき、神表象の内在化についてさらに検討する。

(2) 神アタッチメントの定義と妥当性

ここで、本研究を進めるために、先行研究の動向を参照しつつ神表象を定義したい。

第一章・第一節・5・(1)で述べたとおり、アタッチメント理論では、子どもは幼少期にアタッチメント人物など特定の対象へ近接し、その対象が近くに存在するかぎり安心できるとされている。さらに、そのような特定の対象との関係から内的作業モデルが構築されるという（pp.80～83）。Kaufman, G. D. (1981) は、「神の概念とは、完全に機能するアタッチメント人物の概念である。……重要なことは、子どもが神を、助けが必要だと思ったときにはいつでも信頼して活用できる、養護的かつ愛情に満ちた親であると思えるかということである」（p.67、引用者訳）と述べている（p.67）。Kirkpatrick, L. A. (1992) は

Kaufman, G. D.の考え方を参照し、アタッチメントの研究者たちが、アタッチメント人物が生物学的な母親と同じかどうかはさておいて、それでも「母親」ということばを使ったのと同じような意味で、『神』という超自然的なアタッチメント人物」という表現を使うとしている (p.7)。

以上のことから、本研究では神アタッチメントを、「子どもが幼少期に、『神』を超自然的なアタッチメント人物として内在化させ、そのアタッチメント人物に近いものと感じるとき、それが安心感となるもの」と定義する。

(3) 神アタッチメントを測定する尺度の回答可能性

ところで、神は実際の母親と異なり、アタッチメント人物として近づくことはできない。ところが、基本的信頼感が神表象の内在化と関連があるように、母親へのアタッチメント傾向が神アタッチメントと関連がある可能性はあり、どのような神表象を内在化させるかによって神アタッチメントが左右される可能性も否定できない。

実際のアンケート調査で、回答者がECR-Rに回答するのと同じように、アタッチメント人物を「神」に置き換えた尺度に回答できるかは不確定要素が残る。しかし、「仏さま」を対象として意識し、場合によっては語りかけるのと同じように、キリスト者は祈りによって絶対他者としての神に語りかけ、祈りの対象である神がどのような存在であるかを意識することができることから、回答は可能であると考えられる。

(4) 神アタッチメントを測定する尺度の必要

継続調査を行うために、神アタッチメントを測定する尺度が必要である。神アタッチメントを測定する尺度としては、Beck and McDonald (2004) が ECR をもとに開発した AGI があるが、邦訳されていない。神表象を測定する日本語版の尺度は第一研究で開発したが、神アタッチメントを測定する日本語の尺度はない。以上のことから、本研究では、神アタッチメントを測定する日本語版の尺度の作成を試みる。

方法は、AGI を邦訳するのではなく、日本人キリスト者を対象にアンケート調査を実施し、因子分析によって尺度を作成する方法を採用した。具体的には、ECR の改訂版である The Experiences in Close Relationships-Revised (ECR-R) Questionnaire (2000, Fraley, Waller, & Brennan) (以下、ECR-R と略記) のアタッチメント人物を「神さま」に置き換え、それを邦訳した。

2 方法（調査C）

(1) ECR-Rの邦訳の作成

Fraley et al. (2000) は、成人のアタッチメントを測定する Experiences in Close Relationships scaleを含む四つの既存の尺度について検討し、ECR-Rを作成した。18項目からなる「不安」と18項目からなる「回避」の下位尺度で構成されている。

ECR-Rの邦訳は以下の手続きによって行った。

1) 邦訳の試案の作成

36の質問項目のアタッチメント人物を「神さま」に置き換え、日本語の試案を作成した。

2) 訳文の確認

邦訳の正確さを期すため、英語圏のネイティブ二名、その内一名は日本語を十分理解できる協力者に、試案を英語に翻訳できるかを含めて原文の意味が訳語に正確に表現されているかを確認してもらった。以上の手続きを経て、36項目の日本語版尺度を作成した。

3) 尺度の命名

「神アタッチメント尺度」(God Attachment Scale、以下GASと略記)と命名した。

(2) その他の使用した尺度

1) ラスムッセンの自我同一性尺度日本語版(REIS) (1987、宮下) (以下、REIS と略記)

Erikson, E. H.の発達漸成理論図式における乳幼児から成人前期までの同一性の程度を測定するための、段階ごとに12項目ずつ、計72項目からなる自我同一性尺度である。宮下(1987)は、宮下と平野が作成した邦訳版の尺度をさらに発展させるために項目分析を行った。各項目の得点と全体の得点との相関係数を算出し、有意水準に達しなかった五項目を削除して67項目を得た。続いて尺度の信頼性・妥当性を検討したところ、比較的高い信頼性・妥当性があることが示された。最初の六段階に対応する六つの下位尺度から構成されている。

2) GISJ (河村、2010、2013a)

3) PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版 (小川、1991) (以下、PBI と略記)

Parker, Tuping, and Brown (1979) が作成した PBI を小川が日本語に翻訳したものである。Parker et al. (1979) は、子から見た親の養育態度の自覚的評価スケールを開発した。12の養護項目と13の過保護項目の二因子で構成され、信頼性、妥当性は確認

されている。養護項目は、愛着 (affection)、暖かさ (emotional warmth)、共感 (empathy)、親密さ (closeness) など (逆の意味で無関心、拒否) の度合いを測定し、過保護項目は、操縦 (control)、侵入 (intrusion)、過剰接触 (excessive contact)、幼児扱い (infantilization)、自律的行動の妨害 (prevention of independent behavior) など (逆の意味で自主、独立を促すこと) の度合いを測定している (小川、1991)。小川 (1991) は邦訳を試み、信頼性、妥当性も確認された。本研究では、父親、母親について、それぞれ別に回答してもらった。

4) 4 分類愛着スタイル尺度日本語版 (RQ) (1998、加藤) (以下、RQ と略記)

Bartholomew and Horowitz (1991) は、内的作業モデルが他者に関するモデル (他者観) と自己に関するモデル (自己観) の性質によって、異なるアタッチメントの内的作業モデルができあがるという Bowlby, J. 理論を踏まえて、二つの次元で四つのアタッチメント傾向を分類する 2 次元 4 分類モデルを提唱した。ここでいう「自己観」とは、「自尊感情の維持を他者からの受容に依存する程度」を意味し、他者観とは、「親密さの回避の次元」を意味している。この二つのモデルがポジティブであるかネガティブであるかによって、四つのアタッチメント傾向が区別される。四つのアタッチメント傾向とは、安定型 (自己観 : Positive、他者観 : Positive)、拒絶型 (自己観 : Positive、他者観 : Negative)、とらわれ型 (自己観 : Negative、他者観 : Positive)、おそれ型 (自己観 : Negative、他者観 : Negative) である。加藤 (1998) は、Bartholomew and Horowitz (1991) が開発した「関係尺度 (Relationship Questionnaire)」の日本語版を作成し、構成概念妥当性を確認した。四つのアタッチメント傾向を測定する尺度である。

5) 一般他者版成人愛着スタイル尺度 (ECR-GO) (中尾・加藤、2004a、2004b) (以下、ECR-GO と略記)

恋人を想定して成人のアタッチメント傾向を測定する ECR をもとに、中尾と加藤 (2004) が「恋人」を「人」に置き換えて作成した尺度である。一般の他者をアタッチメントの対象に、「見捨てられ不安」 (自己観) と「親密性の回避」 (他者観) を測定することができる。

(3) 質問紙の構成

調査協力者へ負担がかかることが想定されたため、質問紙を A 版・Erikson, E. H. の心理社会的発達理論に関連したものと、B 版・アタッチメント理論に関連したものに分けた。

A 版・B 版共通で用いた尺度もあった。また属性に関する質問は A 版・B 版共通とした。それぞれの質問紙は以下の尺度で構成された。

1) A 版・心理社会的発達理論から検討する質問紙 (Appendix 1 参照)

REIS (アンケート 1)、GISJ (アンケート 2)、PBI (父親について尋ねるアンケート 3、母親について尋ねるアンケート 4)

2) B 版・アタッチメント理論から検討する質問紙 (Appendix 2 参照)

RQ (アンケート 1)、ECR-GO (アンケート 2)、GAS (アンケート 3)、GISJ (アンケート 4)、PBI (父親について尋ねるアンケート 5、母親について尋ねるアンケート 6)

3) A 版・B 版共通の属性についての質問

A 版、B 版いずれも、最後の部分に、年齢、性別、宗派、キリスト者になってからの年数、小学生までの家族環境および家族との関係、神イメージが変化していることがあるか、ある場合にはどのような要因が考えられるか、その他神についてどうとらえているかを自由に記述してもらう欄を設けた。最後の部分には、神表象の変化についての面接に協力をお願いする文章と、協力していただける方には連絡先を記入してもらう欄を設けた。

(4) 質問紙調査の実施

質問紙は、四教団の教会と一神学校、その他友人に依頼した。実施時期は 2013 年 1 月～2 月であった。A 版は 275 部の質問紙を依頼、143 の質問紙が回収され、回収率は 52.0%、B 版は 292 部の質問紙を依頼、153 の質問紙が回収され、回収率は 52.4%であった。

(5) 有効回答の決定

アンケートごとに未記入であるものは除外し、欠損項目がある場合はサンプル数が減少することを防ぐために質問項目ごとに平均値を算出したものを代入した。以上の手続きを経て、A 版は 132、B 版は 150 を有効回答として採用した。有効回答数を表 13 に示す。

表 13 配布数、回収数、有効回答数

	配布数			回収数			有効回答数		
	A版	B版	合計	A版	B版	合計	A版	B版	合計
カトリック 聖公会	97	104	201	26 (26.8%)	44 (42.3%)	70 (34.8%)	23 (23.7%)	39 (37.5%)	62 (30.8%)
プロテスタント	178	188	366	117 (65.7%)	109 (58.0%)	226 (61.7%)	109 (61.2%)	111 (59.0%)	220 (60.1%)
合 計	275	292	567	143 (52.0%)	153 (52.4%)	296 (52.2%)	132 (48.0%)	150 (51.4%)	282 (49.7%)

(6) 各質問項目の平均値と標準偏差

質問項目の平均値と標準偏差を算出した。その結果を表14に示す。

表 14 各尺度の質問項目の平均値と標準偏差

項目	n	平均	標準偏差	項目	n	平均	標準偏差	項目	n	平均	標準偏差
REIS				RQ				GISJ			
1	131	3.27	1.55	1	148	4.11	1.62	1	265	3.45	0.61
2	132	3.73	1.66	2	147	2.59	1.34	2	269	3.42	0.62
3	131	3.30	1.55	3	148	3.40	1.58	3	270	1.52	0.80
4	131	3.84	1.80	4	147	3.01	1.62	4	251	3.27	0.81
5	131	4.36	3.11	ECR-GO				5	251	3.33	0.63
6	130	3.63	1.54	1	149	2.60	1.50	6	252	3.36	0.73
7	131	3.68	1.40	2	149	2.63	1.56	7	262	3.24	0.80
8	131	5.34	1.20	3	150	2.56	1.40	8	258	3.41	0.68
9	131	4.33	1.44	4	149	1.89	0.99	9	240	2.17	1.04
10	132	4.38	1.43	5	149	3.24	1.64	10	258	3.38	0.66
11	131	3.61	1.74	6	149	2.65	1.37	11	246	3.13	0.90
12	132	3.82	1.61	7	150	3.85	1.54	12	255	1.42	0.66
13	132	3.95	1.57	8	149	4.64	1.45	13	265	3.50	0.62
14	131	4.27	1.48	9	149	3.76	1.72	14	256	2.79	0.91
15	132	2.59	1.39	10	149	3.42	1.59	15	259	1.84	0.92
16	132	4.04	1.66	11	148	4.82	1.53	16	267	3.58	0.59
17	132	3.30	1.39	12	148	2.69	1.57	17	266	3.54	0.61
18	132	3.37	1.36	13	150	3.27	1.52	18	266	1.44	0.67
19	131	3.69	1.50	14	149	2.21	1.24	19	250	3.20	0.74
20	132	4.52	1.65	15	149	4.45	1.49	20	239	3.15	0.69
21	132	3.62	1.50	16	147	3.84	1.39	21	265	1.41	0.70
22	131	5.73	1.18	17	146	4.03	1.62	22	263	3.37	0.68
23	132	4.36	1.49	18	148	2.68	1.36	Parental Bonding Instrument、父親			
24	129	4.16	1.77	19	146	3.03	1.49	1	256	2.87	0.86
25	131	3.52	1.60	20	149	2.17	1.28	2	253	2.07	0.87
26	130	4.28	1.47	21	148	3.32	1.52	3	254	2.91	0.78
27	130	4.42	1.69	22	148	2.14	1.22	4	252	1.77	0.87
28	131	4.18	1.36	23	148	2.95	1.45	5	249	2.69	0.83
29	132	5.55	1.36	24	149	4.30	1.52	6	254	2.99	0.82
30	132	3.48	1.78	25	149	2.45	1.36	7	246	2.78	0.82
31	131	5.64	1.35	26	149	3.66	1.62	8	249	1.45	0.74
32	132	4.48	1.31	27	148	2.26	1.25	9	252	1.61	0.80
33	131	4.39	1.52	28	148	3.70	1.55	10	250	1.49	0.78
34	131	4.15	1.67	29	145	2.28	1.24	11	251	2.61	0.95
35	132	3.91	1.48	30	149	3.05	1.60	12	251	2.69	0.91
36	132	3.39	1.40	GAS				13	250	2.19	0.84
37	131	4.66	1.53	1	149	1.74	1.19	14	252	2.19	0.90
38	131	3.89	1.87	2	149	5.29	1.81	15	248	2.89	0.76
39	132	3.63	1.54	3	149	1.95	1.45	16	254	1.84	0.87
40	131	3.96	1.43	4	149	5.37	1.80	17	247	2.39	0.84
41	131	3.06	1.45	5	146	1.66	1.23	18	254	2.43	0.95
42	132	3.95	1.53	6	146	1.71	1.23	19	254	1.57	0.71
43	132	4.81	1.32	7	148	4.02	1.76	20	251	1.57	0.71
44	127	4.55	1.53	8	150	2.05	1.35	21	250	2.81	0.79
45	131	2.78	1.20	9	149	5.78	1.53	22	248	2.58	0.87
46	129	3.91	1.85	10	150	2.25	1.56	23	251	1.86	0.88
47	131	3.51	1.51	11	148	5.13	1.75	24	252	2.14	0.91
48	131	2.98	1.71	12	150	1.92	1.28	25	249	2.92	0.78
49	127	2.98	1.45	13	147	1.46	0.85	Parental Bonding Instrument、母親			
50	132	3.92	1.40	14	150	1.71	1.20	1	263	3.17	0.77
51	130	2.80	1.87	15	150	1.67	1.23	2	262	1.89	0.84
52	131	4.32	1.52	16	150	2.24	1.56	3	263	3.05	0.78
53	130	3.57	1.51	17	149	2.64	1.92	4	259	1.67	0.85
54	132	4.33	1.43	18	149	5.51	1.84	5	262	2.99	0.85
55	132	2.98	1.19	19	148	6.22	1.11	6	261	3.25	0.80
56	132	3.14	1.69	20	150	6.29	1.11	7	255	2.86	0.78
57	130	4.95	1.30	21	149	5.70	1.61	8	260	1.56	0.77
58	131	3.48	1.49	22	150	4.97	1.72	9	261	1.77	0.85
59	132	3.83	1.58	23	148	1.60	1.10	10	258	1.72	0.87
60	128	2.88	1.47	24	150	1.72	1.19	11	260	2.97	0.88
61	132	4.63	1.43	25	149	5.94	1.30	12	258	3.02	0.89
62	129	2.66	1.44	26	148	1.74	1.18	13	259	2.07	0.82
63	130	3.05	1.34	27	150	2.77	1.95	14	261	2.07	0.86
64	132	5.12	1.23	28	150	2.03	1.38	15	259	2.94	0.78
65	131	4.27	1.22	29	148	4.58	1.78	16	262	1.72	0.83
66	132	5.09	1.32	30	147	2.71	1.73	17	255	2.74	0.83
67	132	4.67	1.33	31	150	5.64	1.49	18	261	1.79	0.79
				32	150	2.07	1.41	19	260	1.64	0.78
				33	148	1.76	1.27	20	259	1.69	0.81
				34	150	1.65	1.13	21	257	2.89	0.80
				35	149	1.50	0.97	22	256	2.72	0.88
				36	149	4.11	1.71	23	260	1.95	0.93
								24	258	1.94	0.85
								25	258	2.91	0.75

(7) 逆転項目の変換

A版のREIS、PBI、B版のECR-GO、GAS、PBIの逆転項目を変換した。

(8) 各尺度の基本統計量

各下位尺度の得点の基本統計量を算出した。その結果を表15に示す。

表 15 尺度得点の基本統計量

A版質問紙		件法	平 均	標準偏差
REIS	基本的信頼感	7件法	4.47	0.65
	自律感		4.29	0.80
	主導性		4.79	0.58
	勤勉性		4.48	0.70
	アイデンティティーの確立		4.82	0.62
	親密性		4.45	0.67
GISJ	親しい	4件法	3.33	0.42
	厳しい		1.67	0.52
PBI	父養護	4件法	1.77	0.58
	父過保		0.94	0.40
	母養護		2.07	0.60
	母過保		1.04	0.47
n=100				
B版質問紙		件法	平 均	標準偏差
ECR-GO	一般不安	7件法	2.68	0.85
	一般回避		3.72	0.95
GAS	神不安	7件法	2.01	0.90
	神回避		2.66	1.01
GISJ	親しい	4件法	3.35	0.44
	厳しい		1.56	0.44
PBI	父養護	4件法	1.82	0.66
	父過保		0.89	0.47
	母養護		2.12	0.65
	母過保		0.86	0.51
n=129				

3 GASの因子分析による検討

邦訳した36の質問項目について主因子法による因子分析を行った。解釈可能性を考慮し、因子負荷量が0.4以上の規準で二因子を抽出、プロマックス回転を行ったところ、最終的に28項目が残った。質問項目数はECR-Rの36から、第一因子が16、第二因子が12の合計28に減少したが、因子数は同じ二因子が抽出された。全体の質問項目および各因子の内定整合性を確認するためにクロンバック係数を算出した。その結果を表16（次頁）に示す。

GASはアタッチメント人物を神に置き換えることで回答が可能であるかが懸念された。尺度としての信頼性・妥当性については、この段階で評価することはできないが、再度質問紙調査を行うことで尺度の信頼性を確認する必要がある。また、本来であれば、翻訳後に文化的差異を検討する必要があるが、今後の課題である。

表 16 GAS 因子分析結果

質問項目 ($\alpha = .92$)		F1	F2	共通性
第1因子: 見捨てられ不安 ($\alpha = .90$)				
1	私は、神さまがわたしのことを本当は愛していないのではないかとしばしば心配になる	.77	-.17	.62
2	私は、私が神さまのことを大切に思うほどには、神さまは私のことを大切に思っていないのではないかと心配になる	.76	.04	.58
3	私が、神さまから目をはなしてしまったら、神さまはだれか他の人のほうに思いが向いてしまうのではないかと心配になる	.76	-.17	.61
4	神さまと親密になりたいという思いに対して、神さまはうんざりして私から離れていってしまうことがときどきあるだろうと思う	.73	-.04	.53
5	私は、神さまに対する自分の思いを表現すると、神さまは私に対して同じようには思ってくれていないのではないかと心配になる	.70	-.06	.50
6	私は神さまが私のことを本当に知ったら、私のことを好きでなくなってしまうのではないかと思うと心配だ	.66	.14	.45
7	私は、神さまがわたしといっしょにいたいと思っていないのではないかとしばしば心配になる	.63	.00	.39
8	神さまはときどき、理由もなく私に対する思いを変えることがある	.62	.00	.39
9	私は、神さまの愛を失うことを恐れている	.58	-.16	.36
10	私が神さまと親密になりたいと望むほどには、神さまは私と親密になりたいと思っていないと思う	.58	.08	.34
11	私は、神さまに捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない	.52	.21	.31
12	私は、神さまが私から離れてしまうのではないかと心配になることはほとんどない	.51	.24	.32
13	私は自分が他の存在に負けてしまうことが心配である	.50	.03	.25
14	私はしばしば、神さまが私を思う気持ちが、私が神さまを思う気持ちと同じくらい強ければいいのと思う	.47	-.10	.23
15	私は、神さまとの関係がとても心配だ	.44	.27	.26
16	神さまは、私が怒っているときだけ、私の存在に気づいてくれると思っている	.42	.16	.20
第2因子: 親密性の回避 ($\alpha = .87$)				
17	神さまに頼るのは心地良い	.01	.78	.61
18	神さまに近づくことは難しいことではない	-.04	.69	.48
19	私は何でも神さまに話す	-.11	.67	.47
20	私は自分が個人的に何を考え、何を感じているかを神さまと分かち合うとき、とても心地良いと感じる	-.06	.66	.44
21	私はいろいろなことについて神さまと徹底してやりとりする	-.11	.65	.43
22	神さまと近くにいることは私にとってとても心地良い	-.01	.64	.41
23	神さまに近づくことは比較的簡単なことだと思う	-.06	.64	.41
24	何か困ったときに神さまに向き合うことはとても助けになる	.05	.63	.40
25	私は自分の問題や関心について、たいてい神さまに打ち明けている	-.10	.63	.40
26	神さまに心を打ち明けることは、あまり心地良いことではない	.22	.55	.35
27	神さまに頼るのは別にむずかしいことではない	.03	.50	.25
28	神さまを愛して行くのは簡単なことだ	.06	.47	.23
因子間相関		F1	F2	
F2			.56	
主因子法(プロマックス回転)		n=129		

4 まとめと課題

本研究では、ECR-Rのアタッチメント人物を「神さま」に置き換え、それを邦訳したものをを使って質問紙調査を実施した。因子分析を行ったところ、28項目二因子が抽出された。信頼性・妥当性は確認されていないが、尺度作成の第一歩として有意義であり、今後の研究のために有用であると判断した。

次の研究では、神表象、アタッチメント、神アタッチメント、親の養育態度の関連を検討する。

第四節 第四研究：アタッチメント理論からの検討（調査C）

1 問題と目的

第三研究では、神アタッチメントを測定する日本語版の尺度、GAS を作成した。本研究では GAS を用いて、調査 C を実施した際に質問紙を構成した RQ、ECR-GO、GISJ、PBI との関連を検討する。GAS と RQ、ECR-GO、GISJ、PBI との相関を算出することによって、神アタッチメントが、アタッチメント傾向、親の養育態度、神表象とどのような関連があるかを検討することを目的とする。

2 仮説

第四研究は以下の仮説のもとに行う。

第一に、アタッチメントと神アタッチメント、神表象との関連について検討する。一般の他者と肯定的なアタッチメント関係を築くことができる人は、神アタッチメントも肯定的であり、かつ肯定的な神表象を内在化させていることが推察される（仮説 4-1）。

第二に、アタッチメント傾向と神表象との関連について検討する。安定型のアタッチメント傾向を身につけた人は、肯定的な神とのアタッチメント関係をもち、かつ肯定的な神表象を内在化させていることが推察される（仮説 4-2）。

第三に、親の養育態度と神表象との関連について検討する。養護的養育態度で育ったと認識している人は、肯定的な神表象を内在化させ、過保護的養育態度で育ったと認識している人は否定的な神表象を内在化させていることが推察される（仮説 4-3）。

第四に、親の養育態度と神アタッチメントとの関連について検討する。養護的養育態度で育ったと認識している人は肯定的な神アタッチメント関係を形成し、過保護的養育態度で育ったと認識している人は否定的な神アタッチメントの関係を形成していることが推察される（仮説 4-4）。

3 方法

第四研究では、第三研究の調査 C（第三節の 2）で収集したデータを分析した。

4 下位尺度間の相関

B 版・アタッチメント理論から検討する質問紙について、各下位尺度間の相関を算出した。その結果を表 17（次頁）に示す。

表 17 ECR-GO・GAS・GISJ・PBI の相関

		ECR-GO		GAS		GISJ	
		見捨てられ不安	親密性の回避	見捨てられ不安	親密性の回避	親しい神イメージ	厳しい神イメージ
GAS	見捨てられ不安	.59 **	.18 *				
	親密性の回避	.32 **	.20 *	.51 **			
GISJ	親しい神イメージ	-.30 **	-.08	-.47 **	-.60 **		
	厳しい神イメージ	.41 **	.20 *	.54 **	.30 **	-.24 **	
PBI	父養護	-.11	-.20 *	-.19 *	-.01	.18 *	-.13
	父過保護	.17	.11	.23 **	.06	-.13	.19 *
PBI	母養護	-.27 **	-.18 *	-.28 **	-.14	.27 **	-.20 *
	母過保護	.25 **	.12	.29 **	.17	-.14	.29 **

** $p < .01$, * $p < .05$

n=129

(1) 一般他者および神アタッチメントと神表象の関連

その結果、親しい神のイメージについては、一般他者への「見捨てられ不安」との間に弱い負の相関 ($r = -.30$)、「神からの見捨てられ不安」との間に負の相関 ($r = -.47$)、「神との親密性の回避」との間に強い負の相関 ($r = -.60$)が見られた。厳しい神のイメージについては、一般他者への「見捨てられ不安」との間に正の相関 ($r = .41$)、一般他者への「親密性の回避」との間に弱い正の相関 ($r = .20$)、「神からの見捨てられ不安」との間に正の相関 ($r = .54$)、「神との親密性の回避」との間に弱い正の相関が見られた ($r = .30$)。

親しい神のイメージを内在化させている人は、神から見捨てられる不安を持たず、神との親密性を保とうとする傾向がある。また、一般他者からの「見捨てられ不安」を持たない傾向があることが示された(結果 4-1)。仮説 4-1 は一部支持された。

厳しい神のイメージを内在化させている人は、「神からの見捨てられ不安」を抱き、神との親密性を回避する傾向がある。また、一般他者からも見捨てられる不安を抱き、親密性を回避する傾向があることが示された(結果 4-2)。

(2) 親の養育態度と神表象の関連

次に、親の養育態度と神表象の関連について検討したところ、父、母の養護的養育態度と親しい神のイメージとの間に弱い正の相関が見られた ($r = .18$, $r = .27$)。過保護的養育態度については、相関は見られなかった。父の養護的養育態度と厳しい神のイメージの間には相関は見られなかったが、母の養護的養育態度と厳しい神のイメージの間には弱い負の相関が見られた ($r = -.20$)。父、母の過保護的養育態度と厳しい神のイメージの間には弱い正の相関が見られた ($r = .19$, $r = .29$)。

弱い相関であるが、父、母が養護的養育態度で接したと認識している人は、親しい神のイメージを内在化させる傾向があり、父、母が過保護的養育態度で接したと認識している人は、厳しい神のイメージを内在化させる傾向があることが示唆された（結果 4-3）。16歳までの親の養育態度と神表象に関連があることが示された。仮説 4-3 は一部支持された。

(3) 親の養育態度と神アタッチメントの関連

親の養育態度と神アタッチメントの関連について検討したところ、父・母の養護的養育態度と「神からの見捨てられ不安」との間に弱い負の相関が見られた（ $r=-.19$ 、 $r=-.28$ ）。また、父・母の過保護的養育態度と「神からの見捨てられ不安」との間に弱い正の相関が見られた（ $r=.23$ 、 $r=.29$ ）。「神との親密性の回避」との間には相関は見られなかった。

弱い相関であるが、父・母が養護的養育態度で接したと認識している人は、神から見捨てられる不安を抱きにくく、父・母が過保護的養育態度で接したと認識している人は、神から見捨てられる不安を抱く傾向があることが示唆された（結果4-4）。16歳までの親の養育態度に関する認識と神アタッチメントに関連があることが示された。仮説4-4は一部支持された。

5 アタッチメント傾向と神表象の関連

次に、RQ で測定できる安定型、拒絶型、とらわれ型、おそれ型の四つのアタッチメント傾向と神表象との関連を検討した。スタイルごとに平均値を算出し、平均値に差があるかを検討するために一要因分散分析を行い、主効果が有意であったものについては多重比較を行った。なお、タイプ 2 の拒絶型はサンプルサイズが小さいため、分析結果からは除外した。その結果を表 18 に示す。

表 18 神のイメージと RQ の四つのスタイルの平均値 分散分析結果

		愛着のタイプ				F値(3, 110)	多重比較 Fisherの 最小有意差法
		1 安定型	2 拒絶型	3 とらわれ型	4 おそれ型		
		n	59	4	35	16	
GISJ	親しい存在	平均	3.42	2.90	3.29	3.29	2.22
		標準偏差	(0.44)	(0.29)	(0.45)	(0.47)	
	厳しい存在	平均	1.47	1.42	1.67	1.71	2.70 *
		標準偏差	(0.38)	(0.40)	(0.41)	(0.52)	
GAS	見捨てられ不安	平均	1.76	1.37	2.39	2.38	5.62 *
		標準偏差	(0.78)	(0.39)	(0.96)	(1.04)	
	親密性の回避	平均	2.45	2.31	2.93	3.06	2.77 *
		標準偏差	(1.02)	(0.71)	(1.03)	(0.88)	

* $p < .05$

n=114

その結果、「親しい存在」以外の三つの下位尺度で主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、タイプ1の安定型は、タイプ3のとらわれ型、タイプ4のおそれ型よりも、「厳しい存在」、「神からの見捨てられ不安」、「神との親密性の回避」が低いことが示された。とらわれ型とおそれ型は、安定型に比較して神を厳しい存在としてイメージしており、神とのアタッチメントも否定的であることが示された（結果4-5）。仮説4-2は支持された。

6 まとめと課題

本研究では、第三研究で作成した GAS の下位尺度と RQ、ECR-GO、GISJ、PBI の下位尺度との間の相関を算出し、神表象、アタッチメント、神アタッチメント、親の養育態度の関連を検討した。検討した結果を踏まえて、以下の点について考察した。

(1) 神表象と神アタッチメントの関連

親しい神のイメージについては、「見捨てられ不安」、「神からの見捨てられ不安」、「神との親密性の回避」に弱い負の相関が見られ、逆に、厳しい神のイメージについては、「見捨てられ不安」、「親密性の回避」、「神からの見捨てられ不安」、「神との親密性の回避」との間に正の相関が見られた。ECR-GO は、幼少期のアタッチメント関係がその後の関係の中でも持続されて行くことを前提にしているが、幼少期のアタッチメントが神との関係や神表象の内在化と関連していることが示された。親の養育態度と「神からの見捨てられ不安」の間には正の関連があるばかりでなく、養育態度が養護的な場合には、一般他者との親密性を保つ傾向がある。親の養育態度についての認識は重要な要因であることが示唆された。

この結果はアタッチメント傾向にも表れている。タイプ1の安定型は、タイプ3のとらわれ型、タイプ4のおそれ型よりも、神との良好な関係を築いており、神とのアタッチメントも肯定的である。安定型のアタッチメント傾向を身につけることができると、神との関係も人との関係も良好になる傾向があると考えられる。以上のように、神表象および一般他者へのアタッチメントと神アタッチメントの間に関連が見られる。これは Beck et al. (2004, 2005) の研究を支持するものであった。

(2) 神アタッチメントと社会性・内面の差異との関連

この中でも特に、親しい神のイメージに着目した。一般他者との「親密性の回避」との相関係数が、 $r=-.08$ であるのに対して、「神との親密性の回避」との相関相関が、 $r=.60$ と、

かなり開きがある。親しい神のイメージを内在化させていることと、一般他者との親密性には関連がないにもかかわらず、神との親密性には強い負の相関が見られるということである。神のイメージが親しいものになった場合、神との親密性は変化する可能性があっても、一般他者との親密性がすぐに回復するわけではない可能性があることを示唆している。

この結果は、第三章・第二節・7・(2)で述べた社会性と内面の差異との関連で示唆を与えるものである。すなわち、神を親しい存在としてイメージしている場合、自尊感情などの内面にはその肯定感は現れないが、社会的な関係には肯定的に表現される傾向がある。同時に、負の要素である「見捨てられ不安」は軽減される傾向がある。また神との親密性は保つ傾向があるが、一般他者との親密性が深まることはない。

要約すると、親しい神のイメージを内在化させることで、神との親密性は深まっても、一般他者との親密性は必ずしも深まるわけではなく、同時に自己の認識も肯定的にはならない、それでいて外側に見える他者との関係は積極的になる傾向があるという構図が見えてくる。神を厳しい存在としてイメージしている場合、自尊感情などの内面には負の影響があることで自己の認識は低く、一般他者からも神からも見捨てられる不安を抱え、親密性を回避してしまう傾向がある。しかし、それが必ずしも社会的関係の崩壊にはつながらず、何かで支えられているという構図が見えてくる。

相関分析の結果だけでは、神表象の変化のプロセスの影響と、神表象と他の要素との因果関係を論じることができないが、これらの知見は、アタッチメント理論を考える際に重要な洞察を含んでいると考えられる。

(3) 神アタッチメントと母性イメージ

本研究の結果は、神表象および一般他者へのアタッチメントと神アタッチメントの間に関連が見られることを示唆していた。神アタッチメントが肯定的なときには、内在化される神表象も肯定的になると考えられる。神表象が肯定的な場合には、神を「父」や「牧者」のイメージで内在化している可能性が高い。GISJの質問項目に関して、第三章・第一節・6・(4)で論じたように、ここで「父」と定義される神表象には、「裁判官」や「王」に示される父性性の対照として焦点化される受容的な母性性が含まれる。このことは後に検討課題として挙げる甘えの心理とも関連する可能性がある。マリヤ崇拜のような、母性を強調した用語は本研究では採用しないが、今後、GISJの質問項目の検討も含めて、さらに分析する必要がある。

(4) 次の研究への展望

アタッチメントが神との関係や神表象の内在化のあり方と関連しているという結果を踏まえて、次の研究ではErikson, E. H.の心理社会的発達段階と神表象の関連について検討する。

第五節 第五研究：心理社会的発達理論からの検討（調査C）

1 第二研究からの知見

第二研究（調査 B）では、第三章・第一節・4・(4)で述べたように、Erikson, E. H.の心理社会的発達理論に基づき、基本的信頼感と神表象の関連を検討した。その結果、神表象と基本的信頼感に関連があることが示された。

続いて、神表象を規定している要因を探るために重回帰分析を行った。その結果、基本的信頼感は、肯定的な神のイメージに正の影響を、厳しい否定的な神のイメージに負の影響を与えており、神表象に影響している要因の一つであることが示された。

2 問題と目的

Erikson, E. H.の心理社会的発達理論は、Rizzuto, A. (1979) が各発達段階と神表象を対応させているものの (pp.206～207)、神表象研究においてはほとんど用いられていない。第二研究（調査 B）では、肯定的な神表象を獲得するために、第一段階の発達課題である基本的信頼感が重要な意味を持っていることが示唆された。しかし、ライフサイクルを考えた場合、一生涯同じ状態が継続するとは考えにくい。

人間のライフサイクルを調査対象にする場合、同一サンプルを時間軸で追う縦断的研究を計画するか、時代性を考慮するためにあわせてコーホート研究を計画することが望ましいが、人のライフサイクルは数十年という長い期間におよぶため、実現可能性が低い。そのため本研究では、心理社会的発達理論に準拠した質問紙調査を幅広い年代層に実施することによってライフサイクルと神表象との関連を検討する横断的研究を計画し、考察する。

3 仮説

第五研究は以下の仮説のもとに行う。

第一に、親の養育態度と神表象との関連について検討する。養護的養育態度で育つたと

認識している人は、肯定的な神表象を内在化させ、過保護的養育態度で育った人と認識している人は否定的な神表象を内在化させていることが推察される（仮説 5-1）。

第二に、神表象と幼児期の発達課題である主導性・罪責感との関連を検討する。罪責感
は否定的な神表象と関連があることが推察される（仮説 5-2）。

第三に、神表象と学童期の発達課題である勤勉性・劣等感との関連を検討する。肯定的
な神表象と勤勉性は関連があり、逆に否定的な神表象と劣等感は関連があることが推察さ
れる（仮説 5-3）。

第四に、神表象と青年期の発達課題であるアイデンティティの確立との関連を検討する。
アイデンティティの確立は肯定的な神表象と関連があることが推察される（仮説 5-4）。

第五に、神表象と成人初期の発達課題である親密性との関連を検討する。肯定的な神表
象は親密性と関連があることが推察される（仮説 5-5）。

4 方法

第五研究では、第三研究の本調査（調査 C）で収集したデータを分析した。

5 下位尺度間の相関

分析は以下の手順で行った。まず逆転項目を換算した。各質問項目の平均値を算出し、
未記入の項目に代入した。それぞれの下位尺度の得点を算出し、各下位尺度間の相関を求
めた。その結果を表 19 に示す。

表 19 自我同一性・神のイメージ・親の養育態度の相関									
		ラスムッセンの自我同一性尺度日本語版 REIS					GISJ		
		基本的信 頼感	自律感	主導性	勤勉性	アイデン ティ ティの 確立	親密性	親しい神 イメージ	厳しい神 イメージ
GISJ	親しい神イメージ	.15	-.07	.16	.04	.16	.25 *		
	厳しい神イメージ	-.20 *	-.17	-.12	-.28 **	-.15	-.26 **		
PBI	父養護	.27 **	.04	.18	.08	.31 **	.23 *	.24 *	.07
	父過保護	-.15	-.20	-.22 *	-.26 **	-.13	-.23 *	-.03	-.03
PBI	母養護	.25 *	.09	.36 **	.15	.20	.24 *	.26 **	-.01
	母過保護	-.14	-.20 *	-.31 **	-.27 **	-.10	-.23 *	-.13	.17
** $p < .01$, * $p < .05$								n=100	

(1) 親の養育態度と神表象の関連

親の養育態度と神表象の関連について検討した。父、母の養育態度と親しい神の

イメージの間には弱い正の相関が見られた ($r=.24$ 、 $r=.26$)。過保護項目については相関は見られなかった。PBI は 16 歳までの父母の養育態度について覚えている範囲で答えてもらうものであり、その期間の親の養育態度について肯定的な認識を持っている人は肯定的な神表象を内在化させていることが示唆された (結果 5-1)。仮説 5-1 は一部支持された。

(2) 神表象と心理社会的発達理論との関連

次に、Erikson, E. H. の心理社会的発達段階と神表象の関連について検討した。その結果、第一段階の発達課題である基本的信頼感と厳しい神イメージとの間に弱い負の相関が見られた ($r=-.20$)。「基本的信頼感尺度」では「親しい神イメージ」との間に正の相関が、「厳しい神イメージ」との間に負の相関がそれぞれ見られたが、今回の調査では、厳しい神のイメージとの間にのみ負の相関が見られた (結果 5-2)。

第三段階の発達課題である主導性については相関が見られなかった。仮説 5-2 は支持されなかった。

第四段階の発達課題である勤勉性については、厳しい神イメージとの間に弱い負の相関が見られた ($r=-.28$)。負の相関が示されたことから、厳しい神のイメージと劣等感との間に関連があることが示唆された (結果 5-3)。仮説 5-3 は一部支持された。

第五段階の発達課題であるアイデンティティの確立については、相関は見られなかった。仮説 5-4 は支持されなかった。

第六段階の発達課題である親密性は、親しい神イメージとの間に弱い正の相関が ($r=.25$)、厳しい神イメージとの間に弱い負の相関が ($r=-.26$) それぞれ見られた。親密性と神表象の間には関連があることが示され (結果 5-4)、仮説 5-5 は支持された。第六段階の親密性は、アイデンティティを考えるとに着目すべき点であることが示唆された。

6 性別による検討

次に、各下位尺度間の相関を男女別にわけて算出した。その結果を表 20 (次頁) に示す。

(1) 性別による親の養育態度と神表象の関連

親の養育態度と神表象の関連については、女性の場合、父の養護的養育態度と親しい神のイメージの間に弱い正の相関が見られた ($r=.30$) (結果 5-5)。他は相関が見られなかった。

表 20 自我同一性・神のイメージ・親の養育態度の男女別相関

		ラスムッセンの自我同一性尺度日本語版						神イメージ尺度	
		REIS						GISJ	
		基本的信 頼感	自律感	主導性	勤勉性	アイデン ティ ティーの 確立	親密性	親しい神 イメージ	厳しい神 イメージ
男性									
GISJ	親しい神イメージ	.07	.10	.20	.19	.31	.17		
	厳しい神イメージ	-.50 **	-.39 *	-.16	-.47 **	-.23	-.29		
PBI	父養護	.30	.00	.24	.07	.07	.14	.04	.06
	父過保護	-.42 *	-.24	-.62 **	-.36 *	-.14	-.35 *	-.25	-.01
PBI	母養護	.12	.18	.49 **	.29	.28	.44 *	.32	.03
	母過保護	-.29	-.23	-.45 **	-.32	-.19	-.38 *	-.21	.15
								n=33	
		ラスムッセンの自我同一性尺度日本語版						神イメージ尺度	
		REIS						GISJ	
		基本的信 頼感	自律感	主導性	勤勉性	アイデン ティ ティーの 確立	親密性	親しい神 イメージ	厳しい神 イメージ
女性									
GISJ	親しい神イメージ	.25 *	-.14	.15	-.01	.14	.29 *		
	厳しい神イメージ	-.04	-.09	-.14	-.18	-.17	-.26 *		
PBI	父養護	.29 *	.06	.16	.11	.44 **	.26 *	.30 *	.10
	父過保護	-.05	-.17	-.07	-.22	-.11	-.20	.05	-.03
PBI	母養護	.30 *	.06	.32 **	.11	.18	.18	.24	-.05
	母過保護	-.07	-.18	-.25 *	-.23	-.05	-.18	-.11	.23
								n=66	

** $p < .01$, * $p < .05$

n=33

** $p < .01$, * $p < .05$

n=66

(2) 性別による神表象と心理社会的発達理論との関連

神表象と心理社会的発達段階との関連については、男性の場合、親しい神イメージとの間に相関は見られなかったが、厳しい神イメージについては、第一段階の基本的信頼感との間に ($r = -.50$) (結果 5-6)、第二段階の自律感との間に ($r = -.39$) (結果 5-7)、第四段階の勤勉性との間に ($r = -.47$) (結果 5-8)、それぞれ負の相関が見られた。女性の場合、第一段階の基本的信頼感と親しい神イメージとの間に弱い正の相関が見られた ($r = .25$) (結果 5-9)。第六段階の親密性については、親しい神イメージとの間に正の相関が ($r = .29$)、厳しい神イメージとの間に負の相関が ($r = -.26$)、それぞれ見られた (結果 5-10)。

以上のように、心理社会的発達段階と神表象との関連については、性差が見られた。

(3) 性別による親の養育態度と心理社会的発達理論との関連

次に、親の養育態度と心理社会的発達段階の関連について、男性の場合、父親の養育的態度と各発達段階の間には相関は見られなかったが、過保護的養育態度については、第一段階の基本的信頼感との間に負の相関が ($r = -.42$) (結果 5-11)、第三段階の主導性との間に強い負の相関が ($r = -.62$) (結果 5-12)、第四段階の勤勉性との間に弱い負の相関が

($r=-.36$) (結果 5-13)、第六段階の親密性との間に弱い負の相関が ($r=-.35$) (結果 5-14)、それぞれ見られた。特に、第三段階の発達課題である主導性と母親の養育態度の関連については、養護的養育態度との間に正の相関が ($r=.49$)、過保護的養育態度との間に負の相関がそれぞれ見られた ($r=-.45$) (結果 5-15)。さらに第六段階の発達課題である親密性と母親の養育態度の関連については、養護的養育態度との間に正の相関が ($r=.44$)、過保護的養育態度との間に負の相関が ($r=-.38$) それぞれ見られた (結果 5-16)。

女性の場合、父親および母親の養護的養育態度と第一段階の基本的信頼感との間にそれぞれ弱い正の相関が見られた ($r=.29$ 、 $r=.30$) (結果 5-17)。父親の養護的養育態度は、第五段階のアイデンティティの確立との間に正の相関が ($r=.44$) (結果 5-18)、第六段階の親密性との間に弱い正の相関が ($r=.26$) (結果 5-19) それぞれ見られた。母親の養育態度については、第三段階の主導性と養護的養育態度の間に弱い正の相関が ($r=.32$)、過保護的養育態度との間に弱い負の相関が見られた ($r=-.25$) (結果 5-20)。

7 まとめと課題

第二研究において、肯定的な神表象を獲得するために基本的信頼感が重要な意味を持っていることが示されたことを受け、本研究では神表象と人間のライフサイクルの関連について検討した。その結果を踏まえて、神表象と各発達段階との関連について考察した。

(1) 各発達段階と性差

心理社会的発達段階と神表象の関連については性別に特徴がみられた。男性の特徴は、厳しい神のイメージが各発達段階と負の関係にあることであった。特に、第一段階の発達課題と第四段階の発達課題にはその傾向が顕著に見られた。

女性の特徴は、親しい神のイメージと厳しい神のイメージが、親密性と関連があるということであった。全体のデータで算出したときにも親密性との間に相関が見られたが、性別に分析したところ、その相関は女性によるものであることが明らかになった。このことについては(4)で改めて考察する。

(2) 主導性と罪責感

第三段階の発達課題である主導性は、親の養育態度との関連で顕著な特徴が見られた。特に男性の場合、父親の過保護的養育態度、母親の養護的養育態度、そして母親の過保護

的養育態度との間に相関が見られた。このことは、養育態度が過保護的であった場合、主導性を身につけることができなかつたときに生み出される罪責感を抱き込む可能性があることを示唆している。Erikson, E. H. (1959) によれば、良心が確立するのはこの段階である (p.84)。信仰がモラルや良心の機能と関連があるとすれば、この段階の発達課題をクリアすることは重要であり、この段階で健全な良心が育つことは、健康的な信仰を培う備えになる可能性があることを示唆している。

(3) 勤勉の感覚と劣等感

Erikson, E. H. (1959) によれば、この第四段階の時期は、学校に入り、学ぶことを経験する時期であり、基準を示され、強制されてもやらなければならない体験を通して勤勉の感覚を身につける。それがうまく行かないときには、不安全感や劣等感を生み出す時期であるということである (p.92)。この段階は、厳しい神イメージとの間に負の相関が見られたことから (r=-.28)、神を厳しい存在としてイメージしている人は勤勉性が育ちににくく、ネガティブな面から見ると劣等感を蓄積してしまう可能性があることを示唆している。

第四段階で子どもがどのような神表象を内在化させるかは重要である。その時期に勤勉性を身につけることができる場合もあれば、逆に「裁判官」や「王」という神表象が取り込まれ、劣等感が蓄積される可能性もある。このことは、キリスト教教育のあり方にも一石を投じている。教会やキリスト教教育の現場において、どういう神表象が提示される必要があるのかは再考の余地がある。

(4) アイデンティティの確立と親密性

第五段階の青年期の発達課題であるアイデンティティの確立については、神のイメージとの関連は見られなかったが、父親の肯定的養育態度と関連があることが示された。性別では、男性よりも女性の場合に、因果関係までは特定できないにしても、父親の養護的養育態度が関連している可能性がある。

神のイメージとの関連では、第五段階よりもむしろ第六段階の親密性について特徴が見られた。Erikson, E. H. (1959) によれば、アイデンティティの感覚はこの段階で確立され、異性との本当の親密さが可能になるという (p.101)。そのことで自分に自信を持ち、それによって他者との関係を築こうとする (p.101)。

ところで Gilligan (1982) は女性のアイデンティティの確立に着目し、アイデンティテ

ィ形成には男女差があるとした。男女差は Erikson, E. H.も観察していたが (p.12)、Gilligan は、ライフサイクルの図式にそのことが表現されていないと考えた (p.12)。Gilligan によれば、女性のアイデンティティの特徴は人に対して愛着を持ち続けることにあるという (p.23)。男性はアイデンティティが確立することによって特に異性との親密性を深めるのに対して、女性の場合、異性との親密性を深めることによってアイデンティティが確立するという面があり、第五段階よりはむしろ親密性が重要になる第六段階にアイデンティティ確立の鍵があるということである (p.12)。

第六段階の発達課題である親密性と神表象との関連を見ると、男性の場合は関連が見られなかったが、女性の場合は関連が見られた。女性の場合は、どのような神表象を内在化させているかということと親密性に関連がある。この結果は、女性は親密性を通してアイデンティティを確立するという Gilligan の指摘を支持しており、肯定的な神表象の内在化が親密性の深まりに一役買っている可能性があることが示唆された。

基本的信頼感が神表象形成の要因になっていると言われるように(河村、2010、2013a)、その後の発達の段階においても、特に第四段階の勤勉性と第六段階の親密性に神表象が関連していることが示唆された。

(5) 次の研究への展望

本研究まで、神表象とアタッチメントの関連、神表象と心理社会的発達段階との関連を検討した。その結果を踏まえて、さらに詳細に検討するために、調査協力者の属性を指標に、神表象の内在化のあり方を検討する。

第六節 第六研究：神表象の属性別検討（調査C）

1 問題と目的

第二研究では、調査を実施した際に収集したデータから、属性別の分析を行った。その結果を受け、本研究では、第四および第五研究で分析した調査 C のデータについて、神表象の内在化のあり方とアタッチメントや心理社会的発達段階との関連を属性別に検討する。

2 仮説

第六研究は以下の仮説のもとに行う。

第一に、信仰年限および年齢と神表象との関連について検討する。信仰年限や年齢が進むと、神表象は肯定的に変化すると推察される（仮説 6-1）。

第二に、神表象の性差について検討する。第二研究の結果が示唆するように、男性より女性のほうが「親しい神のイメージ」を内在化させていることが推察される（仮説 6-2）。

第三に、神表象の宗派による差を検討する。第二研究では、「親しい存在」はプロテスタントとメソジスト系が高く、「厳しい存在」は聖公会とプロテスタントとメソジスト系が高く、カトリックは低かった。神表象は宗派によって差があることが推察される（仮説6-3）。

第四に、神表象と成人するまでの家族環境の関連について検討する。第二研究では、親を含めて家族のだれがキリスト者だったかによって、神表象に差があることが予測されるという仮説を立てたが（仮説2-11）、支持されなかった。第二研究の質問紙では、成人するまでの人間関係について尋ねていないため、実際の環境がどのようなものだったかは明らかにされていない。しかし、成人するまでの宗教的環境が神表象を決定づけるものではないという結果は、牧会臨床の現場における感触と異なるものである。神表象は家族がキリスト者であったかということに影響を受けることが推察される（仮説6-4）。

第五に、神表象と両親の養育態度の関連について検討する。第五研究では両親の養育態度が神表象の内在化のあり方と関連があることが示唆された。属性別の分析でも同じ結果が出るのが想定され、両親の養育態度と神表象の内在化のあり方に関連があることが推察される（仮説6-5）。

第六に、神表象と兄弟の中での位置との関連について検討する。自分が兄弟の中でどのような位置に生まれたかということは性格の形成に大きな影響があることは想定されるが、神表象の内在化のあり方にも影響を与えていることが推察される（仮説6-6）。

第七に、神表象と兄弟との関係との関連について検討する。兄弟との関係は神表象の内在化のあり方に影響を与えていることが推察される（仮説6-7）。

第八に、神表象の変化の様態について検討する。神表象はWesley, J.のケース・スタディーが示す通り、生涯で変化することは十分想定される。神表象の変化の様態は、急であったり緩やかであったりさまざまである。神表象の変化の様態とアタッチメントなどの他者との関わりには関連があることが推察される（仮説6-8）。

第九に、神表象の変化の様態と親の養育態度の関連について検討する。親の養育態度と神表象の変化に関連があることが推察される（仮説6-9）。

第十に、神表象の変化の様態と変化の方向の関連について検討する。神表象の変化の様

態は、神表象の変化の方向と関連があることが推察される（仮説6・10）。

3 方法

第六研究では、第三研究の本調査（調査 C）で収集したデータを分析した。調査 C では、調査協力者の年齢、性別、宗派、キリスト者になってからの年数、人格形成期の家族構成、人格形成期の家族との関係、神イメージが変化した体験の有無について尋ねた。そのデータをもとに、神表象を属性別に分析する。

4 属性別の分析

(1) 年齢

年代と神表象の関連について検討した。「1」は十代、「2」は 20 代というように、十年ごとの区切りを示す。「親しい神イメージ」、「厳しい神イメージ」、「父の養護的養育態度」、「父の過保護的養育態度」、「母の養護的養育態度」、「母の過保護的養育態度」について、年代別に差があるかを見るために分散分析を行った。その結果、「厳しい神イメージ」についてのみ主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、20 代が高いのに対して、40 代、50 代、60 代が低いという結果が出た。その結果を表 21 に示す。

表 21 年代と神のイメージの関連 分散分析結果

GISJ		2	3	4	5	6	7	8	検定
		20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	
厳しい神イメージ	n	10	11	24	33	32	11	5	$F = 2.74$
	平均	1.93	1.63	1.54	1.47	1.42	1.67	1.79	$df = 6,119$
	標準偏差	0.41	0.51	0.32	0.43	0.43	0.33	0.52	$p < .05$

*Tukey法による多重比較の結果、5%水準で、2>5、1%水準で、2>6となった。

n=126

厳しい神のイメージは、20 代よりも、中年期以降のほうが緩和されている（結果 6・1）。ただし、20 代のサンプル数は 18 であり、40 代の 41、50 代と 60 代の 55 と比較して十分とは言えない。さらに検討を重ねる必要がある。

次に、神アタッチメントについて年代別に検討した。「見捨てられ不安（自己観）」と「親密性の回避（他者観）」を測定することができる ECR-GO、および GAS を用いて、一般他者と神アタッチメントについて測定し、その平均の差を年代別に見るために分散分析を行った。その結果、「神との親密性の回避」についてのみ主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、20 代が高く、50 代が低かった。その結果を表 22（次頁）に示す。

表 22 神アタッチメントの年代別平均値の比較 分散分析結果

GAS		2	3	4	5	6	7	8	検定
		20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	
神との親密性の回避	n	10	11	24	33	32	11	5	$F = 2.89$
	平均	3.54	2.74	2.55	2.52	2.57	2.96	1.57	$df = 6,119$
	標準偏差	1.24	0.72	0.84	0.91	1.09	0.97	0.73	$p < .05$

*Tukey法による多重比較の結果、5%水準で、2>5、1%水準で、2>8となった。

n=126

この結果は、表 21 の「厳しい神イメージ」についての結果を支持するものである。若いころには神イメージが厳しく、神との親密性も回避する傾向があることが示唆された(結果 6-2)。仮説 6-1 は一部支持された。

(2) 性差

次に、神表象の性差を検討するために t 検定を行った。その結果を表 23 に示す。

表 23 GISJ と PBI の性別の平均値の比較 t 検定結果

		性別	n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)	
GISJ	親しい神イメージ	男	81	3.23	0.47	1.17	2.36	**
		女	138	3.38	0.44	(80, 137)	(217)	
	厳しい神イメージ	男	81	1.67	0.61	1.83	**	0.72
		女	138	1.62	0.45	(80, 137)	(217)	
PBI	父養護	男	81	2.76	0.60	1.38	1.20	
		女	138	2.87	0.71	(80, 137)	(217)	
	父過保護	男	81	1.89	0.47	1.02	0.44	
		女	138	1.92	0.48	(80, 137)	(217)	
	母養護	男	81	3.17	0.49	2.22	**	1.13
		女	138	3.07	0.73	(80, 137)	(217)	
	母過保護	男	81	1.85	0.45	1.38	1.38	
		女	138	1.95	0.53	(80, 137)	(217)	

** $p < .01$, 分散が異なる場合にはWelchの検定を行った。

n=219

その結果、「厳しい神イメージ」には男女差がなかったが、親しい神のイメージは女性が男性よりも高かった(結果 6-3)。

続いて、神アタッチメントの性差を検討するために t 検定を行った。その結果を表 24 に示す。

表 24 神アタッチメントの性別の平均値の比較 t 検定結果

		性別	n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)	
GAS	神・見捨てられ不安	男	51	1.98	0.91	1.22	0.07	
		女	76	1.97	0.82	(50, 75)	(125)	
	神・親密性の回避	男	51	2.85	1.05	1.22	1.89	*
		女	76	2.51	0.95	(50, 75)	(125)	

* $p < .05$

n=127

その結果、「神からの見捨てられ不安」については男女差がなかったが、「神との親密性の回避」については有意差が見られた。女性は男性よりも、神との親密性を保つ傾向があることが示された（結果 6-4）。仮説 6-2 は支持された。

厳しい神のイメージについては有意差が見られなかった。

(3) 宗派

次に、カトリック系・聖公会系とプロテスタント諸派の二つに宗派を分け、その差を見るために、神表象、神アタッチメント、一般のアタッチメント、親の養育態度について t 検定を行った。その結果を表 25 に示す。

尺度	下位尺度	宗派	n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)	
GISJ	親しい神イメージ	カトリック・聖公会	48	3.22	0.44	1.01 (47, 169)	2.14 (216)	*
		プロテスタント諸派	170	3.37	0.44			
PBI	父過保護	カトリック系・聖公会系	48	1.72	0.41	1.38 (47, 169)	3.18 (216)	**
		プロテスタント諸派	170	1.96	0.48			

** $p < .01$, * $p < .05$

n=218

その結果、「親しい神イメージ」と「父の過保護的養育態度」に有意差が見られた。「親しい神イメージ」についてはわずかながらプロテスタント系のほうが高く、プロテスタント系のほうが親しい神のイメージを内在化させていることが示された（結果 6-5）。

また「父の過保護的養育態度」についてはプロテスタント系のほうが高く、プロテスタント系のキリスト者のほうが父の養育態度が過干渉的だったと感じていることが示された（結果 6-6）。仮説 6-3 は支持された。

(4) キリスト者になってからの年数

キリスト者になってからの年数と神表象との関連について検討した。「1」は 1 年未満、「2」は 1～2 年、「3」は 3～5 年を表しているが、このカテゴリーを一つにまとめ、「4」は 6～10 年、「5」は 11～20 年、「6」は 21～30 年、「7」は 31～50 年、「8」は 51 年以上の六つで、平均値を比較するために分散分析を行った。その結果を表 26（次頁）に示す。

その結果、「親しい神イメージ」については主効果が有意ではなかったが、「厳しい神イメージ」については主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、5 年未満のキリスト者が、31 年以上のキリスト者よりも有意に高かった（結果 6-7）。

表 26 キリスト者になってからの年数と神のイメージとの関連 分散分析結果

GISJ		1~3	4	5	6	7	8	検定
		5年まで	6~10年	11~20年	21~30年	31~50年	51年以上	
親しい神イメージ	n	14	13	43	45	87	17	$F = 0.45$
	平均	3.32	3.34	3.36	3.30	3.31	3.47	$df = 5,213$
	標準偏差	0.41	0.40	0.49	0.51	0.44	0.37	n.s.
n=219								
GISJ		1~4	5	5	6	7	8	検定
		5年まで	6~10年	11~20年	21~30年	31~50年	51年以上	
厳しい神イメージ	n	14	13	43	45	87	17	$F = 2.41$
	平均	1.99	1.60	1.69	1.67	1.52	1.61	$df = 5,213$
	標準偏差	0.78	0.50	0.42	0.52	0.47	0.59	$p < .05$
*Tukey法による多重比較の結果、5%水準で、1>7となった。n=219								

次に、キリスト者になってからの年数とアタッチメントの関連を検討した。「1」は一年未満、「2」は1~2年、「3」は3~5年、「4」は6~10年を表しているが、これを一つにまとめ、「5」は11~20年、「6」は21~30年、「7」は31~50年、「8」は51年以上の五つのカテゴリーで平均値を比較するために分散分析を行った。その結果を表 27 に示す。

表 27 キリスト者になってからの年数と神アタッチメントとの関連 分散分析結果

			1～4	5	6	7	8	検定
			10年まで	11～20年	21～30年	31～50年	51年以上	
		n	14	25	23	46	19	
ECR-GO	見捨てられ不安	平均	3.38	2.69	2.43	2.69	2.29	$F = 4.37$ ** (1)
		標準偏差	0.91	0.88	0.80	0.76	0.71	$df = 4,122$
	親密性の回避	平均	3.29	3.86	3.43	3.84	3.76	$F = 1.64$
		標準偏差	0.70	1.11	0.80	0.90	1.05	$df = 4,122$
GAS	神からの見捨てられ不安	平均	2.41	2.12	1.95	1.94	1.56	$F = 2.32$
		標準偏差	0.67	1.02	0.92	0.79	0.68	$df = 4,122$
	神との親密性の回避	平均	3.07	2.93	2.55	2.65	2.05	$F = 3.05$ * (2)
		標準偏差	0.88	1.11	1.06	0.89	0.91	$df = 4,122$
** (1) Tukey法による多重比較の結果、5%水準で、1>7、1%水準で、1>6、1>8となった。								n=127
* (2) Tukey法による多重比較の結果、5%水準で、1>8、5>8となった。								

その結果、「見捨てられ不安」と「神との親密性の回避」については主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、「見捨てられ不安」については、10年までのキリスト者が、21年以上のキリスト者よりも高かった。また「神との親密性の回避」については、20年までのキリスト者が21年以上のキリスト者よりも高かった。キリスト者になって20年経った人は20年経っていない人よりも、一般他者へのアタッチメントも神アタッチメントもしっかりしていることが示された（結果 6-8）。

(5) 人格形成期の家庭環境

育った環境と神表象との関連について検討した。「1」はだれもキリスト者がいない、「2」は両親がキリスト者、「4」は母がキリスト者、「5」は親以外のだれかがキリスト者、「6」は家族全員がキリスト者を表す。平均の差を見るために、「親しい神イメージ」、「厳しい神

イメージ」、「父の養護的養育態度」、「父の過保護的養育態度」、「母の養護的養育態度」、「母の過保護的養育態度」についてそれぞれ分散分析を行った。その結果、「厳しい神イメージ」、「父の養護的養育態度」については主効果が有意であった。

「厳しい神イメージ」について多重比較を行ったところ、「6 家族全員がキリスト者だった」と回答した人は、「家族の一部がキリスト者だった」と回答した人よりも有意に低かった。その結果を表 28 に示す。

表 28 人格形成期の環境と神のイメージとの関連 分散分析結果								
育った環境		1	2	4	5	6	F値(4, 213)	多重比較 (Tucky法)
		だれもクリスチャンはいなかった	両親がクリスチャン	母がクリスチャン	親以外のだれかがクリスチャン	家族全員がクリスチャン		
n		111	42	26	20	19		
GISJ/厳しい神イメージ	平均	1.59	1.70	1.77	1.81	1.36	2.86 *	5%水準で5>6
	標準偏差	(0.54)	(0.52)	(0.39)	(0.57)	(0.30)		
** $p < .01$. * $p < .05$							n=218	

家族全員がキリスト者の場合、厳しい神のイメージが減少し、家族全員がキリスト者でない場合は、厳しい神のイメージを内在化させる傾向があることが示唆された（結果 6・9）。

次に、「父の養護的養育態度」について多重比較を行ったところ、「だれもキリスト者はいなかった」と回答した人よりも「家族全員がキリスト者だった」と回答した人のほうが高かった。その結果を表 29 に示す。

表 29 人格形成期の環境と父の養護的養育態度との関連 分散分析結果								
育った環境		1	2	4	5	6	F値(4, 213)	多重比較 (Tucky法)
		だれもクリスチャンはいなかった	両親がクリスチャン	母がクリスチャン	親以外のだれかがクリスチャン	家族全員がクリスチャン		
	n	111	42	26	20	19		
PBI/父・養護	平均	2.69	2.94	2.94	2.95	3.23	3.52 **	1%水準で、1<6
	標準偏差	(0.67)	(0.63)	(0.68)	(0.64)	(0.65)		
** $p < .01$, * $p < .05$							n=218	

これらの結果はサンプルサイズが小さいため結果の信頼性は高くないことが想定された。そこで分類を再検討し、「1」の「だれもキリスト者はいなかった」と回答した人と、それ以外の人について、平均値の差を見るために t 検定を行った。その結果を表 30 に示す。

表 30 キリスト者が家族にいるかによる父の養育態度の差の検討							t 検定結果
環境		n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)	
PBI 父養護	だれもクリスチャンはいなかった	111	2.69	0.67	1.09	3.32	**
	家族のだれかがクリスチャンだった	108	2.99	0.64	(110, 107)	(217)	
** $p < .01$					n=219		

父親の養育的養育態度については、だれかがキリスト者だったと回答した人のほうが、だれもキリスト者はいなかったと回答した人よりも有意に高かった。キリスト者がいない家庭より、家族のだれかがキリスト者であるほうが、父親の養育態度が養護的であったと感じており、さらには、家族全員がキリスト者の家庭の場合、そうでない家庭で育った場合よりも父親の養育態度が良かったととらえていることが示された（結果 6-10）。仮説 6-4 は支持された。

(6) 両親との関係

1) 両親の養育態度と神表象の関連

まず、「親しい神イメージ」、「厳しい神のイメージ」、「父の養護的養育態度」、「父の過保護的養育態度」、「母の養護的養育態度」、「母の過保護的養育態度」について相関を算出した。その結果を表 31 に示す。

表 31 自我同一性・GISJ・親の養育態度の相関				
	父親		母親	
	養護的	過保護的	養護的	過保護的
親しい神イメージ	.16 *	-.09	.24 **	-.12
厳しい神イメージ	-.05	.08	-.09	.21 **
** $p < .01$, * $p < .05$			n=223	

「親しい神イメージ」は「父の養護的養育態度」、「母の養護的養育態度」との間に正の相関が見られ、「厳しい神イメージ」は「母の過保護的養育態度」との間に正の相関が見られた。両親の養護的な養育態度は、肯定的な神イメージの内在化と関連があり、母親の過保護的・干渉的な養育態度は、否定的な神イメージを内在化させることと関連があることが示された（結果 6-11）。

調査協力者の属性の欄の「父親との関係」、「母親との関係」については、関係が良好だったと回答した人のほうが、そうではないと回答した人よりも親しい神のイメージを抱いており、同じ傾向を示した。

2) 父親との関係

次に、父親との関係と神表象との関連を検討した。父親との関係が良好であったかという問いに対して、「1 とてもそう思う」、「2 そう思う」、「3 あまりそう思わない」、「4 そう思わない」の四つの選択肢で回答してもらった。選択肢 1 と 2、選択肢 3 と 4 をグループとし、その平均値の差を検討するために t 検定を行った。その結果、「親しい神イメージ」

について有意差が見られた。「厳しい神イメージ」、「神からの見捨てられ不安」、「神との親密性の回避」については有意差が見られなかった。その結果を表 32 に示す。

表 32 父との関係と神のイメージとの関連の検討 t 検定結果							
父との関係			n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)
GISJ 親しい神イメージ	良い(選択肢1と2)	悪い(選択肢3と4)	164	3.36	0.44	1.27	1.67 *
			57	3.24	0.49	(163, 56)	(219)
厳しい神イメージ	良い(選択肢1と2)	悪い(選択肢3と4)	164	1.62	0.54	1.50	0.56
			57	1.66	0.44	(163, 56)	(219)

* $p < .05$

n=221

このことから、父親との関係が良好だった場合に、親しい神のイメージを描くことができる可能性があることが示された（結果 6-12）。

3) 母親との関係

次に、母親との関係と神表象との関連を検討した。母親との関係が良好であったかという問いに対して、「1 とてもそう思う」、「2 そう思う」、「3 あまりそう思わない」、「4 そう思わない」の四つの選択肢で回答してもらった。各選択肢の平均値の差を検討するために分散分析を行った。その結果を表 33 に示す。

表 33 母との関係と神のイメージとの関連の検討 分散分析結果							
						多重比較	
		1	2	4	5		
母親とは良い関係だった		とても そう 思う	そう 思う	あまり そう 思わ ない	そう 思わ ない	F値(3, 218)	(Fisherの最小有意差法)
n		90	96	26	10		
GISJ/親しいイメージ	平均	3.47	3.23	3.18	3.42	6.05 **	1>2, 1>3
	標準偏差	(0.44)	(0.44)	(0.39)	(0.55)		
GISJ/厳しいイメージ	平均	1.60	1.64	1.73	1.55	0.50	
	標準偏差	(0.51)	(0.52)	(0.56)	(0.39)		
** $p < .01$, * $p < .05$ n=222							

** $p < .01$, * $p < .05$

n=222

その結果、「親しい神イメージ」について主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、「1 とてもそう思う」と回答した人の「親しい神イメージ」の得点が有意に高かった。このことから、母親との関係が良好だった場合に、親しい神イメージを描くことができる可能性があることが示された（結果 6-13）。

「厳しい神イメージ」、「神からの見捨てられ不安」、「神との親密性の回避」については有意差が見られなかった。仮説 6-5 は一部のみ支持された。

(7) 兄弟の中での自分の位置

兄弟の中での自分の位置と神表象との関連を検討した。「1 一人っ子」、「2 二人兄弟の上」、「3 二人兄弟の下」、「4 三人以上で自分が一番上」、「5 三人以上でまんなか」、「6 三人以上

で自分が一番下」の六つの選択肢について、その平均値の差を検討するために分散分析を行った。その結果、「親しい神イメージ」、「厳しい神イメージ」、「神からの見捨てられ不安」、「神との親密性の回避」についていずれも有意差はなかった（結果 6-14）。仮説 6-6 は支持されなかった。

(8) 兄弟との関係

兄弟との関係と神表象との関連を検討した。兄弟との関係が良好であったかという問いに対して、「1 とてもそう思う」、「2 そう思う」、「3 あまりそう思わない」、「4 そう思わない」の四つの選択肢で回答してもらった。各選択肢の平均値の差を検討するために分散分析を行った。その結果を表 34 に示す。

表 34 兄弟との関係と神のイメージとの関連の検討							分散分析結果	
兄弟とは良い関係だった		1	2	3	5	F値(3, 218)	多重比較 (tucky法)	
		とてもそう 思う	そう思う	あまりそう 思わない	そう思わ ない			
n		57	106	28	10			
GISJ/親しいイメージ	平均	3.47	3.23	3.35	3.68	5.72	** 1>2, 2<4	
	標準偏差	(0.39)	(0.47)	(0.52)	(0.26)			
GISJ/厳しいイメージ	平均	1.60	1.64	1.72	1.50	0.59		
	標準偏差	(0.55)	(0.52)	(0.52)	(0.41)			
** $p < .01$, * $p < .05$						n=201		

その結果、「親しい神イメージ」については主効果が有意だった。多重比較を行ったところ、「兄弟と良い関係だったか」という問いに「とてもそう思う」と回答した人は「そう思う」と回答した人よりも親しい神イメージの値が高かった。このことから、兄弟との関係が良好な人ほど親しい神イメージをもっている可能性があることが示された。また関係が良好だったと回答した人よりも、「4」の良好ではなかったと回答した人のほうが親しい神イメージの値が高かった。これはサンプル数が十というように少なかったため、結果の信頼性に疑問がある。「厳しい神イメージ」は主効果が有意でなかった。

以上のことから、両親だけでなく兄弟との関係も神イメージの内在化に影響を与えている可能性があることが示された（結果 6-15）。仮説 6-7 は支持された。

ここで、兄弟との関係と両親の養育態度との関連について検討した。兄弟との関係がどうだったかという問いに対する四つの回答について、PBI の各下位尺度の平均値の差を検討するために分散分析を行った。その結果を表 35（次頁）に示す。

表 35 兄弟との関係と親の養育態度との関連の検討 分散分析結果

兄弟とは良い関係だった		養育態度				F値(3, 218)	多重比較 (tucky法)
		1 とてもそう 思う	2 そう思う	3 あまりそう 思わない	5 そう思わ ない		
PBI	n	57	106	28	10		
父・養護的養育態度	平均	3.22	2.79	2.65	1.95	15.23 **	1>2=3>4
	標準偏差	(0.63)	(0.60)	(0.57)	(0.72)		
父・過保護的養育態度	平均	1.72	1.91	1.93	2.56	10.73 **	1<2=3<4
	標準偏差	(0.39)	(0.43)	(0.52)	(0.50)		
母・養護的養育態度	平均	3.43	3.11	2.88	2.28	13.05 **	1>2=3>4
	標準偏差	(0.62)	(0.55)	(0.60)	(0.93)		
母・過保護的養育態度	平均	1.71	1.91	2.00	2.38	6.90 **	1<2=3=4
	標準偏差	(0.46)	(0.42)	(0.61)	(0.64)		
** $p < .01$, * $p < .05$						n=201	

その結果、四つの下位尺度についていずれも主効果が有意であった。両親が養護的な養育態度を取っていた人と感じている人ほど兄弟との関係が良好であり、両親が過保護的・過干渉的な養育態度を取っていたと感じている人ほど、兄弟との関係は良好でないことが示された。

両親の養育態度は神表象とも連動しているため、両親の養育態度、兄弟との関係、神表象が連動していることが示された（結果 6-16）。

5 神表象の変化

(1) 神表象の変化とアタッチメントとの関連

神表象が生涯で変化したかについて、「1 今まであまり変化がないと思う」、「2 徐々にだが前と今を比較すると違ってきていると思う」、「3 ある時期や出来事を境に変化したと思う」、「4 あまり固定していなくて、いろいろ変化したと思う」、「5 その他」の五つの選択肢で回答してもらった。それぞれの選択肢について、神表象、神アタッチメント、一般他者へのアタッチメントの差を見るために分散分析を行ったところ、「親しい神イメージ」、「厳しい神イメージ」、「神からの見捨てられ不安」、「神との親密性の回避」、一般他者からの「見捨てられ不安」、一般他者との「親密性の回避」いずれも主効果が有意でなかった。

次に、「1 今まであまり変化がないと思う」、「2 徐々にだが前と今を比較すると違ってきていると思う」、「3 ある時期や出来事を境に変化したと思う」の三つの選択肢について検討した。「神表象に変化があった」と感じている人（選択肢 2 と 3）を一つのカテゴリーにして、「神表象に変化がない」と感じている人（選択肢 1）と比較するために t 検定を行った。その結果を表 36（次頁）に示す。

表 36 変化がなかったと答えた人と変化があったと答えた人の平均値の比較 t 検定結果

ECR-GO	性別	n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)
親密性の回避 (他者観)	変化がないと答えた人(1)	31	4.00	1.17	1.96 *	1.76 *
	変化があったと答えた人(2, 3)	93	3.60	0.84	(30, 92)	(40.692)

* $p < .05$ 等分散が異なったためWelchの検定を行った

n=124

その結果、「神表象に変化がなかった」と答えた人は、「神表象が変化した」と答えた人よりも人との親密性を回避する傾向があることが示された (結果 6-17)。

次に、「神表象に変化がなかった」と答えた人と「神表象に緩やかな変化があった」と答えた人を一つのカテゴリーにし (選択肢 1 と 2)、「神表象に急な変化があった」と答えた人 (選択肢 3) と比較するために t 検定を行った。その結果を表 37 に示す。

表 37 急な変化があった人とそれ以外の人の平均値の比較 t 検定結果

ECR-GO	性別	n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)
親密性の回避 (他者観)	変化がないか緩やかな変化と答えた人(1, 2)	63	3.87	1.04	1.70 *	2.13 *
	急な変化があったと答えた人(3)	61	3.52	0.80	(62, 60)	(116.008)

* $p < .05$ 等分散が異なったためWelchの検定を行った

n=124

その結果、「神表象に急な変化があった」と答えた人は、「神表象が変化していない」、あるいは「神表象が変化したとしても急激な変化ではなかった」と感じている人よりも、他者との親密性を保つ傾向があり、「神表象の変化が必ずしも急なものではなかった」と感じている人は、他者との親密性を回避する傾向があることが示された。

以上のことから、神表象の変化を感じている人は、神表象があまり変化していないと感じている人よりも他者との親密性を保とうとする傾向があることが示された (結果 6-18)。仮説 6-8 は支持された。

(2) 神表象の変化と親の養育態度との関連

神表象の変化と父の養育態度の関連について検討した。分析は質問紙 B 版のデータを使用して行った。生涯で神表象が変化したかという問いに対して、「1 今まであまり変化がないと思う」、「2 徐々にだが前と今を比較すると違ってきていると思う」、「3 ある時期や出来事を境に変化したと思う」、「4 あまり固定していなくて、いろいろ変化したと思う」という選択肢を選んだ人について、父親の養育態度の得点の平均を比較するために分散分析を行った。その結果を表 38 (次頁) に示す。

その結果、父の養育的養育態度について主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、「2 徐々に変化した」と「3 ある時期や出来事を境に変化した」との間で有意な差が見

られた。「神表象が徐々に変化した」と答えた人は、「神表象がある出来事を境に変化した」と答えた人よりも、傾向として父の肯定的な養護を受けて育てられたと認識していることが示唆された。父から肯定的・養護的な養育態度で接してもらえなかったと認識している人は、神表象が急激に変化する傾向があることが示された（結果 6-19）。

表 38 神表象の変化と父の養育態度との関連の検討 分散分析結果

		1今まであまり変化がないと思う	2徐々にだが前と今を比較すると違ってきていると思う	3ある時期や出来事を境に変化したと思う	4あまり固定して、いろいろ変化したと思う	検定
	n	31	32	61	2	$F = 3.14$
父の養護的養育態度	平均	1.82	2.11	1.68	1.96	$df = 3,122$
	標準偏差	0.71	0.54	0.66	0.65	$p < .05$

*Tukey法による多重比較の結果、1%水準で、2>3となった。

n=126

次に、母の養育態度との関連について検討した。「1 今まであまり変化がないと思う」、「2 徐々にだが前と今を比較すると違ってきていると思う」、「3 ある時期や出来事を境に変化したと思う」、「4 あまり固定して、いろいろ変化したと思う」の四つの選択肢について、「神表象がゆっくり変化した」と感じている人（選択肢 2）とその他の人の母親の養育態度の得点の平均を比較するために t 検定を行った。その結果を表 39 に示す。

表 39 神表象の変化と母の養育態度との関連の検討 t 検定結果

PBI	性別	n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)
母親の養護的養育態度	ゆっくり変化したと答えた人(2)	32	2.37	0.40	2.95 **	3.18 **
	それ以外の人(1と3と4)	94	2.05	0.69	(31, 93)	(93,211)

** $p < .01$, 等分散が異なったためWelchの検定を行った。

n=126

その結果、「神表象が徐々に変化した」と答えた人の平均値はそれ以外の人々の平均値よりも高く、神表象がゆっくり変化したと感じている人は母の養護的養育態度を受けて育った傾向があることが示された（結果 6-20）。仮説 6-9 は支持された。

父・母とも、過保護的養育態度については平均に有意差がなかった。

(3) 神のイメージの変化の方向

次に、神表象が変化したと回答した人について、どのような方向への変化だったかをたずねたものをまとめた。それを表 40（次頁）に示す。

厳しい神のイメージから親しい神のイメージに変化したと回答した人について、徐々に変化したと回答した人が 14（21%）であったのに対し、急に変化したと回答した人が 37

(36%)であった。このことから、神表象が急に変化した人は、神表象が徐々に変化した人よりも、神表象が親しいものになる傾向があると考えられる（結果 6-21）。変化した後の神表象が親しさと厳しさの両方を含んでいると回答した人は、徐々に変化したと回答した人と急に変化したと回答した人の間で差が見られなかった。仮説 6-10 は支持された。

表 40 神表象の変化の方向

		神イメージの変化				合計
		1「変化がない」	2「徐々に変化」	3「急に変化」	4「固定していない」	
変 化 の 方 向	2「厳しい→厳しさ・親しさ」		19 (28%)	19 (18%)		38 (17%)
	3「厳しい→親しい」		14 (21%)	37 (36%)		51 (23%)
	4「親しい→厳しい」		1 (1%)	1 (1%)		2 (1%)
	5「親しい→厳しさ・親しさ」		13 (19%)	9 (9%)		22 (10%)
	6「親しい→さらに親しい」		16 (24%)	22 (21%)		38 (17%)
	7「その他」		4 (6%)	10 (10%)		14 (6%)
	該当せず	39	1 (1%)	5 (5%)	9	54 (25%)
合計		39	68 100%	103 100%	9	219 100%

6 まとめと課題

第六研究では、第二研究で得られた属性別分析の結果を踏まえて、神表象、アタッチメント、神アタッチメント、心理社会的発達段階について属性別に検討した。検討した結果に関連して、以下の四点について考察した。

(1) ライフサイクルと神表象の変化

本研究では、年代やキリスト者になってからの年数に応じて神表象が変遷していることを示唆する結果が得られた。ところが、第三章・第五節・2 でも述べたとおり、ライフサイクルを研究対象にする場合には、同一サンプルを時間軸で追う縦断的研究を計画することが望ましいが、調査対象が数十年におよぶことから、実際には不可能である。本研究の分析は縦断的研究でないため、本研究の結果のみにより人の生涯のプロセスで厳しい神のイメージが徐々に緩和されて行くと結論づけることはできない。30代と70代の人がある時代にどのような影響を受けたかという変数も考慮されなければならない。しかしながら、不確定要素を考慮した上で、ライフサイクルにおける神表象の変遷を一つの傾向あるいは可能性として提示することは可能であると考えられる。

年代別に神表象の差異を検討したところ、キリスト者になってから五年程度は、厳しい神のイメージを取り込む傾向があるが、年数が経過するとその厳しい神イメージは少しずつ減少する可能性があることが示された。それとともに「見捨てられ不安」や「神との親

密性の回避」も徐々になくなり、年限を重ねることによって、神のイメージが肯定的に変化して行く。キリスト者になってからのしばらくの時期には、キリスト者としての基準に生きようという心理が働くために、神を基準としてとらえやすいのかもしれない。

40～50 代に厳しい神のイメージが徐々に薄れ、神との親密性が深まって行くという可能性は、Erikson, E. H.の心理社会的発達段階におけるアイデンティティの問題と関連があることが推察される。アイデンティティの確立の鍵は、第三章・第五節・7・(4)で述べたとおり第六段階の親密性にあるとされるが、その第五研究では、親密性が深まるときに、神表象が影響を与えていることが示唆された。

谷（1998）は時間的展望について検討し、基本的信頼感と時間的展望に関連があることを明らかにした。神表象の時間的展望については、親しい存在としての神表象が基本的信頼感の形成にプラスの影響を与えることがわかっており（河村、2010、2013a）、親密性の確立の段階でも影響を与えている可能性があることは注目に値する。神表象がライフサイクルの底流にあって影響を与え続けている可能性があると考えられる。

本研究は縦断的研究ではないため、今後さらに検討を重ねる必要がある。

(2) 性差

性差については、親しい神のイメージは男性よりも女性が高い値を示したが、厳しいイメージについては性差が見られなかった。2010 年の調査では、親しい存在としての神のイメージは男性よりも女性のほうが高い値を示し、逆に厳しい存在としての神のイメージは女性よりも男性のほうが高い値を示した（河村、2010、2013a）。一般的な傾向として、男性よりも女性が神を親しい存在として受けとめていると考えられる。

厳しい存在には、「王」と「裁判官」の神表象が含まれ、これはいずれも基準を示す表象であり、父性・母性でいえば父性である。家族という観点からすれば、父親が母親に比較してやや厳しい神のイメージを持ち、母親が父親に比較してやや優しい神のイメージを持っていることは、家族のダイナミズムのバランスを保つ背景的要因と考えることもできる。

ところで、聖書が示す父性は、否定的父性性というよりは理想的な父性性に近いものである。父性性は、もし肯定的・生産的に作用すれば、「支柱性」としての機能を果たし、個人の心的発達、自我の成長を支え導くことができるはずである（松本、p.62）。ところが、GISJ の厳しい神のイメージは、第三章・第一節・6・(4)で述べたように、理想的な父性性ではなく否定的・律法的な「桎梏性」の父性である。また、親しいイメージに分類される

「父」のイメージは、受容的な父性性が中心となり、理想的な父性性は載りにくかった。家族が健全に機能するためには、父性性が否定的な意味で発揮されるのではなく、社会性を促すような健全な意味で発揮される必要がある。見方を変えれば、男性のほうが厳しい神のイメージが強かったということは、家族の形成にとってある種の危うさが含まれていることを示唆していると考えられることもできる。

またこのことは、研究対象領域の教会のキリスト者に女性が多いこととも関連がある可能性がある。信仰をもって三～五年程度では厳しい神のイメージが強いが、信仰の年数を重ね、神との関係が深まって行くとき、男性性に比較して女性性は有利に働く可能性があるということである。また、男性に比較して女性が親しい神のイメージを内在化させているということは、親密さの重要性を述べた Gilligan の指摘を支持するものである。なぜ日本人キリスト者は女性が多いのか、なぜ従来のキリスト教の提示は女性性に受けやすいのかということについて、人間理解を深める中で再考する必要があると考えられる。

(3) 人格形成期の家庭環境

人格形成期の家庭環境については、家族全員がキリスト者だった人は、そうではない人よりも厳しい神のイメージの値が低かった。家族全員がキリスト者である場合には、「王」や「裁判官」という厳しい表象をそれほど持つことなく人格形成ができるということを示唆している。一部の家族だけがキリスト者である場合は、全員がキリスト者の場合よりも、人生観の違いなどから来る緊張が家庭内に存在するためかもしれない。

ここで、父親の養護的な養育態度に着目したい。父親の養育態度が養護的かどうかについては、「だれもキリスト者はいなかった」と回答した人よりも「家族全員がキリスト者だった」と回答した人のほうが高かった。家族全員がキリスト者で、父親が養護的な役割を果たすことができれば、すなわち八つの神の役割イメージにおける「父」役割を十分に果たすことができれば、子どもたちは不必要に厳しい神表象を内在化させないで人格形成をすることが可能であるということができる。

ところで、相関分析では、両親の養護的な養育態度は肯定的な神表象の内在化と関連があったが、母親の過保護的・干渉的な養育態度は否定的な神表象の内在化と関連があった。これらのことから、健全な神表象の形成、そしてそのことが影響を与える健全な人格形成にとって、父の養育態度が養護的であること、母の養育態度が過干渉的でないことは極めて重要である。さらに、兄弟との関係も神表象と関連があることが示された。兄弟との関

係が極めて良好であったと認識している人は親しい神のイメージを内在化させる傾向があった。兄弟を含め、家族全体が機能していることは、神表象の形成のために重要である。

(4) 神表象の変化

神表象に変化がなかった人は、神表象が急激に変化した人よりも、一般他者との親密性を回避する傾向があった。見方を変えれば、神表象が人生のどこかで変化したと認識している人は、一般他者と親密な関係を構築する傾向があるということである。

さらに、神表象の変化が緩やかなものであった人と急激なものであった人を比較したところ、父親の養育態度が養護的であったと認識している人ほど、神表象は徐々に変化していることが示唆された。逆に見れば、父親の養育態度が養護的でなかったと認識している人は、神表象はある時を境に急激に変化する可能性があるということである。人格形成期の環境が良好でないほうが、神表象の変化を急激に経験し、そのことで神表象の変化を明確に認識しているという結果は着目する必要がある。

ここで、神表象の変化がどのような方向への変化であったかを検討した。変化した後の神表象に親しさと厳しさの両方が含まれているというとらえ方をしている人について、徐々に変化したと回答した人と急に变化したと回答した人を比較したところ、同数であった。しかし、神のイメージが親しいものになったと回答した人について、徐々に変化したと回答した人と急に变化したと回答した人を比較したところ、急に变化したというとらえ方をしている人が多かった。また、親しいイメージがさらに親しくなったというとらえ方をしている人についても、急に变化したととらえている人が多かった。人格形成期の環境が必ずしも良好でなかった人は、良好だった人に比較して急激な変化を体験するが、神のイメージも厳しいものから親しいものへ変化したととらえている人が多いことがわかる。神表象の急激な変化は、神表象を親しいものに変える契機となり、そのことによって、一般他者との親密な関係を構築しようとする可能性があることを示唆している。

ところで、第三章・第二節・7・(2)で述べたように、内面の宗教性と外面に表れる社会性は必ずしも一致しない。すなわち、厳しい神のイメージは、基本的信頼感や自尊感情に負の影響を与えていながら、それがすぐに対人的・社会的自覚・行動に表現されるわけではなく、厳しい神表象を内在化させていても、社会関係が悪くならないように自分を支えることができるのである。そうであるならば、内在化させている神表象が急激に変化したとしても、それがすぐに社会性の促進につながるわけではないという見方もできる。内面

における神表象の急激な変化が神表象を親しいものに変容させ、そのことによって、一般他者との親密な関係を構築しようとする可能性があっても、それがすぐに行動に表現されるわけではないこともあわせて考慮しなければならない。

(5) 次の研究への展望

諸外国での神表象研究を受け、第一研究から第六研究では日本人を対象に調査を行い、日本人キリスト者の神表象について分析した。次の研究ではさらに焦点を絞り、日本人の「甘えの構造」に焦点をあてて、神表象の内在化について分析を行う。

第七節 第七研究：神表象と甘えの心理の関連（調査D）

1 日本人の心理と神表象

(1) 一神教的神概念と日本の神概念

Freud, S.や Rizzuto, A.が論じた神表象は、わが国のキリスト者にとっても有効かという点は検討しなければならない。このことを考察するために、Freud, S.や Rizzuto, A.が論じている神表象、わが国という文化背景においてキリスト者の中に形成される神表象、そして聖書が提示する神概念の三点を考慮する必要がある。

まず、Freud, S.が示した神表象は父の「イマージ」と関連があり、Rizzuto, A.が示した神表象は移行対象と関連がある。このような神が、絶対他者として被造物を創造し、感情を表出し、明確な意志をもって人間と関わるキリスト教的な神と同じかという問題である。

次に、Rizzuto, A. (1979) は一神教の形成そのものについては論じていないが、現代の西洋世界を研究対象としていることから (p.87)、そこで論じられている神が一神教であることは前提となっている。ところが、日本的な文化背景では、神は汎神論的な神であり、人間を創造した絶対他者とはほど遠い。この意味で Freud, S.がユダヤ人であったことは意味がある。Freud, S.の神は、聖書に提示されている神であることが前提となっていたはずである。アルゼンチンで生まれ、アメリカに移住した Rizzuto, A.の神も、一神教的神概念が前提になっていることは推察できる。Granqvist et al. (2012) はユダヤ人という点を重視し、アタッチメント人物としての神についてユダヤ人を対象に調査を実施している。

以上のことを踏まえて、両親がキリスト者でなかったなど、キリスト教と関わりのない中で人格形成をした調査協力者の神表象について調査することは意味があると考えられる。

人格形成のプロセスを経た後にキリスト教的な絶対他者と出会ったと認識している人が、キリスト教的な神概念と出会う以前に神をどのようにとらえていたかという問題である。

第二章・第四節・5・(3)で述べたとおり、「先行的恵み」や「共通恩恵」の概念から考察すれば、理論的には、欧米のキリスト者であっても日本人キリスト者であっても、キリスト者であるということで共通点を見いだすことができるはずである。神学的概念である「先行的恵み」や「共通恩恵」について、人間という視点から見たときにも共通点があるかは検討する必要があると考えられる。

幼少期の神表象に文化を越えた共通性があるならば、心理臨床やキリスト教教育の現場で、幼少期の神表象をどのように提示するかは重要なテーマとなる。Wesley 理論の影響を受けた日本のキリスト教会は、「回心」を重要視してきた。「クリスチャン・ホーム」（筆者注：両親などの家族の構成員がキリスト者である家庭の意）で人格形成をした場合でも、成人が経験するのと同等の「回心」を求め、罪の「悔い改め」も強調された。このような考え方の背景には、神との出会いは「回心」によるものであり、キリスト教の背景の中で育った場合を含めて、「回心」以前の期間はそれほど重要視される必要はないという前提があったことが推察される。しかし Rizzuto 理論からすれば、「回心」は必ずしも劇的な変化である必要はない。そうならば、幼少期に形成される神表象を豊かに育てるという視点を重視し、幼少期には、人間が罪人であることを教えるよりは、人間存在の価値と、幼少期に「誕生した」神表象を豊かにするという点に主眼を置いたキリスト教教育が求められるのではないかという仮説である。以上のことから、キリスト教的な背景の中で人格形成をし、その後「回心」に至った人にとって、「回心」以前の神表象の様態について調査することには意義がある。

(2) 「甘えの理論」

日本という文化背景の中で、神表象が西洋的なコンテキストと同じかどうかを検討するための指標として、ここでは土居の「甘えの理論」に着目する。土居（1997a）が提唱した甘えの概念は、日本人の心理を理解するための鍵概念となっている（p.23）。しかし一般的な意味での甘えは文化を越えて人間に普遍的な心理でもあり、甘えを理解するためには、日本的な特徴という面と人間にとって普遍的な面の両方から理解する必要がある。

土居（1997a）によれば、人間に普遍的な発達の視点から見ると、甘えの心理的原型は母子関係における乳幼児の心理にある（p.80）。甘えとは乳児がある程度発達した段階で、

母親が自分とは別の存在であることを知覚した後に、その母親を求めることを指して言うことばである。また甘えの心理は、人間が本来経験する分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとするものであり (p.82)、この心理はすべての乳児に観察しうるものであるという (p.81)。さらに甘えの心理は乳児期だけにとどまらず、成人した後も、新しい人間関係が形成される時に発動されているのではないかとする (pp.82～83)。このように甘えは生涯を通して発達的に理解しなければならないものである。

Rizzuto, A.によれば、成長とは母親との「一体」の状態から離れることである。Winnicott, D.W. (1971) はこの点について、「ほぼよいといえる母親」(橋本訳、1979、p.13) という表現を用いている。母親はいつまでもいる存在ではないが、そこにいない時も存在を感じ取ることができるという考え方である。そして、神が内在化されるのも同様のメカニズムがあり、神が物理的に存在しなくてもその神の存在を感じ取れるという仮説である。この点に関する土居の見解は、Rizzuto, A.と類似するものであるということができよう。

土居 (2001) は、甘えとアタッチメントの関係について言及しているが、実証的な根拠を示しているわけではない。玉瀬・今村 (2006) は土居の指摘を受け、玉瀬・相原 (2004) によって作成された「多次元『甘え』尺度」、および戸田 (1988) によって作成された「内的作業モデル尺度」を用いて甘えとアタッチメントの関係を検討し、安定型、回避型、両価型の三つのアタッチメント傾向が甘えの形成に影響を与えていることを明らかにした。

土居が問題点として指摘しているのは、日本人の場合、大人になってからこの甘えがさまざまな行動パターンの根底に残っているのではないかとということである。土居 (2001) によれば、その甘えは言語化されないまま、また意識すらされないまま重要な機能を果たしており (p.212)、さらには甘えが日本人個人の心理の特徴になっているだけでなく、日本の社会構造を理解するための鍵概念ともなっているということである (p.23)。

日本人の心理について論じるときにもう一つ問題になるのは「個」の概念である。土居は、『甘え』の構造 (1997a) の中で、「義理と人情」(p.29)、「内と外」(p.38)、さらには「表と裏」(2009) の中で、「オモテとウラ」(p.10)、「建前と本音」(pp.37～38)、「個人と制度」(p.54)、さらには天皇制の背景にある甘えの心理 (1997a、p.64)、これらの日本人的特徴について甘えの角度から分析を試みている。ここで問題になるのは「個人と制度」をどのように考えるかということである。土居によれば、日本では、個人は集団に守られて存在し、アメリカでは、制度は個人の利益のためにあるという (2009、pp.54～55)。さらに土居 (1997a) は、「個」と集団との関係について、「自分がある」「自分がない」とい

う視点から考察を加えている (p.162)。日本的な概念では、「個」は集団の中に埋没し、必ずしも尊重されない。しかし欧米では「自分がない」ことは美德ではない。

Morris (1983) によれば、人間が西欧において「個」を意識するようになったのは12世紀になってからである (p.286)。そしてこの時期に新しい内的信心のパターンが生まれたと言われる (p.289)。このことから、「個」の意識と神への信頼には関連があることが推察される。坂口 (1996) は「個」について、以下のように述べている。

人としては私と種的に同一なもの。しかし個なる私にとっては他者。神としては私と絶対に異であり他であるもの。しかも創造者として種的にも個としても、私の存在の根源であり、私を包み、あらしめているもの。私にとって絶対に他であり私と非連続であり、しかも私とある意味で絶対に同一なもの。……しかもまた、両者が自己を失わずに差異と区別を保ちつづける場とも考えなければならない (p.278)。

坂口はこのように、絶対他者としての「神」との関係の中に「個」の出どころがあるとした。キリスト教的な神観念には、そもそも「個」が意識されているということである。

ここで、甘えとの関わりで信仰はどのような意味を持つかについて、二つの点に着目したい。第一は神の観念である。土居は祖先崇拜について論じた際、神について触れている。土居 (1997a) によれば、死んで神や仏になるという思想と甘えの心理には関係があり、さらには甘えの葛藤の彼岸にある者を神と呼び、それこそが日本人的な神観念の本質であるとする (pp.66~67)。日本人的な神観念は甘えの葛藤と関連があり、キリスト教的な神観念とは異なるということである。さらに「自己充足し全能で人間を助けてくれる神の観念はない」とも述べ (2001、p.181)、絶対他者としての神が日本にはないことを示唆している。神表象研究をわが国において行う場合には、この点が問題にされなければならない。

第二は、甘えと信頼の違いである。土居 (1997b) は以下のように述べている。

私が思うに、真の信頼は甘えを超越するものなのではなかろうか。というのは甘えの感情は、もともと信頼感が乏しい場合にも起こり得るからである。むしろ信頼感が乏しければ乏しいほど、余計に甘えることがあるらしい。大体、甘えん坊と言われるような人間は、自分の親も他人も心からは信頼していないものである。それでいて、自分が信頼感に欠けているという点には気付いていないから困る。……このように私は信頼と甘えは別のものであると考える (pp.180~181)。

土居はさらに、ルカによる福音書 10 章のマルタとマリヤについて、一見すると甘えて
いるのはマリヤだが、実は甘えていたのはキリストに文句を言ったマルタであるという分
析をしている (p.183)。甘えは必ずしも信頼ではないということである。土居はまた、「相
手の言葉に聞き入り、相手の存在に自分が全く傾倒することが真の信頼であり信仰である」
とする (p.183)。信頼は、対象が他者として意識され、その他者に傾倒することである。
この意味で、日本人特有の甘えが信頼の妨げになる可能性は十分に考えられる。

土居は、甘えを全面的に否定していたのではない。旧約・新約からいくつかの例を挙げ
(pp.22～55)、神と一つとされるような母子一体性と共通する世界は、信仰によって得ら
れるものであると理解していた。信仰によって得られる甘えは、日本的な甘えとはおそら
く違うものである。土居 (1997b) は、「しかしその陰に、本物の素直な甘えが息づいてい
るに違いないと言いたいのである」と述べている (p.53)。「本物の素直な甘え」を抱くた
めには、「個」としての他者を意識することが前提になっているということである。Freud,
S. と Rizzuto, A. の神は、信頼することができる絶対他者である。

このことと関連して、信じなかった人の中にも神表象が存在するかという問題は重要で
ある。Rizzuto, A. (1979) は、信じなかった人は信じないと決めた人のことであると考え
た (p.47)。Jones, J. W. (1997) は、信じない側を選択した人の中にも、はっきりした神
概念は存在し、信仰の対象としての神を拒絶しても何らかの神表象は存在するはずである
と考えた (p.61)。汎神論的な神概念を背景に人格形成をした場合、信じるという側を選択
しなかった人の中に内在化されている神表象がどのようなものかも検討しなければならない。

2 問題と目的

キリスト教的な神観念では「個」が意識されるが、日本人的な神観念は甘えの葛藤の影
響を受け、「個」が意識されない。土居 (1997b) によれば、甘えと信頼は異なり (p.180)、
日本的な甘えが、絶対他者である神を信頼することの妨げになっている可能性がある。本
研究は、質問紙調査によって、甘えの概念と神表象との関連を検討することを目的とする。

3 方法 (調査D)

(1) 使用した尺度

1) 甘え尺度 (谷、1999)

土居の甘えの概念を構成概念としており、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」

の三つの下位尺度で構成されている。谷（1999）によれば、「直接的甘え」は土居（1999）が提唱する「素直な甘え」に、「屈折的甘え」は「屈折した甘え」に、そして、「とらわれ」は、土居（1994）が「甘えたくとも甘えられない心」の表れという意味での「とらわれ」に該当するものである。

- 2) GISJ（河村、2010、2013a）
- 3) GISJ・簡易版（河村、2010、2013a）
- 4) GAS（河村、2013）

(2) 質問紙の構成

自立尺度（アンケート 1、結果は採用せず）、甘え尺度（アンケート 2）、GISJ（アンケート 3）、GISJ・簡易版（アンケート 4）、GAS（アンケート 5）で構成された。最後の部分に、年齢、性別、宗派、キリスト者になってからの年数、小学生までの家族環境および家族との関係、神表象が変化したことがあるか、その他、神についてどうとらえているかを自由に記述してもらい欄を設けた。属性をたずねる質問項目は、調査 C と同じものとした（Appendix 3 参照）。

(3) 質問紙調査の実施

質問紙調査は、プロテスタント系の教会に 240 部を依頼、実施時期は 2014 年 1 月～2 月であった。最終的に 107 の質問紙が回収され、回収率は 44.6%であった。

今回の調査 D は、対象をプロテスタント系の教会に絞ったが、その理由として、一つは、倫理的配慮から同じ団体に複数回調査を依頼することが難しかったこと、もう一つは、プロテスタント系のキリスト者を対象とした調査結果のほうが現象を数値として抽出しやすいことが挙げられた。フィールドの確保は研究全体を通じて大きな課題であった。

(4) 有効回答とデータの決定

欠損項目がある場合には、質問項目ごとに平均値を算出したものを代入した。以上の手続きを経て、107 の質問紙を有効回答とした。

(5) 逆転項目の変換

GAS（河村、2013）の逆転項目を変換した。

(6) 各質問項目の平均値と標準偏差

各尺度の質問項目の平均値と標準偏差を算出した。その結果を表41に示す。

表 41 各尺度の質問項目の平均値と標準偏差

項目	n	平均	標準偏差	項目	n	平均	標準偏差	項目	n	平均	標準偏差
甘え尺度				GISJ				GAS			
1	106	1.23	0.94	1	106	3.58	0.49	1	107	1.86	1.63
2	106	1.07	0.95	2	106	3.36	0.60	2	103	5.75	1.35
3	107	1.22	0.99	3	101	1.66	0.94	3	106	1.62	1.30
4	106	1.07	0.92	4	101	3.31	0.74	4	105	5.87	1.60
5	107	1.41	0.98	5	106	3.50	0.65	5	104	1.61	1.25
6	106	1.55	0.99	6	104	3.54	0.54	6	105	1.61	1.16
7	106	1.78	1.22	7	107	3.39	0.73	7	105	4.06	1.72
8	107	1.33	0.90	8	106	3.51	0.59	8	106	1.91	1.35
9	106	1.59	0.97	9	98	2.39	1.00	9	107	6.12	1.37
10	106	1.38	0.97	10	106	3.47	0.59	10	105	2.23	1.71
11	107	0.67	0.73	11	102	3.37	0.70	11	106	5.11	1.73
12	106	1.12	0.80	12	104	1.38	0.62	12	106	1.95	1.39
13	107	0.95	0.93	13	107	3.64	0.62	13	107	1.51	1.12
14	107	1.64	0.99	14	103	3.05	0.84	14	106	1.48	1.01
15	106	1.14	0.91	15	106	2.02	1.01	15	107	1.60	1.25
16	107	1.20	0.91	16	106	3.59	0.55	16	105	2.11	1.57
17	107	1.46	1.06	17	106	3.62	0.59	17	104	3.23	2.33
18	104	1.44	1.02	18	102	1.38	0.67	18	104	5.52	1.84
19	105	0.84	0.94	19	100	3.33	0.68	19	105	6.55	0.84
20	105	0.82	0.89	20	101	3.22	0.62	20	106	6.49	0.90
21	107	1.28	0.93	21	104	1.34	0.66	21	106	5.84	1.65
22	107	0.70	0.79	22	103	3.48	0.59	22	105	5.39	1.50
23	107	0.88	0.84	GISJ・簡易版				23	106	1.59	1.22
24	107	1.00	0.99	1	105	3.34	0.74	24	106	1.84	1.57
25	106	1.04	0.83	2	101	3.54	0.59	25	107	6.29	1.14
				3	106	3.52	0.52	26	106	1.68	1.31
				4	103	3.41	0.61	27	105	3.11	2.28
				5	107	3.53	0.59	28	104	1.66	1.25
				6	106	3.52	0.55	29	105	4.77	1.82
				7	104	3.43	0.68	30	105	2.55	1.82
				8	103	3.20	0.80	31	107	5.92	1.25
				9	101	2.99	0.95	32	106	1.81	1.35
				10	107	3.63	0.59	33	107	1.83	1.46
								34	107	1.63	1.27
								35	107	1.35	0.91
								36	106	4.09	1.72

(7) 各尺度の基本統計量

各尺度の得点の基本統計量を算出した。その結果を表42に示す。

表 42 各尺度の質問項目の平均値と標準偏差

尺度	下位尺度	回答の方式	平均	標準偏差
甘え尺度	直接的甘え	4件法	1.20	(0.64)
	屈折的甘え		0.99	(0.71)
	とらわれ		1.47	(0.72)
GISJ	親しい神イメージ	4件法	3.43	(0.44)
	厳しい神イメージ		1.70	(0.55)

n=107

4 因子分析によるGASの検討

邦訳した36の質問項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。解釈可能性を考慮し、因子負荷量が0.4以上で二因子を抽出、22項目が残った。各因子の内定整合性を見るためにクロンバック係数を算出した。その結果を表43（次頁）に示す。

表 43 GAS 因子分析結果

質問項目		F1	F2	共通性
第1因子：見捨てられ不安 ($\alpha = .87$)				
23	私が、神さまから目をはなしてしまったら、神さまはだれか他の人のほうに思いが向いてしまうのではないかと心配になる	.80	-.09	.65
6	私は、神さまがわたしといっしょにいたいと思っていないのではないかとしばしば心配になる	.78	-.04	.61
24	私は、神さまがわたしのことを本当は愛していないのではないかとしばしば心配になる	.73	-.11	.55
34	私は、私が神さまのことを大切に思うほどには、神さまは私のことを大切に思っていないのではないかと心配になる	.72	.09	.52
33	私は神さまが私のことを本当に知ったら、私のことを好きでなくなってしまうのではないかと思うと心配だ	.61	.13	.39
1	私が神さまと親密になりたいと望むほどには、神さまは私と親密になりたいと思っていないと思う	.60	-.18	.40
35	神さまは、私が怒っているときだけ、私の存在に気づいてくれると思っている	.58	-.04	.34
8	私は、神さまに対する自分の思いを表現すると、神さまは私に対して同じようには思ってくれていないのではないかと心配になる	.57	.02	.33
5	私は神さまのせいで自信をなくしてしまっている	.51	.16	.29
28	自分に必要な愛情とサポートを神さまから得ることができないと思うと怒りを感じる	.48	.07	.24
15	神さまと親密になりたいという思いに対して、神さまはうんざりして私から離れていってしまうことがときどきあるだろうと思う	.46	.01	.21
30	私は自分が他の存在に負けてしまうことが心配である	.46	.15	.23
第2因子：親密性の回避 ($\alpha = .85$)				
29	神さまに近づくことは比較的簡単なことだと思う	-.17	.74	.58
7	神さまを愛して行くのは簡単なことだ	-.06	.74	.55
11	神さまに頼るのは別にむずかしいことではない	-.07	.69	.48
31	私は自分が個人的に何を考え、何を感じているかを神さまと分かち合うとき、とても心地良いと感じる	.05	.67	.45
22	神さまに近づくことは難しいことではない	-.01	.64	.41
25	神さまに頼るのは心地良い	.15	.59	.38
9	神さまと近くにいることは私にとってとても心地良い	.03	.56	.32
4	私は自分の問題や関心について、たいてい神さまに打ち明けている	-.05	.48	.23
19	何か困ったときに神さまに向き合うことはとても助けになる	.13	.46	.23
2	私は何でも神さまに話す	.13	.46	.23
因子間相関		F1	F2	
F2			.37	
主因子法(プロマックス回転)		n=107		

第三研究のGASの因子分析結果と比較してみたところ、全体の質問項目数が、第三研究は、第一因子「見捨てられ不安」が16、第二因子「親密性の回避」が12の合計28、この第七研究は、第一因子が12、第二因子が10の合計22であった。第一因子については、六つの質問項目が除外され、新たに二つの質問項目が加わり、12となった。第二因子については、二つの質問項目が除外され、10となった。

以上のように、質問項目は流動的だが、因子数は安定している。因子数については一定の信頼性があるものの、質問項目が流動的であることについてはさらに調査を重ねて信頼性を確認する必要がある。しかしながら、本研究においては有効な尺度として分析に使用できると判断した。

5 仮説

第七研究は以下の仮説のもとに行う。

第一に、親しい神のイメージと甘えの関連について検討する。神表象と甘えには関連があり、親しい神のイメージを内在化させている人は、甘えの感覚が高いことが推察される（仮説 7-1）。

第二に、厳しい神のイメージと甘えとの関連について検討する。神表象と甘えには関連があり、厳しい神のイメージを内在化させている人は、甘えの感覚が希薄であることが推察される（仮説 7-2）。

第三に、神アタッチメントと「直接的甘え」との関連について検討する。神アタッチメントと甘えには関連があり、「神からの見捨てられ不安」を持ち、神との親密性を回避する傾向がある人は、「直接的甘え」の感覚が低いことが推察される（仮説 7-3）。

第四に、神アタッチメントと間接的甘えとの関連について検討する。神とのアタッチメントと甘えには関連があり、「神からの見捨てられ不安」を持ち、神との親密性を回避する傾向がある人は、間接的甘えの感覚が高いことが推察される（仮説 7-4）。

第五に、神アタッチメントと「とらわれ」の感覚との関連について検討する。神とのアタッチメントと甘えには関連があり、「神からの見捨てられ不安」を持ち、神との親密性を回避する傾向がある人は、「とらわれ」の感覚が高いことが推察される（仮説 7-5）。

6 相関分析

各下位尺度間の相関を算出した。その結果を表 44 に示す。

表 44 甘え尺度、GISJ、GAS の相関

		甘え尺度			GAS	
		直接的 甘え	屈折的 甘え	とらわれ	見捨てら れ不安	親密性 の回避
GISJ	親しい神イメージ	-.22 *	-.20 *	-.06	-.36 **	-.51 **
	厳しい神イメージ	.20 *	.26 **	.26 **	.45 **	.11
GAS	見捨てられ不安	.36 **	.37 **	.27 **		
	親密性の回避	.31 **	.33 **	.35 **		

** $p < .01$, * $p < .05$

n=107

その結果、「親しい神イメージ」は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」との間にそれぞれ弱い負の相関が見られた（ $r = -.22$ 、 $r = -.20$ ）（結果 7-1）。仮説 7-1 は支持されなかった。

「厳しい神イメージ」は、甘え尺度の下位尺度すべてについて弱い正の相関が見られた

($r=.20$ 、 $r=.26$ 、 $r=.26$) (結果 7-2)。仮説 7-2 は支持されなかった。

「神からの見捨てられ不安」については、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」すべてについて弱い正の相関が見られた ($r=.36$ 、 $r=.37$ 、 $r=.27$) (結果 7-3)。仮説 7-3 は支持されなかった。仮説 7-4、仮説 7-5 は支持された。

「神との親密性の回避」については、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」すべてについて正の相関が見られた ($r=.31$ 、 $r=.33$ 、 $r=.35$) (結果 7-4)。仮説 7-3 は支持されなかった。仮説 7-4、仮説 7-5 は支持された。

ここで、個別の神表象についてさらに詳細に検討するために、甘え尺度の各下位尺度と十の神表象の相関を算出した。その結果を表 45 に示す。

表 45 十の神表象と甘え尺度の相関

	甘え尺度		
	直接的 甘え	屈折的 甘え	とらわ れ
1王	.00	-.02	-.13
2祭司	-.05	-.13	-.04
3人生の師	-.01	.03	.10
4医者	-.11	-.05	-.01
5救出者	-.10	.03	.04
6牧者	-.17	-.14	-.05
7父	-.13	-.30 **	-.16
8友だち	-.05	-.26 **	-.15
9裁判官	.13	.18	.13
10創造者	-.09	-.03	.00

** $p < .01$, * $p < .05$

n=107

「屈折的甘え」は、「親しい神イメージ」を構成する「父」と「友だち」との間に弱い負の相関が見られた ($r=-.30$ 、 $r=-.26$)。屈折的な甘えは親しい神のイメージと負の相関があることが示唆された (結果 7-5)。

7 属性別の分析

ここで、甘え尺度の下位尺度について、それぞれ属性別の分析を行った。

(1) 人格形成期の家庭環境

まず、家族の中にキリスト者がいなかったと回答した人 (選択肢の 1) と家族のだれかがキリスト者だったと回答した人 (選択肢の 2~6) について、平均値の差を検討するために t 検定を行った。その結果を表 46 (次頁) に示す。

その結果、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」のいずれも、家族にキリスト者が

いたと回答した人のほうが高かった。家族にキリスト者がいる環境で人格形成をした人は、家族にキリスト者がいない環境で人格形成をした人よりも甘えの心理が強い可能性がある（結果 7-6）。

表 46 人格形成期に家族環境の違いによる平均値の差 t 検定結果

	性別	n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)	
直接的甘え	家族にキリスト者がいなかった	62	1.08	0.56	1.66	2.50	**
	家族のだれかがキリスト者だった	40	1.40	0.72	(61, 39)	(100)	
屈折的甘え	家族にキリスト者がいなかった	62	0.86	0.54	2.34	2.11	** *
	家族のだれかがキリスト者だった	40	1.17	0.82	(61, 39)	(60.559)	
とらわれ	家族にキリスト者がいなかった	62	1.36	0.66	1.37	1.95	*
	家族のだれかがキリスト者だった	40	1.64	0.77	(61, 39)	(100)	

** $p < .01$, * $p < .05$, 分散が異なる場合にはWelchの検定を行った。

n=102

(2) 父親との関係

次に、甘え尺度の各下位尺度について、生まれてから小学生までの家庭環境における父親との関係の認識の違いによって平均値に差があるかを検討するために一要因分散分析を行い、主効果が有意であったものについては多重比較を行った。その結果を表 47 に示す。

表 47 父親との関係と甘えの関連の検討 分散分析結果

		1	2	4	5	F値(3, 218)	多重比較 (Fisherの最小 有意差法)
父親とは良い関係だった		とても そう 思う	そう 思う	あまり そう 思わ ない	そう 思わ ない		
	n	27	41	16	19		
直接的甘え	平均	1.22	1.20	1.10	1.22	0.13	
	標準偏差	(0.69)	(0.60)	(0.69)	(0.68)		
屈折的甘え	平均	0.79	1.10	0.81	1.18	1.80	
	標準偏差	(0.71)	(0.73)	(0.61)	(0.78)		
とらわれ	平均	1.23	1.67	1.19	1.61	3.30 *	1<2, 2>3
	標準偏差	(0.74)	(0.73)	(0.53)	(0.70)		

** $p < .01$, * $p < .05$

n=103

その結果、「とらわれ」の心理について、父親との関係が良かったと回答した人は、他の三つの選択肢を選んだ人よりも高い値を示した。父親との関係が全般的に良かったと認識している人は、「とらわれ」、すなわち、甘えたくても甘えられない心理を抱えている傾向がある（結果 7-7）。

ところで、「とてもそう思う」と回答した人は、「そう思う」と回答した人よりも平均値が低くなっている。このことについては本研究で理由を特定することはできないが、明確に父親との関係が良かったと認識している人よりも、傾向として良かったと認識している程度の人の方が、甘えたくても甘えられない心理を内在化させているのは知見として興味深い。データの信頼性を高めるためにも、再調査を行う必要があると考えられる。

(3) 母親との関係

次に、甘え尺度の各下位尺度について、生まれてから小学生までの家庭環境における母親との関係の認識の違いによって平均値に差があるかを検討するために、良かったと認識している人と良くなかったと認識している人に分類した上で、両者の平均値を比較するために t 検定を行った。「直接的甘え」と「屈折的甘え」については有意差が見られなかったが、「とらわれ」については有意差が見られた。その結果を表 48 に示す。

表 48 母親との関係と「とらわれ」の関連の検討 t 検定結果

母親との関係		n	平均	標準偏差	F値 (df)	t値 (df)
とらわれ	①とてもそう思う、②そう思うと回答	87	1.41	0.72	1.10	2.16 *
	③あまりそう思わない、④そう思わないと回答	17	1.81	0.68	(86, 16)	(102)

* $p < .05$

n=104

母親との関係が良好であった人よりも、母親との関係が良好でなかった人のほうが「とらわれ」の値が高かった。母親との関係が良好でなかった人のほうが「とらわれ」、すなわち、甘えたくても甘えられない心理を抱いている可能性がある（結果 7-8）。

(4) 環境および父親・母親と甘えとの関係

ここで、家族にキリスト者がいた場合といなかった場合に分け、さらに父親・母親との関係がどうであったかによって分類した。「あまりそう思わない」と「そう思わない」の選択肢は、サンプル数が少なかったため一つにまとめた。それぞれのグループの平均値に差があるかを検討するために一要因分散分析を行い、主効果が有意であったものについては多重比較を行った。その結果を表 49、表 50（次頁）に示す。

表 49 父親との関係と甘えの関連の検討 分散分析結果

		家族にキリスト者は いなかった			家族のだれかが キリスト者だった			多重比較
		1	2	3	4	5	6	
父親とは良い関係だった	とても そう 思う		そう 思う	あまり そう 思わ ない/ そう 思わ ない	とても そう 思う	そう 思う	あまり そう 思わ ない/ そう 思わ ない	F値(5, 97) (Tukey)
	n	14	27	18	13	14	17	
直接的甘え	平均	1.15	1.03	1.00	1.29	1.53	1.34	1.75
	標準偏差	(0.62)	(0.48)	(0.63)	(0.78)	(0.67)	(0.71)	
屈折的甘え	平均	0.74	0.87	0.89	0.85	1.56	1.13	2.69 *
	標準偏差	(0.45)	(0.59)	(0.54)	(0.93)	(0.76)	(0.87)	1=2<5
とらわれ	平均	1.18	1.44	1.33	1.29	2.12	1.51	3.35 **
	標準偏差	(0.75)	(0.52)	(0.81)	(0.76)	(0.88)	(0.45)	**1<5 *2=3=4<5

** $p < .01$, * $p < .05$

n=103

表 50 母親との関係と甘えの関連の検討 分散分析結果

		家族にキリスト者は いなかった			家族のだれかが キリスト者だった			F値(5, 93)	多重比較 (Tukey)
		1	2	3	4	5	6		
母親とは良い関係だった		とても 思う	そう 思う	あまり 思わな い/そう 思わな い	とても 思う	そう 思う	あまり 思わな い/そう 思わな い		
	n	21	31	8	14	18	7		
直接的甘え	平均	1.21	1.01	1.00	1.38	1.57	0.84	2.81 *	2<5
	標準偏差	(0.62)	(0.48)	(0.73)	(0.62)	(0.79)	(0.38)		
屈折的甘え	平均	0.86	0.82	1.07	1.00	1.28	1.06	1.27	
	標準偏差	(0.59)	(0.49)	(0.66)	(0.66)	(0.92)	(0.84)		
とらわれ	平均	1.46	1.24	1.60	1.48	1.59	2.02	1.64	
	標準偏差	(0.84)	(0.52)	(0.65)	(0.82)	(0.73)	(0.80)		
* $p < .05$		n=99							

その結果、家族のだれかがキリスト者である環境で育ち、父親との関係が良かったかという問いに対して「そう思う」と回答している人は、家族にキリスト者がいない環境で育ち、父親との関係が良かったと認識している人よりも「屈折的甘え」と「とらわれ」が高かった。

家族のだれかがキリスト者である環境で育ち、母親との関係が良かったかという問いに対して「そう思う」と回答している人は、家族にキリスト者がいない環境で育ち、母親との関係が良かったかという問いに対して「そう思う」と回答している人よりも「直接的甘え」が高かった。父親との関係、母親との関係が良かったと認識している人は、家族にキリスト者がいなかった環境で育った回答者よりも家族にキリスト者がいた環境で育った回答者のほうが甘えの心理が強い傾向がある（結果 7-9）。

(5) 兄弟構成

一人っ子だったか、兄弟が複数いたかなどの兄弟構成と甘えの関係について、平均値の差を検討するために分散分析を行ったが、有意差は見られなかった。

(6) 神表象の変化の方向

次に、神表象がどのような方向に変化したかについて検討した。「厳しいイメージが親しさと厳しさの入り混じったイメージになった」、「厳しいイメージが親しいイメージになった」、「親しいイメージが厳しさと親しさが入り混じったイメージになった」、「親しいイメージがさらに親しいものになった」という選択肢を選択した人が、甘え尺度の各下位尺度

の平均値に差があるかを検討するために一要因分散分析を行い、主効果が有意であったものについては多重比較を行った。その結果を表 51 に示す。

表 51 神表象の変化の方向と甘えの関連の検討 分散分析結果							
神表象の変化の方向		2	3	5	6	F値(3, 70)	多重比較 (Fisherの最小有意差法)
		厳しいイメージが親しさと厳しさの入り混じったイメージに	厳しいイメージが親しいイメージに	親しいイメージが厳しさと親しさが入り混じったイメージに	親しいイメージがさらに親しいものに		
n		19	22	18	15		
直接的甘え	平均	1.17	0.97	1.44	1.00	2.36	
	標準偏差	(0.53)	(0.65)	(0.64)	(0.53)		
屈折的甘え	平均	1.10	0.77	1.12	0.72	1.86	
	標準偏差	(0.76)	(0.57)	(0.75)	(0.52)		
とらわれ	平均	1.52	1.23	1.74	1.13	2.77 *	3<5, 5>6
	標準偏差	(0.56)	(0.82)	(0.70)	(0.66)		
* $p < .05$					n=74		

その結果、親しい神のイメージが厳しさと親しさが入り混じった神のイメージに変化したと回答した人は、他の選択肢を選んだ人よりも「とらわれ」の心理が強いことが示された。神のイメージが厳しい方向に変化したと認識している人は、「とらわれ」、すなわち甘えたくても甘えられない心を抱いている傾向がある（結果 7-10）。

8 まとめと課題

本研究では、甘えの概念と神表象との関連を検討した。本研究の結果を踏まえて、以下の四点について考察した。

(1) 信頼と甘えの違い

本研究では、神表象と神アタッチメントと甘えの心理の関係について検討した。その結果、親しい神イメージを内在化させている人は、「直接的な甘え」、「屈折的な甘え」を抱きにくくなる傾向があり、逆に、厳しい神イメージを内在化させている人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」を含む甘えの心理が強いということが示唆された。

神アタッチメントについては、「神からの見捨てられ不安」も「神との親密性の回避」も、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」すべてについて正の相関が見られ、神アタッチメントがしっかりしていない人は甘えの心理を抱く傾向があることが示唆された。

以上のことから、親しい神イメージを内在化させ、神アタッチメントが確かであると、甘えの心理は抱かなくなる傾向があることが示唆された。逆に、厳しい神のイメージを内在化させていると、「直接的甘え」の心理が高くなるという結果は、甘えの心理は、親しいと感じることができる存在に対して抱くものであるという一般的なイメージと合致しない。すなわち、対象が神である場合、一般的なアタッチメント人物を対象とした場合と傾向が異なり、親しい神のイメージを内在化させていることと、甘えの心理を抱くこととは次元が違うということを示唆している。甘えの心理は、必ずしも「個」を意識しない中で抱くものであるのに対して、親しい神表象は、GISJの質問項目の内容からもわかるように、他者性を意識することを含んでいる。

親しい神のイメージを内在化させていることと、甘えの心理を抱くこととは異なるということは、土居の「甘えと信頼は違うものである」という仮説を実証的に裏付けるものである。日本人に特有の甘えの心理と他者を信頼することは同じでない。信頼は、信頼する相手が尊厳ある他者として意識されることが前提となる。GISJの「親しい神イメージ」因子の中にも、「個」が意識される内容が含まれている。日本人キリスト者がイメージする神に甘える気持ち、居心地がよいと感じる感覚、神と一つとされたという言い方によって表現される甘い感覚は、神への信頼とは異なるものであると考えられる。

(2) 「屈折的甘え」

本研究の結果は、「屈折的甘え」は、神を厳しい存在としてイメージし、神アタッチメントが希薄であるときに抱く心理であることを示していた。また、神を「父」や「友だち」という肯定的・受容的なイメージでとらえることができないときに、「屈折的甘え」を抱く傾向があることが示された。「屈折的甘え」は質問項目の内容から、「ひねくれる」、「すねる」、「ひがむ」、「うらむ」などの内容を含むものであり、土居（1997a）によれば、それらは日本的な甘えを表現する語彙である（p.24）。日本人に特徴的な「屈折的な甘え」の心理は、神を親しい存在としてイメージできず、むしろ神を厳しい存在として内在化させ、「神からの見捨てられ不安」が増幅されるときに抱く心理であると考えられることができる。

(3) 「とらわれ」の意識（甘えたくても甘えられない心）

本研究の結果は、神を厳しい存在としてイメージしている人は「とらわれ」の度合いが高いこと、そして、「とらわれ」の度合いが高い人は、神との親密性を回避する傾向がある

ことを示していた。また、神を親しい存在として内在化させている人は、「直接的甘え」と「屈折的甘え」は減る傾向にあるが、「とらわれ」だけは相関が見られなかった。神を親しい存在として内在化させていても、そのことは「とらわれ」の心理を軽減する要因ではないことを示唆していた。

土居（1994）によれば、「とらわれ」は「甘えたくとも甘えられない心」と定義される。その場合の「甘えたくとも甘えられない心」とは、甘えたい心が抑圧されている状態を意味するとされている。また、「自分」の意識の観点からすると、「自分がない」状態とも定義されている（p.48）。逆の「自分がある」状態とは、自己の表象を持つことだけでなく、自分に対する積極的な感情を含んでいると定義される。甘えが出ているときには、この積極的な感情は対象に向けられる依頼心として表現されるが、「自分がある」状態では、その依頼心が自分自身に向けられるという（p.49）。また、依頼心は甘えという形で自分の意識に先行して現れ、そのことによって人間は精神的に成長ができるという。しかし、それがいつまでも持続するとき、自分の意識の成長は妨げられる。「自分がある」という状態は、この依頼心が自分に向くようになることであるとしている（pp.49～50）。さらに土居は、自分の意識と「自信・自尊心」の関係について説明を加え、「自分がない」状態だからといってそれは「自信・自尊心」が働いていないということではなく、「自分がない」状態でも自我は意識されているということである。ここで問題なのは、「自分がない」状態は、対象から分離された固有の自我の意識ではなく、対象と深く結びついてしまっている自我の意識だということである。それはつまり、傷つきやすい自我ということになる（p.50）。

以上の土居の観点を踏まえて考察すると、神を厳しい存在としてイメージしている状態は、甘えたくても甘えられない「とらわれ」の心の状態であり、さらには「自分がない状態」であることを意味する。また、神を親しい存在として内在化させても、そのことで甘えたくても甘えられない心が軽減するわけではないという面も推察される。対象から分離した固有の自我がもたらす成熟した自信と自尊心を持たず、対象に左右される傷つきやすい自我を持っている状態のままである可能性がある。

「とらわれ」の強い人は、神との親密性を回避する傾向がある。神を否定的にイメージし、甘えたくても甘えられない、その甘えを素直に出せない状態である。また「自分がない」状態であり、傷つきやすい自我の状態を抱え込んでいるということである。

神に対する信頼は、絶対他者としての神に向き合うことを意味し、自分がない状態では神への信頼や真の意味での親密性を築くことはできないことは推察される。これは「個」

の希薄さを意味しており、「甘えと信頼は異なる」とした土居の見解を支持するものである。日本人に特徴的な「とらわれ」の心理が神表象のあり方に影響を与えている可能性がある。

(4) 原家族の宗教的環境と甘え

本研究では、甘えの心理と調査協力者の属性について検討した。人格形成のプロセスの中で家族の中にキリスト者がいた場合といなかった場合を比較したところ、キリスト者がいた場合のほうが甘えの心理が高かった。ところが、第六研究では、家族全員がキリスト者の場合、厳しい神のイメージが減少し、家族全員がキリスト者でない場合は、厳しい神のイメージを内在化させる傾向があることが示唆された（結果 6-9）。以上のことから、家族にキリスト者がいる場合には、厳しい神のイメージは減少する傾向があるが、甘えの心理は強くなる。逆に、家族にキリスト者がいない場合には、神表象は厳しくなる傾向があり、日本的な甘えの心理は抑制されるということが示唆された。

このことは一つの問題提起をしている。キリスト者が家族環境にいなかった人のほうが日本的な甘えの心理が抑制され、「個」の確立が伴う神への信頼を促す可能性があるということである。キリスト者が家族にいなかった場合には、明確なステップを踏んでキリスト者になるというプロセスをたどることが想定され、そのことによって「個」の確立と、他者としての神への信頼がより意識的になされる可能性がある。ところが、キリスト者が家族にいた人の場合、日本的な甘えの心理が強くなる傾向があり、同時に甘えの心理が神への信頼を妨げ、「個」の確立は必ずしも促進されない可能性が高いということである。

従来のキリスト教の環境では、神への信頼は、神学的な視点からの分析がほとんどであり、人間の視点からの分析は十分に行われて来なかった。わが国においても、「個」の確立の観点から信仰を考えるという視点が欠落しているのが現状である。河村（2005）は、青年の自立のプロセスに着目し、キリスト教の背景の中で人格形成をする場合、成長する過程において人間が自立するメカニズムを理解する必要があるという問題提起をした。キリスト教的な背景の中で人格形成をした人は、「個」の確立に向けた自立の葛藤を抱き続けるあまり、教会を離れるか、自立的でない未熟なパーソナリティーのままキリスト者として教会の中にとどまるか、いずれかのケースになる可能性がある。特に、「回心」を重視する Wesley 理論の影響を受けた教会教育においては、子どもが自己の発達課題をクリアするプロセスとあわせて「回心」を経験することができなかった場合、自立できないままに宗教に傾倒することになる可能性がある。本研究の結果からすれば、親と同じ価値観を踏襲す

ることが信仰の継承であると考えるのは間違いである。むしろ、キリスト者として生きる選択をする際に、自覚的に原家族と異なる価値観を作ることが、**Marcia** 理論で言われる「早期完了」の状態にならないために必要であることを本研究は示唆している。

(5) 本研究の限界と次の研究への展望

本研究では、日本人の心理と神表象の関連について検討した。日本人の心理と神表象との関連を検討するために、本来であれば日本人キリスト者と日本の文化的影響のないキリスト者からサンプリングを行った上で両者を比較する必要がある。コントロール群を設定できなかったことは本研究の限界である。実験計画の精緻化が望まれる。

第一研究から第七研究までは、質問紙調査を実施することによる量的研究を行い、神表象の内在化の実態把握に努めた。特に神表象の変化については、いくつかの傾向が観察された。次の研究では神表象の内在化のプロセスと神表象の変化に着目し、質的研究を行う。

第四章 質的研究：神表象の変化のプロセスの検討

第一節 本研究における質的研究の意義

1 量的研究と質的研究の特性

第三章では、質問紙調査を実施した上で統計分析を行う量的研究法によって、日本人キリスト者を対象に、神表象の実態調査と分析を行った。それらの知見を踏まえた上で、第四章では領域密着型のグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的研究を行う。

やまだ（2007）によれば、量的研究が、研究者がフィールドを研究の対象とし、「仮説」を立ててそれを実証する方法であるのに対して、質的研究は「仮説」を実証するのではなく、研究者も現場に参加しながら、領域密着型の理論を構築することを目的とする方法である（pp.2～5）。また量的研究が数字を特徴とするのに対して、質的研究は言語の長所を最大限に生かすことにより、現場に密着した分析を行う研究法である（pp.10～11）。

質的研究法は、量的研究が仮説演繹的方法であるのに対して、調査の対象となる現実を自分とは全くことなる異文化であると理解し、自分がすでに持っている考え方に現実をあてはめるのではなく、その現場・領域において生きている人が使っていることばや概念に驚くことから調査が始まる研究法である（山田、2009b、pp.164～165）。研究者が仮説を演繹的に実証するのではなく、研究者が知らない世界が広がるという意味で帰納的な特性を持つと言える。この考え方の延長にあるのが、グラウンデッド・セオリー・アプローチに関する議論である（p.165）。才木（2008）は、「新しい知見とは、当事者自身が気づかなかった構造とプロセス（とそれによる今後の展開の推測）を明らかにしたもので、『言われてみればそうだった』と当事者さえもが気づかされるようなものだと思います」（p.6）と述べ、グラウンデッド・セオリー・アプローチは、研究者が想像もしなかったような新しい知見を得ることができる優れた分析方法であるとしている。

このように質的研究法は、大きな社会構造は拾えないという限界を持ちながら、生きた人間を対象にその現象を描くという意味で、地域密着の理論構築のため、研究者の既成概念を拡張することができるという強みを発揮する。

質的研究法については、客観性・普遍性への疑義が投げかけられてきた。量的研究では、抽出方法を考慮して母集団を予測し、仮説を立て、反証を棄却することによって傾向を統計的に分析し、そこに一般性を求め、知見を導き出すものである。会話の解釈を行う質的研究に比較すれば、研究者の主観が入りにくいという意味で客観性を確保することを狙っ

ている。それに対し、質的研究法は、母集団を予測することから客観性を保証することを目指す量的研究とは異なり、数量的な意味での普遍性・客観性を狙わない。そのことが、質的研究法が確からしさをどのように確保するのかという批判ともなってきた。また、特定の経験をした人を対象にするため、サンプリングの偏りを指摘されることもあった。

サトウ（2007）はその批判に応える方法の一つが、モデル構成であるとする（p.25）。モデル構成とは、ローカリティーを持ちつつ共有可能な一般性をさぐる方法である。質的研究法におけるサンプリングは、抽出する個体に母集団の代表性を持たせるのではなく、研究対象について豊かな情報を提供してくれる個体を抽出する方法である（p.26）。母集団の平均像を描くためではなく、生きた人間の現象を描くことを目的としている。

質的研究法の確からしさへの批判に対して、Glaser & Strauss（1967）は、量的研究だけで十分な理論産出ができるかという点、課題の多様性に対応できるかという二点について、逆の問いかけをしている（1967、p.223、後藤・大出・水野訳、1996、p.303）。また、量的研究法のサンプリングについて、母集団を明確に定義できないままにランダム・サンプリングを行うことも論理的に矛盾しているという指摘もある（サトウ、p.26）。木下（2003）によれば、どれだけ数量的に分析ができて、その結果が現実の問題や現象を説明するには不十分であるという認識が質的研究に関心を向ける理由になっている（p.62）。

このように、質的研究法の確かさについて疑義が投げかけられてきたが、量的研究法の限界も指摘されてきた。本研究においては、量的研究法と質的研究法が研究目的に向かって相互補完できるという考え方から、量的研究法と質的研究法の両方を採用した。まず量的研究において日本という領域のキリスト者の神表象の実態と傾向について明らかにすることを試みた。その上で、量的研究でさらに分析を継続するためには縦断的研究が必要であり、その場合、数年あるいは数十年かけて実態を追いかけることになる。しかしそれでも、緻密な心的変化を追うことができるわけではない。質的研究法、特にグラウンデッド・セオリー・アプローチを導入することは、内在化された神表象の変化を生きた人間の現象と理解し、領域に密着した理論構築ができるという意味で意義があると考えられる。

2 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

木下（2003）は、グラウンデッド・セオリーの理論特性を以下の五つにまとめている（pp.25～28）。第一に、データに密着した分析から説明力を持つ独自の理論を生み出すことができる。第二に、継続的比較分析法によって質的データを分析することができる。第

三に、研究者が意図する限定された範囲内で、人間行動の説明と予測に有効な理論である。第四に、他者との相互作用の変化を説明できる動態的説明理論である。第五に、実践的な活用を促す理論である。この中で特に重要なのは、grounded on data の分析という点である（木下、2007a）。あくまでデータに密着した分析を行うことで、現場に適用可能な理論構築を目指すということである。

さらに、その内容特性を以下の四つにまとめている。第一に、現実への適合性 (fitness)、第二に、理解しやすさ (understanding)、第三に、一般性 (generality)、第四に、コントロール (control) である (pp.30～33)。特に四番目の要素は、本研究において意味がある。理論を受けとって実践する【応用者】が、その結果を活用したときに現状を改善するために役立てることができなければ意味がないということである。理論構成を試みる研究者と理論を受けとって実践する実務者は対等であるという考え方である。

グラウンデッド・セオリー・アプローチは歴史的にいくつかの段階を経て、現在では四つのタイプがある。「オリジナル版」、「Strauss・Corbin 版」、「Glaser 版」、そして「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」である（木下、2003、pp.37～42）。木下はオリジナル版の特性を復活させ、そこで残されていた課題を解決する方法で独自のグラウンデッド・セオリー・アプローチを生み出した。これが修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA と略記）である (p.44)。その特性は以下の七点にまとめることができる。

- (1) グラウンデッド・セオリー・アプローチの理論特性と内容特性を満たす。
- (2) データの切片化をしない。
- (3) データの範囲、分析テーマの設定、理論的飽和化において方法論を限定し、分析過程を制御する。
- (4) データに密着した分析をするためのコーディング法を開発し、分析ワークシートを導入した。
- (5) 【研究する人間】の視点を重視する。
- (6) 面接型調査に有効に活用できる。
- (7) 解釈を多重的に同時並行で行い、理論的サンプリングと継続的比較分析を行いやすくした (pp.44～45)。

この中で特に重要なのは、研究する人間の視点を重視すること、そしてそのためにデータの切片化をしないことである（木下、2003、pp.157～158）。他の三つのグラウンデッド・

セオリー・アプローチはいずれも切片化を行うが、木下（2007b）は、切片化を行えば、データの文脈は寸断され、分析者の研究関心を棚上げすることになる可能性があるとしている（p.39）。切片化してしまえば、結局質的データを数量化することにならないかという指摘である（木下、2003、p.84）。そのために、オリジナル版の考え方を引き継ぎつつ、データの文脈を残したままで概念・カテゴリーを抽出する方法を開発したのが M-GTA である。

3 半構造化面接

調査をフィールドワーク型と面接型に分けて考えれば、M-GTA は面接型調査に適している。そもそもオリジナル版はフィールドワーク型調査に適合的だったが、実際は面接型調査が行われている（木下、2003、p.116）。

質的研究のデータ収集法として行われる調査インタビューは、構造化の程度などによって、構造化インタビュー、半構造化インタビュー、非構造化インタビューの三つに区分される（徳田、2007、p.102）。構造化インタビューでは、インタビュイーに同じ質問が同じ順序でなされる。インタビュアーの柔軟な質問は、データの客観性を妨げるものとして退けられる。非構造化インタビューは、その場の状況に応じて質問が自由になされる。そのため、インタビューする側の熟練も求められる。半構造化インタビューは両者の間に位置する。質問項目はある程度前もって決めておきながら、実際のインタビュー場面では適宜質問項目を変更したり、話の展開に応じて質問の順序を変更したりすることもある（徳田、p.102）。

4 分析方法としての適性

現在までの研究では、基本的信頼感、自尊感情、人生の積極性が、肯定的な神のイメージとの間に正の相関があることが確認できている。また、第三研究以降の研究では、Erikson, E. H.の心理社会的発達段階と神表象との関わり、Bowlby, J.のアタッチメント理論と神表象の関わり、そして日本人の神表象の特性を検討した。次に焦点となるのは、神表象の変化の可能性と様態である。

神表象の変化について検討することが目的であることから、半構造化面接と M-GTA が適していると判断した。M-GTA が適していると考えるのは以下の点においてである。

第一に、M-GTA がヒューマン・サービス領域の研究に適しているという点である（木

下、2007b、p.66)。神表象そのものは個人の心理的・内的世界の問題であるが、同時に社会的な問題でもある。牧師やキリスト者援助者が対人援助を行う実際の現場と密接につながりがあり、領域密着型理論の構築は大切なことである。

第二に、M-GTA は研究対象がプロセス的特性をもっている場合に適しているということである（木下、2007b、p.67）。神表象が変化したとすれば、どのように変化したか、どのようなきっかけや背景があったかなどについて聞き、そのプロセスを明らかにする。

第三に、神表象の変化のプロセスを見ることによって、神表象の歪曲による不適応を防ぐことができるモデルを提示することを目的としているということである。予測にも有効な動態理論を目指す M-GTA はこの点において有効であると考えられる（木下、2007b、p.68）。

第四に、M-GTA が実践的活用のための理論であり、応用が検証であるということである（木下、2007b、p.85）。神表象についての理論を実際の援助のプロセスに適用することによって、応用者が必要な修正を行うことを目指しているのも大切な点である。

第五に、インタビュー・データを念頭にしていることである（木下、2007b、p.74）。本来、神表象についての変化は時間を追う視点が必要になり、長い年数をかけた縦断的研究が求められる。しかし、現状においては不可能であり、面接調査を採用せざるを得ない。インタビュー・データによってプロセスを追うことができるのは大切な点である。

以上のことから、本研究において、M-GTA が適切な方法であると判断した。

面接調査の方法について、半構造化面接が適していると考えるのは以下の点においてである。第一に、神表象の変化のプロセスと幼少期の神表象について聞くことを目的としていることから、インタビュアーが収集するデータにある程度の枠があること。第二に、インタビューのライフ・イベントについて自由な語りを引き出すことも重要な要素であること。以上のことから、ある程度の構造を持ちながら実際の面接場面で適宜質問を変更することができる半構造化面接が適切な方法であると判断した。

第二節 第八研究：神表象の変化のプロセスの検討（調査E）

1 問題と目的

本研究では、先行研究をふまえて、日本人キリスト者の神表象がどのように変化するかを検討し、キリスト教教育や心理臨床のあり方を考察する。本研究は、神表象の変化につ

いて調査するものであり、神表象が変化したと認識している調査協力者を対象とする。

本調査は、臨床牧会の現場で観察されて来た、神表象の歪みが生き方に影響を与えているのではないかという視点に着目し、質的な分析により、神表象と日本人の心理、および生涯において神表象が変化したか、また変化した場合には、どのような要素がそのことに関係していたかを探ることを目的とする。

以下のことを目的として、面接による質的分析を実施した。

- (1) 人格形成のプロセスでキリスト教的な環境の中にいたかいないか、その両者について、神表象はどのように変化したか、また変化した場合、その様態はどのようなものであったか、変化したときに、何か要因があったのかについて尋ねる。なお、神のイメージがどのように変化したかを尋ねる際に、八つの神の役割を提示する。
- (2) キリスト者になる前と後の神表象の変化、あるいは違いについて尋ね、キリスト教的な背景のない中で人格形成をした調査協力者とキリスト教的な背景の中で人格形成をした調査協力者の比較を試みる。
- (3) 幼少期の神表象の形成がどのようなものであったかについて尋ね、キリスト教的な背景のない中で人格形成をした調査協力者とキリスト教的な背景の中で人格形成をした調査協力者の比較を試みる。

以上の観点について、人格形成のプロセスでキリスト教的な環境の中にいたかいないかによって違いが見られれば、それは日本的な特徴と理解できるだろう。人格形成のプロセスでキリスト教的な環境の中にいなかった人の神表象について、幼少期の神の認識と、成人後にキリスト者になった後の神の認識の間に連続性が認められない場合には、Rizzuto, A. (1979) の理論は、キリスト教的な背景がある場合に限定される理論であると結論づける必要がある。逆に、一定の連続性が認められる場合には、Rizzuto, A. (1979) が述べる神表象が、わが国のような非キリスト教的文化背景においても当てはまり、幼少期に神の「恵み」を伝える従来の方法論へ問題提起をすることになると考えられる。

2 方法（調査E）

(1) 調査協力者

2013 年 1 月に実施した「神イメージと生き方についてのアンケート」の回答欄で面接に協力いただけることを申し出てくれた方を中心に、所属教会の責任者の許可を得て、半構造化面接を行った。実際に面接を実施した調査協力者のリストを表 52（次頁）に示す。

表 52 調査協力者一覧

No.	性別	年齢	職業など	時間
1	女性	40代	神学生・主婦	49分
2	女性	60代	団体職員・事務職	40分
3	男性	50代	牧師	40分
4	男性	60代	大手メーカー引退	38分
5	女性	40代	保育士	22分
6	女性	60代	主婦	15分
7	女性	60代	主婦	20分
8	女性	20代	会社員	24分
9	女性	20代	教会職員	14分
10	女性	40代	牧師	25分

(2) 実施期間および場所

面接は、2013年12月～2014年4月に実施した。面接の場所は、研究責任者の本務校の教室・あるいは面談室、調査協力者の所属する教会の部屋、その他、研究責任者および調査協力者以外の人にインタビューの内容が聴取されない場所を選定して実施した。

(3) 倫理的配慮

半構造化面接を実施する前に、調査協力者の所属する教会・団体の責任者に、当該者に面接を行うことについて了解を得た。

調査協力者には、個人情報やプライバシーの保護、データの使用目的と使用方法等について十分な説明を行った。面接に際して収集したデータ（記述、音声を含む）は、研究のため以外には用いないことを確認した。またデータは調査協力者個人が特定されないことがないように管理し、研究・分析のプロセスにおいても、研究結果の提示においても、個人が特定されないことがないように十分に配慮することを説明した。

面接実施時には説明文を提示し、面接の実施および録音について同意を得た。さらに、回答が任意のものであること、回答に同意しない場合はいつでも面接を中断することができること、面接を中断した場合でも、調査協力者はいかなる不利益を被ることはない旨、十分に説明して実施した。

(4) 半構造化面接で質問した質問項目

以下の質問項目を中心に、半構造化面接を行った。

- 1) 神さまイメージが変わったとお答えいただきましたが、どのようなことだったのかをお話ししてください。
- 2) 神さまイメージが変わる前と変わった後では、どのような違いがあったかお話ししていただけますか。生きることについて何か変化がありましたか。
- 3) 神さまの八つの役割を見て、ご自分の今までの人生でどのような変化があったかお話ししてください。
- 4) 変化があった場合、その前後のことや、生きることについて変化があれば自由にお話ください。
- 5) あなたが小さい時の神さまイメージがどのようなものだったかお話ししてください。

3 分析

分析は、M-GTA（修正版グランデッド・セオリー・アプローチ）を用いて行った。データは、調査協力者の同意を得ることができた場合に録音し、音声データから逐語録を作成した。

逐語録は A4（40 字×30 行）で作成し、A 氏が 16 ページ（12,281 字）、B 氏が 12 ページ（9,334 字）、C 氏が 6 ページ（5,052 字）、D 氏が 10 ページ（7,402 字）、E 氏が 11 ページ（7,324 字）、F 氏が 8 ページ（5,151 字）、G 氏が 19 ページ（17,146 字）、H 氏が 10 ページ（7,611 字）、I 氏が 18 ページ（13,670 字）、J 氏が 25 ページ（16,950 字）の合計 135 ページ（101,921 字）であった。

最初に、内容が豊富に語られていると判断した事例を分析焦点者として設定し、概念を生成した。概念を生成するプロセスでは、概念ごとに分析ワークシートを作成した。その後、分析焦点者から生成された概念を意識しながら、順次、他の事例について分析を行った。十の調査協力者の分析を終了した時点で理論的飽和と判断した。最終的に 22 の概念を生成し、生成した概念は九のカテゴリーにまとめられた（分析ワークシートは Appendix 4 参照）。

4 結果

(1) 概念リスト

概念とカテゴリーのリストを表 53（次頁）に示す。

表 53 概念とカテゴリーのリスト

カテゴリー	概念名	定義
1 気づきへの契機	1 やりとげた感	自分に出来る事をやり終えたという満足 それまでの生き方に行き詰まり、絶望して いる思い
	2 挫折感	
2 自己の気づき	3 自己分離	演じている自分と自分の実態の間に ギャップがあって統合されていない自己 自分の醜い姿を認識して自分を責め、苦 悩する気持ち
	4 醜い自己存在の認識	
3 変化へのステップ	5 既存の教会枠外での自己の振り返り	既成の教会という枠以外で自分を振り返 る。時として従来の福音理解が意味がな かったという思い
	6 他者との暖かい関係の体験	
4 神表象の変化	7 正直な祈り	誰にも言えないことをそのまま正直に対象 である神に語る
	8 神表象の再内在化	
5 変化の様態	9 神表象の変化の意味	神表象がどのような意味で変化したかを 整理してとらえる 挫折感が徐々に癒されて行く体験 一定の短い期間に明確に心の内面が変 化する体験
	10 緩やかな癒し	
	11 短期間の明確な内面的変化	
6 神の再発見	12 神の人格的他者性	神が自分や自然界とは全く次元の異なる 他者であるという意識、またその他者が 働きかけてくるという意識 自分の人生に起きたイベントが意外な展 開だったという意識
	13 意外性の意識	
7 自己の再統合	14 無条件さの体験	自分が出来るから赦されるのではなく無 条件に受け入れられていることを体験的 に理解する 自分がありのままでよいことに気づき、自 分を責めなくなる 自分のスタンスが揺るがないものになる
	15 素の自分の受けとめ	
	16 自分のスタンスの確立	
8 内面の生成	17 支えられている平安	内面的な苦悩から自由になり、神がいつ しよにおられることからくる平安な気持ち 自分をお願いすることよりも、やってもら っていることへの意識の変化 神さまのために生きようという思い
	18 やってもらっている意識への方向性の変化	
	19 生きる目的	
9 生き方の変化	20 自分の人生の委ね	神が自分にわかるように導いてくださる という感覚を持つことができるので、自分 で自分のことを監視しない 周囲の人や状況との関係が変化する 人にどのように評価されるかを気にしな くなる
	21 他者や状況との関係の変化	
	22 人の評価からの解放	

(2) カテゴリーごとの説明

次に、カテゴリーごとに概念を説明する。調査協力者の具体的な発言は「 」で示す。

() 内の発言者名は、調査協力者のプライバシー保護の観点から、実施順で記載した表 52 の「調査協力者一覧」を、A 氏から J 氏までランダムに振り直したものである。

1) カテゴリー《気づきへの契機》

二つの概念、〈やりとげた感〉と〈挫折感〉からなる。この二つの対照的な概念は、神表象が変化する前の出来事として、多くの調査協力者によって語られていた。そして、この二つのギャップが神表象の変化の契機となっていた。例えば H 氏は次のように語っている。「元々……、なんでも一生懸命、取り組む性格で、まあ、頑張り屋、で、健康が取り柄だった、……ので」、さらに「でも、体調を崩して、その……、頑張ることが状況的にできなくなってしまってから、すごく自分の存在価値とか意味っていうものを」。このように、神表象の変化においては〈やりとげた感〉と〈挫折感〉のギャップが契機となっていると考えられた。そのため、これら二つの概念は、《気づきへの契機》としてまとめられた。

〈やりとげた感〉とは、「自分に出来る事をやり終えたという満足」と定義した概念である。具体的には、「それで、やれるべきことは私なりにやり尽くした。と思っていた、人間的な満足感が、あって……、で、子どもが〇〇（筆者注：学校）行って、あの……、感謝ですと（A 氏）」、「私は自分なりにいいクリスチャン（筆者注：「キリスト者」と同意、以下、調査協力者が回答したまま「クリスチャン」と表記）でありたいと思って一生懸命やってきたことを、愛して来たというまあ一つの自負になっていたんだと思うんですけどね（G 氏）」と語っている。神に対する姿勢も、人生の具体的な取り組みについても、自分なりにやっているという満足感である。

〈挫折感〉とは、「それまでの生き方に行き詰まり、絶望している思い」と定義した概念である。具体的には、「崩されて、……ていう感じ。……なぜだろうっていう。どうしてっ。……関わったいろんな人に、目に付いたんですけども、いくら目についても、何があって何があって、どうしようもない、結果が出ちゃって（A 氏）」、「〇〇（筆者注：年齢）を目前に、離婚ていうことがありまして、しかも〇人も子どもをしながら離婚ていうことがあって、……そういうふうになっちゃったのが、どうしてなんだろう、どうしてなんだろう、どうしてなんだろうって、本当にどうしてなんだろうってわからない（C 氏）」と語っている。それまで立派にやれていただけに、大きな挫折感として体験されている。

2) カテゴリー《自己への気づき》

〈自己分離〉と〈醜い自己存在の認識〉からなるカテゴリーである。この二つの概念は、神表象が変化する前に自分にどのように対峙したかという問題として、多くの調査協力者によって語られていた。そして、この二つの認識が神表象の変化の前提となっていた。例えば G 氏は次のように語っている。「あなたは主のためとか言ってるけども、結局のどこ

ろ、あなたが満足したかった、あなたが優越感に浸りたかった、みんなから誉められたかった、結局そういうことだったでしょっていう」、さらに「その、自分の何とも言えない醜さ、あるいは卑怯な態度っていうかね、全部自分が刈り取っているだけのことなのに、それを神さまのせいにして怒っている自分っていうのは、いったい何なんだっていう」。このように、神表象の変化においては〈自己分離〉と〈醜い自己存在の認識〉という自己への対峙が前提となっていると考えられた。そのため、これら二つの概念は、《自己への気づき》としてまとめられた。

〈自己分離〉とは、「演じている自分と自分の実態の間にギャップがあって統合されていない自己」と定義される概念である。具体的には、「あまりのギャップに。で、今思えば、自分の満足だったんだなあってことは、今んなったらわかりますけどね(A氏)」、「だから、あの、人の前で、こう、かくあるべしクリスチャンを、なにしろ生まれたほんのしばらくの間から、ずーっと聖書のメッセージ聞いているわけですから、演ずることができますよね。だけれども、演じている自分とそうじゃない自分との間に、ものすごいギャップがあって(C氏)」と語っている。

〈醜い自己存在の認識〉とは、「自分の醜い姿を認識して自分を責め、苦悩する気持ち」と定義される概念である。具体的には、「その方がすごくできる方で、本当にみなさんから、尊敬されている方で、なんかその、別にはじめはそんなふうに思わなかったんだけど、なんか、あの人さえないなければ自分をもうちょっとこう、認めてもらえるのにみたいな、なんかそういう、すごい気持ちが出て来て、なんかそれを隠そうとするんだけど、それがもう本当に出て来てしまうっていうのが、本当に恐ろしいというか(B氏)」、「今でもちょっと、あの……、心を自分の中に、こう、あんまりよくわからなかったことが、イエスさまが、こう、掘り起こしてくださって、自分の醜い面を(D氏)」と語っている。

3) カテゴリー《変化へのステップ》

〈既存の教会枠外での自己の振り返り〉と〈他者との暖かい関係の体験〉の二つの概念を含む。この二つの概念は、神表象が変化する前の一つのステップとして、調査協力者によって語られていた。そして、この二つのステップが神表象の変化への備えとなっていた。例えば A 氏は次のように語っている。「先生、経験してないじゃんっていう。……経験してなかったら無理だと思って、あるときから期待しなく。……なんか、そんなことを考えながら子育てしてたから」、さらに「こういうことあったって、もしかしたら、その話せたのが、今思えば、癒されてく。……その、夫婦の問題とか。……子育ての問題とか」。この

ように、神表象の変化においては〈既存の教会枠外での自己の振り返り〉と〈他者との暖かい関係の体験〉が内面的ないやしを体験する準備となっていると考えられた。そのため、これら二つの概念は、《変化へのステップ》としてまとめられた。

〈既存の教会枠外での自己の振り返り〉とは、「既成の教会という枠以外で自分を振り返る。時として従来の福音理解が意味がなかったという思い」と定義される概念である。具体的には、「……教会は針のむしろでした。……この人は噂をしていろんなことを言ってたんだらうなっていう、あの、見えちゃったんですよね（A氏）」、「……まあ、M先生のカウンセリングを受けるようにH先生が勧めてくださって、……先生がおっしゃったのは、そんなの当たり前じゃないの、生木を引き裂かれるようなものだもの、……あなたがしてきたことの結果の罰でこうなっているわけじゃないって、あの、だから心配なくていいって。……それで、一つ、肩の荷が下りて（C氏）」と語っている。教会という既存の枠とのギャップを感じながら、他の場所に助けを求めたいという気持ちが示唆されている。

〈他者との暖かい関係の体験〉とは、「仲間との交わりやカウンセリングなどの対人的な援助を受ける体験」と定義できる概念である。具体的には、「授業そのもののの中に、その、肯定感というものがものすごくあって、自分はいいいんだっていうか、肯定してもらっているっていう雰囲気、今まで感じたことのない雰囲気があって……、その雰囲気ってのは今思えば肯定感（H氏）」、「本当にこう……、人との関係を大事にしてくれるし、裏切らないし、週一回会う時間を持って、で、その時間は自分のために時間を費やして下さって……（J氏）」と語っている。

4) カテゴリー《神表象の変化》

〈正直な祈り〉と〈神表象の再内在化〉からなるカテゴリーである。この二つの概念は、神表象が変化する体験の実態として、調査協力者によって語られていた。例えばB氏は次のように語っている。「そういう思いがあるっていう、それは本当にどうにかしなくちゃっていうんで、そこから本当に祈るっていうか」、さらに「本当に十字架が私のためだったっていうのが、そこで本当に神さまイメージがガラッと変わって」。このように、神表象の変化においては〈正直な祈り〉と〈神表象の再内在化〉が実体験として経験されていると考えられた。そのため、これら二つの概念は、《神表象の変化》としてまとめられた。

〈正直な祈り〉とは、「誰にも言えないことをそのまま正直に対象である神に語る」と定義される概念である。具体的には、「で、でも、その頃から、夜に、本当に神さまって、まあ、時に泣いたりしながら、神さまの、神さまに、自分からお祈りするようになって（E

氏)」、「そういう思いになって、まあ、本当に、初めて神さまの前で泣いたんですね (G 氏)」という発言があった。

〈神表象の再内在化〉とは、「神についてそれまで持っていたイメージが変化し、新しいイメージを内在化させる」と定義できる概念である。具体的には、「裁きにあってしまうとか、……罪を犯してしまう人間だけでも、でもそれもすべてまるごと受けとめてくれる (B 氏)」、「それで 180 度、わたしの神さまに対する考え方が変わったんですね (C 氏)」という発言があった。

5) カテゴリー《変化の様態》

〈神表象の変化の意味〉、〈緩やかな癒し〉、〈短期間の明確な内面的変化〉の三つの概念を含むカテゴリーである。この三つの概念は、神表象の変化がどのような様態で起きたのかということについて、多くの調査協力者によって語られていた。例えば H 氏は次のように語っている。「(面接者：じゃあ、やっぱり、こう、ある種の連続性があるって)。ありますもんね。あります」。さらに「やっぱり、ある日突然ではなくて、徐々に徐々にこう、変わって来てる、信仰の再生の時とも違ってくる」。また B 氏は次のように語っている。「(面接者：じゃあ、何となく、一年かかってわかりましたってんじゃないかって)。本当にそこに。(面接者：そんな時だった)。うんうん」。このように、神表象の変化の様態は、神の存在そのものは同じ存在であり、神表象の変化のスピードは一様でないと要約できると考えられた。そのため、これら三つの概念は、《変化の様態》としてまとめられた。

〈神表象の変化の意味〉とは、「神表象がどのような意味で変化したかを整理してとらえる」と定義される概念である。神表象の変化を前後して、神の存在をどのように捉えていたかということである。具体的には、「おんなじ方です。……前は近寄りがたい方だったのに、今は、見守ってくださる、導いてくださる、わたしの全生涯を引き受けてくださるって感じなんですけども (D 氏)」、「深まったのかどうかわかりませんが、違う面を見て、感謝ですね、という世界ですよ。……ああ、濃くなってますね。……明確に濃くなってる (I 氏)」、「ただ、あの……、じゃあ、何が変わったかと言われると、別だったのかと言われると、そうではないと私は思っていて、同じお方なんですけど、私はその、ある面しか見てなかったというか、知らなかったという、まあ、そういうことだろうと思うんですね (G 氏)」と語っている。イメージは明らかに変化したけれども、同じ存在として認識していることが示唆されている。

〈緩やかな癒し〉とは、「挫折感が徐々に癒されて行く体験」と定義できる概念である。

具体的には、「……で、なんであんなだろうってことが、……いつ解決したかはわかんないんですけど、段々となんか癒されていって (A 氏)」、「そういうことは、非常にその、ある日突然、ガラッと変わったわけじゃないですもんね。徐々に徐々に (I 氏)」と語られた。神表象の変化が緩やかなプロセスであるというとらえ方をしていた。

〈短期間の明確な内面的変化〉とは、「一定の短い期間に明確に心の内面が変化する体験」と定義できる概念である。具体的には、「世界がもう変わったっていうくらい (B 氏)」、「(面接者：それが、その……、信じようとしたときに、それが変わっていったって感じなんですね)。はい。もう、けっこう一瞬でしたね (J 氏)」と語られていた。神表象の変化は、緩やかなプロセスで認識しているケースと、非常に短い時間で認識しているケースの両方が観察された。

6) カテゴリー《神の再発見》

〈神の人格的他者性〉と〈意外性の意識〉の二つの概念を含むカテゴリーである。この二つの概念は、神表象が変化した出来事がどのような意識で受け止められたかということについて、調査協力者によって語られていた。例えば B 氏は次のように語っている。「本当にダメだって思ったときに、本当に、その時にもう、これしかないってみことばが来て、今まで本当に普通、今までも読んでみことばなんだけども、これは私に語られてるっていう、なんか、なんかすごく感じて」。このように、神表象の変化においては、神が人格的他者として感じられ、それが意外なこととして認識されていた。そのため、これら二つの概念は、《神の再発見》としてまとめられた。

〈神の人格的他者性〉とは、「神が自分や自然界とは全く次元の異なる他者であるという意識、またその他者が働きかけてくるという意識」と定義される概念である。具体的には、「(面接者：そうすると、クリスチャンにおなりになる前も、神さまっていうのは、いわゆるただのパワー・スポットとか、そんなんじゃなくて、やっぱり)。そうじゃないですね。……やっぱり、なんか、人格をもって、意思を持っている感じはしましたよ。……絶対者としての。……そういう感じはしました (I 氏)」、「まあそういう、やっぱり力強い神さまが……、いつも守ってくださるっていうか……、個人的にも関わりをもってくださるっていうことが……、あの……、ハッキリしたって、それでそういうことかなと思います (J 氏)」と語られていた。神社や仏閣など、日本の既存の宗教観とは明確に異なる存在として神に遭遇したという意識が示唆されている。

〈意外性の意識〉とは、「自分の人生に起きたイベントが意外な展開だったという意識」

と定義できる概念である。具体的には、「で、改めてやっぱりそういう出来事ってのは、要するに私が求めたからではないし、……まあ、少なくともその時点では、私はまあ、まさに交通事故っていう表現をね、いつか聞いたことありますけども、まさにわたしは全然予期しない、で、起こっちゃったという、その必然性は私の中にはなかったという。……まさか、そんな展開になるなんて、っていう感じなんですね。まあ、それだけに、私は本当に愛されているんだっていう確信になっちゃったという（G氏）」、「（面接者：それから、変わったあとは……、神さまが自分を探してる……）。あー、そうですね。そうなんですよ。見付けられた……、見付けられたっていうことでも……、まあ、あの……、わたしもそんなときは見付けたと思いましたけど（J氏）」という発言があった。神表象の変化が想定外のものであったというとらえ方をしていることが示唆されている。

この二点は神表象の変化のプロセスにおいて重要な点であると判断し、詳細を後述する。

7) カテゴリー《自己の再統合》

〈無条件さの体験〉、〈素の自分の受け止め〉、〈自分のスタンスの確立〉の三つの概念を含むカテゴリーである。この三つの概念は、神表象が変化した後の自己の認識として、多くの調査協力者によって語られていた。そして、この三つの自己についての認識が神表象の変化の後の特徴となっていた。例えばJ氏は次のように語っている。「わたしが何をしたからとか、何かを……、あの……、何かをもらうためにやってるんじゃない、神さまの無条件の愛ってものを知って」。また、B氏は次のように語っている。「大丈夫っていうふうに、本当に、……ただ、すごい力が抜けて、今までは……すごくこう、比べてたりとかしてたところがあったんですけど、なんか、そうじゃないっていうか、なんか……、もう私は私で、こう、やれることをやればいいっていうか、精一杯」。さらに「（面接者：自分なりのスタンスが定まったって感じなんですか）。そうですね。すごく、うん、なんかもう、これで揺るがないっていうか。（面接者：ええ。揺るがないって感じ）。うん、もう、なんか、まあ、揺るがなっていうと大げさかもしれないけれども。ああ、これでいいんだっていう納得が、すんとこう落ちた感じで……」。このように、神表象の変化後には、〈無条件さの体験〉、〈素の自分の受け止め〉、〈自分のスタンスの確立〉が認識されていると考えられた。そのため、これら三つの概念は、《自己の再統合》としてまとめられた。

〈無条件さの体験〉とは、「自分ができるから赦されるのではなく無条件に受け入れられていることを体験的に理解する」と定義される概念である。具体的には、「いつも、いてくださるっていうのが、どれだけ、すごい、いいことだっていうか、だから自分のその、ダ

メな部分も、受け入れていただいているっていうのが、わかっていただいているっていうか、そういう気持ちがある（H氏）、「仕事の中ではやっぱり、嫌なこともあるし、ライバルに負けたときの悔しさとか、という高慢さがあるじゃないですか。オレだってもっとうまく……、そういうところのいやらしさってのは、当然、いつも人間は持っていると。……そういうものが、そういうものが、人間なんだよっていう、解釈をしますねえ。……で……、それは、それを赦してくださるのが神さまだよと……、そんなときでも赦してくれるじゃないかと、そういう思いですね、やっぱりねえ（I氏）」と語られていた。自分が何かをしたからではなく、条件なしに受容されているという感覚が表現されている。

〈素の自分の受け止め〉とは、「自分がありのままでよいことに気づき、自分を責めなくなる」と定義できる概念である。具体的には、「……で、それからどうなった、なんか……、ありのまんまでいい、なんかそんなものを、いつ身につけたのか、わかんない（A氏）」。

「C先生はおっしゃるには、あの……、ウソついちゃいけないって、二面性があっちゃいけないって、あの……、もう神さまは全部お見通しなんだから、立派で、いい人である必要もないし、十戒が守れなくて当たり前だし、あの……、わがままで自己中心でも当たり前だし、ただ、そういう自分であることを認めて、……それで180度、わたしの神さまに対する考え方が変わったんですね（C氏）」、「それから、やっぱ、学校でも、何て言うのかな、一言で言えば、背伸びをしたり、自分をつくろったり、っていうことが極端になくなったっていう（G氏）」という発言があった。背伸びしないで生きることができるようになっていたことが示唆されている。

〈自分のスタンスの確立〉とは、「自分のスタンスが揺るがないものになる」と定義できる概念である。具体的には、「うん、そういうのは、全然、そういうのはなくなって、自分は自分しかない、自分でしかないって、なんか、それがまたそれでいいっていうか、……うん、そういうのがやっとわかってきたかなって……、感じですけど。……………（B氏）」、「あれ、あん時、まあ、社会的に、会社ん中いたときに、いろんなお葬式に出なきゃいけないわけじゃないですか。……それでも、だから何なのって、いう感じがしますね、ボクはね。もう、それはそれで割り切ってやっちゃえばいいじゃない、っというふうに、非常にドライな、それはボクの信仰揺らぐわけじゃないと（I氏）」と語られていた。必要以上に人の評価にとらわれない姿が示唆されている。

8) カテゴリー《内面の生成》

〈支えられている平安〉、〈やってもらっている意識への方向性の変化〉、〈生きる目的〉

の三つの概念からなるカテゴリーである。この三つの概念は、神表象が変化した後には体験した自己の認識が、どのような内面的な変化をもたらしたかを表すものとして、多くの調査協力者によって語られていた。例えば H 氏は次のように語っている。「そばにいても、口やかましく言う親みたいなんじゃなくって、見守っててくださってるっていう、安心感」。また、B 氏は次のように語っている。「神さまがもう私を本当に変えてくださる、生かしてくださってるっていう、そっちに変わったら」。さらに、D 氏は次のように語っている。「恵みをこんなにいただいて、本当ただでいただいているのに、……その、受けたものをどう、どうしてつらいのかなんて思うようになって」。このように、神表象の変化においては〈支えられている平安〉、〈やってもらっている意識への方向性の変化〉、〈生きる目的〉の三つの面で、内面が新たに生成されていると考えられた。そのため、これら三つの概念は、《内面の生成》としてまとめられた。

〈支えられている平安〉とは、「内面的な苦悩から自由になり、神がいっしょにおられることからくる平安な気持ち」と定義できる概念である。具体的には、「瞬間にそれができて……、で、そしたら、今までに、経験したことのない平安ていう、……が与えられて、それが、まあ、今いろんな中通るとき、神さまみんなこういう、布石だったのかなあと、思いながら (A 氏)」、「でも支えられたり、必ず守られているっていう思いを与えていただいて、なので、あの……、まあ、本当の平安が、その、神さまのもとにあるって思ってから (E 氏)」という発言があった。

〈やってもらっている意識への方向性の変化〉とは、「自分がお願いすることよりも、やってもらっていることへの意識の変化」と定義できる概念である。具体的には、「だから、そういう意味で、今は、本当に神さまとの、もう、何をしてくださらないんですよ (A 氏)」、「変わって、でも、私が何かしたっていうか、そういうわけでもなく、本当に、なんか、神さまがそういうふうにしてくださったんだなあっていうふうに、なんか、自分がなんかしたとかいうふうに思わなくなったっていうか (B 氏)」と語られていた。

〈生きる目的〉とは、「神さまのために生きようという思い」と定義できる概念である。具体的には、「神さまがもう私を本当に変えてくださる、生かしてくださってるっていう、そっちに変わったら、もうなんか、神さまのためになんかしなくちゃって。……なんかその、負担じゃないっていうか、なんか、なんていうんですかね、もう、神さまが私に、しなさいっておっしゃってることなんだから、やろうっていうか、なんか、そういうふうに変わって来たっていうか、うん (B 氏)」、「神さまが、その、望んでくださるような生き方

をしたっていうふうに、まあ、でも。……そうか、神さまが願ってくださる道ってのがあるのかっていうことにはたと気づかされて（E氏）」という発言があった。

9) カテゴリー《生き方の変化》

〈自分の人生の委ね〉、〈他者や状況との関係の変化〉、〈人の評価からの解放〉の三つの概念を含むカテゴリーである。この三つの概念は、神表象が変化した後に、自己の認識が変化する《自己の再統合》、内面が新しく生成される《内面の生成》を経て、生き方がどのように変化したかという観点で、多くの調査協力者によって語られていた。例えばE氏は次のように語っている。「それから、あの……、すごく妙な言い方なんですけど、後は野となれ山となれというか、わたしがこうであっても神さまが責任持ってくださいるんだから平安でいていいんだって」。また、I氏は次のように語っている。「(面接者：お焼香しても、そのことで、自分の信仰が揺らぐわけでもないし、神さまに対する思いが揺らぐわけでもない)。なにもない。それこそ、遺族の方へ、なんて言うの……、やらないで失礼しますというのもまた、非常に……、まあ、与えられた職場の中の立場から言って、困るんじゃないかと思ってね。相手の方がね。それで、まあ、軽く、軽く流しちゃうってのはあるんですけどね」。さらに、J氏は次のように語っている。「そういうのが、自分がすごく気になりだして……。でも別に友だち、そういうことを言うわけでもなく。……だから、でも、恐れていたんだと思います。いつか離れていくんじゃないか、みたいな。そういうこと言ったら、嫌いになって離れて行くんじゃないかなっていう恐れが多分なくなったんだと思います」。このように、神表象の変化後には、〈自分の人生の委ね〉、〈他者や状況との関係の変化〉、〈人の評価からの解放〉の三つが、生き方や関係性の変化として体験されていると考えられた。そのため、これら三つの概念は、《生き方の変化》としてまとめられた。

〈自分の人生の委ね〉とは、「神が自分にわかるように導いてくださるという感覚を持つことができるので、自分で自分のことを監視しない」と定義できる概念である。具体的には、「もしその、どうしても神さまが、ここは変えたほうがいいって思ったら、神さまが示してくださいって、変えてくださるって、自分がなんか頑張っているんじゃないかって。……そういう信仰に変えてくださって（B氏）」、「それから、あの……、すごく妙な言い方なんですけど、後は野となれ山となれというか、わたしがこうであっても神さまが責任持ってくださいるんだから平安でいていいんだって、そう心遣いして、一日の苦労は一日で足りるんじゃないかって、そういうにこう、安心して暮らせるようになりましたかしらね（C氏）」と語られていた。

〈他者や状況との関係の変化〉とは、「周囲の人や状況との関係が変化する」と定義できる概念である。具体的には、「今まではなんかこう、裁くって感じで子どもを見ていた、だけど、なんて言うんだろう、やっぱり、自分も、裁く、うーん、本当、罪人だっていう、そういうわかったから、なんか、子どもを赦せるっていうか、なんか、何をしてもなんか、愛せるっていう、なんか、受けとめられるっていうふうに変わって来て（B氏）」、「友だちと連絡するのも怖いくらいだったんですけども、で、こう、イメージが変わってきて、本当に、こう、状況っていうか、が変えられてきたことによって、友だちとの関係も、また、戻って来ましたし（F氏）」と語られていた。

〈人の評価からの解放〉とは、「人にどのように評価されるかを気にしなくなる」と定義できる概念である。具体的には、「ん。っということです。あと、そう……、人からどう思われるんだろうってことを気にしなくなった。……それまでは、世間様が世間様がっていう枠組みの中で、世間様に恥をかく、恥の感覚がすごく多かったんだけど、それがなくなりましたかねえ（C氏）」、「うん。だから、いい人にならなくていいわけですから、うん、愛されているっていう、その自信っていうか、喜びがあるので、……聖人のようなすばらしい人になったわけではなくって、自分のありようっていうのは確かにまずいところはまずいんですけど（G氏）」、「信仰的なこと言われると……、すごくナーバスになってた、……のが、……楽になった。それは……、それはあれかな。（面接者：人から言われても、あまり気にならない。）……そんなに……、そのことで、すごく不安になっちゃっていう。……っていうことはなくなったかなあ（H氏）」と語られていた。人の評価を必要以上に気にしなくなった姿が示唆されている。

(3) ストーリーライン

次に、表 54 にある神表象の変容のプロセスを、ストーリーラインで表現した。〈 〉は概念を、《 》はカテゴリーを表す。

神表象が変化する前には、それほど問題を抱えていたわけではなく、自分なりの〈やりとげた感〉を感じているが、〈重大なことがら〉が起きたときに〈挫折感〉を感じるようになる。この相反するように感じられる〈やりとげた感〉と〈挫折感〉のギャップが《気づきへの契機》となる。

そのことで自分が醜い者であるという〈醜い自己認識〉、そして、自分がやっていること

と言っていることが合致していないという意味での〈自己分離〉に気づく。《自己の気づき》である。

自己に気づくことで《変化へのステップ》へ進む。このステップでは二つのことが経験される。一つは〈既存の教会枠外での自己の振り返り〉である。それまでの教会仲間以外の人との関わりや、カウンセリングを受けるという経験を経て、〈他者との暖かい関係の体験〉をする。

その中で、自分の実態よりもよく見せようとしている自分ではなく、実態に合った自分として、〈正直な祈り〉を体験し、〈神表象の再内在化〉が起きる。神表象の変化は、〈緩やかな癒し〉として、かなり時間のかかるプロセスの中で経験する場合と、〈短期間の明確な内面的変化〉として経験する場合がある。神のイメージは変化するが、神という存在については神表象の変化前後にわたって同じであるというとらえ方をしている。

その後、《自己の再統合》を経験する。自分ができるから赦されるのではなく、無条件に受け入れられていることを体験的に理解する〈無条件さの体験〉、自分がありのままでよいことに気づく〈素の自分の受け止め〉、これらのことを経験しながら、〈自分のスタンスの確立〉に至る。

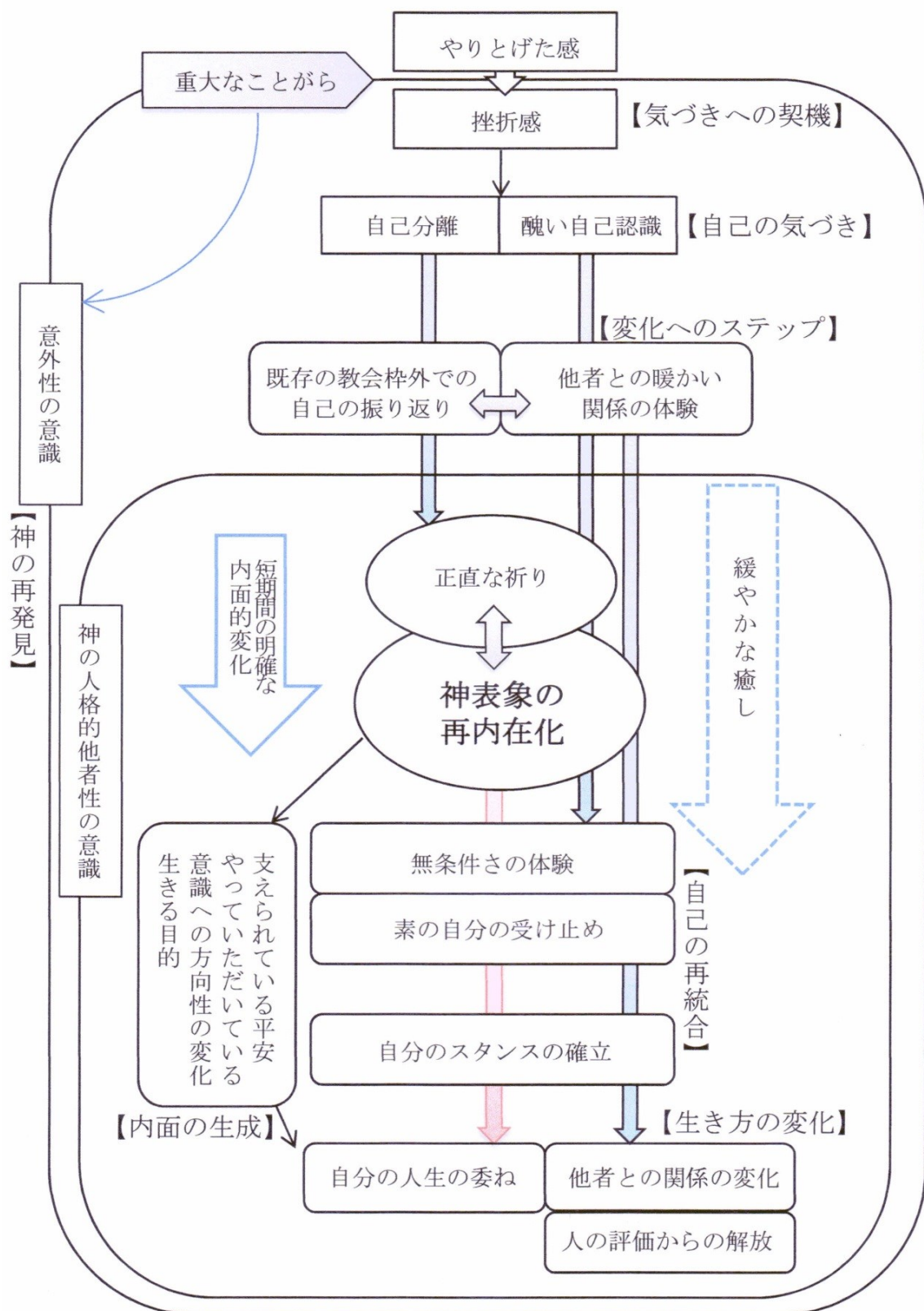
神表象が変化することによって、《内面の生成》を経験する。内面的な苦悩から自由になり、〈支えられている気持ち〉を感じるようになり、自分がお願いするのではなく、やってもらっていることに意識が変化する〈やってもらっている意識への方向性の変化〉、そして、〈生きる目的〉を捉えなおす。

《自己の再統合》と《内面の生成》を経て、《生き方の変化》が起きる。神が自分にわかるように導いてくださるという感覚から、自分で自分のことを監視しないで済むという意味で〈自分の人生の委ね〉の状態を経験し、〈他者や状況との関係が変化〉し、心理的に〈人の評価から解放〉される。

これらのプロセス全体において、二つの観点で《神の再発見》をする。神が自分や自然界とは全く次元の異なる他者であるという意味での〈神の人格的他者性〉、また自分の人生で起きたイベントが意外な展開だったという意味での〈出来事の意外性〉である。

(4) 結果図

どのようなプロセスで神表象が変化したか、生成した概念とカテゴリーの関係を図にまとめた。その結果を図8（次頁）に示す。



注：文字は「概念」、【文字】は「カテゴリー」を表す

図 8 神表象の変化のプロセス

5 分析2

M-GTA の分析からは、神表象の変化に伴い、調査協力者の生き方の変化や自己イメージの変化が生じていることが見いだされた。しかし、変化する神表象それ自体には、調査協力者間で違いが見られた。そのため、本項では神表象について、より詳細な分析を行う。

(1) 他者性と意外性の意識

第一に、神表象が変化するプロセスにおいては、神を人格的他者として意識するようになって行く（結果 8-1）。神表象の変化のプロセスの特徴は、神を人格的他者として意識する他者性である。なぜなら、神表象が変化するプロセスは《神表象の変化》や《内面の生成》というカテゴリーから生じており、これらのカテゴリーは、神を人格的他者として再発見したことによって生じたものと考えられるからである。キリスト者になる経験にも人格的他者との出会いという意味合いが含まれるが、神表象の変化のプロセスにおいては、それがさらに意識的なものとして受けとめられている。

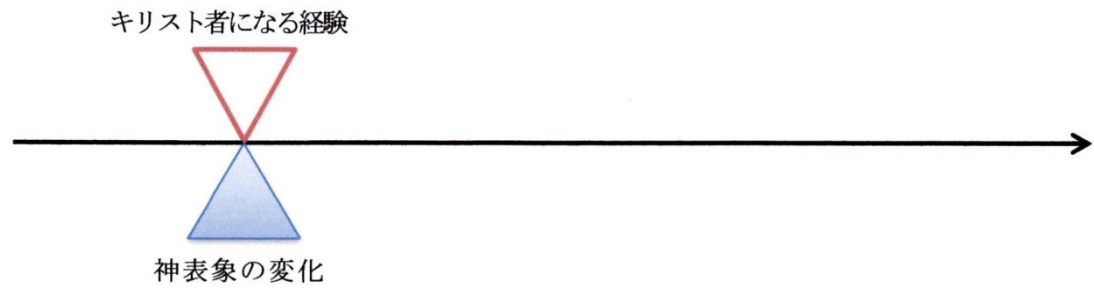
第二に、そのプロセスは、意外な展開として意識されている（結果 8-2）。神表象の変化のプロセスのもう一つの特徴は、意外性である。なぜなら、神表象が変化するプロセスは、《気づきへの契機》や《自己の再統合》というカテゴリーから生じており、これらのカテゴリーは、経験される出来事が意外なものと受け止められていることによって生じたものと考えられるからである。神表象の変化の前に経験する重大なことがらも、人生の想定外のことであり、そのような中で直面するようになった自己も想定外のものであり、さらに、神を人格的他者として意識するようになることも、想定外のこととして認識されている。これらのプロセスを経て神表象が変化し、そのことによって自己のスタンスが確立されるという経験をする。

このことは、日本人の心理との関連で考察すべき問題を含んでいる。自分とは全く異なる他者との出会いを通して、人間は初めて自己を認識し、そのことによって「個」としての自己を認識できるということである。

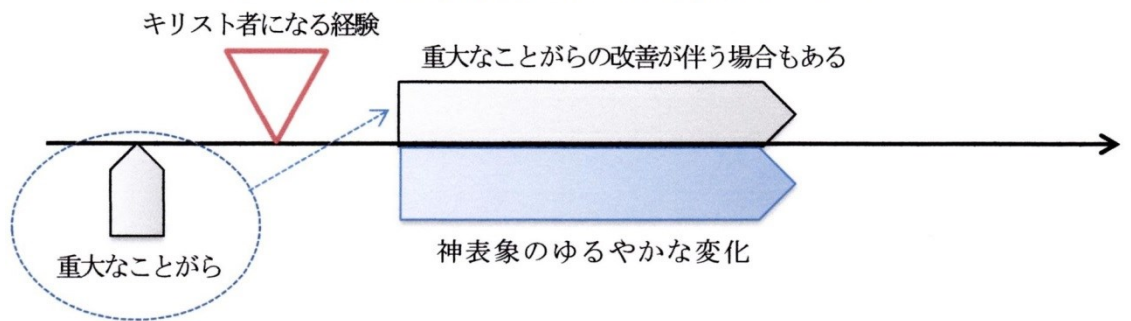
(2) 神表象の変化のプロセスパターン

次に、神表象の変化のプロセスに着目して調査協力者の語りをまとめたところ、調査協力者の神表象の変化のプロセスは、以下の六つに分類されることが見出された。六つのプロセスパターンを図 9（次頁）に示す。

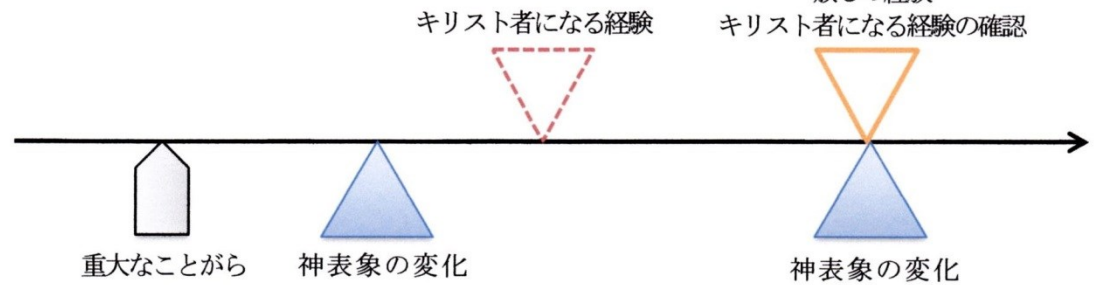
【パターン A】キリスト者になる経験と重なったと認識しているパターン



【パターン B】キリスト者になる経験後に変化したと認識しているパターン



【パターン C】赦しの経験と重なっていたと認識しているパターン



【パターン D】Cの変化型、赦しの経験の後に変化したと認識しているパターン

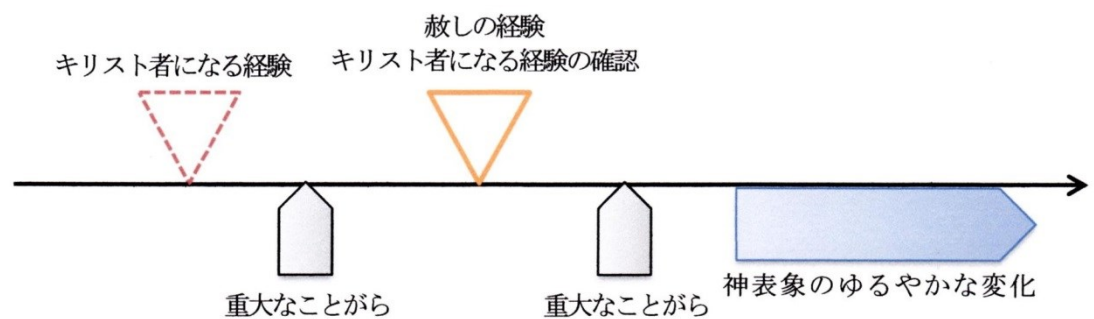
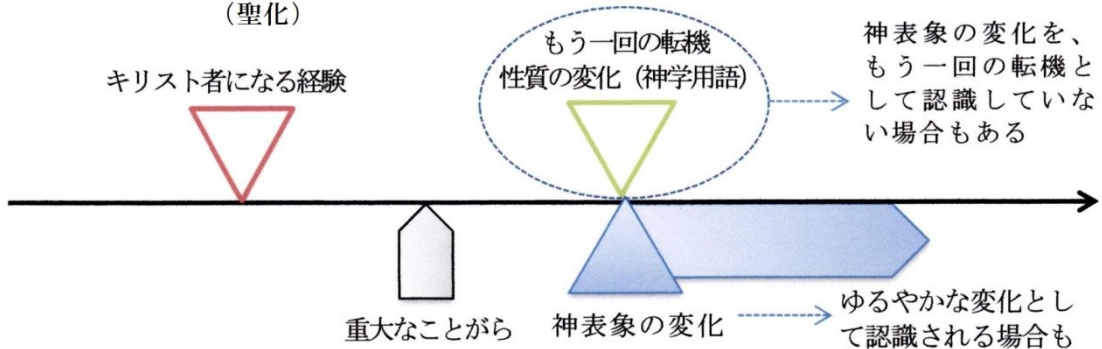


図 9 神表象の変化 ～ライフ・イベントや信仰との関係

【パターン E】性質の変化としての転機的経験周辺と重なっていたと認識しているパターン（聖化）



【パターン F】性質の変化としての転機的経験よりも後に変化したと認識しているパターン（聖化）

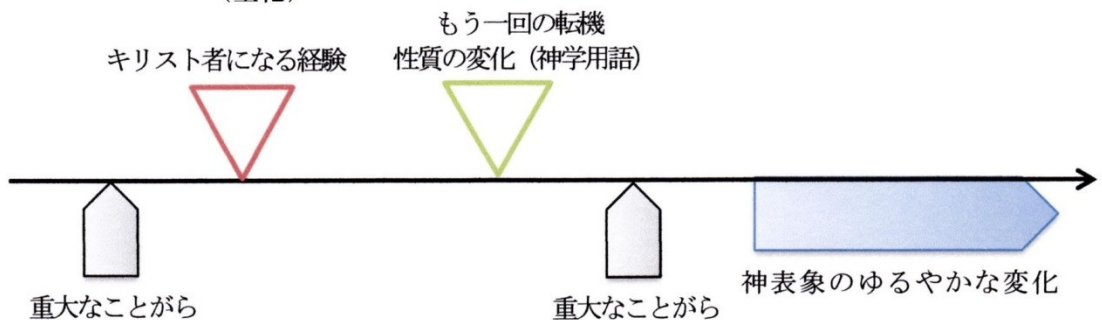


図 9b 神表象の変化 ～ライフ・イベントや信仰との関係（続き）

以下で、それぞれについて解説する。まず、パターン A であるが、これはキリスト者になる経験と神表象の変化が一致したと認識している場合のプロセスを表している。この例では、神表象の変化と信仰の変化が並行している。このパターンに当てはまったのは J 氏である。例えば、J 氏は次のように述べている。「二十代での変化ですね……。えっとー、そうですね……。あの……。高校からミッション・スクールで育ったんですけども。…大学三年の時に、個人的なあ、その、救い主で。……それは……。あの……。どんな、こう、わたしが何をしたらとか、何かを……。あの……。何かをもらうためにやってるんじゃない、神さまの無条件の愛ってものを知って」。このように、神表象の変化がキリスト者になる経験と一致しているのがパターン A である。

次にパターン B であるが、これはキリスト者になる経験の後に、神表象が変化したと認識しているプロセスを表している。キリスト者になる前に重大なことがらを経験し、それが神表象の変化と並行して改善したケースもあった。このパターンに当てはまったのは F 氏と I 氏である。例えば、I 氏は次のように述べている。「やっぱり、ある日突然ではなく

て、徐々に徐々にこう、変わって来てる、信仰の再生の時とも違ってくる、20年前とも変わってると、常に変わってる」。このように、キリスト者になる経験の後にゆっくりした神表象の変化を経験したのがパターン B である。

次にパターン C であるが、これはキリスト者になる経験の後にもう一度赦しを確信し、その赦しの確信と同時に神表象の変化を経験するなど、複数の経験をしたと認識している場合のプロセスを表している。このパターンに当てはまったのは E 氏である。例えば、E 氏は次のように述べている。「女子校で、……なかなかその人間関係が難しくって。……神さまに、自分からお祈りするようになって。……すごく神さまは愛してくださっていて、生きてもいいんだってというか、そういう愛のまなざしに気づかせていただいて。(面接者：〇〇歳のとき、洗礼をお受けになったということですけど)。……えーと、ハッキリと告白したのは、その、〇〇歳に」。このように、複数の出来事を重ねる中で、神表象の変化を経験したプロセスを表しているのがパターン C である。

次にパターン D であるが、これはキリスト者になる経験の後に、赦しを確信する経験をしているが、神表象の変化はそれとは別にゆるやかな変化として体験したと認識しているプロセスを表している。このパターンに当てはまったのは D 氏、H 氏である。例えば、H 氏は次のように述べている。「段々段々、こう、気持ち、なんて言うか、受け入れられるようになって、病気そのものも、まあ全然、受けとめるまでにすごく時間がかかったけど……(面接者：じゃあ、神さまイメージ変わったっていうのは……)。体調崩してから。…なんていうの、かき立てられるような、生き方だった。(面接者：それが、どんなふうに……、変わって)。まあ、父、うーん、父に変わった。……十字架経験てのは、また全然別のところでしているんで。……あっ、変化してるわ」。このように、キリスト者になる経験、赦しを確信する経験などを経て、緩やかな神表象の変化を経験しているのがパターン D である。

次にパターン E であるが、これはキリスト者になる経験の後に重大なことがら起き、そのことを契機に神表象が変化したと認識している場合のプロセスを表している。この例では、神表象の変化を「高次の回心体験」(筆者注：「聖化」の意)(松島・宮下、2008)として認識しているケースもあれば、「高次の回心体験」として認識していないケースもあった。このパターンに当てはまったのは B 氏、G 氏などである。例えば、B 氏は次のように述べている。「でも、本当にそこから変わったっていうのは……、だから、もうそれがきよめなのか、その辺がわからないんですけど、なんかもうそこから本当にガラッと変わっ

たか」(筆者注:「きよめ」とは「高次の回心体験」の意)。このように、キリスト者になる経験の後に重大なことがらが起き、そのことを契機に神表象が変化したのがパターン E である。

次にパターン F であるが、これは、神表象の変化が、キリスト者になる経験とも「高次の回心体験」(松島・宮下、2008)とも一致していなかったと認識している場合のプロセスを表している。このパターンに当てはまったのは A 氏である。例えば、A 氏は次のように述べている。「(面接者:その転機ってのは……つまり、救いの経験でもない、きよめの経験でもない、何だったんでしょうか)。……きよめの恵みはいただいていた、それは揺るがないし、救いの確信も揺るがないし、……ただ気がついたときに、気がついたっていか、ふっと振り返る気持ちの余裕ができたときに、あれ? 神さますごいことして下さったのかなって。……はっきり言えないんです。そのきっかけは、起点はあるんだけど、いつからだったっていうのはわからない」。このように、神表象の変化が、キリスト者になる経験とも「高次の回心体験」(松島・宮下、2008)とも一致していないのがパターン F である。

以上のように、神表象が変化するパターンは多様であることが観察された。信仰の体験的側面はオリジナルである(結果 8-3)。神表象の変化は、緩やかな癒しとして、かなり時間のかかるプロセスである場合と、短期間の明確な内面的変化として経験する場合がある。

それにもかかわらず、共通点は観察された。第一に、重大なことがら、例えば対人関係の挫折、家族関係の破綻、受験などの人生の転機における失敗、愛する対象の喪失などの後に神表象が変化する体験に至る場合が多いということである(結果 8-4)。神表象の変化は、人間の思索の結果ではなく、困難な場面で向き合う自己の認識、あるいはそのような自己認識に土台した他者認識によるものであることを示唆している。第二に、キリスト者になる経験と神表象が変化した経験は時間的に重ならない(結果 8-5)。キリスト者になることは転機だが、そのことで神表象が変化したり、生き方が変化したりすることではない。

「個」の確立のためには、キリスト者になる経験以上の、内的変化を促すイベントが必要だということになる。西洋的精神土壌とは異なる日本の特徴であることが推察される。

(3) 神表象の変化

次に、変化前後の神の存在をどのように認識していたかに着目して調査協力者の語りからことばを抽出し、そのまま抽出して列記した。それを表 54(次頁)に示す。

表 54 神表象の内容の変化

キリスト者になる前	キリスト者になったあと	神表象が変化したあと
裁判官 暖かいけど遠い 宇宙が動いているから お空の上にいる 限りなく無神論 神、仏は神とっていなかったが、神はいる	偉い、厳しい 愛してくださる あがない主 あがない主 あがない主 いっしょにいてくださる	甘えられる存在 愛のまなざし あがない主 あがない主、創造者、父 あがない主、牧者 あがない主、牧者
怖い方 裁判官、王 裁かれている 裁きの神	王、裁判官(若い頃) 王、創造者 王、創造主 応答してくることはなかった	あがない主、牧者、創造者 裏切らない方 帰れる場所 距離が近くなり、ありのままを受けいれてくれる
叱られる 地獄へやる人 自分とは関係ない、遠い存在 自分には関わらない神	神さまが近づいてくださる 個人的な神さま、わたしを造られた神さま 裁判官 裁判官	決して受け入れないことがない方 最善しかならない方 自分が見透かされている すごく自分の人生に関係がある方、近くに
人格対人格ではなかった 神的な存在は信じていなかった 神話の話 創造者 創造者 創造主 存在は無条件に認めていた 天国へ行けないという意識 遠い方、聖い方、近寄りがたい方 見張っている 物語の中の登場人物 八百万の神 両親から教えられていた神さま	裁判官、啓示者、王、祭司 裁判官、創造者 裁判官、創造者だった 自分のところにも来てくれる 十字架の愛(あがない主) 人格神 創造者、啓示者、王、裁判官 創造者、赦してくれる神 天国にいる者と、造られた者がつながった 再び、裁判官、王、啓示者 見守っているが、裁判官だった 見守っておられる神	すべてまるごと受け入れてくれる 迫ってくる 創造者(けっこうあとで) 近い存在(5~6年前) 父 父、牧者、あがない主 父、牧者に近い(今) 父よりはあがない主が強い 共にある神 とりなしをしてくれる神(祭司) 牧者、あがない主 牧者、父 牧者、父、創造者、啓示者、あがない主 牧者、見守っていてくれる神
何となく、天国と地獄、極楽みたいなところ、神さまって存在は知らなかった		無条件の神 身近に感じられる、いつもわたしを見てくださる 牧者、父 憐れみをもって、見てくださる

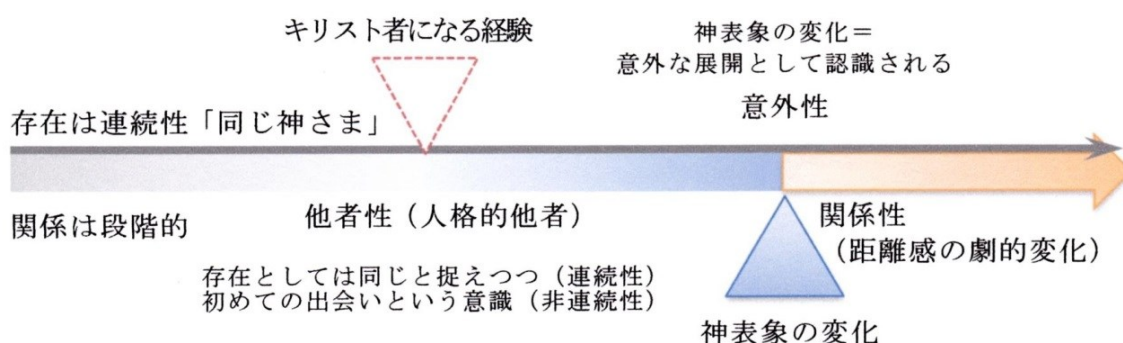
表 54 から、以下のことが観察された。第一に、変化の前は「王、裁判官」というとらえ方が強い(結果 8-6)。キリスト者になった後に神表象の変化があった場合も、キリスト者になってから神表象が変化するまでの期間、「裁判官」が強かったことが観察された。第二に、キリスト者になったときに神表象が変化した場合も、キリスト者になった後に改めて神表象が変化した場合も、変化後に「あがない主」が意識されている(結果 8-7)。ただしこの「あがない主」は、聖書に提示されているもとの意味である「救出者」「買い戻す者」というイメージよりは、十字架にかかれたあがない主という意味で認識されている。第三に、神表象が変化した後には、「父、牧者」が意識されている(結果 8-8)。この変化は、キリスト者になった時と違う機会に神表象が変化した場合に顕著に認識されている。「あがない主」と「父、牧者」の両者はどちらか一方ではなく、両方を意識するようになるが、時間的には両者は必ずしも重ならないケースが多い(結果 8-9)。「創造者」は、

キリスト者になる前後にわたって認識されているが、神表象が生涯のどこかで変化した後にはあまり強調されず、「あがない主」と「父、牧者」が強くなっている（結果 8-10）。

(4) 神の存在自体の変化のパターン

次に、神表象が変化した前後の神の存在に関して、人格形成期にキリスト教的背景があったケースとなかったケースに着目して調査協力者の語りをまとめたところ、神表象の存在の認識は、以下のパターンで集約されることが示された。パターンを図 10 に示す。

【パターンA ～キリスト教的背景があったケース】



【パターンB ～キリスト教的背景がなかったケース】

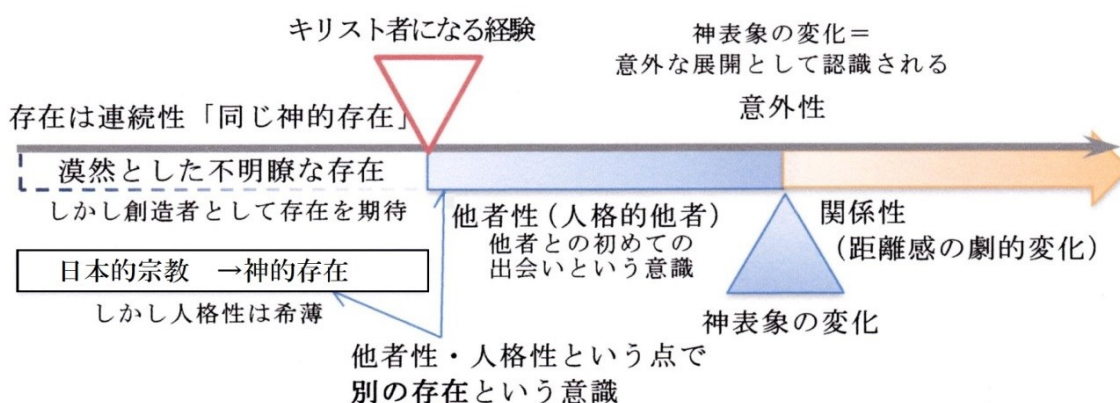


図 10 キリスト者になる経験および神表象の変化の前後の神の存在の比較

以下でそれぞれについて解説する。まず、パターン A であるが、これはキリスト教的な背景があった場合のプロセスを表している。この例では、キリスト者になる経験前後で、神の存在は「同じ神さま」として認識されていた。また、神表象が変化したときには、存

在は同じでありながら、距離感が劇的に変化したと認識されていた。このパターンに当てはまったのは B 氏、C 氏、G 氏などである。例えば、G 氏は次のように述べている。「あの……、じゃあ、何が変わったかと言われると、別だったのかと言われると、そうではないと私は思っていて、同じお方なんだけど、私はその、ある面しか見てなかったというか、知らなかったという、まあ、そういうことだろうと思うんですね」。このように、神表象が変化した前後では、存在は同じでありながら、距離感が劇的に変化したと認識されていたのがパターン A である。

次にパターン B であるが、これはキリスト教的な背景がなかった場合のプロセスを表している。この例では、キリスト者になる経験前後では、やはり神の存在は「同じ神さま」として認識されていた。ただ、キリスト教的な背景がないため、漠然とした不明瞭な存在として認識されていた。神表象が変化した前後では、キリスト教的背景があったケースと同様に、存在は同じでありながら、距離感が変化したと認識されていた。また、日本的な宗教との関わりがあった場合には、その宗教が語る神的な存在については人格性を感じることはほとんどなく、それでいて、その宗教とは別のところに漠然と神的な存在があることを感じ取っていた。このパターンに当てはまったのは F 氏、I 氏などである。例えば、I 氏は次のように述べている。「(面接者：はあ。……じゃあ、そういう、人間とは違う存在があるってことは)。感じて。(面接者：感じていらっしゃったんですね。その存在と、聖書ん中に書かれている神さまってのは、連続性があるものなんですか)。……多分、つながっていると思いますよ。……(面接者：そうすると、クリスチャンにおなりになる前も、神さまっていうのは、いわゆるただのパワー・スポットとか、そんなんじゃないくて、やっぱり)。そうじゃないですね。……やっぱり、なんか、人格をもって、意思を持っている感じはしましたよ」。また、「あの……、うちはですねえ、母親は実は、〇〇宗の娘さんなんです。……でも、実際、そういう、〇〇宗が、どういう信仰かっていったときに、日常生活見て、全く信仰的なものはないですよ。もの～～ですよ。そういう宗教的なものではない」。さらに「明確に濃くなってる。……あの……、やっぱり、ハッキリ、ハッキリっていうか、まだまだ、ぼやー、ぼやーっとしてますよ。でも、臨在感があり、……、いろんな恵みなり、……、そ、そういうのは、今こうやって生活している中で、感じ取られる、感じ取ることができる、っということはやっぱり、明らかになってる、だと思いますね」。このように、神表象が変化した前後では、存在は同じ神として認識され、距離感が変化したというとらえ方をし、日本的な宗教との関わりがある場合には、その宗教の神的な存在に

については人格性を感じることはなく、その宗教と別のところに漠然と神的な存在があることを感じ取っていたのがパターン B である。

(5) 神の存在の変化の意味

図 10 にあるように、神の存在のとらえ方は二つのパターンに集約されたが、神表象が変化したことについて、神の存在をどのように認識したかを分析するために、半構造化面接で語られたことをそのまま抽出して列記した。それを表 55 に示す。

表 55 神の存在の変化の意味

Q どのような意味で存在が変化したか
神の存在は同じ方として受けとめている
同じ神さまだけれども、とらえ方が変わった
同じ神さま、一面だけしか知らなかった
同じ神さま、距離感が近くなった
自分の中では同じ神
同じ神だけれども、見方が変わった
すぐ近くにいたくださる方、距離感の変化
〇〇歳(神イメージが変化したとき)が100なら、それ以前は10もいっていない

表 55 を見ると、キリスト者になる前も含めて、神表象は大きく変化しながらも、神の存在は同じものとして認識されていたことが観察される。存在は同じものとして認識しながら、距離感と関係が変化した、という受けとめである（結果 8-11）。

本研究の目的は、幼少期の神表象の形成がどのようなものであったか、およびキリスト者になる前と後の神表象の変化がどのようなものであったかを尋ね、キリスト教的な背景のない中で人格形成をした調査協力者とキリスト教的な背景の中で人格形成をした調査協力者の比較を試みることであった。幼少期にキリスト教的な背景があったケース（パターン A）とキリスト教的背景がなかったケース（パターン B）を比較してみると、存在に連続性があり、同じ神的存在として受け止められていたことが示された。神表象の存在についてキリスト教的な背景と文化があるかないかによって違いが見られなかったことから、キリスト教的な背景のない中で人格形成をした場合でも、幼い頃から神表象の萌芽が内在化されていることが示唆された。Rizzuto, A. (1979) の神表象理論が、わが国のような非キリスト教的文化背景においても支持されたとと言えるだろう。幼少期に「回心」を軸に教育を行う従来の方法論への問いかけとなっていると考えられる。

さらに、キリスト教的な背景がなく、日本的宗教と関わりがあったケースは、宗教が神的な存在として規定していたものについては人格性が希薄であったというとらえ方をし、

同時に、創造者としての神的存在が、それは漠然とした不明瞭なものなのだが、他のところにあるというとらえ方をしていた。宗教として規定されているものよりは、人間の心が素朴に感じるものが人間のスピリチュアリティの必要に応えることができるものなのではないかということを示唆している。この点でも、幼少期から神の萌芽が内在化されるとした Rizzuto 理論は支持された。

この結果は、体系化された宗教の限界を示唆している。おそらくキリスト教も例外でないであろう。体系化された宗教が、人間が幼少期から内在化させている神表象に対して適切な対応ができない場合には、心に響く、生活密着型のキリスト教のあり方が、何か別の枠で求められることになる。宗教のあり方への問いかけがなされていると考えられる。

(6) 神表象の変化の結果

次に、神表象が変化した結果について、「図 8 神表象の変化のプロセス」および 4・(3) のストーリーラインから、以下のことが示された。神表象の変化は三つの段階での変化をもたらしていた。第一の段階は、《自己の再統合》である。重大な出来事によって、自分が醜い者であるという〈醜い自己認識〉、そして、自分がやっていることと言っていることが合致していないという意味での〈自己分離〉に気づくが、神表象の変化によってそれらが解消される（結果 8-12）。この自己の統合には二つの特長が観察される。一つは、〈無条件さの体験〉である。自分ができるから赦されるのではなく、無条件に受け入れられていることを体験的に理解する（結果 8-13）。もう一つは、〈素の自分の受け止め〉である。自分がありのままでよいことに気づく（結果 8-14）。そしてこれらのプロセスを経て、〈自分のスタンスの確立〉に至る（結果 8-15）。

第二の段階は《内面の生成》である。自分が頑張るのではなく、〈支えられている気持ち〉を感じるようになる（結果 8-16）。自分がお願いするのではなく、やってもらっていることに意識が変化する〈やってもらっている意識への方向性の変化〉を経験する（結果 8-17）。そして、〈生きる目的〉を捉えなおす段階に至る（結果 8-18）。

第三の段階は、《生き方の変化》である。〈自己の再統合〉と〈内面の生成〉によって生き方が変化している。この変化は内面的不協和からの自由を意味していると推察される。自分とは異なる他者としての神が自分にわかるように導いてくれるという感覚があるために、自分で自分のことを監視しないで済むという意味で〈自分の人生を委ね〉ることができる（結果 8-19）。心のエネルギーを生きることに効率よく使うことが出来る状態

である。さらには、他者との関係も変化する。〈他者や状況との関係が変化〉し(結果 8-20)、心理的に〈人の評価から解放〉される(結果 8-21)。

本研究の結果から、神表象の変化によってもたらされる《自己の再統合》と〈自分のスタンスの確立〉が、本人の認識の中で明確なものとなって行くことが示唆された。変化のスピードや様態はきわめて多様なものであっても、神表象の変化によってもたらされる結果は、共通的なものであった。

(7) 日本人キリスト者が取り込んでいる神表象

本研究は、「神の役割理論」を構成概念として採用した上で研究を展開した。そのプロセスの中で、日本的なものと欧米的なもの間に差異があることは十分想定された。また、八つの神表象は聖書から抽出されたものだが、日本人が理解できないものが含まれていることも示唆された。第八研究は面接調査であるため、全体の傾向であると判断するには不十分であるが、調査協力者が神のイメージの変化について言及した神表象の多くが、「裁判官」、「王」、「創造者」、「あがない主」、「父」、「牧者」に集中しており、「祭司」と「啓示者」が取りあげられることはほとんどなかった。「祭司」に含意されていることは「あがない主」に含まれ、「啓示者」は「王」や「父」に含まれていることなど、概念が混同されていることも観察された。このように、日本人キリスト者は、神表象を、厳しいイメージの「裁判官」、「王」、親しいイメージの「父」、「牧者」、赦しと関連のある「あがない主」、そして存在の根幹を意味する「創造者」の四つのカテゴリーでとらえていた(結果 8-22)。

本研究の調査協力者は、Wesley 理論を背景に持つ日本人キリスト者であり、聖書が提示する神表象全体をバランスよく取り込んでいない現状は、「回心」を重視する Wesley 理論に背景的要因がある可能性も否定できない。本研究の結果が示した傾向を、日本人キリスト者に固有の特徴であると判断するか、Wesley 理論を背景に持つキリスト者に固有の特徴であると破断するかについては、他の文化圏のキリスト者や、他の宗派のキリスト者との比較検討が求められる。

6 本研究の限界

2 方法の(4)の 3)にある「神さまの八つの役割を見て、ご自分の今までの人生でどのような変化があったかお話ししてください」という質問項目は、目的が神表象の変化を尋ねることであったため、このような表現になったが、調査協力者が内在化させている多様な神

表象を暗黙のうちに限定してしまう可能性も否定できず、これは本研究の限界である。

面接に協力することを申し出てくれた調査協力者の多くは、自分の神表象が変化したという認識を持っている人であった。そのため、肯定的な語りをしてくれる人に偏っている可能性がある。神表象が変化しない人や、神表象が変化したか、それを語ることに否定的な人は分析に含まれておらず、肯定的影響のみに限定された理論である可能性がある。

本研究は、十名の語りからの理論構築であるため、理論的飽和がネガティブデータ（反証例）の存在を否定できるほどではないと考えられる。今後は、神表象が変化しないと認識している人の語りや、ネガティブデータの収集のために、よりデータサンプリングを続けながら、包括的な理論構築を目指す必要があるだろう。

第五章 総合考察

本研究では、キリスト教会でキリスト教教育を受けた日本人キリスト者を対象に、神表象の内在化の様態、神表象とアタッチメントおよび心理社会的発達段階との関連、日本人の心理と神表象の関連について検討した。さらに、本研究が Wesley 理論に基づく教会教育を研究射程として想定しているため、対象をメソジストの背景を持つ教会でキリスト教教育を受けたキリスト者に絞り、神表象の変化について調査・分析を行った。第一節で各研究の結果をまとめ、第二節で総合的に考察を加える。

第一節 結果

1 自尊感情

自尊感情が低い人、すなわち、「これでよい (good enough)」と感じる、「自己受容」がしにくい人は、否定的な厳しい神表象を持つ傾向がある (結果2-1)。

2 人間関係・対人的信頼感

対人的信頼感の高い人は肯定的な神表象を、対人的信頼感の低い人は否定的な神表象を持つ傾向がある (結果2-3)。

3 社会的関係・生き方

(1) 能動的実践的態度

能動実践態度の高い人、すなわち、今という時間を大切にしつつ、目標達成への努力を惜しまない積極性を持っている人は、肯定的な神表象を持つ傾向がある。能動実践態度と厳しい神表象の間には関連が見られなかった (結果2-4)。

(2) 自己の創造・開発

自己の創造・開発の姿勢が高い人、すなわち、自己に向き合い、自己の可能性を探る姿勢の高い人は肯定的な神表象を持つ傾向がある (結果2-5)。

「自己創造開発」の姿勢、すなわち、自己に向き合い、自己の可能性を探る姿勢は、厳しい神のイメージを含めた神表象全体に正の影響を与えている可能性がある (結果2-22)。

(3) 自他共存

自他共存の傾向がある人、すなわち、「個」としての自己の行為は責任をもってやり遂げる一方で、人間一人の力の限界を自覚しているために、他者を尊重し、周囲と調和的・協力的でありたいと願う心を備えている人は、肯定的な神表象を持つ傾向がある（結果2-6）。

(4) こだわりと執着心のなさ

こだわりや執着心のない人、すなわち、自己の失敗に対していつまでもくよくよこだわらず、自己の内面的な安定感に支えられたこだわりのなさを備えている人は、肯定的な神表象を持つ傾向がある（結果2-7）。

(5) 他者尊重

他者尊重の姿勢が高い人、すなわち、他者を尊重するあまりに自己を抑えるという自己抑制的な面がある人は、肯定的な神表象を、他者尊重の姿勢が低い人は否定的な神表象を持つ傾向がある（結果2-8）。

「他者尊重」、すなわち他者のあり方や意見を尊重する姿勢は、親しい神のイメージに弱い正の影響を、厳しい神のイメージに弱い負の影響を与えている可能性がある（結果2-23）。

4 神表象を形成する要因

基本的信頼感は、肯定的な神のイメージに正の影響を、厳しい神のイメージに負の影響を与えている可能性がある（結果2-21）。

「自己創造開発」、すなわち自己に向き合う姿勢は、厳しい神のイメージを含めた神表象全体に正の影響を与えている可能性がある（結果2-22）。

「他者尊重」、すなわち他者のあり方や意見を尊重する姿勢は、親しい神のイメージに弱い正の影響を、厳しい神のイメージに弱い負の影響を与えている可能性がある（結果2-23）。

5 神表象の内面性への影響と外的表れ

神を親しい存在としてイメージしていても、それがすぐに自己肯定感につながらず、それでありながら、外面的な生き方を肯定的に保つことができる可能性がある（結果2-9）。

神を厳しい存在としてイメージしている場合は、自尊感情や基本的信頼感などの内面性が低下してしまうにもかかわらず、神のイメージの厳しさが対人的・社会的存在としての

自覚・行動にすぐに表現されるわけではない可能性がある（結果2-10）。

6 十の神表象と生き方

(1) 全体的傾向

十の神表象全般の得点が高く、神表象全体に肯定的なイメージを持てる人は、他者との関わりの中で生きて行く姿勢が積極的になる傾向がある（結果2-11、結果2-12）。

神について「父」、「牧者」、「創造者」の表象を内在化させている人は、社会的関係のなかで生きる姿勢が積極的になる傾向がある（結果2-13）。

(2) 親しい神のイメージ

親しい神のイメージを持っている人は、十の神表象全般について肯定的なイメージを描いている（結果2-14）。

(3) 厳しい神のイメージ

厳しい神のイメージを持っている人は、神を「王」、「救出者」、「裁判官」としてとらえる傾向がある（結果2-15）。

7 属性別分析

(1) 年齢

自尊感情や基本的信頼感という内面性、対人的なこだわりのなさは、年齢は50代以降に徐々に高くなって行く傾向がある（結果2-16）。

厳しい神のイメージは、20代は高いが、中年期以降に緩和される傾向がある（結果6-1）。

若いころには神イメージが厳しく、神との親密性も回避する傾向がある（結果6-2）。

(2) 年数

自尊感情や基本的信頼感の内面性、社会と関わりを持つ生き方の積極性は、キリスト者になってから30年以上経過するときに徐々に高くなって行く傾向がある（結果2-17）。

5年未満のキリスト者は、31年以上のキリスト者よりも厳しい神イメージを内在化させている（結果6-7）。

10年までのキリスト者は、21年以上のキリスト者に比較して「見捨てられ不安」を抱い

ている。20年までのキリスト者は、21年以上のキリスト者よりも神との親密性を回避する傾向がある。キリスト者になって20年経った人は、20年経っていない人よりも、一般他者へのアタッチメントも神アタッチメントもしっかりしている可能性がある（結果6-8）。

(3) 性差

女性は男性よりも、親しい神のイメージを内在化させる傾向がある（結果2-19、結果6-3）。

男性は女性よりも、厳しい神のイメージを内在化させる傾向がある（結果2-20）。

親の養育態度と神表象の関連については、女性の場合、父の養護的養育態度を受けて育ったと認識している人は、神を親しい存在として内在化させる傾向がある（結果5-5）。

神表象と心理社会的発達段階との関連については、男性の場合、親しい神イメージと心理社会的発達段階の間には関連はない。ところが、厳しい神イメージを内在化させている人は第一段階の基本的信頼感が低く（結果5-6）、第二段階の自律感が低く（結果5-7）、第四段階の勤勉性が低く（結果5-8）なる傾向がある。

女性の場合は、親しい神イメージを内在化させている人は第一段階の基本的信頼感が高くなる傾向がある（結果5-9）。

親しい神イメージを内在化させている人は第六段階の親密性が高くなる傾向があり、逆に、厳しい神イメージを内在化させている人は親密性が低くなる傾向がある。（結果5-10）。

親の養育態度と心理社会的発達段階の関連について、男性の場合、過保護的養育態度で育てられたと認識している人は、第一段階の基本的信頼感は低く（結果5-11）、第三段階の主導性は明確に低く（結果5-12）、第四段階の勤勉性は低く（結果5-13）、第六段階の親密性は低く（結果5-14）なる。

母親の養護的養育態度で育てられたと認識している人は、第三段階の発達課題である主導性が高くなり、過保護的養育態度で育てられたと認識している人は、主導性が低くなる（結果5-15）。

母親の養護的養育態度で育てられたと認識している人は、第六段階の発達課題である親密性が高くなり、過保護的養育態度で育てられたと認識している人は、親密性が低くなる（結果5-16）。

女性の場合、父親および母親の養護的養育態度を受けて育ったと認識している人は、第一段階の基本的信頼感が高くなる傾向がある（結果5-17）。父親の養護的養育態度を受けて育ったと認識している人は、第五段階のアイデンティティの確立が高くなり（結果5-18）、

第六段階の親密性が高くなる（結果5-19）。母親の養護的養育態度を受けて育ったと認識している人は、第三段階の主導性が高くなり、過保護的養育態度を受けて育ったと認識している人は、主導性が低くなる（結果5-20）。

「神からの見捨てられ不安」については男女差がなかったが、「神との親密性の回避」については、女性は男性よりも、神との親密性を保つ傾向がある（結果6-4）。

(4) 宗派

プロテスタントとメソジスト系は、親しい神のイメージと厳しい神のイメージの両面を内在化させ、他方カトリックは、厳しい神のイメージをそれほど内在化させていない可能性がある（結果2-18）。

プロテスタント系のキリスト者は、他の宗派と比べてわずかながら親しい神のイメージが強い（結果6-5）。

プロテスタント系のキリスト者は、他の宗派と比べて父の養育態度が過干渉的だったと感じている（結果6-6）。

8 親の養育態度

(1) 親の養育態度と神表象

父・母が養護的養育態度で接してくれたと感じている人は、親しい神のイメージを内在化させる傾向があり、父・母が過保護的養育態度で接したと感じている人は、厳しい神のイメージを内在化させる傾向がある（結果4-3）。

父・母の養護的養育態度を受けて育ったと認識している人は肯定的な神表象を内在化させている（結果5-1）。

(2) 親の養育態度と神アタッチメント

父・母が養護的養育態度で接してくれたと感じている人は、神から見捨てられる不安を抱きにくく、父・母が過保護的養育態度で接したと感じている人は、神から見捨てられる不安を抱く傾向がある（結果4-4）。

とらわれ型とおそれ型は、安定型に比較して神を厳しい存在としてイメージしており、神アタッチメントも否定的である（結果4-5）。

(3) 親の養育態度と家族環境

家族全員がキリスト者である中で人格形成をした人は、厳しい神のイメージが減少し、家族全員がキリスト者でない中で人格形成をした人は、厳しい神のイメージを内在化させる傾向がある（結果 6-9）。

キリスト者がいない家庭より、家族のだれかがキリスト者であるほうが、父親の養育態度が養護的であったと感じており、さらには、家族全員がキリスト者の家庭の場合、そうでない家庭で育った場合よりも父親の養育態度が良かったと認識している（結果6-10）。

(4) 父親との関係

父親との関係が良好だった人は、親しい神のイメージを内在化させている可能性がある（結果 6-11、結果 6-12）。

(5) 母親との関係

母親との関係が良好だった人は、親しい神のイメージを内在化させている可能性がある（結果 6-13）。

母親の過保護的・干渉的な養育態度を受けて育った人は、否定的な神イメージを内在化させている可能性がある（結果 6-11）。

(6) 兄弟の中での位置

兄弟の中での位置は、神表象の親しさ、厳しさ、神とのアタッチメントの程度と関連がない（結果 6-14）。

(7) 兄弟との関係

兄弟との関係が良好な人ほど親しい神イメージをもっている可能性がある（結果 6-15）。
両親の養育態度、兄弟との関係、神表象は連動している（結果 6-16）。

9 アタッチメント

(1) 神表象との関連

親しい神のイメージを内在化させている人は、神から見捨てられる不安を持たず、神との親密性を保とうとする傾向がある。また、一般他者からの「見捨てられ不安」を持たな

い傾向がある（結果 4-1）。

厳しい神のイメージを内在化させている人は、「神からの見捨てられ不安」を抱き、「神との親密性を回避」する傾向がある。また、一般他者からも見捨てられる不安を抱き、親密性を回避する傾向がある（結果 4-2）

(2) アタッチメント傾向

とらわれ型とおそれ型は、安定型に比較して神を厳しい存在としてイメージしており、神アタッチメントも否定的である（結果4-5）。

10 心理社会的発達段階

(1) 第一段階・乳児期

基本的信頼感の高い人は肯定的な信頼できる神表象を、基本的信頼感の低い人は否定的な厳しい神表象を持つ傾向がある（結果2-2）。

基本的信頼感の低い人は、厳しい神イメージを内在化させる傾向がある（結果5-2）。

基本的信頼感、肯定的な神のイメージに正の影響を、厳しい神のイメージに負の影響を与えている可能性がある（結果2-21）。

(2) 第四段階・学童期

厳しい神のイメージを内在化させている人は、第四段階の発達課題である勤勉性が弱くなる傾向があり、劣等感を抱きやすくなる可能性がある（結果 5-3）。

(3) 第五段階・青年期

第五段階の発達課題であるアイデンティティの確立については、相関は見られなかった。

(4) 第六段階・前成人期

親しい神のイメージを内在化させている人は、第六段階の発達課題である親密性を身につけることができる傾向があり、厳しい神イメージを内在化させている人は、親密性を身につけにくい可能性がある（結果 5-4）。

11 甘えの心理と神表象

(1) 神表象と甘えの心理

親しい神イメージを内在化させている人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」の心理が弱くなる傾向がある（結果 7-1）。

厳しい神イメージを内在化させている人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」、すなわち、甘えたくても甘えられない心理を抱く傾向がある（結果 7-2）。

神を「父」、「友だち」としてイメージしている人は、「屈折的甘え」を抱かない傾向がある（結果 7-5）。

(2) 神アタッチメントと甘えの心理

「神からの見捨てられ不安」を抱いている人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」を抱く傾向がある（結果 7-3）。

神との親密性を回避する傾向がある人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」を抱く傾向がある（結果 7-4）。

(3) 家族環境と甘えの心理

家族にキリスト者がいた人は、キリスト者がいなかった人よりも、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」のいずれの心理も抱きやすい。家族にキリスト者がいる環境で人格形成をした人は、家族にキリスト者がいない環境で人格形成をした人よりも甘えの心理が強い可能性がある（結果 7-6）。

父親との関係が全般的に良かったと認識している人は、「とらわれ」の心理を抱いている傾向がある（結果 7-7）。

母親との関係が良好であった人よりも、母親との関係が良好でなかった人のほうが「とらわれ」の心理を抱いている可能性がある（結果 7-8）。

父親との関係、母親との関係が良かったと認識している人は、家族にキリスト者がいなかった環境で育った回答者よりも家族にキリスト者がいた環境で育った回答者のほうが甘えの心理が強い傾向がある（結果 7-9）。

神のイメージが厳しい方向に変化したと認識している人は、「とらわれ」の心理を抱いている傾向がある（結果 7-10）。

12 神表象の変化

(1) アタッチメントとの関連

神表象に変化がなかったと認識している人は、神表象が変化したと認識している人よりも、人との親密性を回避する傾向がある（結果 6-17）。

神表象に急な変化があったと認識している人は、神表象が変化していない、あるいは神表象が変化したとしても急激な変化ではなかったと認識している人よりも、他者との親密性を保つ傾向があり、神表象の変化が必ずしも急なものではなかったと認識している人は、他者との親密性を回避する傾向がある。（結果 6-18）。

(2) 親の養育態度との関連

神表象が徐々に変化したと認識している人は、神表象がある出来事を境に変化したと認識している人よりも、父の肯定的な養護を受けて育てられている。父から肯定的・養護的な養育態度で接してもらえなかったと認識している人は、神表象が急激に変化する可能性がある（結果 6-19）。

神表象がゆっくり変化したと感じている人は母の養護的養育態度を受けて育った可能性がある（結果 6-20）。

(3) 変化の方向

神表象が急に变化した人は、神表象が徐々に変化した人よりも、神表象が親しいものになる傾向がある（結果 6-21）。

(4) 他者性と意外性の意識

神表象が変化するプロセスにおいては、神を人格的他者として意識するようになって行く（結果 8-1）。

神表象が変化するプロセスは、意外な展開として意識されている（結果 8-2）。

(5) 変化のパターン

キリスト者になる経験と神表象が変化する経験は、パターンが多様であり、神表象の変化は、緩やかな癒しとして、かなり時間のかかるプロセスである場合と、短期間の明確な内面的変化として経験する場合がある（結果 8-3）。

重大なことがら、例えば対人関係の挫折、家族関係の破綻、受験などの人生の転機における失敗、愛する対象の喪失などの後に神表象が変化する体験に至る場合が多い（結果 8-4）。

キリスト者になる経験と神表象が変化した経験は時間的に重ならない（結果 8-5）。

(6) 神表象の変化

変化の前は「王、裁判官」というとらえ方が強い（結果 8-6）。

キリスト者になったときに神表象が変化した場合も、キリスト者になった後に改めて神表象が変化した場合も、変化後に「あがない主」が意識されている（結果 8-7）。ただしこの「あがない主」は、聖書に提示されているもともとの意味である「救出者」「買い戻す者」というイメージよりは、十字架にかかれたあがない主という意味で認識されている。

神表象が変化した後には、「父、牧者」が意識されている（結果 8-8）。

「あがない主」と「父、牧者」の両者はどちらか一方ではなく、両方を意識するようになるが、時間的には両者は必ずしも重ならないケースが多い（結果 8-9）。

「創造者」は、キリスト者になる前後にわたって認識されているが、神表象が生涯のどこかで変化した後には強調されず、「あがない主」と「父、牧者」が強くなる（結果 8-10）。

(7) 神の存在の変化

キリスト者になる前も含めて、神表象は大きく変化しながらも、神の存在は同じものとして認識されていた。存在は同じものとして認識しながら、距離感と関係が変化したという受けとめをしている（結果 8-11）。

(8) 変化の結果

醜い自己認識と自己分離が解消され、自己の再統合に至る（結果 8-12）。

無条件に受け入れられていることを体験的に理解する（結果 8-13）。

自分がありのままでよいことに気づき、素の自分の受け止めがなされる（結果 8-14）。

神表象の変化によって自分のスタンスが確立される（結果 8-15）。

自分が頑張るのではなく、支えられている気持ちを感じるようになる（結果 8-16）。

自分がお願いするのではなく、やってもらっていることに意識の方向が変化する（結果 8-17）。

生きる目的を捉えなおす（結果 8-18）。

自分とは異なる他者（神）が自分にわかるように導いてくれるという感覚があるために、自分で自分のことを監視しないで済むという意味で、自分の人生を委ねる（結果 8-19）。

他者や周囲の状況との関係が変化する（結果 8-20）。

心理的に人の評価から解放される（結果 8-21）。

(9) 内在化される神表象のカテゴリー

Wesley 理論を背景に持つ日本人キリスト者は、神表象を、厳しいイメージの「裁判官」、「王」、親しいイメージの「父」、「牧者」、赦しと関連のある「あがない主」、そして存在の根幹を意味する「創造者」の四つのカテゴリーでとらえている（結果 8-22）。

第二節 考察

本節では第一節で総括した各研究の結果と、各研究の最後の部分に記述したまとめと課題を踏まえて、以下、主要な点について考察した。

1 日本人キリスト者の神表象の内在化の特徴

(1) 四つのカテゴリー

本研究は、第一研究、第二研究および第八研究の結果から、Wesley 理論を背景に持つ日本人キリスト者がどのような様態で神表象を内在化させているかを実証したものと位置づけることができる。日本人キリスト者は神表象を、厳しいイメージの「裁判官」、「王」、親しいイメージの「父」、「牧者」、赦しと関連のある「あがない主」、そして存在の根幹を意味する「創造者」の四つのカテゴリーでとらえていることが示された（結果 8-22）。日本人はキリスト者になるときに、汎神論的神概念から、聖書の提示する絶対他者としての神に神概念の転換をする。そして、聖書を読み、聖書に提示されている神表象を取り込む。ところが本研究の結果は、日本人キリスト者は聖書に記述されている神表象全体を内在化させているのではなく、全く内在化されていないものもあることを示していた。

この中でも特に着目しなければならないのは、「裁判官」、「王」の神表象である。尺度構成のために、第一研究と第二研究で因子分析を行った結果、「裁判官」、「王」は、厳しい神イメージを表す因子として変動なく抽出された（表 4、表 5、表 6 参照）。それに対して、

親しい神イメージと頼れる神イメージの因子は、サンプル抽出を変えることで因子が変動し、条件の影響を受けやすいことが示された。最終的には、親しい神イメージの因子と頼れる神イメージの因子は、一つの因子に集束され、GISJ は二因子構造の尺度となった。属性別の分析では、宗派によって神イメージに差異があることが確認されたが（結果 2-18）、それにもかかわらず、キリスト者が概して否定的な神イメージを内在化させている全体像が浮かび上がってくる。

この結果がわが国のキリスト者に特徴的なものか、Wesley 理論に特徴的なものかについては、対照群を設定した比較研究による詳細な分析が必要である。日本人キリスト者が神を四つのカテゴリーで内在化させていたことについては、心理臨床とキリスト教教育の適用との関連で、本節・7 および 8 で詳細に考察を加える。

(2) 聖書に提示されている神表象との関連

ここで、本研究で観察された神表象について四つの点を確認する。

第一に、「啓示者」の神表象は、質問紙では「人生の師」という表記を使ったが、イメージしにくかった。神学的な概念は「個人的コミュニケーション」であり、距離感が近いはずだが、実体験は神学的概念と必ずしも合致していない。

第二に、「あがない主」の神表象は本来「救出者」、「買い戻す者」を意味しているが、第八研究の面接での語りは、「自分を愛し、十字架の上で自分のために死なれた神」のイメージであった。「あがない主」の表象は、神表象が変化した後には認識される神表象の一つであり、キリスト者になる体験や、十字架の意味をさらに深いレベルで知る経験を意味していると想定される。これは、神学的には、「あがない主」ではなく「祭司」である。

第三に、「王、裁判官」の神表象は否定的な意味で理解されているが、「王」はキリスト者が従うべき主権者という意味が、「裁判官」は義を実現する聖なる方という意味があり、必ずしも否定的ではない。ところが実際には、「王、裁判官」は否定的・律法的な神表象として内在化されている。因子分析でも質問項目が流動化しない。

第四に、「父」の神表象は、聖書の内容を考慮して、父性性について詳細に検討する必要がある。日本人の場合、受容的な神の意識は母性につながるが、第二章・第三節・2 で論じたように、聖書の「父」の神表象には、その内容から父性と母性の両面が含まれていると想定された。本研究の結果は、「父」の神表象については、(1)否定的・律法的父性、(2)受容的・母性的父性、(3)理想的・社会的父性、の三つの観点から論じる必要があることを

示唆していた。次の項目で、その三つの観点について考察する。

(3) 父性性の三つの角度からの検討

本研究は神表象を測定できる尺度構成から開始したが、第三章・第一節・6・(4)で述べたとおり、受容的な父性性は十分に表現されていながら、肯定的な父性性は質問項目に載らなかった。今後尺度構成の精緻化を検討しなければならないが、父性性を以下の三点に要約できることが示唆されていた。

第一に問題になるのが、否定的・律法的父性である。第三章・第一節・6・(4)で論じたように、GISJ を作成した時には聖書の八つの神表象を質問項目に織り込んだが、因子分析の結果、質問項目には、否定的・律法的父性や父性の歪みが表現されたものが残った。

「王」、「裁判官」が質問項目に含まれる第二因子「厳しい存在」の質問項目は変動がなかった。このことから、第二因子に表現されている否定的・律法的神イメージは、キリスト者一般に幅広く内在化されていると推察することが可能であり、おそらくこのイメージは、心理臨床やキリスト教教育において、さまざまな不適応が見られる場合に着目すべきものであると考えられる。この父性性は、松本（1998）が「桎梏性」と呼んだものであると想定される（p.58）。

第二に、受容的・母性的父性である。父性性は否定的・律法的父性ばかりではない。聖書の「父」のイメージには、人間の父性性の不完全さが要因となって、皮肉なことに人間の実体験に含まれにくい受容的な面も含まれていると想定される。質問項目の内容を検討してみると、父のイメージに受容性が含まれていることは、歪んだ父性を肯定的な方向に引き戻すほど十分に表現され、それが第二因子「厳しい存在」で表現されている否定的・律法的父性に対する対概念として提示された可能性はある。

第三に、理想的・社会的父性である。父性性は否定的・律法的父性、受容的・母性的父性ばかりではない。聖書に記述されている父である神のイメージは理想的な父性性に近いものである。父性性は、もし肯定的・生産的に作用すれば、「支柱性」としての機能を果たし、個人の心的発達、自我の成長を支え導くことができるものである（松本、1998、p.62）。理想的・社会的父性は GISJ の質問項目に載らなかったが、表 4 の予備調査における因子分析結果では、第一因子「頼れる存在」が、質問項目の内容から理想的・社会的父性性に近いものであると考えられる。そうであるならば、この因子をどのように抽出できるかが今後の検討課題になるだろうと思われる。

2 神表象の内在化のプロセス：Rizzuto理論の検討

本研究は、第四研究および第八研究の結果から、欧米の先行研究で検討されて来た神表象の内在化のプロセスについて、日本人キリスト者を対象に展開したものである。本研究の結果は、Freud, S.の神表象理論を一部支持するものの、それで日本人キリスト者の神表象の実態全部を説明できないことを示唆していた。Freud, S.の神表象理論は、神の起源をエディプス期に求めたことから、幼少期に形成された父の「イマゴ」と関連が深い父性的なものである。ところで、養護的養育態度を受けることができたと認識している人は、「父」や「牧者」などの肯定的な神表象を内在化させる傾向があった（結果 4・3）。また母親の養護的養育態度は、親しい神のイメージの内在化と関連があり、母親の過保護的・干渉的な養育態度は、否定的な神イメージの内在化と関連があった（結果 4・3）。この点は、移行対象に母親像による神表象の起源を求めている Rizzuto 理論を支持している。健全な母子関係が子どもの健全な成長を促すならば、子どもは幼少期から肯定的な神表象を内在化させることが可能である。本研究の結果も、基本的信頼感が肯定的な神表象を形成する要因になっていることを示している（結果 2・21）。

ところが、Rizzuto, A.の理論だけでは十分に説明できない側面も観察された。第一章・第一節・3・(4)・12)にあるように、Rizzuto, A. (1979) は信じる段階について、神への信仰があるかないかは、初期の対象物や初期に意味を持つ人との関係において獲得した個人的なバランスがあるかどうかで決まり、幼少期に現れるこの移行対象が人生のライフサイクルの変化とペースをあわせて行くことができれば、生涯にわたって変化し続けるが、もしそれが意味を失うならば、忘れ去られるかあるいはそのまま無視される可能性もあるなど (p.202)、移行対象としての神はライフサイクルを生きて行くということである。ところで、第八研究では、神表象の変化のプロセスにおいては、神を人格的他者として、意外性の中で意識するようになることが示唆されていた（結果 8・1、結果 8・2）。Rizzuto, A.が述べている「ライフサイクルの変化のペースにあわせて変化する神表象」と、神表象の変化のプロセスにおいて人格的他者として、意外性の中で意識しなおす神表象とは異なるものである可能性がある。

この点について、Halevi-Spero, M.の理論に着目したい。Halevi-Spero, M.は、第一章・第一節・4・(4)の「図 6 心理内的『神』対象の心的表象と客観的神的对象」に示されているように、神表象の内在化には四つのルートがあるとした。ルート A は、移行対象として神が内在化されるルートである。ルート D は、非常に早い段階で心の中に神表象が形成

され、それが客観的な神的対象と置き換わるルートである (p.141)。ルート C は、神的対象が、人間の心が理解できる形で自らを提示しつつ、人間関係のメカニズムや経験を通して発達的な方法で内在化されるルートである (pp.140~141)。ルート B は、「理想的『神的』表象が直接内在化」されるルートである。本研究の結果は、神表象がダイナミックに内在化される B の内在化の様態がありうることを示唆していると考えられる。この点で、Rizzuto 理論を超えるものである。

3 日本人に特徴的に見られる心理と神表象

(1) 「個」の確立と甘えの心理

本研究は、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、日本人の心理の中に「個」を意識することが希薄であるという土居 (1997a) の指摘を実証したものである。土居 (1997a) は個人と集団との関係について、「自分がある」「自分がない」という視点から考察した。日本的な視点では、個人の主体性は集団の中に埋没する。

第八研究では、以下の二つのことが明らかになった。第一は、神表象の変化のプロセスにおいて、他者性の意識が見られたということである (結果 8-1)。第二は、神表象の変化のプロセスは想定外のこととして認識されているということである (結果 8-2)。このように、神表象の変化は他者性の意識をもたらすが、その中でも神表象が急に变化したと認識している人は、徐々に变化した人よりも、神表象が親しいものに变化する傾向が見られた (結果 6-21)。ところが、神表象の変化によって神を肯定的にイメージできていながら、「とらわれ」の意識が依然として残っている人は、神との親密性を回避する傾向があるという点も観察された。この状態は、意識としては神を肯定的にイメージできても、甘えたくても甘えられない気持ちを抱き続け、また「自分がない」状態、すなわち依存心が対象と結びついた、傷つきやすい自我の状態を抱え込んでいる姿であると推察される。神を親しい存在としてイメージし、他者性の意識、想定外の経験であったという意識があっても、そのことによって直ちに、土居が指摘する意味での「個」の確立に繋がるわけではない可能性を示唆している。「とらわれ」の意識によって「個」が確立できないゆらぎを見せる日本人の傾向が示唆されている。

このことから、「個」の確立のためには、「とらわれ」の意識に着目する必要があると考えられる。「とらわれ」の意識を抱く傾向がある人は、人格形成のプロセスで否定的な神表象を内在化させてきた可能性があり、内在化されている神表象の父性性がどのようなもの

であるかをライフサイクルに沿って見て行くことによって「とらわれ」の状態が軽減されれば、そのことによって「個」の確立が促される可能性がある。成熟した民族性への成長の足がかりとして「個」の確立が求められるならば、神表象の内在化のプロセスとともに、「とらわれ」の意識の背後にあるものを見て行くことが一つの鍵となると考えられる。

(2) 神への信頼と甘えの心理の差異

「個」の確立と関連して、本研究は、第七研究の結果から、甘えと信頼は違うという土居の仮説を実証的に裏付けたものである。信頼は、対象が尊厳ある他者として意識されることが前提となる。日本人キリスト者がイメージする神に甘える気持ち、居心地がよいと感じる感覚、神と一つとされたという表現で表される甘い感覚は、神への信頼とは異なるものであると思われる。本研究の結果が示唆していたことは、キリスト者は、神表象の変化によって神を人格的他者として意識するようになる可能性があるが、反面、キリスト者であっても、神を人格的他者として意識していない状態があり得るということであった。

甘えの心理は聖書の中に表現されているが、ここで問題になるのは、甘えの心理と信頼が混同されることである。キリスト者の生活において、甘えと信頼がどのように異なっているかを考える必要があるのではないと思われる。ここで **Freud, S.**の理論に戻りたい。**Freud, S.**は、無意識下にあるものを意識化することが治療のプロセスであると理解していたが、そのようなプロセスを経ることによって、無意識下にある神表象が意識化され、神表象が変化することがあれば、キリスト教が提示する信頼の段階に至る可能性があるのではないかと考えられる。本研究は、日本人キリスト者に信頼の意味を問うものである。

4 一致仮説と補償仮説：「日本的修正補償仮説」

本研究は、第二研究、第四研究、第六研究、第八研究の結果を踏まえて、アタッチメント理論の中で四つの仮説が提示されていることを受けて、日本人キリスト者をどの仮説で説明できるかを検討したものと位置づけることができる。**Davis et al. (2012)** は、「一致仮説」と「補償仮説」に関して提唱されたさまざまな仮説を、(1)「内的作業モデル一致仮説」、(2)「感情補償仮説」、(3)「適合一致仮説」、(4)「内在関係認識一致仮説」の四つに整理した。どの仮説が妥当かは、養育者との関係、養育者の宗教性などによっても異なるとされ、仮説で全部を説明できない複雑さも指摘されている。

本研究では、神表象の変容に関していくつかの結果が得られた。第一に、幼少期の基本

的信頼感や内的作業モデルは、その後の人間関係にも影響があるばかりでなく、神との関係にも影響がある可能性があるということである（結果 2-2、結果 2-21、結果 4-1、結果 4-2）。これは「一致仮説」に該当する。第二に、父から肯定的・養護的な養育態度で接してもらえなかったと認識している人は、神表象が急激に変化する傾向があるということである（結果 6-19）。第三に、神表象が急激に変化した人は、神表象が徐々に変化した人よりも、神表象が親しいものに変化する傾向があるということである（結果 6-21）。そして第四に、神表象が変化した後には、「父、牧者」が意識されるようになるということである（結果 8-8）。これらを総合すると、Granqvist and Hagekull（1999）が提唱した「修正補償仮説」に近いものが見えてくる。幼少期にアタッチメントを構築することができた人はアタッチメント人物となる大人と同じ宗教規範を取り込み、信仰も徐々に成長するが、アタッチメントに不安がある人は、感情が前面に出やすく、劇的な「回心」を経験するというものである。

ところが本研究の結果は、先行研究の四つの仮説で全部を説明できるものではない。ここで、考察すべき課題を整理したい。第一に、内面の宗教性と外面に表れる社会性は必ずしも一致しないということである。親しい神のイメージを内在化させ、それですぐに自己イメージが肯定的に変化するわけではないにもかかわらず、社会性は肯定的であるのに対して（結果 2-9）、厳しい神のイメージは、基本的信頼感や自尊感情に負の影響を与えているながら、それがすぐに対人的・社会的存在としての自覚・行動に表現されるわけではないとされる（結果 2-10）。親しい神イメージを内在化させている状態と厳しい神イメージを内在化させている状態を図 11 に示す。

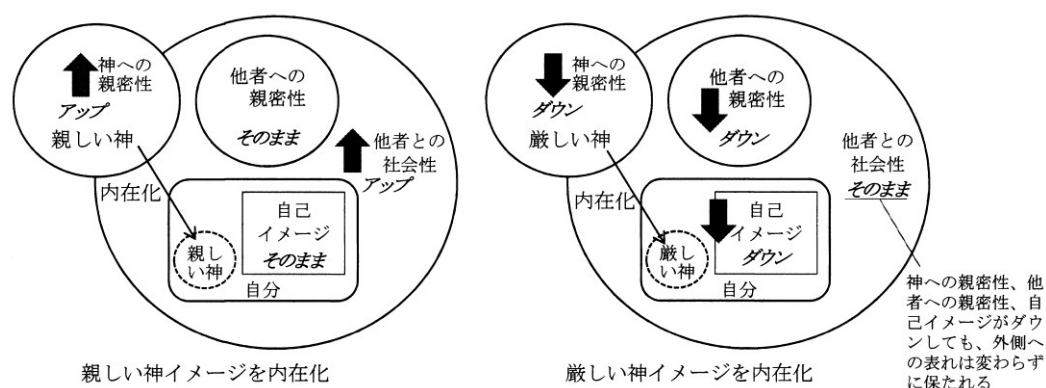


図 11 厳しい神表象の内在化と社会性の保持

第二に、甘えの心理と神アタッチメントの関連についてである。神を厳しい存在として

内在化させている人は、神との親密性を回避しながら、甘えたくても甘えられないという心理を抱く傾向がある（結果 7-4）。他方、親しいイメージを内在化させている人は、それほど「直接的甘え」と「屈折的甘え」を抱かないが（結果 7-1）、神のイメージが親しい方向に変化しても、「とらわれ」の状態が残る可能性がある。神表象の変化は自己の再統合をもたらすが（結果 8-12）、甘えの心理と関連したアンビバレントなものが残っていることをどのように説明するかという問題である。

第三に、「補償仮説」では、神表象の変化後に、その人が内在化させている神表象がどのようなものかは検討の必要がある。母親から養護的な養育態度で接してもらえたと認識している人は、基本的信頼感を獲得し、肯定的な神表象を内在化させ、ゆるやかな神表象の変化をたどる（結果 6-20）。その場合、神表象は親しいものとしてとどまり続けるだろう。逆に、父親から肯定的・養護的な養育態度で接してもらえなかったと感じている人は、神表象の急激な変化を経験する傾向があるが（結果 6-19）、神表象が変化しながらも、長年培われた厳しい神表象が改まることなくそのままとどまる可能性もある。厳しい神のイメージを長い間内在化させてきたことによる負の影響は、外側の行動に表面化していなくても、基本的信頼感などの内面性にダメージを与えているというギャップも観察されている（結果 2-10）。神表象の変化は必ずしも直ちに内面的な変化をもたらさない可能性がある。

以上の三点を踏まえて、第五の仮説が想起される。まず「補償仮説」では、神表象の変化のプロセスは明確なものとして認識できる可能性が高い。ところが、親しい神表象を内在化させることによって「直接的甘え」と「屈折的甘え」はある程度減少傾向にありながら、依然として「とらわれ」の状態が残る。厳しい神表象を内在化させ、自己の統合が不十分な状態であっても、生き方や関係性は必ずしも劣悪にならないという面もある。また、本人が神表象の変化を認識できても、その変化が生き方や関係性にそのまま表現されるかという点必ずしもそうではない可能性があり、内面と外面にギャップが残存する時期が一定期間続く。以上のことから、「神表象の変化を認識し、生き方や関係性においても決して悪くなく、それでありながら内面的には『とらわれ』の状態にある」という仮説が提起される。これを(5)「**日本的修正補償仮説**」と命名する。

ここで、(4)「内在関係認識一致仮説」と(5)「**日本的修正補償仮説**」の違いについて確認しておきたい。(4)は、内面的には統合されていながらそれが必ずしも信仰的行為として表現されない状態であり、(5)は、内面的に神表象の変化を経験しながらも甘えたくても甘えられない「とらわれ」の状態が残り、それでありながら一定の外面性は保っている状態と

いうことになる。(4)、(5)いずれも、内面の宗教性と外面に表れる社会性は必ずしも一致しないということに共通があるが、一致しない内容はかなり異なっている。このことに関連して、いくつかの点について考察した。

- 1) (4)は基本的に「一致仮説」であり、(5)は「補償仮説」である。(4)は欧米で発表された仮説であり、キリスト教が社会的に認知されている中で人格形成をしたという背景があることが推察される。このことから、幼少期に内在化された神表象がそのまま深化しているのが(4)であり、キリスト教的な背景の中で人格形成をしたモデルと考えることもできる。それに対して(5)は、幼少期の養育環境などが必ずしも好ましいものではない場合に神表象が変化するモデル、あるいは人格形成期にキリスト教的な背景がなかったか、あるいはキリスト教的な背景が必ずしも良い影響を与えることができなかった場合のモデルと考えることができる。
- 2) (4)は、アタッチメント人物との関係から始まって、神との関係についての内面的な認識が深まり、それが内的な宗教性に影響を与えて行くが、それにもかかわらず、外的な宗教行為には影響を与えないという考え方である。(4)は、日本のようなキリスト教が認知されていない文化背景では当てはまりにくいことが想定される。そうであれば、(4)も(5)と同様、ある種の枠が必要になる。「一致仮説」・「補償仮説」の研究は、議論が深まって行けば行くほど、適応可能な、現場密着型の理論を提示することになる。そのため、文化背景の差異に踏み込む緻密な議論を展開しなければならなくなり、人間一般に普遍的に適応可能な理論を提示しにくくなる面も想定される。
- 3) (5)の背景的要因として、儒教的道德観や日本人的「和」の精神が一因となっている可能性がある。キリスト者がキリスト者であることをやめた場合でも、そのことですぐに倫理的基盤を失って社会性が墮落してしまうことはない。日本という文化背景では、儒教的な倫理規範などが機能している可能性も視野に入れて、日本人論から考察を深めて行くべきであると考えられる。
- 4) (5)の背景的要因として、社会的規範や社会がキリスト者に対して抱く期待を、キリスト者が取り込んでいる可能性があることは推察される。倫理性が求められているという意識をもって生きれば、外面を繕うことは大切なことになる。内面の肯定度の低さが表面化すれば、本人も周囲も混乱する。当然、そのギャップを小さくしたいという意識が働くであろう。それが生きにくさの要因になる可能性はある。

以上、(4)「内在関係認識一致仮説」と(5)「**日本的修正補償仮説**」の差異を確認した。

「**日本的修正補償仮説**」について考察するとき鍵となるのは、甘えたくても甘えられない「とらわれ」の概念であると考えられる。「補償仮説」は、神表象の変化が比較的急速なものとして認識されることが前提となっている。神表象の変化が急速であったと認識している人の場合、神表象の劇的な変化によって肯定的な神表象を内在化させることができても、それまでのプロセスの中で心理的課題をクリアできなかったことが、「とらわれ」に繋がっている可能性があるとも推察される。今後さらに検証が必要な課題である。

5 神表象の内在化の共通の側面

(1) 一神教的神概念と日本の神概念の異同

本研究は、第八研究の結果から、日本人キリスト者の中に形成される神表象と Rizzuto, A.らの提示した神表象との異同を実証的に確認し、「先行的恵み」や「共通恩恵」の概念を神表象のレベルで確証したものと位置づけることができる。

第三章・第七節・1・(1)において、Freud, S.や Rizzuto, A.が論じた一神教的神概念と日本の神概念の違いについて問題が提起された。欧米における神表象理論の研究で論じられている神は一神教の神であることは前提となっており、日本的なコンテクストの汎神論的神とは同じではない。第八研究においては、キリスト者になる前の神表象についてインタビューを実施した。その中にはキリスト教的な背景のない中で人格形成をした調査協力者も含まれていた。その結果、キリスト者になる前も含めて、神表象は変化しながらも、神の存在は同じものとして認識されていた（結果 8-11）。この結果は、キリスト教的な背景のない中で人格形成をした場合でも、内在化させている神の存在は同じであることを示しており、Rizzuto 理論をおおむね支持していた。日本人がキリスト者になる前に内在化させている神は、汎神論的な概念の影響を受けている可能性は否定できない。それにもかかわらず、キリスト者になる前後で神表象の内容に連続性が認められたことは、幼少期に内在化される神は、文化背景にかかわらず共通的に同じであることを示唆している。

神学では、人間は文化背景などの諸要因を超えて、神の「恵み」を共通的に受けているとされ、Wesley 理論ではそれを「先行的恵み」という用語で説明している。Wesley, J.は、人間が罪の影響を限りなく受けているならば、神の「恵み」の働きかけに応答することはできないはずだが、人間が応答できるのは神が先行的に「恵み」を注がれるからであると考え、「回心」前から先行的に働いているという意味で、それを「先行的恵み」と呼んだ。本研究は、「先行的恵み」の概念が妥当なものであることが示唆している。

(2) 父性性と神表象の変化の位置づけ

本研究は、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、「個」の確立の要件を神表象の変容の視点から提案したものである。幼少期に内在化される神は、文化背景にかかわらず共同的に同じであるという知見は一つの問題提起となる。日本という精神土壌における神概念には、背景に母性原理があるのに対して、キリスト教の神概念は、母性的・受容的な面を含みつつ、父性原理がその背景にある。その理解に立って、「個」が希薄だといわれる日本人が「個」を獲得するためには、このキリスト教的父性との出会いが重要な意味を持つという論じられ方が一般的であった。この見解は間違いであるとは言えない。

しかし、キリスト教的父性との出会いによってキリスト者になったとしても、それが直ちに「個」の確立に繋がるわけではないという本研究の結果は、もう一つの側面を提示している。人格的統合による「個」の確立は、父性性との出会いよりは、生涯のある局面における神表象の変化、あるいは神表象の再内在化によるのではないかという問題提起である。神表象が変化する前は、神を「王」、「裁判官」として内在化させているケースが少なくないが、「王」、「裁判官」という神表象は、松本（1998）によれば、「桎梏性」の父性原理を象徴する神表象であると考えられる（p.58）。神を「裁判官」のような厳しい存在として内在化させている状態は、甘えたくても甘えられない状態、自分のない状態である。したがって、父性性との出会いそのものよりは、生涯における神表象の変化によって神について抱く父性性がどのように変化したかを見て行く必要があることを示唆している。「先行的恵み」や「共通恩恵」の概念を改めて評価した上で、キリスト者が内在化させている神表象の変化を、「個」の確立に向けたキリスト者の成長のプロセスにおける大切な要素として位置づける必要があると考えられる。この意味で本研究は、父性性の役割と神表象の変化の経験の位置づけを試みたものである。

(3) 「個」の確立の意味

本研究は、第五研究、第七研究および第八研究を踏まえて、神表象の変化にともなう「個」の確立の意味を実証的な角度から展開したものである。まず、いくつかの点を指摘したい。第一に、「個」の確立とは、自己存在の根拠が明確化することと関連があると考えられる。「創造者」としての神を認識することは、自分が神によって造られている、自己存在が偶然の産物ではないことを認識することである。第二に、「個」の確立とは、自己の肯定的受容と関連がある。神表象が「王、裁判官」から「父、牧者」に変化した経験と、自己存在

の肯定的受容とは少なからず関連があると考えられる。また、無条件に受け入れられていることを体験的に理解した（結果 8-13）という証言や、自分がありのままでよいことに気づき、素の自分の受け止めがなされた（結果 8-14）という証言とも折り合いがつく。第三に、「個」の確立とは、自己存在の枠や限界を認めることができたことと関連があると考えられる。「あがない主」が認識されるというのは、自分が神に対して、罪ある、限界ある存在であることを認識することを意味する。このような意味での自己認識は、並行して他者の認識が明確になることであり、他者との境界が明確になることによって他者性をより意識できるようになることであると考えられる（結果 8-1）。さらに、自分が頑張るのではなく、支えられている気持ちを感じるようになる（結果 8-16）という証言、やってもらっていることに意識の方向が変化する（結果 8-17）という証言などは、その他者が、自分に積極的に関わりを持つ他者として認識されていることを意味していると思われる。

これらのことを踏まえて、「個」の確立を二つの面から考えてみたい。第一に、「個」の確立とはアイデンティティの確立を意味していると考えられる。Erikson, E. H. (1959) は、社会的な現実の中に位置づけられる自己の感覚を「自我アイデンティティ (ego identity)」と呼んだが、本研究の結果が示していたことは、「個」の確立とは、自分が他者との関係をどのように構築して行くか、自分が社会の中でどのように位置づけられて行くかということを意味していると考えられる。第二に、「個」の確立は、心理社会的側面だけにはとどまらない。より本質的な意味で、本来の自分への覚醒を意味していると考えられる。本研究は軸足を実証研究に置いてきたが、本来、神表象研究というテーマと深い関わりを持つ神学領域から考察すれば、人間が生来持つ「神のかたち」、すなわち、神によって創造された存在に回復されて行くことを意味する。心理的に人の評価から解放され（結果 8-21）、醜い自己認識と自己分離が解消し、自己の再統合に至る（結果 8-12）、生き活きと生きる姿は、人間が神によって創造された本来の姿を取り戻すことであると考えられる。本研究は、「個」の確立について概念規定を試みたものである。

6 神表象の内在化の全体像

ここで、神表象の内在化の全体像を図 12（次頁）に示す。この図は、量的研究・質的研究を含む本研究の結果全体をまとめたものであり、すべての要素が関連しているのでも個別の事例について説明力のあるものでもない。なおこの図には、後述する「父・牧者アプローチ」等も含まれている。

7 心理臨床・牧会臨床への神表象理論からの提言

(1) 神概念と神表象の関連

本研究は、第八研究の結果を踏まえて、先行研究で指摘されてきた神概念と神表象の関係について、改めて両者の関係の位置づけを試みたものである。神表象理論の歴史では、神概念と神表象を区別すべきであるという指摘がされ続けてきたにもかかわらず、実際は区別されて来なかった。Lotufo, Jr., Z. (2012) は、神表象と神概念の違いを区別した上で、両者を別に扱うのではなく、相互に影響し合っていると理解すべきであるとした。さらに、神概念よりは神表象のほうが人に強い影響を与えたとしながらも、どちらもその人の経験や、心理療法を受けることによって変化する可能性があるとした。

内在化された神表象は、神概念として意識上にある部分と、無意識の中に神表象として存在している部分があると考えられる。無意識の中に神表象として存在している部分は、基本的信頼感や親の養育態度の影響を受ける部分である。無意識あるいは前意識の領域にある神表象は、意識の領域にある神概念と分離したものではなく、両者は密接につながっており、しかもそのつながりがどうであるかは本人も意識していない、しかし重大なことなど何かが起きたときには意識に上ってくる、これが「想定外」ということの意味であると考えられる。本研究では、「想定外」の出来事によって自己に向き合い、そのことを通して他者をさらに深く意識するようになることで神表象の変化を経験していることが示された。神表象の変化の経験が「想定外」であるという意識は、Freud, S.が提示した無意識の領域にあるものが、予期しない様態で意識上に表れた現象であると理解できるであろう。

以上のことから、神概念と神表象の位置づけは、精神分析理論によって説明が可能であると考えられる。神表象は前意識とその背後にある無意識に、神概念は意識に対応すると位置づけることができる。Freud 理論と神表象・神概念との関係を図 13 に示す。

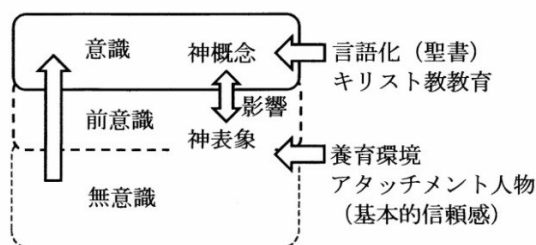


図 13 Freud, S.の局所論における神概念と神表象の位置づけ

神概念と神表象が相互に影響し合い、密接につながっているという考え方は、言語を用

いたキリスト教教育や心理臨床にとって重要である。キリスト教教育を通して神について学び、心理療法で神についての言語が提示されれば、言語化されたものは神概念になるが、言語は語り手の神表象にも深く関連しており、受け手の神概念と神表象にも影響を与える可能性があるはずである。その関係を図 14 に示す。この点で、神表象と神概念の違いを区別した上で両者が相互に影響し合っていると理解した Lotufo, Jr., Z. (2012) の見解は妥当であると考えられる。

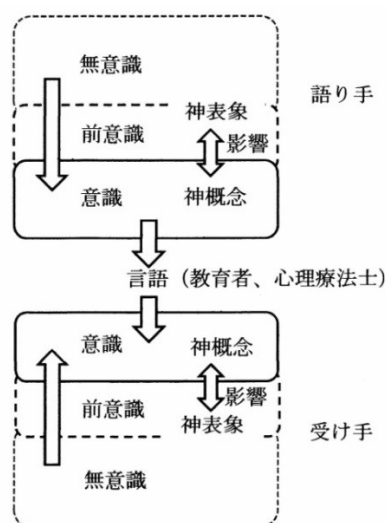


図 14 言語化された神概念と神表象の関係

精神分析理論では、無意識にあるものを意識化することが治療の基本的な考え方であるが、同様に、無意識あるいは前意識の領域にある神表象が神概念として意識にのぼってくことによって、心理療法の治療効果が期待できる可能性があると考えることができる。

(2) 神という鏡に映し出される自己

本研究では、第二研究、第五研究、第六研究および第七研究の結果から、自己のあり方と神の内在化の様態に関連があること示したものである。自己のあり方と神をどのようにイメージしているかが関連しているということは、自己のあり方に神が投影され、神について抱くイメージに自己が投影されていると解釈することが可能ではないかと考えられる。例えば、神を受容的な存在としてとらえている人は自己を受容的な存在としてとらえており、神は複雑でわからない存在だととらえている人は、自己存在が複雑で、自己理解が及ばない状態にあると推察される。その意味で自己洞察が欠如している可能性があるということである。その関係を図 15（次頁）に示す。

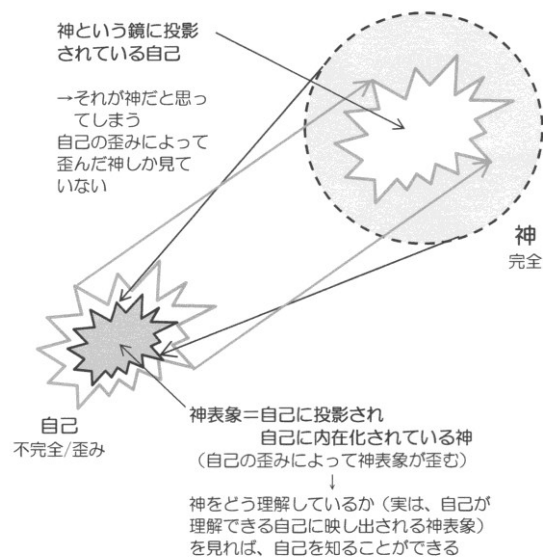


図 15 神という鏡に映し出される自己

自己のあり方が神を投影するということは、神を内在化させるプロセスにおいて、聖書に啓示されている神が自分の人格のスタンスによって歪められる可能性があり、また逆に、神について抱くイメージが自己を投影しているということについては、歪められて内在化されている神のイメージが自己の姿を映し出すということを意味している。そうであるならば、自分にとっての神はどういう存在かということ整理することによって、自分がどういう存在かを知ることができるはずである。「自己という鏡が映し出す神」であると同時に、「神という鏡に映し出される自己」という自己理解が必要だということである。

信仰は神を信じればよいのではない。信仰が神を信じることだけに包摂されるのであれば、独りよがりなキリスト教理解に陥ることは避けられない。自己洞察は、自己のことが見えないからこそ必要なものである。自己は見えないため、自己を映し出す鏡がなければ自己を知ることができない。神をどのように内在化させているかを知ることによって自己を知ることができれば、それは自己洞察の可能性を拓けてくれる。この意味で、自分が神をどのようにイメージしているかを知る神表象理論は、大きな希望となる。本研究は、信仰は神の啓示による形而上学的なものでありながら、信仰の健全性は、その受け皿となる人間の理解を土台に置いたものでなければならないという Seamands, D. (1981、1985、1988、1993) の視点を実証的に支持するものである。

(3) 心理臨床における神表象の理解

本研究は、第一研究から第八研究までの結果から、具体的な神表象を用いて神のイメー

ジを測定することによって、より詳細な神表象の特定を行ったものと位置づけることができる。聖書から抽出した神学的知見が実証的アプローチでも有効であるかを検討した。その結果、第五章・第二節・1・(1)で述べたように、キリスト者は、神を、親しいイメージの「父」、「牧者」、赦しと関連のある「あがない主」、厳しいイメージの「裁判官」、「王」、そして存在の根幹を表す「創造者」の四つのカテゴリーでとらえていた（結果 8-22）。

ここで、「神表象の親しさの度合い」だけでなく、神をどの程度の距離でイメージしているかという「神表象との距離感」の視点も考慮に入れて、二軸による神表象の位置づけを試みた。「親しさの度合い」は、神を親しい存在として感じているか、厳しい存在として感じているかという度合いのことであり、「距離感」は、自分が神を近い存在としてイメージしているか、遠い存在としてイメージしているかということである。

「父」は親しい存在であり、近い距離感で内在化される神表象である。「あがない主」は親しい存在であるが、パーソナルな距離感が必ずしも近いわけではない。「王」は厳しい存在であるが、一部肯定的な意味も含まれているため、「裁判官」よりは親しい位置づけであり、距離感も近い存在としてイメージできる神表象である。「裁判官」は最も厳しいイメージであり、かつ遠い存在としてイメージすべきものである。「創造者」は、キリスト者になる前後にわたって内在化させている神表象であり、人間存在の根本に関わる、全体を覆う基本的な神表象と位置づけることができる。これらのことを踏まえて、四つのカテゴリーの神表象を図にプロットした。その結果を図 16 に示す。A から D はそれぞれ領域を意味する。図 16 は、神表象の位置関係を数量的に表したのではなく、相互の位置関係について説明力のあるものでもない。

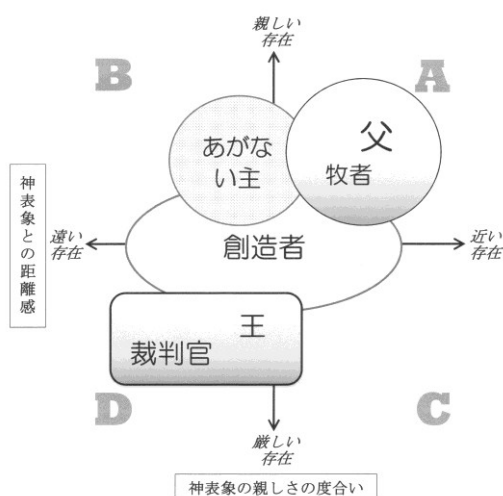


図 16 神表象の親しさの度合いと神表象との距離感

図 16 のような位置づけで神表象を内在化できれば、許容範囲内のバランスで神を内在化させているということができるであろう。しかし、ここで問題になるのは、D の「裁判官」が C の領域に移動し、「王」と「裁判官」がパーソナリティーに否定的な影響を与え過ぎる状態である。「裁判官」との関係性が近すぎる状態は、自分のパーソナリティーや生活を否定的なものにする。信仰生活は神経症的になり、生き方も後ろ向きになる。同時に、周囲の人に対しても厳しくなる。他方、神を、「父、牧者」としてイメージできる場合、すなわち A のポイントが高い場合は、神表象を健康的にとらえており、他者尊重も可能になり、生き方も前向きになる。以上のことから、キリスト教教育や心理的治療のプロセスにおいて、A の領域を豊かにすること、D の領域が強すぎないようにすることを一つの目標にできるのではないかと考えられる。

ここで、キリスト者になる前の状態も含めて、神表象が変化する前の段階の神表象の親しさの度合いと神表象との距離感を想定したものを図 17 に示す。

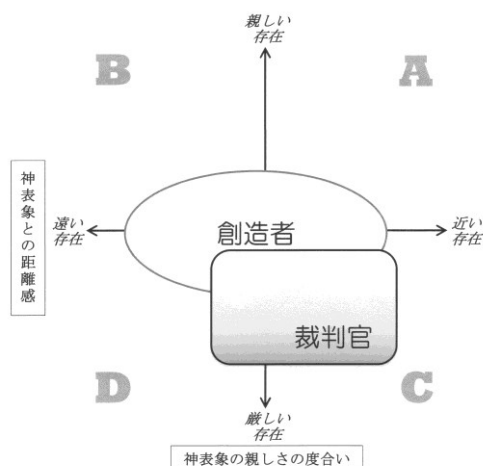


図 17 キリスト者になる前の神表象の親しさの度合いと神表象との距離感

第八研究の結果によれば、「創造者」はキリスト者になる以前から認識されている可能性がある。また、「裁判官」は、Freud, S.の理論では超自我に重なり、キリスト者でなくても、神的な存在として内在化させている可能性もある。

神表象の変化の様態については、「裁判官、王」から「あがない主」を意識するようになる段階と、「王、裁判官」から「父、牧者」を意識するようになる段階の二段階あることが示された。これはすなわち、図 17 が図 16 に変化するということである。

D の領域か、場合によっては C の領域に入っている「裁判官」が否定的な影響を及ぼし

すぎないようにするためには、神表象が「裁判官」から「あがない主」と「父、牧者」に変化し、「裁判官」がCの領域からDの領域に移動し、そのことで全体のバランスが取れることである。「あがない主」は神表象が変化した後には内在化される重要なものだが、宗教体験の色合いが強く、認知の調整ではとらえにくい。また、赦しの実感と関係があるという意味で、実存的である。それに対し「父、牧者」の表象は、聖書のことばの学びとカウンセリングによって認識を矯正できる可能性がある。ここに教会教育と心理臨床のヒントがあるのではないかと考えられる。

8 キリスト教教育への神表象理論からの提言

(1) キリスト教教育における従来の神の提示

本研究は、第二研究、第五研究および第八研究の結果を踏まえて、幼少期の教会の教育における神のイメージの提示の問題点を示したものと位置づけることができる。Wesley理論を背景に持つ教会教育の考え方では、幼少期に「あがない主」を体験的に理解することが重要であるとされてきた。「あがない主」としての神を知るという体験は、自分が罪人であるという理解が前提となり、子どもであってもその認識は欠かせないというアプローチである。Freud理論を参照すれば、エディプス期に父性性に出会うことに主眼が置かれ、その考え方を子どもに対する教会教育にも適用してきたと考えることもできるであろう。あがない主からアプローチした場合の親しさの度合いと神表象との距離感を想定したものを図18に示す。

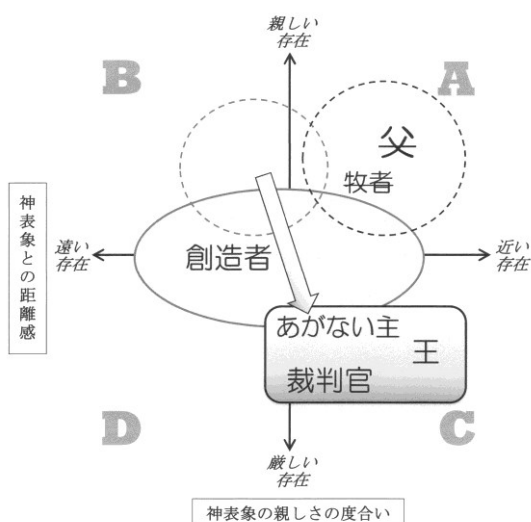


図 18 「あがない主アプローチ」の親しさの度合いと神表象との距離感

神表象理論の角度から考えれば、幼少期に「あがない主アプローチ」で神表象を取り込むことが健全な成長を促すかは再考の余地がある。「あがない主」を理解するように働きかけられた場合、「あがない主」がバランスよく内在化されるのではなく、むしろ受けとる側は、Dの領域にある「裁判官、王」と区別されないままに内在化されてしまう可能性があるのではないかと推察される。その仮説が正しければ、「あがない主」という神表象と「裁判官、王」という神表象がセットになって、極めて否定的なイメージとしてすり込まれ、それがCの領域に非常に強いものになって残ることになる。このことが、幼少期からキリスト教的な背景の中にあるキリスト者が「裁判官、王」というネガティブな神のイメージを内在化させているメカニズムなのではないかと推察される。Freud理論で言えば、超自我としての「裁判官」がCの領域に内在化されている状態と考えられる。神表象は、否定的・律法的な父性として、パーソナリティーに負の作用を及ぼす可能性が高くなる。内的世界は限りなく内省的なものになり、超自我が監視する宗教になる。このことは、Tillich, P. (1958) が、牧会者のところに来る人たちは、本人が自覚しているかは別にして、多くが完全主義者だとしたことの意味ではないかと推察される。

さらに、第五研究では、厳しい神のイメージを内在化させている場合、基本的信頼感は低くなり、劣等感は高くなる傾向があることが示唆された。基本的信頼感という発達課題をクリアしにくいということは、アイデンティティの確立のプロセスに支障が生じる可能性が高くなるということを意味している。

本研究は、キリスト教教育における従来の神表象の提示に問題提起をするものである。

(2) 神表象理論からの神の提示：「父・牧者アプローチ」

本研究は、第二研究、第五研究および第八研究の結果から、キリスト教教育における神表象の提示について一つの可能性を示唆したものと位置づけることができる。本研究の結果は、従来の「あがない主アプローチ」に限界があることを示唆していた。神表象の内在化全体のバランスから想定すれば、健全な成長のためには、Aの領域に「父、牧者」としての神表象を内在化させることができるような働きかけがキリスト教教育において必要ではないかと考えられる。「父、牧者」からアプローチした場合の親しさの度合いと神表象との距離感を想定したものを図19（次頁）に示す。

Rizzuto, A. (1979) はWinnicott, D.W.の理論を土台にして、神表象の萌芽はかなり幼い時期から人間の中に形成されているとした。さらに第八研究では、キリスト者になる前

の神の存在は、キリスト教的な背景がない場合であっても、キリスト者になった後の神と同じ存在として認識されていることが示された（結果8-11）。もし同じ存在として認識され続けるならば、肯定的な神のイメージを神表象の基礎として内在化させておくアプローチが求められるのではないかということである。

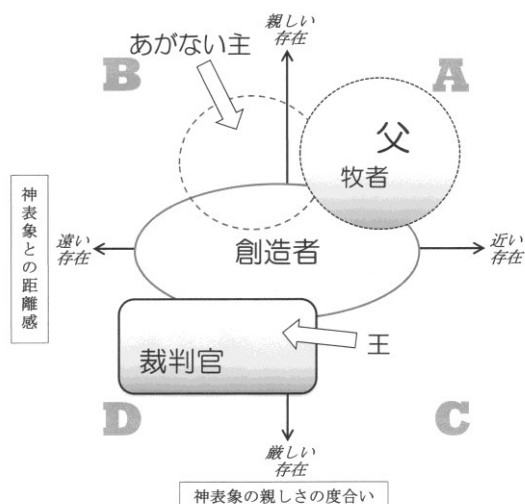


図 19 「父・牧者アプローチ」の親しさの度合いと神表象との距離感

このことと関連して、「創造者」という神表象がキリスト者になる前後にわたって認識されていたことは重要である（結果8-10）。「創造者」は、キリスト者になる以前の幼少期であっても、受け手が自分のものとして意識化できる可能性がある。

以上のことから、幼少期には、神に創造され、神に愛されている存在であることを示すことに妥当性があると考えられる。その後の成長過程において、「あがない主」の健全な理解が深まれば、「父、牧者」とのバランスを保ちつつ、健全な神表象の内在化が可能になるのではないかと想定される。このアプローチを「**父・牧者アプローチ**」と表現する。

肯定的な神表象を内在化させることができれば、親との関係は良好になり、基本的信頼感を築くことが可能になり、その結果、発達課題も順次クリアできる可能性が高くなることが考えられる。神表象の変化は急激ではなく緩やかになるが、アイデンティティの確立のプロセスをたどりながら、肯定的な神のイメージをさらに豊かなものにすることができるといえる。ここに教会教育の役割がある。

(3) 前エディプス段階と信仰

本研究は、第四研究、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、プレ・エディパルな

段階における宗教性と、健全な人格性の発達を伴ったキリスト者の信仰の違いを、神表象の角度から確証したものである。本研究では、Freud, S.と Winnicott, D.W.の理論を受けて、日本人キリスト者の神表象を分析した。その結果、エディプス期を焦点化して神表象の起源を求めることには限界があることが示唆され、神表象の起源を Winnicott, D.W.が提示したようなプレ・エディパルな段階にまでさかのぼって考えるべきことが示された。ここで、土居（1992）が指摘しているように、母性原理に基づく日本的文化背景では、信仰と「甘え」を取り違える可能性があるということに着目しなければならない（p.161）。信仰と「甘え」を混同した場合、母性原理に土台を置いて「個」が埋没するプレ・エディパルな心理を信仰と取り違えることもあるだろう。

これは、「個」が希薄だという指摘をされる日本人の中に、「甘え」の心理をきっかけにして宗教現象に深く入って行く危うさが内包されていることとも関連があり、マインドコントロールのメカニズムの一面を説明しているものであると考えられる。プレ・エディパルな状態には、自己の主体性が欠如しているという危うさがある。宗教が、成人になりながらもプレ・エディパルな状態にある人の受け皿になることもあり得ることである。

この点については、エディプス期に焦点を当てた Freud 理論に一定の役割があると考えられる。ただ、Freud 理論をそのまま受容すればよいということではない。本研究の結果は、エディプス期の解決として内在化される神表象が、超自我を連想させるような Freud 的な神表象ではなく、肯定的な神表象が発展した、聖書が提示する神表象に近いものであることが望ましいことを示唆していた。肯定的な神表象の内在化を土台に、肯定的な人格性・社会性が育まれれば、自己との対峙が可能となり、その結果、エディプス期の心理的課題を克服することによってアイデンティティの確立に向けて成長することができる可能性があるということである。エディプス期の心理的課題の克服を視野に入れずに Winnicott 理論に焦点を当てれば、「個」は結果として埋没することになる。その意味で教会教育や牧会臨床は、人がアイデンティティの確立に向かって成長しつつある過程の中にあることを意識したものである必要がある。

(4) 「クリスチャン・ホーム」における自立のプロセス

本研究は、第六研究、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、キリスト教を背景にした人格形成のプロセスにおいて、自立の視点から問題提起をしたものと位置づけることができる。本研究では、神表象の提示について、「あがない主アプローチ」と「父・牧者

アプローチ」を比較検討した。「あがない主アプローチ」の場合は、「裁判官」を内在化させながら人格形成をすることになる可能性があり、神表象の変化は明確に意識しやすいものになっても、その後も否定的な神のイメージが残存し、甘えの心理は相対的に強くなり（結果 7-2）、「**日本的修正補償仮説**」に示されるような、甘えたくても甘えられない、「とられ」の意識を抱き続けるようになる可能性がある。厳しい神のイメージによって内面的にダメージを受けながら、外面的には一定の社会性を保ってキリスト者としての生活ができる状態である。

Wesley 理論に基づく教会教育の環境では、「回心」の経験が重要視されてきたが、人間の視点からの分析は十分に行われて来なかった。わが国においても、「個」の確立の観点から信仰を考えるという視点が欠落しているのが現状である。キリスト教的な背景の中で人格形成をした人は、「個」の確立に向けた自立の葛藤を抱き続けるあまり、教会を離れるか、自立的でない未熟なパーソナリティーのままキリスト者として教会の中にとどまるか、いずれかの可能性がある。この点に関連して、第七研究の結果は一つの示唆を与えていた。甘えの心理は家族の中にキリスト者がいた場合のほうが、家族の中にキリスト者がいなかった場合よりも強い（結果 7-6）。すなわち、家族にキリスト者がいる場合のほうが「個」の確立が弱く、信仰について自覚的でない可能性が高いということである。また、甘えの心理が強いということは、内在化されている神表象が厳しいものである可能性もある。これは、Freud 理論で言えばプレ・エディパルな状態とすることができるだろう。プレ・エディパルな状態には、自己の主体性が欠如しているという危うさがある。宗教が、成人になってもプレ・エディパルな状態にとどまっている人の受け皿になることもある。

この甘えの心理が強い状態は、Marcia 理論でいう「アイデンティティ拡散」の状態か、あるいはアイデンティティの危機を経験しないまま何かに傾倒している「早期完了」の状態であると考えられる。「早期完了」の状態は、自分の目標と親の目標の間に不協和がなく、どんな体験も、幼児期以来の信念を補強する機能を果たし、パーソナリティーの硬さを持っているという特徴がある（遠藤、2013、p.123）。また、権威を好み、権威主義的な接し方を嗜好する傾向がある。権威主義的な嗜好性は、神表象の観点からすれば、厳しい神表象を内在化させていることと関連があると考えられる。その状態では、自己を受容し、他者との肯定的な関係を築くことが難しくなるとすれば、それが権威主義的な傾向を生み出すことは可能性として考えられることである。

キリスト教教育において提示される神表象や神学が、場合によっては「早期完了」の状

態を強化する役割を果たす可能性もある。この点が、一般的な人格形成とキリスト教を背景にした人格形成の違いであり、またキリスト教教育の難しさであると考えられる。人間の自立を促すことによって人間を成長させるはずの宗教や教育が、逆に人間の自立を妨げる要因になりうるということである。人格形成の段階で否定的な神表象を内在化させ、自立が上手にできない場合には、幼少期から内在化させてきた親の価値観とキリスト教が提示する価値観が重なったまま、無自覚に両者を取り込み、その後、どのような体験をしても、両者が別物であることに気付くことができず、むしろ、その後の体験が、無自覚に取り込んだ、親の価値観と重なったままの未成熟なキリスト教を強化する方向に作用し、Marcia 理論の「傾倒」をより強固なものにする。このことを神表象の関連で考察すれば、Rizzuto, A.が示唆した神表象の改定は行われず、外見はキリスト者であっても、自己理解やパーソナリティにおいて未発達な状態にとどまる可能性も否定できない。親の価値観を引き継ぐことを信仰の継承であると考えれば、「早期完了」の状態は避けられない可能性が高いということである。

以上のことから、親がキリスト者である場合、親と同じ価値観を踏襲することが信仰の継承であると考えるのは間違いである。むしろ、原家族と異なる価値観を作ることで自立に向かいつつ、原家族と異なる枠で自覚的にキリスト者として生きる選択をすることが、「早期完了」の状態にならないために必要であることを本研究は示唆している。しかし、牧会臨床で見られる臨床像からすると、これは簡単ではない。

自立に向けたステップについて、第八研究の結果は一つのことを示していた。重大なことがらの後に神表象が変化する場合が多いということ（結果 8-4）、また、自分がやっていることと言っていることが合致していないという意味での〈自己分離〉に気づき、神表象の変化によってそれらが解消され（結果 8-12）、〈自分のスタンスの確立〉に至る（結果 8-15）ということであった。神表象の変化は、自立に向けての契機になる可能性がある。

さらに本研究の結果は、「早期完了」の状態にある者が、幼少期から内在化させてきた親の価値観とキリスト教が提示する価値観が重なったまま無自覚に両者を取り込んできたことに気づくとき、複雑な内面的危機を迎える可能性があることを示唆している。自分の目標と親の目標の間に不協和がなく、どんな体験も、幼児期以来の信念を補強する機能を果たしている状態であったことに気づけば、親との関係は悪化する。それが破壊的な方向に行けば教会を去るという結果になる可能性が高い。しかしこの場合はわかりやすく、危機を経験して結果的にアイデンティティが確立することもあると考えられる。

危機を迎えているにもかかわらず、教会を離れずに、キリスト教の環境に残った場合は、プロセスはさらに複雑になることが推察される。親との価値観と異なる価値観を自分の中に創出するという葛藤を経験しながら、親の価値観と同じキリスト教を再度取り込まなければならないという心理的矛盾を抱え込む、いわゆる「自立のねじれ現象」である。第八研究の結果が示すプロセス、すなわち、自分がやっていることと言っていることが合致していないという意味での〈自己分離〉に気づき、自分がありのままでよいことに気づき（結果 8-14）、そして〈自分のスタンスの確立〉に至る（結果 8-15）プロセスを、親の価値観と重なっている教会という枠の中で経験して行くという複雑さである。これは大変な葛藤になる可能性がある。危機を経験する中で自己投入の対象を獲得しようと努力している「モラトリアム」の状態に（加藤、1983、pp.20～21）一度引き戻され、心理的課題を乗り越えることができれば、真の自立と自覚的信仰に至る可能性があるという意味で、危機は悪いものではない。見た目が「傾倒」しているか、すなわち自分なりの信念をもって生きているか、あるいは「回心」の経験が明確であるかという側面だけに着目すれば、「早期完了」の状態とアイデンティティの確立の区別はしにくくなる可能性がある。より実効的な教育のために、自立という観点が大切ではないかと考えられる。

本研究は、神表象の変化との関連において、自立のプロセスについて問題提起をしたものと位置づけることができる。これは端緒に過ぎず、内在化されている神表象がアイデンティティの確立のメカニズムにどのような影響を与えるかについては、今後より実証的な検討が必要になると考えられる。

(5) Wesley理論に基づく教会教育のプログラムの展望

本研究は、第四研究、第五研究および第八研究の結果を踏まえ、Wesley理論を背景に持つ教会教育において、受け皿となる人間性の理解が重要であることを示し、教会教育のプログラムのあり方に問題提起したものと位置づけることができる。Wesley理論に基づく教会教育の現場では、「回心」に軸足を置くアプローチが大切であると考えられてきた経緯があり、必ずしも「父・牧者アプローチ」を採用しているわけではない。教会教育のプログラム立案も、どちらかと言えば「回心」を目標に考えられてきた傾向がある。対象が子どもであっても、教会教育のプログラムの中で、人間に罪があること、十字架がその解決であることなどに集約されたキリスト教の教理が提示され、キリスト者になる決心が促されることも時としてある。いわゆる、「あがない主アプローチ」である。これは、教会教育の

最終的目標から考えれば間違っているとは言えず、そのようなプロセスを経て、生涯キリスト者であることを貫く人もいるであろう。しかし、あわせて考えておかなければならないことは、「あがない主アプローチ」は、キリスト教の内容を命題として提示する傾向が強くなる可能性があるということである。その場合、養育者と養育を受ける者の人格性を通して伝えようとする視点は希薄になる。他方、「父・牧者アプローチ」は、養育者と子どもとの間に肯定的な関係作りをする中で神表象の提示ができるという意味で、人格性を通して子どもに「恵み」を伝えやすくなる可能性がある。

ここで、養育者が内在化させている神表象がどのようなものかについても考慮する必要がある。同じ「あがない主アプローチ」でも、「裁判官、王」というイメージが背後にある場合と、神の恵みに感謝しているという意味で、「あがない主」という神表象をとらえている場合では、教会教育の現場での子どもとの接点におそらく違いがあると考えられる。

本研究の結果は、信仰の受け皿となる人間性の観点が重要であることを示唆している。「回心」、「聖化」だけに軸足を置くのではなく、人間性や他者との関係を含む社会性が育っているだろうかということを慎重に見て行かなければならないということである。その点を十分考慮できない場合、Marcia理論で言えば「早期完了」の状態になる可能性、あるいは「自立のねじれ現象」に陥る可能性が高くなることは想定される。教会教育の担い手は、人間性と発達に関する理解に努める必要がある。心理的側面や発達の側面に十分な配慮がなされた、「父・牧者アプローチ」に基づいた教会教育が期待される。心理療法の現場であれば、クライアントの人格形成のプロセスについての十分な共感が求められる。

9 救いの神学への神表象理論からの提言

(1) Wesley理論による信仰体験の検討：「第Xの転機」

本研究は、第八研究の結果を踏まえて、Wesley 理論の枠組みにおいて、「**第 X の転機**」という概念を提出することによって、「回心」や「聖化」という視点だけでなく、神表象の変化がむしろ重要であることを示したものと位置づけることができる。第八研究では、内在化されている神表象の変化のパターンについて調査・分析を行った。その結果、キリスト者になる経験と神表象が変化する経験は、パターンが極めて多様であることが観察された（結果 8-3）。すなわち、(1)神表象の変化がキリスト者になる経験と重なっていると認識しているパターン、(2)キリスト者になる経験の後に神表象が変化したと認識しているパターン、(3)キリスト者になる経験ではなく、別の機会に神の赦しを確信した時に重なると認

識しているパターン、(4)キリスト者になった後に経験した「聖化」と重なりと認識しているパターン、そして(5)キリスト者になる経験とも「聖化」の経験とも重ならない、その後に変化したと認識しているパターンである。このように、神表象が変化した経験は、キリスト者になる経験とも「聖化」の経験とも必ずしも重ならない。キリスト者になることは大きな転機であっても、そのことで神表象が変化したり、神表象の変化にともなって、生き方が急激に変化したりすることでもない。転機でありながら、時期を特定しにくいという意味で、「回心」を「第一の転機」、「聖化」を「第二の転機」と呼ぶことと対比させて、神表象の変化の経験を「**第 X の転機**」と命名した。

神表象の変化の体験が、「回心」とも「聖化」と重なっていたという認識もあるが、重ならないという認識については慎重な考察が必要であると考えられる。ここで、「回心」、「聖化」と神表象の変化の異同について見ておきたい。Wesley 理論において、「回心」は、「罪ある者が神によって義とされ、いのちが与えられ、神の子とされる」(ワイレー・カルバートソン、pp.351～373)と定義される概念である。多くの場合、キリスト者になる経験と同じものとして認識されている。「回心」には、宗教改革の伝統の中にある Luther の「信仰義認」、すなわち、信仰によって罪が赦されるという概念と、自分が神の家族に加えられ、神の子とされるという認識、すなわち神を「父である神」と認識することが含まれる。「回心」では、「罪が赦され、神の子とされる」という点が焦点化される。他方、「聖化」は、「新生(引用者注:「回心」と同意)に次ぐ、神の御業であり、それによって、信仰者(引用者注:「キリスト者」と同意)は、原罪あるいは腐敗性から自由にされ、神に対する完全な傾倒と、全うされた愛による聖なる服従の状態に導き入れられるもの」と定義される概念である(ワイレー・カルバートソン、pp.397～398)。また、「神のかたち」が回復されるプロセス全体を表す場合もある(ワイレー・カルバートソン、p.400)。「神のかたち」とは、第二章・第一節・3・(2)～(3)で述べたように、人間が神に創造されたときに神が人間に組み込んだもので、「自然的像(理性・意志・自由)」、「政治的像(被造物を管理する責任)」、「道徳的像(人間と神との関係の土台)」の三つが含まれる。特に「聖化」のプロセスにおいては、「道徳的像」が回復されるとされる。「聖化」では、「性質が変化し、人間が創造されたかたちに回復される」という点が焦点化される。

このように、「回心」は罪の行為が赦されることに重点が置かれ、「聖化」は罪ある自分の性質が聖く変えられることに重点が置かれると考えられる。なお、第八研究で調査協力者が語った、『聖化』は経験的にわかるが、『聖化』と神表象の変化は重なっていなかった

という証言は、「聖化」を、プロセスとしてよりは、「新生に次ぐ、転機的に体験できるもの」という意味で使っていると考えられる。

以上のように、「回心」や「聖化」は、Wesley 理論では、明確な認識としてとらえられるものと理解されている。また、第二章・第一節・3・(1)の「図 7 Wesley, J.の救いの順序」に示されているように、「回心」と「聖化」は、比較的急な変化の中で体験できるものであるが、同時に、キリスト者の生涯全体を「聖化」のプロセスとしてとらえるところに特徴があるとも理解されている。神が人間に「恵み」を与え、そのことが人間の内面に変貌を促し、生活を改変させるという積極的な方向性を内包し、キリスト者に積極的な成長を促す理念であると考えられる。

「回心」は、キリスト者になる経験と重なるという認識が一般的であり、キリスト者の間でもその認識にそれほど大きなぶれはない。しかし「聖化」になると、宗派によって神学的位置づけは大きく異なり、体験や理解にかなり幅が出てくる。「聖化」によってどのような結果がもたらされるのかという視点は、そもそも概念自体が宗教的なカテゴリーの枠の中で語られるために、宗教体験に収斂され、概念規定が明確化されることはそれほどなかった。例えば、「聖化」のもたらすものとして、「キリスト者の完全」や「全き愛」という神学用語が使われるが、それが人間体験として何を意味するのかということについては各々の体験に委ねられ、敢えて概念の精緻化を試みることはしない。特に人間形成の視点、人間心理の視点からの考察は、序章で引用した Seamands, D.など、諸外国ではいくつかの試みがあるものの、わが国においてはほとんどなされていないのが現状である。

わが国で、Wesley 理論に影響を受けた宗派の中に、「きよめ派」と呼ばれる流れがあり、その神学的概念と宗教儀礼の多くはアメリカとイギリスから入ってきたとされるが、必ずしも批判的検討が十分でないままに取り入れられたため、教会活動の実態が宗派の創設者の人格やカリスマに負うところが大きかったと想定される。「聖化」が人間に何をもたらすのかということについて、批判的検討や概念の精緻化がなされなかったことは、担い手に実践面での自由度を与えたというメリットになったが、神学的・実践的逸脱があった場合に、それに対して枠を提供することが難しかっただけでなく、依然として積極的な意味でキリスト者の成長のモデルを描けないままであることも否めない。さらには、人間科学領域に属する心理学と、宗教の領域に属する神学が対話を試みようとしたときにも、必ずしも積極的でなく、キリスト教学に基づく人間援助を主領域とする牧会学の学術的発展がなかなか進まないのも事実である。例えば、「聖化」を、受け皿となる人間の問題として、心

理学や人間科学領域のボキャブラリーを用いて表現することもない。この意味で、神学と心理学の対話はかみ合わず、「聖化」が人間に何を与えるのかということについても漠としたままである。

ここで、「**第 X の転機**」、すなわち神表象の変化によって「個」が確立されることの意味を再確認したい。第五章・第二節・5、(3)で述べたように、本研究の結果から想定される「個」の確立には、心理社会的な意味でのアイデンティティの確立という面と、神学的な意味での本来の自分への覚醒、「神のかたち」への回復という面の二面があることが指摘された。本研究の結果からすれば、「回心」や「聖化」によるだけで、この意味での「個」の確立がなされるとは考えにくい。Wesley 理論が積極的な意味での成長を促すモデルであり、その成長を実効的なものとするためには、「回心」と「聖化」という概念規定に限界が来ている可能性があるという問題提起がされた。

キリスト者になる経験とは別の機会に神表象が変化したと考える場合、まず想起されるのは、神表象の変化は「聖化」の経験なのではないかということである。ところが、今回の研究では「聖化」とも重ならないケースが観察された。このことによって、従来とは異なる信仰体験の再表現・再定義が必要であるという問題提起がされた。この知見は、従来の神学体系に一石を投じている。キリスト者になる経験や「聖化」を骨子としてきた従来の神学体系をどのように再解釈するかという問題である。このことについてはいくつかの解釈可能性がある。第一に、「聖化」とは違っていたという証言をどのように受け止めるかという問題である。調査協力者の神学的理解が十分でなかったことも想定される。このことについては、さらに実証的な研究を重ねる必要がある。第二に、従来の神学体系、すなわち、キリスト者になる「回心」の経験、それとは異なるレベルの「聖化」という骨組みで構築した神学体系を根本的に見直す必要があるという考え方である。第三に、従来の神学体系は保持しつつも、その中に神表象の変化を織り込んで行くという解釈である。キリスト者になる時に経験することなのか、その後のライフ・イベントで経験することなのか、「聖化」と定義される内的変化によって経験することなのか、あるいは転機的な経験というよりは、むしろ徐々に変化するものなのか、いずれにしても生涯のどこかで神表象の変化を経験すればよいという考え方である。ここでは、第三の解釈可能性が实际的であると考えられる。神表象の変化は人生のどこかで起きうる、そしてその変化が、自己の認識、他者の認識、人生の認識などを変え、人格的な成長を促すという見方である。

神表象の変化の時と内容は改めて注目すべきことである。神学的に規定されている概念、

すなわち「回心」や「聖化」を軸に信仰のあり方を考えた場合、急激な内的変化が焦点化されやすい。そのことで、アイデンティティの確立という視点が軽視されれば、「早期完了」や「自立のねじれ現象」に陥ってしまう可能性が高くなる。むしろ、神表象の変化とアイデンティティの確立という観点から信仰体験を考えるほうが、キリスト教的な背景の中で人格形成をする場合に発生しうる問題を未然に防ぐことができる可能性を持っているということである。本研究は、教会教育と人格形成における Wesley 理論の新しい展開を提示するものである。「第Ⅹの転機」は実証的研究の結果として提示されたが、神学的枠組みの中にどのように位置づけるかは今後の課題である。

(2) 宗教の方向性の再考：「恵み」の神学との関わりで

本研究は、第八研究の結果を踏まえて、神表象の変化の内容と様態との関連で、キリスト教のあり方、特に「恵み」の概念の再評価が必要であることを示唆したものと位置づけることができる。キリスト者に内在化された神表象の変化のプロセスで特に注目すべきことは、神表象の変化によって自己のあり方が変化したということ、それとともに神との関係が変化したということである。第八研究は、神表象の変化による三つの結果を示している。第一は、自己の受容である。自己が再統合され（結果 8-12）、無条件に受け入れられていることを体験的に理解し（結果 8-13）、自分がありのままでよいことに気づき、素の自分の受け止めがなされ（結果 8-14）、自分のスタンスが確立される（結果 8-15）。第二は、方向性の変化である。支えられている気持ちを感じるようになり（結果 8-16）、やっってもらっていることに意識の方向が変化し（結果 8-17）、自分とは異なる他者（神）が自分にわかるように導いてくれるという感覚があるために、自分で自分のことを監視しないで済むという意味で自分の人生を委ねている（結果 8-19）。第三は、社会的関係の変化である。他者や周囲の状況との関係が変化し（結果 8-20）、心理的に人の評価から解放される（結果 8-21）。

この中でも特に着目すべき点は、無条件さの体験と方向性の変化である。無条件に受け入れられていることを体験的に理解することで自己を受容することができる。さらには、支えられ、やっってもらっていることに意識が変化し、自分で自分のことを監視しないで済むという内面の変化を経験している。

この変化は、キリスト教の本質と深く関係している。キリスト者として生きる本質は、切磋琢磨して立派な人間になることを目指すことでもなければ、自分が何かを成し遂げる

ために宗教を利用することでもない。受容の教理の再評価の必要を提唱した Tillich, P. (1949) は、再統合における最初の働きかけは、無限的なものから有限的なものへやって来なければならないと述べ（相澤訳、p.188）、人間から神へではなく神から人間へという基本的方向性が大切だと指摘している。「やってもらっている意識の深まり」である（結果 8-17）。宗教が、人間が何かをやることをだけを求めるのであれば、そのことで人がいやされることはない。

これは、神の絶対主権にすべてを閉じ込めてしまう神学のことではない。人間は幼少期から神表象の萌芽が誕生し、神のかたちを内在化させている尊厳ある存在である。神の絶対主権だけですべてを説明すれば、人間に付与されている尊厳は失われる。

Tillich, P. (1958) はさらに、牧会者のところに来る人たちは、本人が自覚しているかは別にして、多くが完全主義者だとしている（相澤訳、p.175）。神表象の視点からすれば、「裁判官」を内在化させている状態である。これは、人間の側に求められているものが多い宗教の当然の帰結であると考えることができる。「やってもらっている意識」ではなく「やらなければならない意識」の宗教は完全主義者を生み出す。相澤（2009）は、教会が倫理道徳的清さと正しさ、そして罪や罪意識を強調しすぎてきたため、キリスト者の中に自責の念や劣等感を生み出し、それがもとになって他者を裁く体質になってはいないかと警鐘を鳴らしている（pp.346～347）。無条件で受け入れられている意識、やってもらっている意識の深まりが必要とされているという点で、どのような神表象が内在化されているか、また神表象がどのように変化しつつあるかに着目することは意味がある。神学的に表現すれば、「恵み」の概念の再評価が必要であると考えられる。

終章 結論

第一節 結果の要約

本研究の結果は第五章・第一節にまとめてあるが、以下、主要点のみ列記する。

1 神表象と自己のあり方・生き方

自尊感情が高く自己を受容できる人、対人的信頼感が高い人、能動的実践的態度がある人、自己の創造・開発の姿勢が高い人、自他共存の姿勢が高い人、こだわりと執着心がない人、他者尊重の姿勢が高い人は、肯定的な神イメージを持つ傾向がある。

親しい神のイメージを内在化させている人は、内面的な基本的信頼感、自尊感情、外面的な生き方いずれも肯定的であるが、厳しい神のイメージを内在化させている人は、基本的信頼感や自尊感情に負の影響を与えている可能性がありながら、対人的・社会的存在としての自覚・行動が必ずしも否定的になるわけではない。

神のイメージが肯定的であり、生きる姿勢が積極的である人は、「父」、「牧者」、「創造者」の表象を、逆に否定的な人は、「王」、「裁判官」、「救出者」の表象を抱く傾向がある。

2 属性別分析

若いころ、あるいはキリスト者になって五年程度は、厳しい神のイメージを内在化させやすいが、年齢や年数を重ねることで、自尊感情、基本的信頼感、生き方が肯定的になり、神表象も肯定的に変化する可能性がある。

性差は、女性は男性よりも親しい神イメージが強く、神との親密性を保つ傾向がある。

3 家族との関係

両親の養護的な養育態度と肯定的な神イメージの内在化は関連があり、母親の過保護的・干渉的な養育態度と否定的な神イメージの内在化も関連がある。

4 アタッチメント

神のイメージの肯定度は、神アタッチメントの肯定度と比例している。

アタッチメント傾向が安定型の人は、神は厳しい存在ではないととらえているが、とられ型、おそれ型の人は、神を厳しい存在としてとらえている。

5 心理社会的発達段階

基本的信頼感の高い人は肯定的な神表象を、低い人は否定的で厳しい神表象を持つ傾向がある。

厳しい神のイメージを内在化させている人は、第四段階の発達課題である勤勉性が弱くなり、劣等感を抱きやすくなる可能性がある。

親しい神のイメージを内在化させている人は、第六段階の発達課題である親密性を身につけることができる可能性が高い。

6 甘えの心理

親しい神イメージを内在化させている人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」の心理が弱くなる傾向がある。

厳しい神イメージを内在化させている人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」、すなわち、甘えたくても甘えられない心理を抱く傾向がある。

「神からの見捨てられ不安」を抱いている人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」を抱く傾向がある。

神との親密性を回避する傾向がある人は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」を抱く傾向がある。

家族にキリスト者がいる環境で人格形成をした人は、家族にキリスト者がいない環境で人格形成をした人よりも甘えの心理が強い可能性がある。

父親との関係が全般的に良かったと認識している人は、「とらわれ」を抱く傾向がある。

母親との関係が良好であった人よりも、母親との関係が良好でなかった人のほうが「とらわれ」を抱く傾向がある。

父、母との関係が良かったと認識している人は、家族にキリスト者がいない環境で育った人よりも家族にキリスト者がいた環境で育った人のほうが甘えの心理が強い傾向がある。

神イメージが厳しい方向に変化したと認識している人は、「とらわれ」を抱く傾向がある。

7 神表象の変化

神表象が変化したと感じている人は、神表象があまり変化していないと感じている人よりも他者との親密性を保つ傾向がある。

神表象が急に変化したと感じている人は、神表象が徐々に変化したと感じている人より

も、神表象が親しいものに変化する傾向がある。

父から肯定的・養護的な養育態度で接してもらえなかったと認識している人は、神表象が急激に変化する傾向がある。母から養護的な養育態度で接してもらったと認識している人は、神表象がゆっくり変化する傾向がある。

神表象が変化するプロセスにおいて、神は人格的他者として意識される。また、プロセスそのものが意外な展開として認識される。

キリスト者になる経験と神表象が変化する経験は、パターンが多様である。

神表象の変化は、重大なことがらの後に起きることが多い。

キリスト者になる経験と神表象が変化した経験は時間的に重ならない。

神表象の変化は、「王、裁判官」から「あがない主」へ変化する段階と、「王、裁判官」から「父、牧者」へ変化する二つの段階がある。この二つの段階は、それぞれ別の機会に認識される。「創造者」はキリスト者になる前後にわたって認識されているが、神表象が生涯のどこかで変化した後にはあまり強調されず、「あがない主」と「父、牧者」が強い。

神表象が変化したときには、変化したのは神との距離感と関係であり、神の存在そのものは同じ存在として認識されている。

神表象の変化の結果、自己の再統合、無条件に受け入れられていることの体験的理解、自分のスタンスの確立、やっってもらっていることへの意識の方向の変化、他者や周囲の状況との関係の変化、人の評価からの解放が起きる。

8 神表象の四つのカテゴリー

日本人キリスト者が神表象をイメージするときには、厳しいイメージの「裁判官」、「王」、親しいイメージの「父」、「牧者」、赦しと関連のある「あがない主」、そして存在の根幹を意味する「創造者」の四つのカテゴリーでとらえている。

第二節 意義

本研究は、第一研究、第二研究および第八研究の結果から、Wesley 理論を背景に持つ日本人キリスト者がどのような様態で神表象を内在化させているかを実証したものと位置づけることができる。日本人キリスト者が神表象をイメージするときには、厳しいイメージの「裁判官」、「王」、親しいイメージの「父」、「牧者」、赦しと関連のある「あがない主」、

そして存在の根幹を意味する「創造者」の四つのカテゴリーでとらえていることが示された。なお、神表象を測定できる尺度構成から、父のイメージは、(1)否定的・律法的父性、(2)受容的・母性的父性、(3)理想的・社会的父性の三つのカテゴリーでとらえる必要があることが示唆された。

本研究は、第四研究および第八研究の結果から、欧米の先行研究で検討されて来た神表象の内在化のプロセスについて、日本人キリスト者を対象に展開したものである。神表象の内在化のプロセスについては、Rizzuto 理論を支持しているが、Rizzuto, A.の理論だけでは十分に説明できない側面も観察され、本論は Halevi-Spero, M.の理論に着目した。移行対象として神が内在化されるだけでなく、客観的な神表象が、理想的・神的表象として直接内在化されていることが示唆された。

本研究は、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、日本人の心理の中に「個」を意識することが希薄であるという土居（1997a）の指摘を実証したものである。日本人キリスト者は、神を肯定的にイメージできていながら、甘えたくても甘えられない、その甘えを素直に出せないままの状態であり、また「自分がない」状態、傷つきやすい自我の状態を抱え込んでいる姿であることが示された。日本人の心理の中に「個」の意識を持つことが希薄であるという土居（1997a）の指摘は実証された。成熟した民族性への成長の足がかりとして「個」の確立が求められるならば、神表象の再内在化とともに、「とらわれ」の意識に着目する必要があることが示唆された。

本研究は、第七研究の結果から、甘えと信頼は違うという土居の仮説を実証的に裏付けるものである。日本人キリスト者がイメージする神に甘える気持ち、居心地がよいと感じる感覚、神と一つとされたという用語によって表現される甘い感覚は、神への信頼とは異なるものであることが示唆された。

本研究は、第二研究、第四研究、第六研究、第八研究の結果を踏まえて、アタッチメント理論の中で四つの仮説が提示されていることを受けて、日本人キリスト者をどの仮説で説明できるかを検討したものと位置づけることができる。神表象の変化について日本人が体験するプロセスは従来の仮説で説明しにくいことから、「神表象の変化を認識し、生き方や関係性においても決して悪くなく、それでありながら内面的には『とらわれ』の状態にある」と定義される(5)「**日本的修正補償仮説**」が提唱された。

本研究は、第八研究の結果から、日本人キリスト者の中に形成される神表象と Rizzuto, A.らの提示した神表象との異同を実証的に確認し、「先行的恵み」や「共通恩恵」の概念を

神表象のレベルで確証したものと位置づけることができる。キリスト教的な背景のない中で人格形成をした調査協力者へのインタビューから、幼少期に内在化される神は、キリスト者になった後も同じ存在として認識されており、内在化される神表象は文化背景を越えたものであることが示唆された。

本研究は、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、「個」の確立のプロセスを神表象の変容の視点から提示したものである。神表象の変化以前の神表象には父性的なものがありながら、必ずしも「個」が確立されているわけではなく、「個」の確立は神表象の変化によるところが大きいことが示された。神表象が変化する経験を、「個」の確立に向けたキリスト者の成長のプロセスにおける大切な要素として位置づける必要がある。

本研究は、第五研究、第七研究および第八研究を踏まえて、神表象の変化にともなう「個」の確立の意味を実証的な角度から展開したものである。「個」の確立は、第一に、アイデンティティの確立を意味していた。神表象の変化によってもたらされた結果は、自分が他者との関係をどのように構築して行くか、自分が社会の中でどのように位置づけられて行くかということに収斂されていた。「個」の確立は、第二に、本来の自分への覚醒、すなわち人間が生来持つ「神のかたち」に回復されて行くことを意味していた。

本研究は、第八研究の結果を踏まえて、先行研究で指摘されてきた神概念と神表象の関係について、改めて両者の関係の位置づけを試みたものである。神概念と神表象に関する本研究の結果は、精神分析理論で説明が可能である。神表象は前意識と無意識、神概念は意識に対応すると考えられる。

本研究では、第二研究、第五研究、第六研究および第七研究の結果から、自己のあり方と神の内在化の様態に関連があること示したものである。健全な自己洞察のためには、「神という鏡に映し出されている自己」という自己理解が必要である。信仰の健全性は、その受け皿となる人間の理解を土台に置いたものでなければならないという Seamands, D.の視点は、本研究により支持された。

本研究では、第一研究から第八研究までの結果から、具体的な神表象を用いて神のイメージを測定することによって、より詳細な神表象の特定を行ったものと位置づけることができる。心理臨床やキリスト教教育の現場において、具体的に神概念を示すことができる可能性が提示された。

本研究は、第二研究、第五研究および第八研究の結果を踏まえて、キリスト教教育、特に幼少期においてどのような神表象が提示されるかということについて新しい視点を提示

したものと位置づけることができる。神表象は、厳しいイメージの「裁判官」、「王」、親しいイメージの「父」、「牧者」、赦しと関連のある「あがない主」、そして存在の根幹を意味する「創造者」の四つのカテゴリーでとらえていることが示された。教会教育の実践の場では、従来の「回心」に軸足を置いた「あがない主アプローチ」だけでなく、バランスのよい神表象の内在化のために「**父・牧者アプローチ**」を採用する必要があることが提起された。

本研究は、第四研究、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、プレ・エディパルな段階における宗教性と、健全な人格性の発達を伴ったキリスト者の信仰の違いを、神表象の角度から確証したものである。日本の文化背景では、信仰と「甘え」を取り違える可能性があり、「甘え」の心理をきっかけにしてさまざまな宗教現象に深く入って行く危うさが内包されているなど、マインドコントロールのメカニズムの一面が示唆された。

本研究は、第六研究、第七研究および第八研究の結果を踏まえて、キリスト教を背景にした人格形成のプロセスにおいて、「個」やアイデンティティの確立の観点から問題提起をしたものと位置づけることができる。Wesley 理論に基づく教会教育の環境では、「回心」が重要視されてきたが、人間の視点からの分析は十分に行われて来なかった。そのことで、皮肉なことに自立が妨げられる可能性も示唆された。より実効的な教育のためには、自立という観点を重視することが大切であることが示された。

本研究は、第四研究、第五研究および第八研究の結果を踏まえ、Wesley 理論を背景に持つ教会教育において、受け皿となる人間性の理解が重要であることを提示したものと位置づけることができる。Wesley 理論に基づく教会教育の現場では、教会教育のプログラム立案も、どちらかと言えば「回心」を目標に考えられてきた傾向がある。しかし、「回心」、「聖化」だけに軸足を置くのではなく、人間性や他者との関係を含む社会性が育っているだろうかということを慎重に見て行かなければならないということである。

本研究は、第八研究の結果を踏まえて、Wesley 理論の枠組みの中で、「**第 X の転機**」という概念を提出することによって、「回心」や「聖化」という視点だけでなく、神表象の変化がむしろ重要であることを示したものと位置づけることができる。内在化されている神表象の変化のパターンについて質的な分析を行ったところ、キリスト者になる経験と神表象が変化する経験は、パターンが極めて多様であることが観察された。神表象の変化は、人生のどの時期に経験するかについて特定できなかった。神表象の変化の経験は、転機でありながら、時期を特定しにくいという意味で、「回心」を「第一の転機」、「聖化」を「第

二の転機」と呼ぶことと対比させて、神表象が変化する経験を、「**第 X の転機**」と命名した。本研究の結果から、「回心」や「聖化」によって「個」の確立がなされるとは考えにくく、「回心」と「聖化」という従来の概念規定に限界が来ていることが推察された。本研究は、教会教育と人格形成における Wesley 理論の新しい展開を提示するものである。

本研究は、第八研究の結果を踏まえて、神表象の変化の内容と様態との関連で、キリスト教のあり方、特に「恵み」の概念の再評価が必要であることを示唆したものと位置づけることができる。牧会臨床の現場では、多くのキリスト者が完全主義者であるという指摘、教会が倫理道德的清さと正しさ、そして罪や罪意識を強調しすぎてきたため、キリスト者の中に強迫神経症的な自責の念や劣等感を生み出し、それがもとになって他者を裁く体質になってはいないかという指摘がなされてきたが、神表象の変化が無条件さの体験をもたらすという観点から、それらの指摘に対して一つの応答を提示したものである。

第三節 総括

本研究は、わが国において、キリスト者がどのような神表象を内在化させているかということに関して実証性のある検討を行うことで、その実態を把握し、神表象の変化の様態とメカニズムを解明することを目的としたものであった。また、教会におけるキリスト教教育、牧会心理臨床の現場で提起されている問題を視野に、キリスト者が内在化させている神表象が人間形成やキリスト教教育にどのような影響を与えるかについて総合的な考察を行い、教会教育の現場に資する知見を得ることを目指したものであった。

先行研究の文献を検討し、諸外国で 1970 年代から始まった神表象理論の系譜をたどった上で、日本人キリスト者という文化枠を対象を絞り、内在化されている神表象についての調査・分析を実施した。具体的な方法としては、神表象を測定するための日本語版の尺度を開発し、その尺度によって量的な検討を行った。さらに Wesley 理論の背景を持つキリスト者に対象を限定し、内在化させている神表象が変化するか、変化する場合にはどのような変化のプロセスを経るか、そしてその変化が、信仰や生き方にどのような影響を与えるかということについて、半構造化面接による質的検討を行った。

その結果、日本人キリスト者に内在化されている神表象は、基本的信頼感や自尊感情などの内面性、生き方などの社会性と関連があることが確認され、諸外国の研究結果をおおむね支持していた。神表象は、「創造者」、「あがない主」、「王、裁判官」、「父、牧者」の四

つのカテゴリーで内在化されていることが示唆された。神表象の変化が「個」の確立を促すものであることが示されたが、日本人に特有の甘えが神への信頼や「個」の確立を妨げている可能性があることが示唆された。また、神表象の内在化が人生の中でどのような意味を持つかということに関する従来の四つの仮説に加えて、第五の仮説「**日本的修正補償仮説**」が提唱された。神表象の変容について分析を行ったところ、聖書の神を知る前に内的に抱いていた神の存在が、キリスト者になって聖書を知った後の神の存在と同じであったことから、「先行的恵み」や「一般恩恵」の神学的概念が実証研究によって確認された。四つのカテゴリーの神表象の分析によって、心理臨床や教会教育の現場で、神概念を臨床的・教育的に提示することができる可能性が示され、特に、神表象を内在化させてゆく受け皿となる人の人間性やその人の発達のプロセスを考慮した教会教育の実践を目ざして、「回心」が焦点化される「あがない主アプローチ」よりは、「**父・牧者アプローチ**」を採用する必要性が提起された。さらに、「回心」と「聖化」に焦点化した信仰理解よりも、生涯のどこかの局面で神表象が変化することが、内面的精神性、外面的社会性、対人関係の構築、信仰のあり方にとって重要な意味を持つ可能性があることが示唆され、「**第 X の転機**」の意義が提唱された。また、神表象の変化によって、神が人間に働きかけるという方向性をもったキリスト教理解に至る可能性があり、「恵み」の概念を再評価する必要性が提起された。

第四節 課題

1 最終的研究射程としての神表象の神学的検討

本研究は、Wesley 理論に基づく教会教育に限定したものであり、構成概念を設定する過程で、神表象の「操作的定義」を行った研究である。神表象についての研究は神学的・宗教哲学的アプローチで数多くなされており、実証的・心理学的検討に比較して歴史もはるかに長い。研究手法としては、神表象の定義について神学的・宗教哲学的な検討を行った上で、実証的・心理学的検討に移行するのが理想的であると考えられるが、実証研究に応用できるような形で神という概念規定を設定することはきわめて困難である。この意味で、本研究は神表象研究の端緒に過ぎない。

本研究を端緒にした神表象理論の最終的な研究射程は、神学的研究法による検討を含めて、神表象研究全体におよぶことを想定したものである。本研究の成果は、神学的検討を

綿密に行った段階で、初めて神表象研究としての価値を高めることができるものであると想定される。本研究で扱わなかった神学的命題の中でも、「神のかたち」(imago Dei) についての神学的検討は必須であると考えられる。

2 実験計画全体の精緻化

本研究では、研究のフィールドが国内に制限されたため、実験計画が限定された。本来ならば、対照群を設定し、日本人の心理と諸外国の人の心理の比較を行う横断的研究に加え、「個」の認識の変化のプロセスを追う縦断的研究も試みるべきである。

また本研究は、実態調査を目的とした量的研究の後に、神表象の変化のプロセスを追うために質的研究を計画した。調査協力者の多くが、自分の神表象が変化したという認識を持っている人であったことは否定できず、肯定的な語りをしてくれる人に偏っている可能性もある。神表象が変化しない人や、神表象が変化した、それを語ることに否定的な人は分析に含まれていないため、肯定的影響のみに限定された理論である可能性がある。より包括的な理論構築のためには、今後、実験計画をさらに精緻化する必要がある。

本研究は、実験計画全体が日本のキリスト教界全体の調査と実態の把握から始まり、神表象がより明確化されやすいプロテスタント系・メソジスト系のキリスト者を対象とした調査・分析へと移行して行く形をとった。フィールドは原則としてキリスト者を対象としており、教会が自発的に集まっている集団である性質上、宗派別にサンプルサイズを揃えることが困難であった。今後、結果の信頼性を上げるために、宗派別のサンプリングをより厳密に行う必要があると考えられる。また、より包括的な理論構成のためには、臨床事例研究なども有意義であると思われる。

3 実証的検討と神学的検討の接点

本研究は、諸外国で行われた神表象理論の研究を受けて、日本という一文化形態を対象に実施したキリスト教教育における実証的検討である。実証的検討でありながら、聖書の中に語られている神を前提としている。

信仰と科学の間の緊張関係を背景として、心理学と神学は積極的な対話を行ってきたわけではない。神表象理論の実証的検討と神学的検討の両者を意識した Halevi-Spero, M. (1992) の研究などがあるものの、極めて限定的なものに過ぎない。今後、神学が心理学の表記に埋没してしまうことを恐れるあまり対話を控えるという姿勢ではなく、実証的探

求を行うことによって神学的探求の深まりが期待できる可能性もある。

本研究は、神表象理論という心理学と神学のいずれの表記も可能である研究分野であり、心理学的探求と神学的探求の接点についての考察を期待したが、十分な議論ができる段階に至っているとは言えず、両者の対話という観点からすればまさに端緒に過ぎない。今後、さらに接点を探る研究を行う必要があると考えられる。

4 父性性の心理学的検討

本研究では、最初の段階で神表象を測定できる日本語版の尺度開発を試みたが、否定的・律法的父性、理想的・社会的父性、受容的・母性的父性の三つのカテゴリーの中で、理想的・社会的父性が質問項目に載りにくかった。また、否定的・律法的父性は、「父」の神表象ではなく、その内容から「王、裁判官」の神表象として表現されていた。本研究における尺度開発は否定的・律法的父性の測定が可能になったという意味で第一歩だが、今後さらに父性性を測定する尺度の精緻化が求められる。

さらに、本研究の結果は、「裁判官」や「王」のような否定的・律法的な父性性が強調される反面、健全な父性性が欠如していることが示唆されたが、そのことの背景に何があるかについては十分な検討ができていない。方法論の問題の可能性もあり、研究者自身の心理的背景が影響していることも可能性として否定できない。父性性の定義を含めて、心理学的研究法に基づいた包括的な検討が求められる。

5 神表象の表象論研究

本研究では神表象をテーマとして取りあげ、Freud 理論から始めて、Freud, S.を超えようとした Rizzuto 理論、そして実証性を高めるために取り入れられたアタッチメント理論の系譜をたどった。しかし表象論研究・象徴研究は、その他の理論背景でも行われており、Jung の分析心理学を始めとして一つの流れを構成している。ところが、神表象理論の歴史は、その理論背景として Jung 理論に焦点を当ててこなかった。神表象研究の初期の舞台がアメリカであったことも一つの背景的要因である可能性がある。より包括的な理論構築のためには、先行研究に載らなかった理論を背景にした研究が求められる。

6 日本人論の視点からの神表象の検討

本研究は、研究を開始した当初、キリスト者であるかないかにかかわらず、内在化させ

ている神表象を測定できる尺度開発を試みた。しかし、質問紙の質問項目がキリスト者には理解できるものであっても、キリスト者ではない調査協力者には回答しにくいものであったようで、かなりが未記入のまま提出された。

日本人一般の神概念については、宗教学や宗教心理学においてさまざまな検討がなされているが、実証的な研究の場合、日本人全体を同じ枠の中にとらえて研究することはきわめて難しい。キリスト教の神概念が、絶対他者としての神であるのに対し、日本的神概念は汎神論的であることがその理由の一つであろう。杉山（2011）は、日本では宗教性を測定する尺度を作るのが難しいと述べている。絶対他者としての神、汎神論的の神の両方を含むことができる研究法の切り口はいまだ見いだせていない。今後の検討課題である。

7 神表象理論に基づく心理療法のモデルの構築

本研究は、諸外国において研究されてきた神表象理論を、日本人キリスト者を対象に検討したものである。その目的の一つは、わが国におけるキリスト教教育のあり方やキリスト者を対象とした心理療法に何らかの貢献ができるのではないかとということにあった。特に心理療法の分野において、諸外国ではさまざまな心理学の理論に神表象理論の知見を取り込み、心理療法のモデル構築が試みられているが（Moriarty et al., 2007）、わが国においては未開拓の分野である。本研究で八つの神表象を研究に取り入れたことによって、神表象理論を教会教育や心理療法に活かすことができる一つの可能性が示唆された。そのためには、GISJの質問項目の精査とGISJの精緻化が必要であると考えられる。

文献

- 相澤 一 (2009) . 宗教と心理学の対話——人間精神および健康の神学的意味 訳者あとがき 教文館.
- Bartholomew, K., Horowitz, L. M. (1991) . Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality & Social Psychology*, **61**(2), 226-244.
- Beck, R. & McDonald, A. (2004) . Attachment to God: The attachment to God inventory, tests of working model correspondence, and an exploration of faith group differences. *Journal of Psychology and Theology*, **32**, 2, 92-103.
- Benson, P. & Spilka, B. (1973) . God image as a function of self-esteem and locus of control. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **12**, 297-310.
- Birky, I. T. & Ball, S. (1987) . Parental trait influence on God as an object representation. *Journal of Psychology*, **122**, 133-137.
- Bowlby, J. (1969) . *Attachment and loss. Vol.1 attachment*. London: Tavistock Institute of Human Relations. (黒田実郎・大羽 夔・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (1976) . 母子関係の理論第一巻・愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowman, E. S., Coons, P. M., Jones, R. S., & Oldstrom, M. (1987) . Religious psychodynamics in multiple personalities: Suggestions for treatment. *American Journal of Psychotherapy*, **41**, 542-554.
- Cheston, S. E., Piedmont, R. L., Eanes, B., & Patrice, L. (2003) . Changes in clients' images of God over the course of outpatient therapy. *Counseling and Values*, **47**, 96-108.
- Coppedge, A. (1987) . *John Wesley in Theological Debate*. Wilmore: Wesley Heritage Press.
- Coppedge, A. (1988) . *The holiness of God*. TS.
- Coppedge, A. (2001) . *Portraits of God: A biblical theology of holiness*. Illinois: InterVarsity Press.
- Davis, E. B. (2010) . *Authenticity, inauthenticity, attachment, and God-image tendencies among adult evangelical Protestant Christians* (Doctoral dissertation).

- Retrieved from <http://www.drwarddavis.com/resources.html>.
- Davis, E. B., Moriarty, G. L., & Mauch, J. C. (2012) . God images and God concepts: Difinitions, development, and dynamics. *Psychology of Religion and Spirituality*. Advance online publication. doi: 10.1037/a0029289.
- Dickie, J. R., Eshleman, A. K., Merasco, D. M., Shepard, A., Vander Wilt, M., & Johnson, M. (1997) . Parent-child relationships and children's images of God. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **36**(1), 25-43.
- Dunning, H. R. (1988) . *Grace, faith, and holiness—A wesleyan systematic theology*. Kansas City: Beacon Hill Press of Kansas City.
- 土居健郎 (1992) . 信仰と「甘え」〈増補版〉春秋社.
- 土居健郎 (1994) . 日常語の精神医学 医学書院.
- 土居健郎 (1997a) . 「甘え」の構造 弘文堂.
- 土居健郎 (1997b) . 聖書と「甘え」 PHP新書.
- 土居健郎 (1999) . 「甘え」理論と精神分析療法 金剛出版.
- 土居健郎 (2001) . 続「甘え」の構造 弘文堂.
- 土居健郎 (2009) . 表と裏 弘文堂.
- 遠藤周作 (2010) . 神と私——人生の真実を求めて. (山折哲雄 (監) 朝日文庫新刊)
- 遠藤利彦 (2013) . 性的成熟とアイデンティティの模索. 現代心理学入門2 発達心理学 岩波書店 pp.111～131.
- Erikson, E. (1959) . *Identity and the life cycle*. New York: Norton. (西平 直・中島由恵 (訳) (2011) . アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Exline, J. J., Yali, A. M., & Sanderson, W. C. (2000) . Guilt, discord and alienation: The role of religious strain in depression and suicidality. *Journal of Clinical Psychology*, **56**, 1481-1496.
- Fowler, J. (1981) . *Stages of faith: The psychology of human development and the quest for meaning*. New York : HarperOne.
- Fraley, R. C., Waller, N. G., & Brennan, K. A. (2000) . An item response theory analysis of self-report measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**(2), 350-365.
- Francis, L. J., Gibson, H. M., & Robbins, M. (2001) . God images and self-worth among

- adolescents in Scotland. *Mental Health, Religion & Culture*, **4**, 103-108.
- Freud, S (1927) . 幻想の未来/文化への不満. (中山 元 (訳) (2007) 光文社)
- Freud, S (1938) . モーセと一神教. (渡辺哲夫 (訳) (2011) 筑摩書房)
- Freud, S (1986) . *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud*, vol.13, The Hogarth Press.
- Freud, S (1986) . *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud*, vol.22, The Hogarth Press. (懸田克躬・高橋義孝 (訳) (1987) フロイト著作集・第一巻 人文書院)
- Freud, S (1987) . フロイト著作集9 小此木啓吾 (訳) 人文書院.
- Freud, S (2010) . フロイト全集13 道旗泰三・立木康介・福田覚・渡辺哲夫 (訳) 岩波書店.
- 深町正信 (1999) . ジョン・ウェスレーと日曜学校運動 青山学院大学キリスト教文化研究センター (編) ジョン・ウェスレーと教育 ヨルダン者 pp.147~180.
- 布施裕二 (2005) . フロイトは何を遺したかーフロイトの復権(1) 宮崎県立看護大学研究紀要, **5**(1), 1-5.
- 布施裕二 (2007) . フロイトは何を遺したかーフロイトの復権(3) 宮崎県立看護大学研究紀要, **7**(1), 1-12.
- Gilligan, C. (1982) . *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge: Harvard University Press (岩男寿美子 (監) (1986) もうひとつの声 川島書房)
- Glaser, B. G. & Strauss, A. L. (1967) . *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine Publishing Company. (後藤 隆・大出晴江・水野節夫 (訳) (1996) データ対話型理論の発見: 調査からいかに理論をうみだすか 新曜社)
- Gorsuch, R. L. (1968) . The conceptualization of God as seen in adjective ratings. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **7**, 56-64.
- 神門しのぶ (2013) . アウグスティヌスの教育の概念 教共社.
- Granqvist, P. (1998) . Religiousness and perceived childhood attachment: On the question of compensation or correspondence. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **37**(2), 350-367.

- Granqvist, P. (2003) Attachment theory and religious conversions: A review and a resolution of the classic and contemporary paradigm chasm. *Review of Religious Research*, **45**(2), 172-187.
- Granqvist, P. (2006) On the relation between secular and divine relationships: an emerging attachment perspective and a critique of the “depth” approaches. *The International Journal for The Psychology of Religion*, **16**(1), 1-18.
- Granqvist, P. & Hafekull, B. (1999) . Religiousness and perceived childhood attachment: Profiling socialized correspondence and emotional compensation. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **36**(2), 254-273.
- Granqvist, P. & Kirkpatrick, L. A. (2004) Religious conversion and perceived childhood attachment: A meta-analysis. *The International Journal for The Psychology of Religion*, **14**(4), 223-250.
- Granqvist, P., Mikulincer, M., Gewirtz, V., & Shaver, R. P. (2012) Experimental findings on God as an attachment figure: Normative processes and moderating effects of internal working models. *Journal of Personality and Social Psychology*, **103**, 5, 804-818.
- Grider, J. K. (1994) . *A wesleyan holiness theology*. Kansas City: Beacon Hill Press of Kansas City.
- Grimes, C. (2007) . God image research: A literature review. *God image handbook for spiritual counseling and psychotherapy, research, theory, and practice*. Moriarty, G. L. & Hoffman, L. (eds) , New York: The Haworth Pastoral Press, pp.11-32.
- Hall T. W. (2004) . Christian spirituality and mental health: A relational spirituality paradigm for empirical research. *Journal of Psychology and Christianity*, **23**(1), 66-81.
- Hall, T. W., Fujikawa, A., Halcrow, S. R., & Hill, P. C. (2009) . Attachment to God and implicit spirituality: Clarifying correspondence and compensation models. *Journal of Psychology and Theology*, **37**(4), 227-242.
- Hertel, B. R. & Donahue, M. J. (1995) . Parental influences on God images among children: Testing durkheim’s metaphoric parallelism. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **34**(2), 186-199.

- 平林孝裕・リアナ トルファシュ (2005) . キリスト教 棚次正和・山中 弘 (編) 宗
 教学入門 ミネルヴァ書房 pp.27-47.
- Hoffman, L. (2004b) . *Cultural constructs of the God image and God
 concept: Implications for culture, psychology, and religion*. Paper presented at the
 annual meeting of the Society for the Scientific Study of Religion, Kansas City, MO.
- Hoffman, L., Grimes, C. S. M., & Acoba, R. (2005) . *Research on the experience of God:
 Rethinking epistemological assumptions*. Paper presented at the Society for the
 Scientific Study of Religion Annual Meeting, Rochester, NY.
- Hoffman, L., Grimes, C. S. M., & Mitchell, M. (2004a) . *Transcendence, suffering, and
 psychotherapy*. Presented at the International Network on Personal Meaning
 (INPM) Conference in Vancouver, British Columbia, Canada.
- 保呂篤彦 (2005) . 絶対者と人間 棚次正和・山中 弘 (編) 宗教学入門 ミネルヴァ
 書房 pp.170-172.
- 板津裕己 (1992) . 生き方の研究——尺度構成と自己態度との関わりについて カウンセ
 リング研究, **55**, 85-93.
- 伊藤啓一 (1985) . コールバーグ (L.Kohlberg) の道徳教育論 道徳教育学論集, **4**, 1-13.
- 伊藤 悟 (2012) . ファウラーの信仰発達理論とその周辺 キリスト教と文化：紀要：青
 山学院大学宗教主任研究叢書, **28**, 183-199.
- ジャンセン ウェイン (2003) . 牧会カウンセリングと三位一体 神学, **65**, 70-83.
- Jansen, J., De Hart, J., & Gerardts, M. (1994) . Images of God in adolescence. *The
 International Journal for the Psychology of Religion*, **4**, 105-121.
- Johnson, W. B., Eastburg, & Mark C. (1992) . God, parent and self concepts in abused
 and nonabused children. *Journal of Psychology and Christianity*, **11**, 235-243.
- Jolley, J. C. & Taulbee, S. J. (1986) . Assessing perception of self and God: Comparison
 of prisoners and normals. *Psychological Reports*, **59**, 1139-1146.
- Jones, E. (1961) . *The life and work of Sigmund Freud*. Basic Books Publishing Co.,
 Inc. (竹友保彦、藤井治彦 (訳) (1982) フロイトの生涯 紀伊國屋書店)
- Jones, J. W. (1991) . *Contemporary psychoanalysis and religion: Transference and
 transcendence*. New Haven and London: Yale University Press. (渡辺 学 (訳) (1997)
 聖なるものの精神分析 玉川大学出版部)

- Jones, J. W. (2007) . Psychodynamic theories of the evolution of the god image. *God image handbook for spiritual counseling and psychotherapy: research, theory, and practice*. Moriarty, G. L. & Hoffman, L. (eds) , New York: The Haworth Pastoral Press, pp.33-55.
- Jonker, H. S., Eurelings-Bontekoe, E. H. M., Verhagen, P., & Zock, H. (2002) . Image of God and personality pathology: An exploratory study among psychiatric patients. *Mental health, religion & culture*, **5**, 55-71.
- Jonker, H. S., Eurelings-Bontekoe, E. H. M., Zock, H., & Jonker, E. (2008) . Development and validation of the Dutch Questionnaire God Image: Effects of mental health and religious culture. *Mental health, religion & culture*, **11**(5), 501-515.
- 狩野力八郎 (2009) . 「Dr. Ana-Maria Rizzuto講演会」について 精神分析研究, **53**(2) : 213-214.
- 葛西賢太 (1994) . リットーの精神分析的信仰形成論——フロイト宗教論のもう一つの可能性 東京大学宗教学年報, **XI**, **3**, 30, 49-63.
- 加藤 厚 (1983) . 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, **31**, 292-302.
- 加藤和生 (1998) . Bartholomewらの4分類愛着スタイル尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, **7**, 41-50.
- Kaufman, G. D. (1981) . *The theological imagination: Constructing the concept of God*. Philadelphia: Westminster.
- Kawamura, Yorihiro (1993) . *John Wesley's doctrine of God and its impact on his theology and ministry*. Wilmore, Asbury Theological Seminary.
- 河村従彦 (1999) . 聖潔と人間性の心理学的一考察——確かな霊的経験としての自己統合 きよめと人間性 宣教研究委員会編 イマヌエル聖宣神学院 pp.280-317.
- 河村従彦 (2005) . クリスチャン・ホームで育った者として——自立のねじれ現象と信仰継承 声 イマヌエル総合伝道団宣教研究委員会 pp.99-132.
- 河村従彦 (2010) . 自尊感情, 基本的信頼感, 生き方と絶対他者 (神) イメージの関連——神イメージ尺度の開発と相互の影響の検討. ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科臨床心理学専攻修士論文.

- 河村従彦 (2013a) . 基本的信頼感、自尊感情、生き方と神イメージの相互の影響の検討. キリスト教教育論集, **21**, 41-54.
- 河村従彦 (2013b) . 神さまイメージ豊かさ再発見 イムマヌエル出版事業部.
- 木村勝彦 (2005) . 超越と内在 棚次正和・山中 弘 (編) . 宗教学入門 ミネルヴァ書房 pp.166-167.
- 木下康仁 (2003) . グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂.
- 木下康仁 (2007a) . 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法. 富山大学看護学会誌, **6**(2), 1-10.
- 木下康仁 (2007b) . ライブ講義M-GTA: 実践的質的研究法, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂.
- Kirkpatrick, L. A. (1992) . An attachment-theory approach to the psychology of religion. *The International Journal for the Psychology of Religion*, **2**(1), 3-28.
- Kirkpatrick, L. A. (1997) . A longitudinal study of changes in religious belief as a function of individual differences in adult attachment style. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **36**, 207-217.
- Kirkpatrick, L. & Shaver, P. (1990) . Attachment theory and religion: Childhood attachments, religious beliefs, and conversion. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **29**, 315-334.
- Krejci, M. J. (1998) . Gender comparison of God schemas: A multidimensional scaling analysis. *The International Journal for the Psychology of Religion*, **8**, 57-66.
- Kunkel, M. A., Cook, S., Meshel, D. S., Daughtry, D., & Hauenstein, A. (1999) . God images: A concept map. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **38**, 193-202.
- Lawrence, R. T. (1997) . Measuring the image of God: The God image inventory and the God image scales. *Journal of Psychology and Theology*, **25**, 2, 214-226.
- Leavy, S. (1988) . *In the image of God: A psychoanalyst's view*. New Haven: Yale University Press. (渡辺 学 (訳) (1995) 精神分析と宗教 玉川大学出版部)
- Lee, C. & Early, A. (2000) . Religiosity and family value: Correlates of God-image in a protestant sample. *Journal of Psychology and Theology*, **28**, 229-239.
- Lotufo, Jr., Z. (2012) . *Cruel God, kind God: How images of God shape belief, attitude, and outlook*. Santa Barbara: Praeger.

- Marcia, J. E. (1966) . Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 5, 551-558.
- 松島公望 (2005) . 日本人クリスチャンにおける宗教意識尺度の開発—プロテスタント教会一教派 (ホーリネス系教会) を対象にして 学校教育研究論集, **11**, 13-28.
- 松島公望 (2006) . キリスト教における「宗教性」の発達および援助行動との関連：キリスト教主義学校生徒を中心にして 発達心理学研究, **17**, 3, 282-292.
- 松島公望, 宮下一博 (2008) . ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「キリスト教における宗教性」発達モデルの構成 千葉大学教育学部研究紀要, **56**, 31-45.
- 松島公望, 宮下一博 (2009) . ホーリネス系教会に関わる日本人成人における「キリスト教における宗教性」発達モデルの構成 千葉大学教育学部研究紀要, **57**, 9-23.
- 松島公望, 宮下一博 (2010) . ホーリネス系教会に関わる日本人青年 (青年期後期) における「キリスト教における宗教性」発達モデルの構成 千葉大学教育学部研究紀要, **58**, 15-27.
- 松島公望 (2011) . 宗教心理学の歴史：戦後における宗教心理学的研究の動向——宗教意識調査を中心に. 金児暁嗣 (監) 宗教心理学概論 ナカニシヤ出版 pp.36-55.
- 松本 滋 (1998) . 父性的宗教母性的宗教 東京大学出版会.
- McDonald, A., Beck, R., Allison, S., & Norsworthy, L. (2005) . Attachment to God and parents: Testing the correspondence vs. compensation hypotheses. *Journal of Psychology & Christianity*, **24**, 21-28.
- Meissner, W. W. (1984) . *Psychoanalysis and religious experience*. New Haven: Yale University Press.
- 宮下一博 (1987) . Rasmussenの自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, **35**, 253-258.
- Moriarty, G. L. & Hoffman, L. (eds.) (2007) . *God image handbook: For spiritual counseling and psychotherapy, research, theory, and practice*. New York, The Haworth Pastoral Press.
- Morris, C. (1983) . 個人の発見. 古田 暁 (訳) 日本基督教団出版局.
- 無藤清子 (1979) . 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, **27**, 178-187.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004a) . 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心

- 理学研究. **75**, 154-159.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004b) . 一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究. **5**, 19-27.
- 日本聖書刊行会 (2003) . 聖書：新改訳、第三版.
- 西脇 良 (2011) . 子どもと宗教. 金児暁嗣 (監) 宗教心理学概論 ナカニシヤ出版 pp.87-102.
- Nelsen, H. M., Cheek, Jr., Neil H., & Au, P. (1985) . Gender differences in images of God. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **24**(4), 396-402.
- 小川雅美 (1991) . PBI(Parental Bonding Instrument)日本語版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学, **6**(10), 1193-1201.
- 奥田和弘 (1990) . キリスト教教育を考える―「共育」を求めて 日本基督教団出版局.
- 大森秀子 (1999) . アメリカにおけるメソジスト監督教会日曜学校運動 青山学院大学キリスト教文化研究センター (編) ジョン・ウェスレーと教育 ヨルダン者 pp.181～231.
- Outler, A. C. (1984) . The sermons in chronological sequence. *The bicentennial edition of the works of John Wesley*, 収録, (ed.) Outler A. C. Nashville: Abingdon Press.
- Parker, G., Tuping, H., & Brown, L. B. (1979) . A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.
- Phillips, J. B. (1961) . *Your God is too small*. New York: Macmillan Publishing Company.
- Pruyser, P. W. (1974) . *The ministers as diagnostician: personal problems in pastoral perspective*. Westminster Press (斎藤 武・東方敬信 (訳) (2004) 牧師による診断すぐ書房) .
- Rizzuto, A. (1970) . *Critique of the contemporary literature in the scientific study of religion*. Paper presented at the annual meeting of the Society for the Scientific Study of Religion, New York, NY.
- Rizzuto, A. (1979) . *The birth of the living God*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Rizzuto, A. (2006) . Discussion of Granqvist's article "on the relation between secular and divine relationships: an emerging attachment perspective and a critique of the

- ‘depth’ approaches.” *The International Journal for The Psychology of Religion*, **16**(1), 19-28.
- Rizzuto, A. (2009) . Why did Freud reject God: A psychodynamic interpretation. (福本 修 (訳) , 講演会記録「フロイトはなぜ神を拒絶したか——精神力動的な一解釈」) 精神文政研究, **53**(2), 213-214.
- Roof, W. C. & Roof, J. (1984) . Review of the polls: Images of God among Americans. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **23**, 201-205.
- Rosenberg, M. (1965) . *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- オモクレイグヒル滋子 (2008) . 実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ：現象をとらえる 新曜社.
- 坂口ふみ (1996) . 〈個〉の誕生：キリスト教教理をつくった人々 岩波書店.
- 桜井茂男 (2000) . ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, **12**, 65-71.
- サトウタツヤ (2007) . 研究デザインと倫理 やまだようこ (編) 質的心理学の方法：語りをきく 新曜社 pp.16-37.
- Seamands, D. (1981) . *Healing for damaged emotions – Recovering from the memories that cause our pain*. Wheaton: Victor Books.
- Seamands, D. (1985) . *Healing of memories*. Wheaton: Victor Books.
- Seamands, D. (1988) . *Healing grace – Finding freedom from the performance trap*. Wheaton: Victor Books. (河村従彦 (訳) (2004) 恵みを知らないクリスチャン イムマヌエル綜合伝道団出版局)
- Seamands, D. (1993) . *Putting away childish things – Change old behavior patterns that keep you from growing up in Christ*. Colorado Springs: Cook Communications Ministries. (河村従彦 (訳) (2002) 子供服を着たクリスチャン イムマヌエル綜合伝道団出版局)
- 庄司順一・奥山眞紀子・久保田まり (2008) . アタッチメント：子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐって 明石書店.
- Spero, M. H. (1992) . *Religious objects as psychological structures: A critical integration of object relations theory, psychotherapy, and judaism*. Chicago: University of

Chicago Press.

Spilka, B., Addison, J., & Rosensohn, M. (1975) . Parents, self, and God: A test of competing theories of individual-religion relationships. *Review of Religious Research*, **16**, 154-165.

菅村玄二 (2007) . 人間科学の意味するところ 西條剛央・菅村玄二・斎藤清二・京極 真・荒川 歩・松嶋秀明・黒須正明・無藤 隆・荘島宏二郎・山森光陽・鈴木 平・岡本祐子・清水 武 (編著) エマージェンス人間科学—理論・方法・実践とそこから 北大路書房 pp.2~14.

杉山幸子 (2011) . 青年と宗教. 金児暁嗣 (監) 宗教心理学概論 ナカニシヤ出版 pp.105-119.

鑪幹八郎 (2002) . 鑪幹八郎著作集 I ・アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版.

玉瀬耕治・相原和雄 (2004) . 大学生の「甘え」と特性5因子の関係 教育実践総合センター研究紀要, **(13)**, 23-31.

玉瀬耕治・今村友美 (2006) . 「甘え」と愛着 (アタッチメント) 教育実践総合センター研究紀要, **(15)**, 39-46.

棚瀬佐知子 (1996) . 日本におけるキリスト教教育——「日本的自己」と三位一体の神との出会い カトリック女子教育研究 カトリック女子教育研究所.

谷 冬彦 (1996) . 基本的信頼感尺度の作成 日本心理学会第60回大会発表論文集, 310.

谷 冬彦 (1998) . 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, **9**, 35-44.

谷 冬彦 (1999) . 青年期における「甘え」の構造 相模女子大学紀要, A. 人文・社会系, **63A**, 1-8.

Tillich, P. (1949) . Psychotherapy and the christian interpretation of human nature. In Perry LeFerve(ed.) *The Meaning of Health: Essays in Existentialism, Pshychoanalysis, and Religion*, Chicago: Exploration Press, 1984. (相澤 一 (訳) (2009)「精神療法とキリスト教的な人間本性の解釈」 宗教と心理学の対話 教文館)

Tillich, P. (1958) . Theology and counseling. In Perry LeFerve(ed.) *The Meaning of Health: Essays in Existentialism, Pshychoanalysis, and Religion*, Chicago: Exploration Press, 1984. (相澤 一 (訳) (2009)「牧会的ケアの神学」 宗教と心理学の対話 教文館)

- Tillich, P. (1960). The impact of pastoral psychology on theological thought. In Perry LeFerve(ed.) *The Meaning of Health: Essays in Existentialism, Psychoanalysis, and Religion*, Chicago: Exploration Press, 1984. (相澤 一 (訳) (2009) 「神学思想に対する牧会心理学の影響」 宗教と心理学の対話 教文館) .
- Tillich, P. (1961). The Meaning of Health. *The Meaning of Health: Essays in Existentialism, Psychoanalysis, and Religion*, 収録, (ed.) Perry LeFerve. Chicago: Exploration Press, 1984. (相澤 一 (訳) (2009) 「健康の意味」 宗教と心理学の対話 教文館)
- 戸田弘二 (1988) . 内的作業モデル尺度 堀 洋道 (監) (2003) 心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる (対人関係・価値観) サイエンス社 pp.109-113.
- 徳田治子 (2007) . 半構造化インタビュー やまだようこ (編) 質的心理学の方法：語りをきく 新曜社 pp.100-113.
- 徳田幸雄 (2005) . 宗教学的回心研究—新島襄・清沢満之・内村鑑三・高山樗牛 未来社.
- 梅本 守 (1986) . フロイトの心的装置とその神経気質に関する二、三の考察 人文研究, **38**(6), 491-507.
- Vergote, A., Tamayo, A., Pasquali, L., Bonami, M., Pattyn, M., & Custers, A. (1969) . A concept of God and parental images. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **8**, 79-83.
- ワイレー・カルバートソン (1977) . キリスト教神学概論 日本ウェスレー出版協会.
- 渡辺 学 (1997) . 訳者解説——宗教の「関係論的精神分析」の試みをめぐって Jones, J. W 聖なるものの精神分析 玉川大学出版部 pp.221-238.
- 渡邊芳之 (1995) . 心理学における構成概念と説明 北海道医療大学看護福祉学部紀要, **(2)**, 81-87.
- 渡邊芳之 (1996) . 心理学的測定と構成概念 北海道医療大学看護福祉学部紀要, **(3)**, 125-132.
- Wesley, J. *The Works of John Wesley: Third Edition*. Grand Rapids: Baker Book House, 1979.
- Wesley, J. *The bicentennial edition of the works of John Wesley*. Albert C. Outler (ed.) . Nashville: Abingdon Press, 1984.
- Wesley, J. 「標準ウェスレイ日記Ⅰ 1735～1743」 (山口徳夫 (訳) (1984) イムマヌエ

- ル総合伝道団)
- Wesley, J. ジョン・ウェスレー説教集53 (上) (竿代忠一・勝間田充夫・藤本 満 (訳) (1995) イムヌエル総合伝道団教学局)
- Wesley, J. ジョン・ウェスレー説教集53 (中) (竿代信和・河村従彦・藤本 満 (訳) (1996) イムヌエル総合伝道団教学局)
- Wesley, J. ジョン・ウェスレー説教集53 (下) (勝間田充夫・河村従彦・藤本 満 (訳) (1997) イムヌエル総合伝道団教学局)
- Wesley, J. 「キリスト者の完全」(藤本 満 (訳) (2006) イムヌエル総合伝道団出版事業部)
- Winnicott, D. W. (1971) . *Playing and reality*. London: Tavistock Publication. (橋本雅雄 (訳) (1979) . 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)
- 山田一成 (2009a) . 社会調査と社会認識 佐藤健二・山田一成 (編) 社会調査論 八千代出版 pp.111-133.
- 山田一成 (2009b) . 仮説が生まれるとき 佐藤健二・山田一成 (編) 社会調査論 八千代出版 pp.153-174.
- やまだようこ (2007) . 質的心理学とは やまだようこ (編) 質的心理学の方法：語り をきく 新曜社 pp.2-15.
- 山我哲雄 (2013) . 一神教の起源——旧約聖書の「神」はどこから来たのか 筑摩書房.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982) . 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 山中 弘 (1990) . イギリス・メソディズム研究 ヨルダン社.
- 山内一郎 (2005) . メソジズムの源流 キリスト新聞社.

あとがき・謝辞

本論文は、ご専門やお立場の異なる先生方のご指導をいただいて書き上げることができたものである。どの方が欠けてもまとめることはできなかったと痛感している。

信仰と心理学にまたがる領域を対象とした研究テーマの特殊性から、わが国において研究を継続することが困難であると思われた中で、吉岡良昌先生が論文の主旨導教授を引き受けてくださった。先生は、教育学のご専門だけではなく、牧師職の視点から、論文の要点と思想について豊かで深い方向性を示し、論点に必要な文献を折々に提示してくださった。第一文献を読み込んだゼミでは、準備不足の学生を忍耐深くご指導くださり、研究姿勢の甘さを正される思いであった。先生のお助けなしに本研究はなしえなかったと実感している。心からの感謝を表したい。

研究法については博士後期課程に入学が許された当初は見通しが全く甘く、最初から躓いてしまった。そのような折、人文科学のご専門の視点から心理学の実証的研究法について方向付けを示し、統計処理や尺度作成の考え方についても適切なご指導くださった副指導教授の久保田まり先生に心からの感謝を表したい。先生は特にご専門のアタッチメント理論と、結論の導き方について、拙論の弱点を補強してくださった。

小坂和子先生は、精神分析学の角度からだけでなく、論文構成や心理学的研究法の角度から豊かなご示唆をくださり、論の組み立ての弱点を補強してくださった。心からの感謝を表したい。その他、本研究に関連する思想背景や研究法についてアドバイスくださったすべての先生方、また拙論を査読してくださった先生方に心からの感謝を表したい。

質問紙調査に暖かく協力してくださった牧師・大学の先生方、質問紙に回答してくださったお一人おひとり、面接への協力を申し出て、そのために貴重な時間を割いてくださった調査協力者のお一人おひとりに心からの感謝を申し上げたい。

本研究は、アメリカ留学時にご指導いただいたAllan Coppedge先生が提唱された「神の役割理論」を構成概念として使わせていただいた。貴重な概念を提供してくださった先生に心からの感謝を表したい。

本職を持ちながらも学ぶことを許し、励ましてくださった教団の先生方、そして忍耐をもって見守ってくれた家族に心からの感謝を表したい。

Appendix

1 調査C「神イメージと生き方についてのアンケート（A版）」質問紙

2013年1月6日

ご関係者各位

「神イメージと生き方についてのアンケート」（A版） （お願いと実施に関する説明文）

拝啓

私は、東洋英和女学院大学大学院・人間科学研究科・博士後期課程一年の河村従彦と申します。

この度、博士後期課程における研究のために、吉岡良昌教授のもとで、「心の中でえがく神さまイメージと人格形成期の環境・愛着・自我同一性との関連」に関するアンケートを実施することになりました。回答には30分程度のお時間がかかり、お忙しいところ誠に恐縮ではございますが、なにとぞご協力くださいますようお願い致します。

- 1 どの質問にも正解とか良い答えはありません。あなたが日頃感じておられるままに率直にご回答ください。また一問一問に時間をかける必要はありません。深刻に考えるのではなく、感じたままを回答してください。
- 2 アンケートは匿名で、結果はコンピューター処理を行います。回答を個別に取り上げることも、回答用紙を他に開示することはありません。また回答を学術目的以外に使用することはありません。
- 3 このアンケートにご回答くださるかどうかは任意であり、回答することに同意いただけない場合であっても、あなたにとって不利になることは一切ありません。
- 4 次の研究のためのご連絡先の記入について（アンケート用紙最後のページ）

ご自分の人生の中で神イメージが変化したとお考えの方について、インタビュー（30分～1時間程度）をさせていただければ願っています。ご協力いただける方は、恐れ入りますがご連絡先を質問紙の最後のページにご記入ください。こちらからご連絡させていただきます。なおインタビューの内容は名前を伏せるなど、個人が特定されることはありません。また、連絡先は、インタビューの目的でご連絡を差し上げること以外に用いることは一切ありません。

この調査に関してご質問・ご意見がございましたら、下記までお問い合わせください。よろしくお願いいたします。

敬具

東洋英和女学院大学大学院・人間科学研究科
研究責任者 河村従彦

■記入の仕方

回答は、各アンケートの最初のところにある記入上の注意を読み、その後で以下のようにあてはまるところに○をつけてください。間違えた場合は×をつけて書き直してください。

▼各アンケートのこの部分に記入上の注意が書いてあります。最初にこの部分をお読みください。

- 1 人生は前向きに生きるべきだと思う
- 2 自分には長所がありません
- 3 神の愛は無条件だと思う

4	3	2	1	
とても 思う	そう 思う	あまり そう 思わ ない	そう 思わ ない	よく わ ら な い
				○
		○		
		○	×	

間違えた場合

■それでは次のページから回答してください。

1 ↓次のページへ

■アンケート 1 ↓【記入上の注意】をお読みください

次の67項目のそれぞれについて、あなたにどの程度あてはまるかを考え、該当する選択肢一つに○をつけてください。

	7 非常 思う	6 かなり 思う	5 やや 思う	4 どちら もない	3 やや 思わない	2 かなり 思わない	1 全く 思わない
1 将来の目的や欲しいものを手に入れるために、現在の楽しみをあきらめるとしたら、悔いが残るであろう							
2 私はいつもあくせくとして忙しいが、ともしればカラまわりばかりして、うまく前へ進んでいないように思える							
3 私は、本当に欲しい物を我慢して待つことができない方だ							
4 私は、これまで、学校のクラブや活動や生徒会活動に進んで参加する方ではなかった							
5 いったん決断したことについてよくよく考えたりしない							
6 何か仕事に着手する時に、やらずにすみようなことは、ことごとく回避する							
7 私のやり方は、他人に誤解を受けることが多い							
8 私は家族に誇りを感じている							
9 集団内で、私はちゅうよすることなく、自ら正しいと思うことをはっきり表明できる							
10 自分がかわったりやっていることに気を散らすことなく専念することはさほど難しいことではない							
11 将来うまくいくかどうかを考えると、今まで絶好のチャンスを逃してしまってきたように思う							
12 隠しておけるなら、家族や自分の育ちについて他人にしゃべりすぎないのが最善である							
13 友人の前で失敗しても、別にくよくよしない							
14 普通、人間はお互いに正直に、かつ誠実にかかわりあっているものだ							
15 私は、将来のはっきりした目標や計画がない。偉い人の判断に従っていけば無難である							
16 自分が他の人のようにうまくやれないということを人に悟られても、それほど気にはならない							
17 うまく課題をやりとげた時でさえ、他の人は私のやったことを理解したり、是認をしたりしてくれないように思える							
18 私はいつもあくせくしているが、どんなに一生懸命やっても、他の人ほどには成果があがらないように思われる							
19 最終的に職業を決定したら、きつとうまく人生を乗り越えられるであろう							
20 いつも、人と競い合わなければならないような仕事をしていると落ちつかず幸せになれないだろう							
21 人との集まりで、他の人が私の考えに同意しないのではないかとと思うと、自分の意見をはっきりと主張するのにためらいを覚える							
22 現在、いかにたくさんの仕事に追われているとしても、次にやらなければならないことについて何らかの計画をもっていることはいいことである							
23 大体の場合、自分が決断した以上は、あとで悔やむことをしない							
24 今と違う顔つき、体つきであってほしいとは思わなかった							
25 たとえ努力してはみても、1つのことに専念することは私にとって随分骨の折れることである							
26 何かしたあとで、それが正しかったかどうか、心配になることが多い							
27 将来自分が何をしたいか確信を持っており、あるはっきりした目標をもっている							
28 私の仕事の出来ばえが、人のものと比較される時でも、私は最大の能力を発揮することができる							
29 私には、腹を割って話し合えるような親友が一人くらいはいる							
30 本当の幸せや成功につながるようなチャンスを逃してきたような気がする							
31 私くらいの年になれば、両親が反対しても、自分のことは自分で決断しなければならない							
32 私は難しいことがらに挑んでいくのが好きである。というのは、それを成し遂げることによって、大きな喜びが得られるからである							
33 人生をうまく成し遂げていく上で、私の容姿や行動が妨げとなっているとは思わない							
34 私は、何か重大な決断をしなくてはならない時には、いつでも家族から援助や助言を受ける							
35 たとえ好意の持てる人であっても、共に活動してきた人を本当に知ることはなかったように思う							
36 人と知り合う時、その人があなたの生いたちや家族について、あまり知らない方が、親しくなりやすい							
37 私の人生の最良の時は、これから訪れるであろう							
38 スポーツや試合など、いつも人と競争したり勝つことを要請されるようなものは、好きにはなれない							
39 なごやかに、気楽にやっていくためには、他人とうまくやっていかねばならないが、それ以上親密になる必要もない							
40 人にとやかく言われるくらいなら、人前では口をつぐんでいる方がよい							
41 人は他人と親しくなりすぎない方が幸せであろう							
42 私は、人と張り合ったり競争する場面、仕事やスポーツをするとき、特にそれが苦にならない気楽に楽しむことができる							

続き

	7 非常に 思う	6 かなり 思う	5 やや 思う	4 どちら もない	3 やや 思わない	2 思わない	1 全く 思わない
43 10代の少年少女時代の楽しい出来事の1つは、仲間たちと一緒に規則や約束を決め、協同して何かをやることである							
44 私は生涯の仕事として何をしたいかはっきり決めていないが、とりあえず、ここ2～3年の計画や目標については、ある程度ははっきりしている							
45 通常、勉強(仕事)しなければならない時には、それがいかなるものであれうんざりしてしまう							
46 本当に信頼のおける人はなかなかいないものだ							
47 自分の感覚ではよくないと思うことを、まわりの仲間がやっている時に、ことわりきれないところがある							
48 働くということは、人間が生きていくために我慢しなければならない必要悪である							
49 私は1つのことに集中することができない方だ							
50 私は、時には強く感情が揺り動かされることもあるが、人前では、決してそれをさどられないようにする							
51 ここ2～3年の間、私はクラブやグループ活動にはほとんど参加していない							
52 私は、とても話しやすい人間のようにだし、自分でもそう思う							
53 私は授業などで指されるのではないかと心配である。というのは、もし答えられないと他人が私のことをどんな風に思うか気になるので							
54 10代の時期に、クラブなどの集団活動に参加することのなかった人は、損をしてきている							
55 これまで、私の仲間は私の能力に対して正当な評価や理解を示してくれなかった							
56 もし、自分の容姿がもっとよければ、もっとよい人生が送れるだろうに							
57 何か課題をやる場合には、全体の見通しを失わないためにも、その場その場のことだけに縛られないようにやっていく							
58 気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込まうとするだろう							
59 私はコンパやパーティーで、他の人をなごませたり、楽しませたりする社交性があると思う							
60 私は、人生において本当に何をしたいのか決めることができない							
61 自分の人生なのだから大事なことは人に頼らないで、自分で決断を下していると思う							
62 だれも私のことを理解してくれないように思う							
63 私は、欲しい物を手に入れるのに時間がかかりすぎるならば、そのものに興味を失ってしまふ方だ							
64 もし必要ならば、1つのことに注意を集中するのも難しいことではない							
65 私がこれまで下した判断なり決断は、だいたいにおいて正しかった							
66 私は、現在自分が歩んでいる道にかなり満足している							
67 一般的に、人間は信頼できるものだ							

■アンケート 2 ↓【記入上の注意】をお読みください

次には神さまについてのさまざまな感じ方が表現されています。こうあってほしいということではなく、あなた自身が今までどのように感じてこられたかについて、あてはまるところに○をつけてください。よくわからない場合は「よくわからない」のところに○をしてください。

	4 とても 思う	3 そう 思う	2 あまり 思わない	1 そう 思わない	よく わから ない
1 神はわたしの心を聖くしてくれる方である					
2 自分は功績を上げなくてもありのまま神に受け入れてもらえる実感している					
3 神はあまりに偉すぎて、とても近づきにくい存在だ					
4 自分はかつて迷っていたが、今は帰るべきふるさとにいる感じがする					
5 神は親しい友だち、良い相談相手であり、正しいことを教えてくれる					
6 自分にとって神は愛に満ちた父のような存在である					
7 神はわたしにとって知恵のある王(君主)のような存在で、頼りになる					
8 自分にとって神は羊を大切に守る羊飼いのような存在である					
9 神は絶対権限をもって、わたしの全部を要求してくる方である					
10 神は人生の師であり、真理を教えてくれる方である					
11 自分は神から、従業員ではなく子どものように扱われている					
12 神は義なので、一日が終わる時、不安になる					
13 神は憐れみふかく、罪・失敗を赦し、心を聖くしてくれる方である					
14 神は近くにいる親しい友だちみたいな存在である					
15 神はわたしにとって支配的な権力者である					
16 神は創造者、宇宙の源であり、わたしを創造した方である					
17 神は救い出す方、力強い存在である					
18 神はわたしのミスを簡単に赦さない存在だと思う					
19 神にとってわたしは子どものような存在なので、一日が終わる時も安心だ					
20 自分は神との間にはギクシャク感がなく、和解していると思う					
21 自分にとって神は、細かいルールで監視する厳しい裁判官のような存在である					
22 神は善だから、わたしは神を信頼すれば安心だ					

3 ↓次のページへ

■アンケート 3 ↓【記入上の注意】をお読みください

あなたの父親についてお尋ねします。該当しない方はここはとばしてください。
この質問表はあなたの両親のさまざまな態度や行動のリストです。あなたが16歳までの、あなたの父親について、覚えている通りにもっとも適当と思えるところに○を付けてください。

	4 非常に そうだ	3 どちら かとい えはそ うだ	2 どち らか とい えは違 う	1 ま っ た く 違 う
1 暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた				
2 私が必要とするほどは助けてくれなかった				
3 私が好んでしたいと思うことをさせてくれた				
4 情緒的には私に冷たいように思えた				
5 私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた				
6 私に優しく、慈愛があった				
7 私が自分自身で決定を下すのを好んだ				
8 私に成長してほしいと思ってくれた				
9 私のすることはすべてコントロールしようとした				
10 私のプライバシーをおかした				
11 私と物事について語り合うのを楽しんだ				
12 よく私に微笑みかけた				
13 私を子供あつかいしがちだった				
14 私が必要としたり、欲していることを理解しているようには思えなかった				
15 私自身に決定を下させた				
16 私は求められていないと感じさせられた				
17 取り乱しているときに気分をほぐしてくれた				
18 私とは多くは話さなかった				
19 私を父に依存させようとした				
20 父がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた				
21 私が望むだけの自由を与えてくれた				
22 望むだけ外出させてくれた				
23 過保護だった				
24 私を誉めるようなことはなかった				
25 私が好むような服装をさせてくれた				

■アンケート 4 ↓【記入上の注意】をお読みください

あなたの母親についてお尋ねします。該当しない方はここはとばしてください。
この質問表はあなたの両親のさまざまな態度や行動のリストです。あなたが16歳までの、あなたの母親について、覚えている通りにもっとも適当と思えるところに○を付けてください。

	4 非常に そうだ	3 どちら かとい えはそ うだ	2 どち らか とい えは違 う	1 ま っ た く 違 う
1 暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた				
2 私が必要とするほどは助けてくれなかった				
3 私が好んでしたいと思うことをさせてくれた				
4 情緒的には私に冷たいように思えた				
5 私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた				
6 私に優しく、慈愛があった				
7 私が自分自身で決定を下すのを好んだ				
8 私に成長してほしいと思ってくれた				
9 私のことはすべてコントロールしようとした				
10 私のプライバシーをおかした				
11 私と物事について語り合うのを楽しんだ				
12 よく私に微笑みかけた				
13 私を子供あつかいしがちだった				
14 私が必要としたり、欲していることを理解しているようには思えなかった				
15 私自身に決定を下させた				
16 私は求められていないと感じさせられた				
17 取り乱しているときに気分をほぐしてくれた				
18 私とは多くは話さなかった				
19 私を母に依存させようとした				
20 母がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた				
21 私が望むだけの自由を与えてくれた				
22 望むだけ外出させてくれた				
23 過保護だった				
24 私を誉めるようなことはなかった				
25 私が好むような服装をさせてくれた				

■あなたについておたずねします。あてはまるところに○をしてください

Q1 年齢 ①10代以下 ②20代 ③30代 ④40代 ⑤50代 ⑥60代 ⑦70代 ⑧80代以上

Q2 性別 ①男性 ②女性

Q3 宗派 ①カトリック ②聖公会 ③プロテスタント ④キリスト教のその他の宗派 ⑤よくわからない

Q4 クリスマンになってからのだいたい年数は

- ①1年未満 ②1年～2年 ③3年～5年 ④6年～10年 ⑤11年～20年
⑥21年～30年 ⑦31年～50年 ⑧51年以上 ⑨わからない

Q5 あなたが育った環境について、生まれてから小学生までを目安に、近いもの一つに○をしてください

- ①だれもクリスマンはいなかった ②両親がクリスマンだった ③親は父がクリスマンだった
④親は母がクリスマンだった ⑤親以外のだれかがクリスマンだった ⑥家族全員がクリスマンだった
⑦わからない ⑧その他→()

Q6 あなたが育った家族について、生まれてから小学生までを目安に、以下の(1)から(5)について、それぞれ近いと思う選択肢の一つを選んで○をしてください

(1) 父親とは良い関係だったと思いますか

- ①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない ⑤あてはまらない

(2) 母親とは良い関係だったと思いますか

- ①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない ⑤あてはまらない

(3) 兄弟構成について、一つに○をしてください

- ①一人っ子 ②二人兄弟の上 ③二人兄弟の下 ④三人以上で自分が一番上
⑤三人以上でまんなか ⑥三人以上で自分が一番下 ⑦その他→()

(4) 兄弟とは良い関係だったと思いますか

- ①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない ⑤あてはまらない

Q7 ひとことで「神」といっても、いろいろな神イメージを描いているといわれます。今までの人生を振り返って、人生のどこかでご自分の神イメージ(神をどのような存在として感じ、心の中で描いているか)は変化したと思いますか。以下の中から近いもの一つを選んで○をしてください

- 1 今まであまり変化がないと思う →これを選んだ方は Q8へ進んでください
2 徐々にだが前と今を比較すると違ってきていると思う } →これを選んだ方は Q9～Q12へ進んでください
3 ある時期や出来事を境に変化したと思う
4 あまり固定化していなくて、いろいろ変化したと思う →これを選んだ方は Q13へ進んでください
5 その他→() →これを選んだ方は Q8～Q13で回答できるものを回答してください

Q8 Q7で1(あまり変化がない)を選んだ方 あまり変化がなかったと感じておられるイメージはどのようなイメージですか。一つに○をしてください

- ①とても親しい存在 ②やや親しい存在 ③どちらでもない ④やや厳しい存在 ⑤とても厳しい存在 (→Q14へ)

Q9 Q7で2と3(変化した)を選んだ方 変化したときに何かきっかけになったこと、影響したことがありましたか。だいたい近いもの一つを選んで○をしてください

- ①失敗や挫折 ②喪失体験のようなこと ③人間関係の難しさ ④人から受けた良い影響
⑤自覚的にクリスマンになったとき ⑥その他→()

5 ↓次のページへ

Q10 Q7 で 2 と 3(変化した)を選んだ方 神イメージはどのように変化しましたか。近いもの一つに○をしてください

- 1 厳しいイメージがさらに厳しくなった
- 2 厳しいイメージが親しさと厳しさの入り混じったイメージになった
- 3 厳しいイメージが親しいイメージになった
- 4 親しいイメージが厳しいイメージになった
- 5 親しいイメージが厳しさと親しさが入り混じったイメージになった
- 6 親しいイメージがさらに親しいものになった
- 7 その他→()

Q11 Q7 で 2 と 3(変化した)を選んだ方 あなたの神イメージが変化したのは何歳くらいのときでしたか

- ①10代以下 ②20代 ③30代 ④40代 ⑤50代 ⑥60代 ⑦70代 ⑧80代以上

Q12 Q7 で 2 と 3(変化した)を選んだ方 神イメージが変化することで、あなたの生き方に変化はありましたか。自由に書いてください

→Q14 へ

Q13 Q7 で 4(固定化せずいろいろ変化した)を選んだ方 神イメージが固定化していなかったことについて、近いもの一つに○をしてください

- 1 全体として厳しいイメージの中で、度合いが上がったり下がったりしている
- 2 厳しいイメージ、親しいイメージの間を行ったり来たりしている
- 3 全体として親しいイメージの中で、度合いが上がったり下がったりしている
- 4 その他→()
- 5 わからない

Q14 あなたが神(あるいは神イメージ)について思っていることを自由に書いてください(スペースが足りない場合はこのページの裏に書いてください)

■あなたがご自分の人生を振り返って、神イメージが変化したと感じておられる場合、インタビューさせていただいて(30分～1時間程度)、もう少し詳しくお話しをお聞きたいのですが、ご協力いただける方は以下に連絡先をいただけますか。こちらから連絡させていただきます。なおインタビューの内容は名前を伏せるなど、個人が特定されることはありません。また以下に記入して下さった情報はインタビューのための連絡以外に用いることはありません。ご協力をよろしくお願い致します。

お名前

性別 男・女

ご住所

お電話

メールアドレス

【回収についてのお願い】

- 1 まとめて回収する場合は、会場で実施した方の指示にしたがってください。
- 2 返信封筒が各アンケート用紙に添付されている場合は封筒に入れてください。差出人名は不要です。

ご協力いただき誠にありがとうございました

2 調査C「神イメージと生き方についてのアンケート（B版）」質問紙

2013年1月6日

ご関係者各位

「神イメージと生き方についてのアンケート」（B版） （お願いと実施に関する説明文）

拝啓

私は、東洋英和女学院大学大学院・人間科学研究科・博士後期課程一年の河村従彦と申します。

この度、博士後期課程における研究のために、吉岡良昌教授のもとで、「心の中でえがく神さまイメージと人格形成期の環境・愛着・自我同一性との関連」に関するアンケートを実施することになりました。回答には30分程度のお時間がかかり、お忙しいところ誠に恐縮ではございますが、なにとぞご協力くださいますようお願い致します。

- 1 どの質問にも正解とか良い答えはありません。あなたが日頃感じておられるままに率直にご回答ください。また一問一問に時間をかける必要はありません。深刻に考えるのではなく、感じたままを回答してください。
- 2 アンケートは匿名で、結果はコンピューター処理を行います。回答を個別に取り上げることも、回答用紙を他に開示することはありません。また回答を学術目的以外に使用することはありません。
- 3 このアンケートにご回答くださるかどうかは任意であり、回答することに同意いただけない場合であっても、あなたにとって不利になることは一切ありません。
- 4 次の研究のためのご連絡先の記入について（アンケート用紙最後のページ）

ご自分の人生の中で神イメージが変化したとお考えの方について、インタビュー（30分～1時間程度）をさせていただければ願っています。ご協力いただける方は、恐れ入りますがご連絡先を質問紙の最後のページにご記入ください。こちらからご連絡させていただきます。なおインタビューの内容は名前を伏せるなど、個人が特定されることはありません。また、連絡先は、インタビューの目的でご連絡を差し上げることに用いることは一切ありません。

この調査に関してご質問・ご意見がございましたら、下記までお問い合わせください。よろしくお願いいたします。

敬具

東洋英和女学院大学大学院・人間科学研究科
研究責任者 河村従彦

■記入の仕方

回答は、各アンケートの最初のところにある記入上の注意を読み、その後で以下のようにあてはまるところに○をつけてください。間違えた場合は×をつけて書き直してください。

▼各アンケートのこの部分に記入上の注意が書いてあります。最初にこの部分をお読みください。

- 1 人生は前向きに生きるべきだと思う
- 2 自分には長所がありません
- 3 神の愛は無条件だと思う

4	3	2	1	
とても 思う	そう 思う	あまり そう 思わ ない	そう 思わ ない	よく わ か ら な い
				○
		○		
		○	×	

間違えた場合

■それでは次のページから回答してください。

1 ↓次のページへ

■アンケート 1 ↓【記入上の注意】をお読みください

あなたが、いろいろな人間関係の中で経験する「人に対する感じ方や考え方」には、一般的には次のような4つのタイプがあると言われています。あなたはそれぞれのタイプにどのくらいよくあてはまりますか。当てはまるところに○をつけてください。4は真ん中です。

7	6	5	4	3	2	1
当	非					ま
て	常					ら
は	に					く
ま	よ					当
る	く					て
			中			は
			間			

← 程度の感じで7～1のどこかに○をしてください →

- タイプ1**
1 私はとて、人といつも心が通じ合う関係を持つことは、簡単である。私は人に頼ったり頼られたりすることに抵抗がない。私は一人ぼっちになってしまうとか、人がありのままの私を受け入れてくれないのではないのかということを心配しない。
- タイプ2**
2 私は人といつも心が通じ合う関係がなくても平気だ。私にとって大切なのは、人に頼っていいと思っていないこと、自分で何でもできていると感じることだ。私は人に頼ったり頼られたりすることが好きでない。
- タイプ3**
3 私は人と完全に気持ちが通じ合うようになりたい。しかし、人は私が望むほど私と親しくなりたくないと思っていないと思う。私は親密な関係を持ちたいのだが、私が人のことを大切に思うほど人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配になる。
- タイプ4**
4 私は人と親しくなることに抵抗を感じている。私は人と心が通じ合う関係を持ちたいのだが、人を信じきることは出来ない。また人に頼ることが苦手である。人とあまりにも親しくなりすぎると傷ついてしまうのではないと思う。

■次に、上の4つのタイプ(タイプ1～タイプ4)の中で自分に最も当てはまるタイプを1つ選んでください。該当するタイプ1つに○印を →

タイ プ1	タイ プ2	タイ プ3	タイ プ4
----------	----------	----------	----------

■アンケート 2 ↓【記入上の注意】をお読みください

以下には、いろいろな人が対人関係の中でどのような気持ちを持つかについての文があげてあります。それぞれの文は、「あなたが普通の対人関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方」に、どのくらいよく当てはまりますか。現在の対人関係での経験だけでなく、いろいろな対人関係の中であなたが普通によく体験していることを思い浮かべながら、それぞれの文について右の7件尺度を用いて評定してください。回答は、それぞれの文の右にある評定尺度上のもっとも当てはまるところ○印をつけてください。4は真ん中です。

7	6	5	4	3	2	1
当	非					ま
て	常					ら
は	に					く
ま	よ					当
る	く					て
			中			は
			間			

← 程度の感じで7～1のどこかに○をしてください →

- 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する
- 私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言う必要がある
- 私は誰かとつき合っていないと、何となく不安で不安定な気持ちになる
- 私は、私がいてほしいと望むくらいに人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう
- 私は、人に何でも話す
- 私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している
- 私は人に頼ることに抵抗がない
- 私は、人と親密になることがとてもこころよい
- 人にダメだなと言われると、自分は本当にダメだなあと感じる
- 私は人に心を開くのに抵抗を感じる
- 私は、(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない
- 私は、知り合いが私のことをほっといて自分一人で何かをすることが重なってくると腹が立ってきしまう
- 私は人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない
- 私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう
- 私は比較的容易に人と親密になれると思う
- 私が親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う
- 私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない
- 私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する
- 私は、人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしているのを感じる
- 私は、人が必要ときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする
- 私は、自分が人に依存することをゆるすことがなかなかできないと思う
- 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう
- 私は人とあまり親密にならないようにしている
- 私は、人にうんざりやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない

続き

- 25 私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかつたら、私はきつと動転して、悲しくなったり腹が立ったりする
- 26 心の奥底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかというと好きではない
- 27 私は、見捨てられるのではないかと心配だ
- 28 私はたいてい、人と自分の問題や心配ごとを話し合う
- 29 私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している
- 30 私はいつも、人が私に対していていてくれる気持ちが、私が人に対していていてくれる気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う

■アンケート 3 ↓【記入上の注意】をお読みください

以下には、いろいろな人が神さまに関してどのような気持ちを持つかについての文があげてあります。それぞれの文は、「あなたが神さまとの関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方」に、どのくらいよく当てはまりますか。現在の経験だけでなく、いろいろな状況であなたが普通によく体験していることを思い浮かべながら、それぞれの文について右の7件尺度を用いて評定してください。回答は、それぞれの文の右にある評定尺度上のもつとも当てはまるところに○印をつけてください。4は真ん中です。

- 1 私は神さまと親密になりたいと望むほどには、神さまは私と親密になりたいと思っていないと思う
- 2 私は何でも神さまに話す
- 3 私は神さまに近づきすぎないほうがよいと思う
- 4 私は自分の問題や関心について、たいてい神さまに打ち明けている
- 5 私は神さまのせいでは自信をなくしてしまっている
- 6 私は、神さまがわたしといっしょにいたいと思っていないのではないかとしばしば心配になる
- 7 神さまを愛して行くのは簡単なことだ
- 8 私は、神さまに対する自分の思いを表現すると、神さまは私に対して同じようには思ってくれていないのではないかと心配になる
- 9 神さまと近くにいることは私にとってとても心地良い
- 10 神さまはときどき、理由もなく私に対する思いを変えることがある
- 11 神さまに頼るのは別にむずかしいことではない
- 12 私は自分が心の底で何を感じているかを神さまに知られたくないと思っている
- 13 私は、神さまが私の近くにいたいと思っておられるとしたら、嫌な気持ちになるだろう
- 14 私は神さまが私に近づきすぎると不安になる
- 15 神さまと親密になりたいという思いに対して、神さまはうんざりして私から離れていってしまうことがときどきあるだろうと思う
- 16 私は、神さまとの関係がとても心配だ
- 17 私は、神さまの愛を失うことを恐れている
- 18 私は、神さまに捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない
- 19 何か困ったときに神さまに聞き合うことはとても助けになる
- 20 神さまは私自身と私の本当の必要を理解してくれている
- 21 私は、神さまが私から離れてしまうのではないかと心配になることはほとんどない
- 22 神さまに近づくことは難しいことではない
- 23 私が、神さまから目をはなれてしまったら、神さまはだれか他の人のほうに思いが向いてしまっているのではないかと心配になる
- 24 私は、神さまがわたしのことを本当は愛していないのではないかとしばしば心配になる
- 25 神さまに頼るのは心地良い
- 26 神さまに心を打ち明けることは、あまり心地良いことではない
- 27 私はしばしば、神さまが私を思う気持ちが、私が神さまを思う気持ちと同じくらい強ければいいのと思う
- 28 自分に必要な愛情とサポートを神さまから得ることができないと思うと怒りを感じる
- 29 神さまに近づくことは比較的簡単なことだと思う
- 30 私は自分が他の存在に負けてしまうことが心配である
- 31 私は自分が個人的に何を考え、何を感じているかを神さまと分かち合うとき、とても心地良いと感じる
- 32 神さまに頼ってしまうことを自分に許すのはむずかしい
- 33 私は神さまが私のことを本当に知ったら、私のことを好きでなくなってしまうのではないかとと思うと心配だ
- 34 私は、私が神さまのことを大切に思うほどには、神さまは私のことを大切に思っていないのではないかと心配になる
- 35 神さまは、私が怒っているときだけ、私の存在に気づいてくれると思っている
- 36 私はいろいろなことについて神さまと徹底してやりとりする

7	6	5	4	3	2	1
当	非					ま
て	常					ら
は	に		中			く
よ	よ		間			当
く	く					て

← 程度の感じて7~1のどこかに○をしてください →

7	6	5	4	3	2	1
当	非					ま
て	常					ら
は	に					く
よ	よ		中			当
く	く		間			て

← 程度の感じて7~1のどこかに○をしてください →

■アンケート 4 ↓【記入上の注意】をお読みください

次には神さまについてのさまざまな感じ方が表現されています。こうあってほしいということではなく、あなた自身が今までどのように感じてこられたかについて、あてはまるところに○をつけてください。よくわからない場合は「よくわからない」のところに○をしてください。

	4 とても 思う	3 そう 思う	2 あまり 思わ ない	1 そう 思わ ない	よく わか らな い
1 神はわたしの心を聖くしてくれる方である					
2 自分は功績を上げなくてもありのまま神に受け入れてもらえると実感している					
3 神はあまりに偉すぎて、とても近づきにくい存在だ					
4 自分はかつて迷っていたが、今は帰るべきふささにいる感じがする					
5 神は親しい友だち、良い相談相手であり、正しいことを教えてくれる					
6 自分にとって神は愛に満ちた父のような存在である					
7 神はわたしにとって知恵のある王(君主)のような存在で、頼りになる					
8 自分にとって神は羊を大切に守る羊飼いのような存在である					
9 神は絶対権限をもって、わたしの全部を要求してくる方である					
10 神は人生の師であり、真理を教えてくれる方である					
11 自分は神から、従業員ではなく子どものように扱われている					
12 神は義なので、一日を終わる時、不安になる					
13 神は憐れみふかく、罪・失敗を赦し、心を聖くしてくれる方である					
14 神は近くにいる親しい友だちみたいな存在である					
15 神はわたしにとって支配的な権力者である					
16 神は創造者、宇宙の源であり、わたしを創造した方である					
17 神は救い出す方、力強い存在である					
18 神はわたしのミスを簡単には赦さない存在だと思う					
19 神にとってわたしは子どものような存在なので、一日を終わる時も安心だ					
20 自分は神との間にはギクシャク感がなく、和解していると思う					
21 自分にとって神は、細かいルールで監視する厳しい裁判官のような存在である					
22 神は善だから、わたしは神を信頼すれば安心だ					

■アンケート 5 ↓【記入上の注意】をお読みください

あなたの父親についてお尋ねします。該当しない方はここはとばしてください。
この質問表はあなたの両親のさまざまな態度や行動のリストです。あなたが16歳までの、あなたの父親について、覚えている通りにもっとも適当と思われるところに○を付けてください。

	4 非 常 に そ う だ	3 ど ち ら か と い え ば そ う だ	2 ど ち ら か と い え ば 違 う	1 ま っ た く 違 う
1 暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた				
2 私が必要とするほどは助けてくれなかった				
3 私が好んでしたいと思うことをさせてくれた				
4 情緒的には私に冷たいように思えた				
5 私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた				
6 私に優しく、慈愛があった				
7 私が自分自身で決定を下すのを好んだ				
8 私に成長してほしいと思ってくれた				
9 私のすることはすべてコントロールしようとした				
10 私のプライバシーをおかした				
11 私と物事について語り合うのを楽しんだ				
12 よく私に微笑みかけた				
13 私を子供あつかいしがちだった				
14 私が必要としたり、欲していることを理解しているようには思えなかった				
15 私自身に決定を下させた				
16 私は求められていないと感じさせられた				
17 取り乱しているときに気分をほぐしてくれた				
18 私とは多くは話さなかった				
19 私を父に依存させようとした				
20 父がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた				
21 私が望むだけの自由を与えてくれた				
22 望むだけ外出させてくれた				
23 過保護だった				
24 私を誉めるようなことはなかった				
25 私が好むような服装をさせてくれた				

■ アンケート 6 ↓【記入上の注意】をお読みください

あなたの母親についてお尋ねします。該当しない方はここはとばしてください。
この質問表はあなたの両親のさまざまな態度や行動のリストです。あなたが16歳までの、あなたの母親について、覚えている通りにもっとも適当と思えるところに○を付けてください。

	4 非常に そうだ	3 どちら かとい えはそ うだ	2 どち らか とい えは違 う	1 ま っ た く 違 う
1 暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた				
2 私が必要とするほどは助けてくれなかった				
3 私が好んでしたいと思うことをさせてくれた				
4 情緒的には私に冷たいように思えた				
5 私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた				
6 私に優しく、慈愛があった				
7 私が自分自身で決定を下すのを好んだ				
8 私に成長してほしいと思ってくれた				
9 私のすることはすべてコントロールしようとした				
10 私のプライバシーをおかした				
11 私と物事について語り合うのを楽しんだ				
12 よく私に微笑みかけた				
13 私を子供あつかいしがちだった				
14 私が必要したり、欲していることを理解しているようには思えなかった				
15 私自身に決定を下させた				
16 私は求められていないと感じさせられた				
17 取り乱しているときに気分をほぐしてくれた				
18 私とは多くは話さなかった				
19 私を母に依存させようとした				
20 母がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた				
21 私が望むだけの自由を与えてくれた				
22 望みだけ外出させてくれた				
23 過保護だった				
24 私を誉めるようなことはなかった				
25 私が好むような服装をさせてくれた				

5 ↓次のページへ

注 B版の p.6～7 は A版の p.5～6 と同じであり掲載は省略

3 調査D「神イメージと生き方についてのアンケート」質問紙

2014年1月1日

ご関係者各位

「神イメージと生き方についてのアンケート」 (お願いと実施に関する説明文)

拝啓

私は、東洋英和女学院大学大学院・人間科学研究科・博士後期課程2年の河村從彦と申します。

この度、博士後期課程における研究のために、吉岡良昌教授のもとで、「心の中でえがく神さまイメージと日本人の精神構造の関連」に関するアンケートを実施することになりました。回答には20分程度のお時間がかかり、お忙しいところ誠に恐縮ではございますが、なにとぞご協力くださいますようお願い致します。

- 1 どの質問にも正解とか良い答えはありません。あなたが日頃感じておられるままに率直にご回答ください。また一問一問に時間をかける必要はありません。深刻に考えるのではなく、感じたままを回答してください。
- 2 このアンケートの回答は匿名です。結果はコンピューター処理を行います。回答を個別に取り上げること、回答用紙を他に開示することはありません。また回答を学術目的以外に使用することはありません。
- 3 ご回答くださるかどうかは任意であり、回答することに同意いただけない場合であっても、あなたにとって不利になることは一切ありません。
- 4 統計処理をした結果についてお知らせになりたい方がおられましたら下記までご連絡ください。まとめた段階でフィードバックさせていただきます。

この調査に関してご質問・ご意見がございましたら、下記までお問い合わせください。よろしくお願いいたします。

敬具

東洋英和女学院大学大学院・人間科学研究科
博士後期課程2年 河村從彦

■記入の仕方

回答は、各アンケートの最初のところにある記入上の注意を読み、その後で以下のようにあてはまるところに○をつけてください。間違えた場合は×をつけて書き直してください。

▼各アンケートのこの部分に記入上の注意が書いてあります。最初にこの部分をお読みください。

- 1 人生は前向きに生きるべきだと思う
- 2 自分には長所がありません
- 3 神の愛は無条件だと思う

4	3	2	1	
とても 思う	そう 思う	あまり そう 思わない	そう 思わ ない	よく わ か ら ない
				○
		○		
		○	×	

間違えた場合

■上記の内容について同意いただけた方は、次のページから回答を始めてください。

1 ↓次のページへ

■アンケート 1 ↓【記入上の注意】をお読みください

以下には、人生のスタンスについて記した文があげてあります。それぞれについて、あなたにどの程度あてはまるかを考え、該当する選択肢一つに○をつけてください。

- 1 自分でこれが正しいと思う道に従って、やはり忠実に信仰の道を歩むよりほかにはない
- 2 相手の意志・相手の考えを推しはかってみなければ、自分の行動を決定することができない
- 3 自分のポジションをだれか次の人にゆずるとき、自分がいちばんいいと思う人、自分が気に入った人を、自分のあとがまにするのがよい
- 4 神の前には自分というものは、他人に対して少しも特権的な地位を持っていない、まったく同じ平等な第三者的な人間にすぎないと思う
- 5 人間は自分を尊しとすると同時に、他人もまた同じような尊い人間であると思う
- 6 相手に向かって正直でありたいと思うならば、相手になにも隠さないし、相手も自分に全部を教えてくれ、相手の言うことを絶対に信頼するべきだと思う
- 7 芸術をやろうと思ったら、師匠に気に入られて引っ張ってもらいより、自分の実力が客観的に認められるほうがよいと思う
- 8 自分は人間個人として、自分一人で立っているという自覚をあまり持っていないと思う
- 9 他の人は、自分と同じように物事を欲し、自分と同じようにいろいろな要求を持っている存在だと思う
- 10 自分を育ててくれた環境や人には感謝したり批判したりしても、そのようなものから気持ち離れ、自分の責任において物事を考えて歩んでいくことが大切であると思う

4 とても 思う	3 そう 思う	2 あまり 思わ ない	1 そう 思わ ない

■アンケート 2 ↓【記入上の注意】をお読みください

次の25項目のそれぞれについて、あなたにどの程度あてはまるかを考え、該当する選択肢一つに○をつけてください。

- 1 私は、自分が思った通りにならないとすねる。
- 2 私には、「自分がない」と思う。
- 3 私は、何事も人にまかせたいと思う。
- 4 私は、ちょっとしたことでふてくされる。
- 5 私は、人に甘えたいと思う。
- 6 私は、何でもないことにとらわれる。
- 7 私は、いろいろなことに気おくれする。
- 8 私は、困ったことがあると人に何とかして欲しいと思う。
- 9 私は、ちょっとしたことでこだわる。
- 10 私は、悲しいことがあったときに人に慰められたいと思う。
- 11 私は、物事がうまく行かないとやけくそになる。
- 12 私は、何かをするとき人をあてにしたいと思う。
- 13 私は、ちょっとしたことでもひがむ。
- 14 私は、ささいなことでも気を揉む。
- 15 私は、困ったことがあるとき人にすがりたいと思う。
- 16 私は、何でもないことにわだかまりを持つ。
- 17 私は、嫌なことがあるとむかつく。
- 18 私は、悩みがあると人に相談したいと思う。
- 19 私は、物事が自分の思い通りにならないとひねくれる。
- 20 私は、何事につけ人をたのみにしたいと思う。
- 21 私は、人に自分のことを言わなくてもわかって欲しいと思う。
- 22 私は、ささいなことで人をうらむ。
- 23 私は、何事につけ人に後押しをして欲しいと思う。
- 24 私は、物事が自分の思い通りにならないと気がすまない。
- 25 私は、ちょっとしたことでくやしいと思う。

4 あ い つ も	3 し ば し ば あ る	2 時 々 あ る	1 あ ま れ に あ る	0 全 く な い

■アンケート 3 ↓【記入上の注意】をお読みください

次には神さまについてのさまざまな感じ方が表現されています。こうあってほしいということではなく、あなた自身が今までどのように感じてこられたかについて、あてはまるところに○をつけてください。よくわからない場合は「よくわからない」のところに○をしてください。

	4 とても 思う	3 そう 思う	2 あまり 思わ ない	1 そう 思わ ない	よく わか ら
1 神はわたしの心を聖くしてくれる方である					
2 自分は功績を上げなくてもありのまま神に受け入れてもらえると実感している					
3 神はあまりに偉すぎて、とても近づきにくい存在だ					
4 自分はかつて迷っていたが、今は帰るべきふささにいる感じがする					
5 神は親しい友だち、良い相談相手であり、正しいことを教えてくれる					
6 自分にとって神は愛に満ちた父のような存在である					
7 神はわたしにとって知恵のある王(君主)のような存在で、頼りになる					
8 自分にとって神は羊を大切にする羊飼いのような存在である					
9 神は絶対権限をもって、わたしの全部を要求してくる方である					
10 神は人生の師であり、真理を教えてくれる方である					
11 自分は神から、従業員ではなく子どものように扱われている					
12 神は義なので、一日を終わる時、不安になる					
13 神は憐れみふかく、罪・失敗を赦し、心を聖くしてくれる方である					
14 神は近くにいて親しい友だちみたいな存在である					
15 神はわたしにとって支配的な権力者である					
16 神は創造者、宇宙の源であり、わたしを創造した方である					
17 神は救い出す方、力強い存在である					
18 神はわたしのミスを簡単には赦さない存在だと思う					
19 神にとってわたしは子どものような存在なので、一日を終わる時も安心だ					
20 自分は神との間にはギクシャク感がなく、和解していると思う					
21 自分にとって神は、細かいルールで監視する厳しい裁判官のような存在である					
22 神は善だから、わたしは神を信頼すれば安心だ					

■アンケート 4 ↓【記入上の注意】をお読みください

あなたにとっての神さまを次のようなイメージで表現した場合、それぞれのイメージについてどのように感じますか。こうあってほしいではなく、今までどのように感じて来られたかをありのままに回答してください。よくわからない場合は「よくわからない」のところに○をしてください。

	4 とても 思う	3 そう 思う	2 あまり 思わ ない	1 そう 思わ ない	よく わか ら
1 王/君主(絶対主権・知恵のある存在)					
2 祭司(憐れみふかい、罪・失敗を赦す、心を聖くしてくれる)					
3 人生の師(真理を教えてくれる)					
4 医者(いやしてくれる存在)					
5 救出者(力強い存在)					
6 羊飼いや牧者(善である存在、よいことをしてくれる存在、はぐくむ)					
7 父(愛・慈悲に満ちた存在・家族のイメージ)					
8 友だち(良い相談相手であり、正しいことを教えてくれる)					
9 裁判官(義である存在、正義のルールで管理)					
10 創造者(宇宙の源、わたしを創造した存在)					

以下には、いろいろな人が神さまに関してどのような気持ちを持つかについての文があげてあります。それぞれの文は、「あなたが神さまとの関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方」に、どのくらいよく当てはまりますか。現在の経験だけでなく、いろいろな状況であなたが普通によく体験していることを思い浮かべながら、それぞれの文について右の7件尺度を用いて評定してください。回答は、それぞれの文の右にある評定尺度上のもっとも当てはまるところに○印をつけてください。4は真ん中です。

[illegible]

■あなたについておたずねします。あてはまるところに○をしてください

Q1 年齢 ①10代以下 ②20代 ③30代 ④40代 ⑤50代 ⑥60代 ⑦70代 ⑧80代以上

Q2 性別 ①男性 ②女性

Q3 宗派 ①カトリック ②聖公会 ③プロテスタント ④キリスト教のその他の宗派 ⑤よくわからない

Q4 クリスマンになってからのだいたいの年数は

①1年未満 ②1年～2年 ③3年～5年 ④6年～10年 ⑤11年～20年
⑥21年～30年 ⑦31年～50年 ⑧51年以上 ⑨わからない

Q5 あなたが育った環境について、生まれてから小学生までを目安に、近いもの一つに○をしてください

①だれもクリスマンはいなかった ②両親がクリスマンだった ③親は父がクリスマンだった
④親は母がクリスマンだった ⑤親以外のだれかがクリスマンだった ⑥家族全員がクリスマンだった
⑦わからない ⑧その他→()

Q6 あなたが育った家族について、生まれてから小学生までを目安に、以下の(1)から(5)について、それぞれ近いと思う選択肢の一つを選んで○をしてください

(1) 父親とは良い関係だったと思いますか

①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない ⑤あてはまらない

(2) 母親とは良い関係だったと思いますか

①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない ⑤あてはまらない

(3) 兄弟構成について、一つに○をしてください

①一人っ子 ②二人兄弟の上 ③二人兄弟の下 ④三人以上で自分が一番上
⑤三人以上でまんなか ⑥三人以上で自分が一番下 ⑦その他→()

(4) 兄弟とは良い関係だったと思いますか

①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない ⑤あてはまらない

Q7 ひとことで「神」といっても、いろいろな神イメージを描いているといわれます。今までの人生を振り返って、人生のどこかでご自分の神イメージ(神をどのような存在として感じ、心の中で描いているか)は変化したと思いますか。以下の中から近いもの一つを選んで○をしてください

1 今まであまり変化がないと思う →これを選んだ方は Q8 へ進んでください
2 徐々にだが前と今を比較すると違ってきていると思う } →これを選んだ方は Q9～Q12 へ進んでください
3 ある時期や出来事を境に変化したと思う
4 あまり固定化していなくて、いろいろ変化したと思う →これを選んだ方は Q13 へ進んでください
5 その他→() →これを選んだ方は Q8～Q13 で回答できるものを回答してください

Q8 Q7 で 1(あまり変化がない)を選んだ方 あまり変化がなかったと感じておられるイメージはどのようなイメージですか。一つに○をしてください

①とても親しい存在 ②やや親しい存在 ③どちらでもない ④やや厳しい存在 ⑤とても厳しい存在 (→Q14へ)

Q9 Q7 で 2と3(変化した)を選んだ方 変化したときに何かきっかけになったこと、影響したことがありましたか。だいたい近いもの一つを選んで○をしてください

①失敗や挫折 ②喪失体験のようなこと ③人間関係の難しさ ④人から受けた良い影響
⑤自覚的にクリスマンになったとき ⑤その他→()

5 ↓次のページへ

Q10 Q7 で 2 と 3(変化した)を選んだ方 神イメージはどのように変化しましたか。近いもの一つに○をしてください

- 1 厳しいイメージがさらに厳しくなった
- 2 厳しいイメージが親しさと厳しさの入り混じったイメージになった
- 3 厳しいイメージが親しいイメージになった
- 4 親しいイメージが厳しいイメージになった
- 5 親しいイメージが厳しさと親しさが入り混じったイメージになった
- 6 親しいイメージがさらに親しいものになった
- 7 その他→()

Q11 Q7 で 2 と 3(変化した)を選んだ方 あなたの神イメージが変化したのは何歳くらいのときでしたか

- ①10代以下 ②20代 ③30代 ④40代 ⑤50代 ⑥60代 ⑦70代 ⑧80代以上

Q12 Q7 で 2 と 3(変化した)を選んだ方 神イメージが変化したことで、あなたの生き方に変化はありましたか。
自由に書いてください

→Q14へ

Q13 Q7 で 4(固定化せずいろいろ変化した)を選んだ方 神イメージが固定化していなかったことについて、近いもの一つに○をしてください

- 1 全体として厳しいイメージの中で、度合いが上がったり下がったりしている
- 2 厳しいイメージ、親しいイメージの間を行ったり来たりしている
- 3 全体として親しいイメージの中で、度合いが上がったり下がったりしている
- 4 その他→()
- 5 わからない

Q14 あなたが神(あるいは神イメージ)について思っていることを自由に書いてください(スペースが足りない場合はこのページの裏に書いてください)

【回収についてお願い】

- 1 まとめて回収する場合は、会場で実施した方の指示にしたがってください。
- 2 返信封筒が各アンケート用紙に添付されている場合は封筒に入れてください。差出人名は不要です。

ご協力いただき誠にありがとうございました

4 調査E 半構造化面接の分析ワークシート

割愛